

武士の旅々

技巧ナイフ。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

袴を履き、着物に袖を通し、今の季節とは真逆の風物詩が刺繍されたローブを羽織る16歳の女の子。黒く艶やかな髪を揺らし、空を飛んだり道を歩いたり。ちよつと泣き虫だけど、決まり事はちゃんと守る素直な子。

そんな彼女の腰には一振りの刀がありました。

女の子は旅の魔女と出会い、魔女さんの真似をして日記をつけ始めます。

これはその日記に記された、いつかどこかで起きた小さな物語。

目次

武士の少女	前編	1
武士の少女	中編	15
武士の少女	後編	29
私が拙者になった3日間		
1日目		40
2日目		57
3日目		69
望み望まれない亡霊		
愛悼の霊園	雪	87
愛悼の霊園	月	103
愛悼の霊園	花	121
あんこ争奪祭り		
NO ANKONO LIFE		143
あんこ好きにあらずんば、人にあらず		160
I am the bone of my anko.		175
幕間	イレイナ争奪祭り	196
仮釈放のリテラチュア		
ブチギレボブカット物語	幾	212
ブチギレボブカット物語	星	231
ブチギレボブカット物語	霜	250
モミジのパーフェクト過重力教室		
1限目		273
2限目		291

3 限目	308
武士の旅立ち	
家出騒動 序	329
家出騒動 破	342
家出騒動 急	356
武士の旅々	377
幕後語り	
拙者がママになるでござる！	396
71人目の裏切り者	
それはブギーマン	405
そこは魔王村	420
そこに魔眼勇者	437
サンドイッチ, which, リーガルwitch.	
第一口頭弁論	453

武士の少女 前編

「おや？… あれは……」

美しい紅葉と黄葉のアンサンブルを楽しむため、少し高めにほうきを飛ばしていた私は、眼下の様子に注意が向きました。

街道のど真ん中で、3人の汚くて屈強で臭そうでむさ苦しい男達が1人の女の子を通せんぼしています。

「うわああああん！ 許してほしくてござる〜！ 拙者、金目の物など持ってないでござるよお！ 金目の物と言えはこの刀でござるが、これを金目の物と言ったら盗られちやいそうなので、金目の物など持ってないと言っておくでござるううう！」

「……………」

どうやら山賊に襲われているようです。女の子は持っていた荷物を脇に置いて、地面に跪き、両手をつき、頭を下げて許しを乞うています。

可哀想に。主に女の子のわざわざ金目の物がどれかを教えてしまう頭が。

「あつ！ ちよつ、マジでそれだけはやめて！ それ武士の魂だから！ 拙者の魂持ってかないで！ 魂盗るなら、もう山賊なんか辞めて死神に転職したらいいでしょ……あつ待つて！ 冗談だから！ 侍ジョークだから！」

予想通り、山賊の方々は女の子から刀を強奪しようと引たくつています。それに抵抗する女の子。というか、実は結構余裕ありません？

とはいえ、流石にこの状況を見過ごすわけにはいきません。

風で飛ばされないように黒の三角帽子を抑え、黒のローブと灰色の髪をためかせて華麗にほうきで急降下する、それはそれはかつこ可愛い美少女とは一体誰でしょう。

そう、私です。

結果から話せば、山賊さん達は私が「えいや」と魔法を使うだけで

簡単に撃退できました。そもそも魔女である私が、汚くて屈強で臭そうで実際臭かった山賊3人に負けるはずなどないのですけどね。

問題はその後です。

「えぐっ…ひぐう…ぐすぐすん…」

襲われていた女の子が私のローブを掴んで離してくれません。そのまま放置するのも気が引けたので、一緒に街道を歩いてあげてるのですが、いつ泣き止んでくれるのでしょうか。

目を向けると泣き顔を見られたくないのか、私のローブに顔を埋めてしまいます。涙と鼻水と涎が付きました。きたない。

「ちーん！」

そのまま鼻かまれました。なにさらしとんじや貴様。

「あの、あなたお名前は？　あまり見慣れない格好をしています。もしかして東国の出身ですか？」

「ぐす…そうでござる…。拙者、名前をモミジと申す者。16歳。恋人募集中でござる」

「そこまで聞いてないです」

「なにゆえ東国の出身とお分かりに？」

「知り合いにいるんですよ。あなたと同じ黒髪黒瞳です」

女の子改めモミジさん。あなた、16歳にもなつてそこまでガチ泣きしますか。

そんな感想を持ちながら、私はモミジさんの服装に興味を引かれました。下はヒラヒラとした黒いズボン——確か袴といいましたか。上は体の正面で重ねるバスローブの親戚みたいなものを着ています。合わせ目はバスローブと逆ですが。

さらに、その上から黒いローブを羽織っていました。桜の花びらが刺繍されていてお洒落です。ちよつと欲しいかも。

さらに目を引くのは、腰に佩いた刀。以前知り合った眠ると記憶を失う白髪さんのような真っ直ぐした刃ではなく、軽く反っています。武士の魂とか言っていましたか。

「ローブを着ているところを見るに、あなた魔法使いですか？」

「然り。まだ未熟者ゆえ、魔導士の位ではござるが」

「それでも最低限攻撃魔法は使えるでしょう。どうして魔法使いでもない山賊に襲われていたんです？」

「拙者、ほうきで飛んでいたところ尻が痛くなつたでござる——」
話を聞いてみると、どうやらお尻が痛くなつて歩いていたら襲われたそうです。それならまあ、普通に魔法で撃退できたはずですが、何を思ったか彼女は刀で戦おうとしたそうです。

ですがだいぶ長い間手入れを忘れていたそうで、錆び付いて抜けなかつたとのこと。聞くところによると、以前海でその刀を銛代わりにして素潜り漁をしたそうです。武士の魂、扱い雑すぎませんかね。

そのままガチャガチャ抜こうと四苦八苦していたら囲まれてしまい、テンパって魔法も使うことができなかつた、と。

「えっ、アホすぎませんか？」

「うう……穴があつたら入りたい」

「まあ、怪我がなくて良かったです」

「はい！ このご恩、一生忘れないでござる。もしよろしければ、名前を伺つてもよろしいでござるか？」

「イレイナです。灰の魔女で旅人です」

「イレイナ殿……イレイナ殿……うん、覚えたでござるー！」

そう言つて、モミジさんは勢い良く抱き着いてきました。あまりに唐突過ぎて腕でガード。汚された袖で防いでやろうとしましたが、まるで子犬が障害物を潜るように避けてガシツ。捕まりました。

「イレイナ殿く大好きでござるく！ 命の恩人でござるくかつこよかつたでござるく！ バチクソときめいたでござるよく」

すりすりすりすり。めちやくちや頬擦りしてきます。武士は礼儀を重んじるって噂で聞いていましたけど、これが重んじられた礼儀ですか。無礼千万でしょう。我命の恩人ぞ？

「イレイナ殿、拙者の主君になつてほしいでござる。誠心誠意、命の限りお仕えするでござる」

「いえいりません。旅人ですので、仕えられても困ります。ていうか、今現在困っています離してください」

ほっぺ無くなりそう。

「むう…。ではせめて恩返しさせてほしいでござる。旅人ならば、レイナ殿はもしやこの先の国に滞在する予定ではござらぬか？」

「ええ、まあ」

「なれば、その国での滞在費は拙者がもつでござる」

「やだラッキー。旅の醍醐味って、やっぱり人との素敵な出会いですよ。」

辿り着いた国は、なんともまあ普通な国でした。普通に男性がいて、普通に女性がいて、普通に老人がいて、普通に子供がいます。普通です。

普通じゃないレベルで普通です。あれ、普通ってなんでしよう？

「レイナ殿！ あちらの宿などいかがでござるか？」

『普通』とは何かという哲学に直面した私の手をモミジさんに引かれ、現実に戻って来ました。ただいま。

後頭部上側に結われた黒くて長いポニーテールが、まるで子犬の尻尾のように左右へぶんぶん振れています。

ちなみにこの国へとおしゃべりしながら歩いてきたのですが、その時こんな会話をしました。

「そのポニーテール可愛いですね」

「これはポニーテールではござらん。『ちよんまげ』というものでござる。武士の魂でござる」

「ポニーテールと何が違うんですか？」

「概ね一緒でござる」

「じゃあポニーテールでいいじゃん。そう思ったのは内緒です。たぶん顔には出ていました。」

そんなこんなでいつもなら安宿で十分な私ですが、今回はできるだけ良い宿に泊まろうと目を皿のようにして探します。いつそ人にとっての国1番の宿を聞いてしましましょうか。うんそうしよう。

「すみません。この国の中で1番良い宿ってどこですか？」

「あら。それなら南東にある宿がいいわよ。普通に美男美女の従業員揃いで、普通に最高のもてなしを普通に最高の笑顔でしてくれるわ。」

まあ、もちろん普通にお値段は張るけどね」

「ありがとうございます」

あのマダム、会話しててちよつとイラツときますね。『普通』が多い。

ですが、他の皆さんに聞いても南東の宿が最高と言うので、そこに行くことは決定しました。

一応お金を払ってくれるのはモミジさんなのでお伺いを立てると、笑顔で領いてくれます。あらやだ素敵。

——ですが、その普通に最高級の宿に着いてチェックインをしようとした時、事件は起きました。

「イレイナ殿おー。お財布どこかに落としちゃったよお……ぐすん」

この馬鹿ちゃんが！ 心の中で叫びました。10回叫びました。なんなら、3回目と7回目は口から出たような気がします。

フロントでまたもやガチ泣きするモミジさんの顔は……うわ汚な。頭部にある耳以外の穴という穴からありとあらゆる液体を垂れ流しています。うわ汚な。

フロントの従業員さんは、めちゃくちや迷惑そうな顔をしています。その視線が助けを求めるように私の顔へと向けられ、胸に提げた魔女の証である星をかたどったブローチを捉え、もう一度視線を私の顔に向けてきます。

その目は、なんだか『お、魔女じゃん。魔女なら払えるよね？ この国で最高級の宿でお値段は普通に張るけど、魔女なら払えるよね？

だって魔女だもん。えっ、もしかして払えない？ 魔女なのに？』と語っています。

魔女ハラスメントですか？

「イレイナ殿お……」

いまだ涙と鼻水と涎をダラダラ垂れ流しながら情けない声でモミジさんもこちらを見ってきます。

この状況……もしかしなくても私が払わないといけませんか？

「当宿は冷やかし厳禁。フロントに来たからには、最低一泊はして頂かなくてはならない規則となっております」

「……ちなみに一泊のお値段は如何程？」

「金貨12枚となっております」

思わずほうきを呼び出して逃げたくなりました。ぼったくりも良いところですよ。

「お食事を付けますと、追加料金で一食につき金貨5枚のお支払いとなっております」

ぼったくりも良いところですよ。

「……わかり……ました……。払……い……ま……す……」

プルプル手と声を震わせながら、私はフロントに金貨12枚を渡してチェックインしました。

「申し訳ないでござる！ 本当に、本当に申し訳ないでござる〜!!？」
さすが高いだけあり、部屋は最高のものでした。

そんな部屋のベッドの上で突如ダイエツトしてしまったお財布へ茫然とした眼差しを向ける私へ、モミジさんは相変わらず泣きながらひたすら謝っています。

泣けば許されると思つてんじゃねーですよとも思いましたが、部屋に入つて調べたら、この宿はどうやらバカンスに来た王族貴族向けのものらしいです。これはたぶん私が最高級の宿と聞いたのが悪かったですね。はい。

とはいえ、基本的に性根の腐っている私です。一言、八つ当たり気味にモミジさんへ言つてやろうと考えましたが……やめておきます。

この部屋、ベッド1つしかないんですよ。バカでかいベッド。その上の真ん中で、土下座で謝りながら泣くものですから……あーあ。ベッドがモミジさんの顔面から流れ出る体液でどんどん汚れていきます。

これ以上泣かれると、私はモミジさんの体液でビチャビチャになつた場所で夜を過ごさなくてはなりません。それはそれは地獄なことでしょう。

「別にそこまで怒つてませんから、もう泣き止んでください。ほら。そろそろお昼ですよ、パン屋さんにも行きましよう？」

「……本当でござるか？ パン屋さんに行くふりして拙者を撒い

て、そのまま閉め出したりしないでござるか？」

「しませんよそんなこと」

ちよつと魅力的に感じてしまったのは内緒です。

そうして最低限の荷物だけ持ち、私達はパン屋さんに来ました。私
が旅をして訪れた国の多くは露店が多かったですが、この国のパン屋
さんはどうやらお店を構えるタイプのようですね。

入店すると、私達は焼けた小麦の香りに包まれました。幸せです。

「ここまで来て聞くのもアレですが、モミジさんはパン平気なんです
か？ 確かあなたの国の主食はお米でしたよね」

「郷に入りては郷に従え。その国の味を楽しむのも旅の醍醐味でござ
る」

「なるほど」

「……ぶつちやけ米食べ飽きただけなんだけどね」

「今のは聞かなかったことにしましょう」

店の入り口でトレーとトングを手に取り、私達は山盛りに積まれた
パンを吟味しながらそんな会話を交わしました。

カチカチ。カチカチ。こういったパン屋さんでパンを選ぶ時、つい
トングをカチカチしちゃうのってどうしてなんでしょう？

「イレイナ殿。何個までパン取っていいでござるか？」

美味しそうなパンに目を輝かせながらモミジさんはそんな事を聞
いてきます。そういえば、彼女の支払いも私をもたなければならな
いんですよね……。

「たくさん食べるほうですか？」

「たくさん種類を少量ずつ食べたいほうでござる」

「では私と1つのパンを半分ずつ食べるというのはどうでしょう？」

「それがいいでござる！ まるで恋人のようでござるな？」

なにやら戯言が聞こえましたが、無視。

「……もしかしてイレイナ殿、クロワッサン好きでござるか？」

「はい。パンは全部好きですが、特にクロワッサンが大好きです」

私のトレーにクロワッサンが二桁は載せられています。モミジさ
んはなにやら言いたそうですが、お金を払うのは私なので言葉をグッ

と飲み込んだようです。賢明ですね。

口を尖らせながら、モミジさんは5種類のパンをトレーに載せました。

「結構食べるんですね？」

「夕食の分も入ってるでござる」

「何故ですか？ また夕食の時に来ればいいじゃないですか」

「……いいでござるか？」

「横でお腹をグーグー鳴らされたら安眠できないでしょう？」

「拙者お腹グーグーなんて鳴らさないでござる！」

顔を真っ赤にしてパイッとそっぽを向かれちゃいました。この子、からかうと楽しいかもしれません。

夕食も同じパン屋さんで買って宿の部屋で食べた後、私たちは交代交代でシャワーを浴びました。

そうして、私は今日あったことを日記帳である『魔女の旅々』に記していた時のことです。

「イレイナ殿、何をしてるでござるっ！」

タオルで髪を拭きながら私の肩越しにひよいっと日記帳を覗き込んできました。

「旅の日記をつけているんです。今日は面白いことがあった…の…で……」

振り返ってバスローブ姿の彼女へ目を向けると、私はモミジさんの変化に言葉尻が濁っていきます。

おかしいですね……。モミジさんの胸、シャワーを浴びる前より明らかに巨大化しています。

東国出身の女性の胸はスポンジでできているのでしょうか？

いえ、前に知り合った彼女は背丈もお胸もちんちくりんでした。その説は却下です。

「面白いこと…？ もしかして拙者のこと書いてくれてるのでござるか！」

何が嬉しいのかは分かりませんが、ピョンピョン跳ねてモミジさん

は喜びを表現しています。

そして、ピヨンピヨンに合わせてポヨンポヨン動く彼女の胸に私の目は釘付けです。なんですかその暴力的な揺れは。

「ハイカラな日記帳でござるなあ」

「……」

「読んでいいでござるっ。」

「……………」

「イレイナ殿？」

「……………寝ましょう」

どうやらコレは悪い夢なようです。だっておかしいでしょう、あの大きさは。モミジさん16歳ですよ？ 私より2つ年下ですよ？

なんなら東国出身の女性は体の凹凸おうちつが乏しいと言うじゃないですか嘘つき！

私は年下の脅威的で驚異的な胸囲に不貞腐れ、ベッドに潜り込みました。

「おろろ？ 拙者のこと、日記に書いてくれないでござるか？」

「もうほとんど書きましたさっさと寝ましょう」

「うん？ わかったでござる」

惚けた顔でモミジさんもベッドに入ってきます。

「つて、なんでそんなにくつついてくるんですか」

「だってあっちの方、なんだかベチャベチャしてるでござる」

「……」

それあなたの体液です。まだ乾いてなかったんですね。

「拙者にくつつかれるの、嫌でござる……っ。」

ぶっちやけ嫌です。モミジさんの胸がまるで私を煽るように押し付けられますから。

ですが、たぶんこれを言うとまた泣いてしまうでしょう。今の質問をする時にはもう声が震えてましたし。

「別に構いませんよ。あなたが良いなら」

「えへへ。やったあ」

すると、彼女は私の首に手を回してまたもや頬擦りをしてきます。

私の胸にモミジさんの豊満な胸が押し付けられます。どうやら宣戦布告のようです。よろしい。ならば戦争だ。

「イレイナ殿は優しいでござるなあ。優しい女性は大好きでござる」

「女性はつて……もしかしてモミジさん、女の子がすきなんですか？」

「はい。拙者、男より女子おなごに心ときめくでござる」

「……………」

どうしよう……もしやこの状況、貞操の危機なのでは…………？」

「初恋の相手はマミ上でござった」

「マミ上……？ それはもしかしてお母さんのことですか？」

「然り。ちなみに父上はパピ上と呼ぶでござる」

「まあそうだろうとは思いました。なんでそんな変な呼び方を？」

「そんなに深い理由はないでござるよ」

よし、なんとか話題を逸らせましたね。このまま逸らし続けます。

「元々拙者、両親のことは父上、母上と呼んでござった。しかし2人はパピ、マミーと呼んでほしかったらしいでござる。その結果、折衷案としてこの呼び方に落ち着いたのでござる」

「愛されてるんですね」

「そうでござるな。一人娘ゆえ、大事に大事に育てられたでござる」

えへへ、と。照れ笑いを漏らしてモミジさんは私の首元に顔を埋めました。

「あつ……イレイナ殿いい匂い」

状況は未だレッドゾーンです。

「そ、それで、そんなに大事に育てられてたのに、よく旅に出ることを許してもらえましたね？」

「うくん……正直許可を得られたかと言われたら怪しいところでござるな」

「……………」

「拙者の家、近所では有名なそこそこ大きな剣術道場なのでござる。内弟子が50人以上いて、一つ屋根の下で暮らしておった。その内弟子の寝食やら炊事洗濯やらはマミ上と拙者でまかなっていたでござる」

「50人だと、結構な重労働だったのでは？」

「然り。特に苦痛だったのは洗濯でござった」

そう言つて一息吐き、モミジさんは当たり前前のように私の耳たぶをはむはむし始めます。なにしてんですかお願いだから食べないでください2つの意味で。

「男の汗が染みついた服を洗う毎日でござる。臭いし汚いしで、本当に地獄でござった。だから家出同然に飛び出したのでござるよ」

「じゃあ、ご両親はとても心配してるんじゃないですか？」

「してるでござろうな」

さらにそのまま、モミジさんの舌が私の耳の中へと入ってきます。筆舌にしがたい感覚がビリビリと脳を刺激しますが、なんとか変な声を出さないようにして話の続きを促します。

「そりゃあもう、家を出る前はめっちゃくちや止められたでござる。パピ上はもちろん、内弟子も総出で拙者を捕らえにきたでござ…痛っ!!？」

手が服の中に入ってきたあたりで、私はモミジさんをベッドから蹴り落しました。さすがにもう無理です。

「あまり調子に乗らないでください。蹴り落としますよ?」

「蹴り落としてから言わないでほしいでござる……」

「話は聞いていますが、どこか別の場所で寝てください」

「どこかって…どこも空いてないでござるよ? ソファは拙者達の荷物があるし」

「床が空いてるでしょう」

「イレイナ殿…ドSでござる」

「それでその後はどうやって旅に出たんですか?」

「このまま話を続けるのでござるか?」

うるうるうるうる。彼女の目が涙で揺れます。

「…もう何もしないと約束できるならベッドに入ればいいですよ」

「約束するでござる」

「もし破ったら?」

「拙者の体…好きにしていいでござるよ?」

「あなたの国では床に寝るんですよね？ 帰郷したと思えば夢見も良いでしょう」

「冗談でござるー！」

力強く言って、もう一度入ってきます。いや、なんで首に手を回すんですか。

そんな抗議の視線に気付いたらしく、モミジさんは上目遣いで言い訳がましくお願いしてきました。

「これくらいはいいでござろう…？」

「……まあ、これくらいなら」

「やった。——さて、どこまで話したでござろうか……」

「確か内弟子さんとパピ上さんがあなたを全力で止めに来た、ってところまでです」

「ああ、そうでござった。もうほとんどクライマックスでござるな。あとはもう簡単でござるよ。さまざまな手練手管や智略戦略を巡らして内弟子とパピ上をシバき倒した拙者は、無事旅立ったというわけだでござる」

ちゃんちゃんと、モミジさんは話を締め括りました。できれば手練手管やら智略戦略やらも詳しく聞きたいところですが、別に気になった部分が私にはありません。

「待ってください。その話だとモミジさんは剣術をやったことがなかったってことじゃないですか？」

「然り。道場での鍛錬を目にすることはあっても、剣を握ったのはその日が初めてでござる」

「それでも内弟子50人以上とお父さんをシバき倒したんですか…？」

「はい。自分で自分を褒めてあげたいでござる」

いや天才じゃないですか。なんであなた魔法使いやってんですか。「あつ、今なんで拙者が魔法使いやってんだって思ったでござるな？」

目を細めて察したようにモミジさんは笑います。先を促すように沈黙を返すと、彼女は少し耳を赤くしてまたもや私の首元に顔を埋めました。

「笑わないって約束してくれるなら教えてあげるでござるよ？」
「笑いませんよ」

今までとは打って変わって真剣な声色で一言、私は返しました。
ただ魔法が不得手というだけで冤罪を被せられ、妹以外の誰にも信じてもらえず、毎日記憶を失いながら世界を彷徨った女の子を私は知っています。

ただ魔法が使えなかったというだけで、教師の夢を諦めるしかなかった人を私は知っています。

ただ魔法が使えないというだけで夢を諦めるしかなかった友人を不憫に思い、間違った手段であると知りつつも17年の歳月を捧げてただの人を魔法使いに変える薬を開発しようとした女性を私は知っています。

そして——ただの絵本に憧れて旅の魔女になろうと必死に頑張り、結果出会いと別れを楽しむ美少女を私は知っています。

魔法には良いにしろ悪いにしろ魅力があるんです。それは捨てられない憧れとなり、時には本人を苦しめる呪いになることもあります。

「きっかけがなんであれ、動機がどうであれ、私はあなたが魔法使いをする理由を笑ったりはしませんよ」

努めて優しく囁くと、モミジさんは嬉しそうな顔で私を見つめます。

「魔法使いなのに剣で戦うという一見非合理的な矛盾、めちゃくちゃカッコ良くない？」

「はっ……！」

鼻で笑いました。動機薄^うつす……!?!?

「あっ！ 笑ったでござる！ 笑わないって言ったのに〜」

ポカポカと可愛らしく叩かれてしまいます。『鼻で』笑ったことはいいのでしょうか。

そんなモミジさんが可愛くて、私は仕返しにくすぐってやりました。どうやらくすぐりへの耐性がないらしく、面白いくらいの反応が

返ってきます。

それから私達は大きいながらも寝れる範囲が狭いベッドの上で
じやれあい、それは疲れて寝落ちするまで続きました。

武士の少女 中編

朝起きると、ベッドの上はぐちやぐちやでひどい有り様でした。

確か、お互いにじゃれつきあってそのまま眠ってしまったんでしたっけ……？ よくよく考えてみれば、同年代の女の子とあそこまではしゃいだのは初めてかもしれませぬ。

私、灰の魔女ですから。魔女といえばクールなものでしょう。まあ、時には……たまには……わりと日頃から？ 小狡いこともしていきますが。それは思考の彼方にスローイン。

「あつ、起きたでござるか。おはようでござる、イレイナ殿」

「おはようございます……って、なんで服着てないんですか？ 痴女ですか？」

「痴女ではござらん。サラシを巻くために脱いだらちようど目を覚ましただけでござる。……イレイナ殿？ 拙者の胸部に何用か？」

喋りながらモミジさんが胸に巻いている包帯のようなもの。サラシと言いましたか。

なるほど。ああやって本来はかなり大きい胸を小さく見せていたんですね。私への当て付けでしょうか。

「どうしてそんなの巻いてるんです？」

「剣を振る時、邪魔になるからでござる。それに激しい運動をしたら揺れて痛いつて経験、イレイナ殿にもあるでござろう？」

「……………」

ねーでござる。生まれてこの方、私の胸が揺れたことは一度たりともねーでござる。煽ってんですか？ おおん？

そのまま慣れた手つきで私を苛立たせない程度に胸を小さく収め、モミジさんは服を着ながら聞いてきます。

「本日の予定はどのようか？」

予定ですか……。正直この国、見るとこないんですよね。なんでもかんでも普通ですし。観光地らしきものもありません。

「特にないですね。明日の朝にはこの国を出るつもりなので、出発の準備にでも充てようかと。この宿に今夜も泊まると出費がえげつな

いので、別の宿も探すくらいでしょうか」

つまり、これといった予定はないということです。

「明日の朝でござるか……」

「はい。……そんな顔しないでください」

「でもお……」

朝っぱらから泣きそうな顔になるモミジさん。どんだけ泣き虫な人ですか。

「じゃあ今日は私がモミジさんに付き合いますよ。どこか行ききたいところとかありますか?」

「本当でござるか!?? 拙者と付き合ってくれてござるか!??」

「語弊があつたらいいけませんので正しく言いますね。モミジさんに付き合おうんです。モミジさんと交際するわけではありませんので悪しからず」

「なーんだ……ちっ」

「露骨に舌打ちしましたね」

先ほどのしおらしさはどちらへ? :

「むう……。じゃあイレイナ殿! 武器屋に行きたいでござる」

「武器屋ですか。なぜそんな場所に?」

「刀を研いでもらいたいでござる」

ああ、そういえば錆びて鞘から抜けないでしたっけ。

「それは構いませんが、そういうのって自分で研ぐものじゃないんですか? 武士の魂なんでしょう?」

「時間かかる上に面倒くさいから嫌でござる」

なんとまあ……。というか、その研ぐためのお金って私が払うんですよね? モミジさん、お金持ってないですもん。

「んでんで、研いでる間にイレイナ殿の買い物を済ませてしまいましよう。そうすれば時間も無駄にならないでござろう?」

「そうですね。助かります」

私が承諾すると、モミジさんはうきうき顔で支度を始めました。もし彼女に尻尾が生えていたら、千切れんばかりに左右へ振られていたことでしょう。

そんなこんなで最高級宿をチェックアウトした私達は、まず武器屋さんを探しました。

すぐに見つかりました。剣やら槍やらが店の前でワゴンに入り、格安で叩き売りされています。仮にも凶器が、このようなお粗末な管理で良いのでしょうか。武器が無くても普通に強い魔女にはあまり縁の無い疑問です。

意気揚々と店の中に入るモミジさんは腰から鞘ごと刀を抜き、カウンターへ置きました。

「店主！ 武器の研磨を依頼したいでござる」

「あいよ。…って、嬢ちゃん。この刀、鞘から抜けないじゃねえか」

「店主！ 拙者と綱引きならぬ、刀引きでござるー！」

「力づくで抜く気か!?」

わりと昨日から思っていました。モミジさんはもしかしたら少しお馬鹿さんなのかもしれません。

きつと頭にいく予定だった栄養も胸に回ってしまったのでしょう。可哀想に。

私の哀れみの視線の先で、モミジさんと店主さんはうんとこしよ。どっこいしょ。それでも刀は抜けません。

「はあ…仕方ありませんね」

あまりにも抜けず、苛立つた様子の店主さんは「てめえなんでこの状態になるまで放置してたんだ馬鹿野郎」と言いたげな目でモミジさんを睨みつけていました。もちろん彼女は涙目。

なので、時間逆転の魔法で抜けるくらいまで巻き戻してあげました。できれば綺麗な状態まで戻して出費を抑えたかったです。どうやら何か代償が必要なくらいには魔力を食いそうです。ホント、どうしてそんなに長い間放置していたんでしょうか。

「じゃあ明日の朝にでも取りに来な」

「了解でござる。頼み申した」

モミジさんは返された柄を刀の鞘に収め、外見上は今までと変わらない状態にして腰に戻しました。あの刃、取れたんですね。

「ではでは！ 拙者とイレイナ殿のデート、開始でござるー！」

「いやデートじゃないです」

「逢引きでござるか？」

「それ意味同じですよね？」

「ではちよつとえつちな感じに逢瀬と」

「だから意味同じですよね？」

「むう…。ああ言えばこう言うでござるな」

「こつちのセリフです」

ちよつと棘のある返しをしても、モミジさんはニコニコしています。ついでに武器屋さんを出てからずっと私の手を握っています。

よほど機嫌が良いのか、鼻歌も聞こえます。ちよつと音痴ですが。

「やっぱり逢瀬と言ったら……宿でござるか？」

「あつ帰ります？ いいですよさようなら」

「冗談でござる！」

私の口元くらいしかない背丈なので、上目遣いにちよつと色っぽく見上げてなにやら戯言をのたまってきました。昨日のベッドでの所業を見る限り、本当に冗談か怪しいところです。

これ以上戯言を並べられても耳が腐るので、私から提案することにしませう。

「まあ無難に朝食でもどうです？ そろそろパン屋さんも空く頃だと思えますし」

時間はちよつと朝食と昼食の間くらい。パン屋さんとしては昼食向けのパンを焼き始めたあたりでしょう。運が良ければ焼き立てを食べられるかもしれません。

「いいでござるな。拙者、この国を出るまでにあのパン屋のパンを制覇したいでござる」

「それは構わないのですが、飽きないんですか？」

「何故だかイレイナ殿と食べるとなんでも飽きずに食べれるでござる。これはきつと愛の力でござるな」

「きつとあのパン屋さんの腕が良いんでしょうね」

あのクロワッサンは絶品でした。以上。この話終わり。

それから他愛なく、中身もなく、どこまでも薄っぺらいながら楽

しくおしやべりしてパン屋さんに向かいます。この人、目につく物が気になる子犬のような性格なので話題がコロコロ変わりますね。

美味しそうな匂いを嗅げば、

「マミ上の作るおしるこは最高でござる。特に寒い日におやつとして出されたら、3杯はおかわりしてしまうでござるな」

帽子屋さんを見つけると、

「パピ上の頭頂部がハゲてるのは、どうやら若い頃外国にかぶれてハットを被り続けたのが原因らしいでござる。マミ上からそれを聞いたので、拙者は三角帽子を被らぬ。遺伝子怖い」

仲睦まじく並ぶカップルを見かければ、

「拙者の国では昔『衆道』というものが盛んでござった。言ってしまったらB.Lでござるな。内弟子の何人かもその道を実つ走つてござった」
ふむ。わりと彼女の国も面白そうですね。是非近くに行つたら寄つてみたいです。

そんな事を考えると、モミジさんは私を見上げました。

「いつかイレイナ殿にも来てほしいでござる。拙者、張り切つて観光ガイドを務めるでござるよ」

「ふふ…今ちようど私も行ってみたいと思つたところです。そうですね。その時はお願いしましょうか」

そう言つてあげると、モミジさんは満面の笑みを浮かべました。尻尾があつたら遠心力で千切れたことでしょう。

頭を撫でたい衝動に駆られながらもなんとか堪え、ちようど目の前まで来たパン屋さんへ意識を移します。この国での私達の食事、今のところこのパンだけですな。

「いらつしやい。また来てくれたのね」

「はい。美味しくてつい」

にこりと笑い、素敵な女店長に挨拶を交わしました。すっかり常連扱いになつちやいましたね。

「うくんん！ やっぱいい匂いでござる〜！」

「あと少しくクロワッサンとベーグルが焼き上がるわよ。ちよつとだけ待つていられる？」

「ベーグル!? まだ食べてないでござる! 食べたいでござるよ!」
「はいはい。じゃあ他のパンでも選んでちようだい?」

店長さんのモミジさんに向ける視線は、娘や孫に向けるものですね。ああも天真爛漫で素直な反応を返されると、やはり嬉しいものなんです。

そんな様子を澄まし顔で眺める私ですが、実は焼き立てのクロワッサンが食べられると聞いてうきうきを抑えられていませんでした。気を抜くと鼻歌を歌い出してしまいそうです。

踊る心を抑えながら、私達は今日も店頭に並ぶ多種多様なパンを吟味していました。

その時です。この幸せ空間に、汚い怒声が響いたのは。

「全員動くなあ!!」

入り口から武器を持った3人組が押し入ってきました。

剣を持った筋骨隆々の男性。

槍を持った骨のようなガリガリ男。

本を持った太つちよ。

とてもバラエティに富んだ見た目の強盗3人組です。あと、全員つと言ってもここにいるのは店長さんと私達の3人だけです。

「へっへっへ。動くんじゃねえぞ嬢ちゃん達。ちつとでも動いたら俺様の聖剣、エクスカリパーの錆にしちまうぞ?」

「ひひひ……オイラの魔槍、ゲイ・ポルグが君達の心臓を貫いちゃうよお〜」

「デュフフ。僕ちんのドラゴンを滅ぼす魔導書でこのお店めちゃうちやにしちやうかもよ。デュフフ!」

「……………」

なんででしょう? あの剣も槍も、さっきモミジさんが刀の研磨を依頼したお店の前でワゴンセールをしていたものによく似ています。なんならタグが付けっぱなしです。

あと魔導書に関しては表紙に擬人化した異様に露出度の高い女の子と、その女の子に腕を組まれて赤くなってる男の子がポップな雰囲気です。たぶん10代あたりを中心に読まれているラ

イトなノベルでしょう。嘘をつくならせめてブックカバーくらい買ったら？

「おう店長さんよ！　ここの店にあるパンを全部寄越しな！　今すぐになー！　あー！」

「ほらほらあゝ早く寄越しなあゝ」

「デュフフ！　パン食べ放題だよ。デュフフ！」

あまりのインパクトに沈黙するしかない私達をビビっていると勘違いしているのか、強盗さん達はめちやくちやイキってますね。店長さんが心配なのでチラツと見ると……あつ、パン生地伸ばすための麵棒を両手に持っています。優しい見た目に反して殺意高めの店長さんです。

一応、パン屋さんは私にとって神聖な場所なので、血が流れるような事態は極力避けたいです。ばつちいので。

なので、最低限警告だけはしておきましょう。

「あゝこれ見えますか？」

私は胸元の星をかたどったブローチ——魔女の証を強盗さん達に見せます。

魔女とは魔法使いの最高位。普通の人が武器を持って束になったところを杖の一振りで壊滅させるなんて朝飯前です。ちょうど私、まだ朝ごはん食べてないですし2つの意味で朝飯前です。

大半の賊はこれを見れば「ひいいい!?　ごめんなさいい！」と土下座で謝るなり、「人違いでしたあー」逃げるなりして一件落着きます。

それらをしない人は魔女すら知らない田舎者か、魔女だろうと俺なら勝てると思春期の勘違いから抜け出せない可哀想な人でしょう。

「なんだあ？　そのぺったんこの胸がどうしたんだよお嬢ちゃくん？」

「オイラ達を誘惑してんのかい？」

「デュフフ！　僕ちん、君みたいなお子ちゃまには興味ないかも」

この人達、この世に、いらない。

ですが誇り高い灰の魔女、それが私です。殺しはしません。生と死のボーダーラインを指の第二関節が超えるくらいで許してあげま

しよう。

彼らの処遇を決めた私は懐から杖を取り出そうとしました。すると――

「おのれ痴れ者共お！ 拙者のイレイナ殿に指一本でも触れてみる！ 即刻打ち首獄門にしてくれるでござる！」

モミジさん、鬼の形相で叫びました。なんのスイッチが入ったんでしょうか。

「聖剣を手に取り、魔槍を掴み、魔導書を持ちながら、それらを悪事に使うなど不届き千万！ 拙者が成敗致すでござる！」

あつ、この人強盗さん達の言葉信じちゃってます……。大変です。やっぱり彼女はお馬鹿さんでした。

「へ、へへ：俺様たちのやろうつてののか？」

「おおおオイラ達をを本気にさせちゃううう？」

「ぼぼぼ僕ちん、強いんだからな！ デュフフなんだからな！」

そして逆にビビる強盗達。どうやらこのパン屋さんにいる6人中4人は悲しいくらいに頭が弱いそうです。

モミジさんはパンの載っているトレーをカウンターに置き、刀に手を掛けて私を強盗達から守る位置に立ちました。それはそうと、その刀って刃ないですよね？

「イレイナ殿は拙者が守る！」

わーかっこいいー。それはそうと、その刀って刃ないですよね？

「義には義を。恩には恩を。ときめきにはときめきを。昨日から貰ったたくさんのモノをイレイナ殿に返すでござる」

そして私に振り返り、ウインクを一つ。

「拙者に――ときめいてもらうでござる」

めちやくちやキメ顔でそんな事を言いました。強盗さん達に顔を向ける瞬間「…ふつ、キマった」とか漏れてますし。

「やつ、やつちまえー!!」

めちやくちやカツコつけてるモミジさんへ、強盗さん達は武器を振り上げて襲い掛かっていきます。約1名、本を朗読し始めましたが。

それに対してモミジさんは――バツ！ 刀を握った瞬間、その場

から消えました。

いえ、消えたものではありません。天井を足場にして上下逆さまの状態になっていきます。そこからさらに壁へ飛び移り、強盗さんの背中へと回りまわりました。そしてまずは1人。剣を持った筋骨隆々の人を鞘でシバきます。

上下前後左右。壁も天井も足場にして、モミジさんは店内を飛び回ります。

(あれは……過重力の応用でしょうか?)

過重力とは読んで字の如く、重力を過剰にかける魔法です。本来は相手の身動きを封じるなど主に捕縛を目的として使用されますが、モミジさんはそれを自分自身にかけているようです。上から下へはもちろん、時には下から上へ。右から左へ。後ろから前へ。

そのせいなのか、彼女が壁や天井を蹴る音はとても静かです。おかげで山盛りに積まれたパンは少し揺れるだけに留まり、落ちることはありません。

(速いですね。室内に限って言えば、私も危ないかもしれません)

恐らく初見であれば魔女である私も負けていたでしょう。それほどまでにモミジさんの技術は洗練されています。

「ガッ!?」

私が冷静に分析している間に槍を持ったガリガリ男も倒しました。ほとんど抵抗させず、速度で翻弄してのノックアウト。見事なものですね。

感心しているとモミジさんはガリガリ男と筋骨隆々男の後ろ襟を掴み、

「イレイナ殿! 店のドア開けてほしいでござる!」

「え? あ、はい」

魔法でドアを開けると——ブウウン! まず後ろから前へ、すぐに前から後ろへ過重力を掛けて生まれた慣性を利用してぶん投げました。2人はもつれ合うようにして店から転がり出されます。

その時です。

「あつ……」

静かとはいえモミジさんの踏み込みで揺れていたバケツが、私の魔法で開けられたドアの振動で山の上から落ちてしまいました。

「任せるでござる」

モミジさんは店の入り口からトングだけを掴み、床に触れるギリギリでキャッチ。カウンターに置いた自分のトレーへ追加で乗せて、店長さんにウインクを1つ。

「これも追加でお願いするでござる」

「……あ……」

店長さんはどこか乙女な声を上げました。どうやら落ちたのは店長さんのようですね。マジですか。

そして残ったのは太つちよさん。

『ば、馬鹿野郎！ 一緒に暮らすってなんだよ!!?』『だって君、いつもその辺で買ったご飯食べてるじゃない。だ・か・ら、私が毎日料理作ってあげる♡』こんな美少女と……一つ屋根の下で……っ!!?冗談じゃねえよ!!?』

無駄に広い声帯技術で役を演じ分けながら未だに朗読していました。強盗辞めて大道芸人になればいいのでは……?』

「あとはお主人でござる。さあどうする?」

「ぼぼぼ僕ちゃんは……僕ちゃんはあ!! ぐめんなさあああい!!」

太つちよさん、逃走しました。体型に見合わぬ俊足です。明らかにこの人が剣なり槍なり持ってた方が良かったのではないのでしょうか。店を出て、一緒に強盗をした2人を踏みつけさらにまっすぐ走り去ります。踏まれた2人、体からヤバイ異音を発していました。ドンマイ。

ですが、未遂とはいえ強盗は強盗。旅の魔女として、それを捕まえるくらいのことにはするべきですね。

私は杖を逃げる太つちよさんに向けると……モミジさんが立ち塞がりました。

「モミジさん、どいてください? あの距離なら私の魔法の方が早いです」

「然り。しかしイレイナ殿、まだ拙者にときめいてござらん?」

「そもそもときめきつて口で言うものなんですか？」

「少なくとも拙者は口で言っちゃうでござるか」

「そうですか」

「なので、イレイナ殿に良いところを見せてときめいてもらうでござる」

少なくとも、店長さんとはときめいたようですよ。ほら、恋する乙女のような顔でモミジさんへ熱い視線を送っています。

それには気付かず、モミジさんは刀を肩に担ぐような構えを取りました。

「それでは特別に、拙者の遠距離魔法をお見せするでござる」

そしてさらに体を捻り……まさか……？

「遠距離魔法おおおおおおお!!」

大きな掛け声と共にぶん！ すぽつ。ゴツンツ！

縦に振り下ろされた刀の遠心力により鞘がすっぽ抜け、逃走する太っちょさんの後頭部を直撃しました。痛そう……。

「ふっ。またつまらぬものを斬ってしまったでござる」

斬ってません。一から十までぶん殴ってます。

そんなツツコミが頭をよぎりながらも、私は目の前で起こった光景に目を見開きました。

鞘も無くなり、ただ握る以外なんの役にも立たなそうな柄をモミジさんは振りました。すると、飛んでいった鞘が戻ってきて——キーン。そのまま柄を納めました。

明らかに物理法則を無視した鞘。手に握った柄の振り方。その2つの動きを私は知っています。なんなら、魔法使いならば誰もが馴染みのある動きでしょう。

「もしかしてあなたの杖は——その柄ですか？」

モミジさんは然りと頷きました。

魔法を扱う為に必要な動作は大きく分けて2つです。

1つめは杖を握ること。

2つめは杖を振ること。

振る為には握らなければならぬので当たり前ですが。

そしてそれは、刀も同じなのでは？

一応魔法使い用の杖という物がありますが、人によって自分が握りやすいように形状を加工することができます。つまり、刀の柄にも加工できるのです。

剣士然とした立ち振る舞いや昨晚の話から、実はモミジさんはほとんど魔法を使えないのではないかと私は考えていました。ですが、見当違いだったようですね。

そもそもよく考えれば分かることです。刃の無くなった刀をどうしてわざわざ持ち歩くのか。武士の魂と豪語する物を、どうして錆びつくまで手入れせず放置していたのか。

彼女にとって刀の刃の部分はさほど重要ではなかったのです。重要なのは柄。もしかしたら、鞘は飛ぶ為のほうきとして使っていたかもしれませんね。

元々私が持っていたモミジさんへの違和感はこれだけではありません。今の戦闘で、芋づる式に確信へと変わりました。

私とモミジさんは強盗を捕らえた謝礼として警察から僅かばかりの金貨を貰い、そのまま別の安宿へと移動しました。

ついでにパン屋さんからは大量のパンと保存の効くラスクをいただきました。モミジさんだけ。羨ましい……。

「美味しい〜！ 美味しいでござるよ、イレイナ殿！」

「良かったですね。店長さんからだいぶ気に入られたみたいですし、明日の朝にでも行ってみては？」

「イレイナ殿、機嫌悪くないでござるか？ ……はっ！ まさか嫉妬？」

「違います」

焼き立ての香りに我慢できなかったのか、お行儀悪く安宿の廊下で食べ歩くモミジさん。あまりのパンの美味しさに、頬が緩みまくつてます。

まあ、お行儀悪いのは私も同様ですけどね。並んでもぐもぐしてま
すから。

ポロポロとパンくずをこぼして廊下を歩く私達に、宿屋の従業員さ
んが大変イラツとした様子でした。

「そういえば、本当によろしいのでござるか？ 少しばかりとはいえ
お金も貰ったので、同室でなくても構わないでござるよう。」

「まあ、そうなんですけどね。なんというか…私がモミジさんとまだ
話したいことがあるんです」

「……子どもは2人くらい欲しいでござる」

「グーお見舞いしますよ？」

「もっと欲しいでござるか!? その…拙者頑張るでござ痛いつ！」

グーはさすがに可哀想なのでパーにしておきました。戯言はそこ
までにしてもらいましょう。

おっと。ここが私達の部屋ですね。扉を開けて、モミジさんに先に
入るよう促します。

「おお……狭いでござるな」

「昨日泊まった宿と比べたら可哀想ですよ」

「壁も薄そうでござる。声我慢できるかな……」

「今度こそグーで殴りますよ？」

「なるほど。どちらかと言えば、イレイナ殿が下になりたいと。確か
にイレイナ殿は受けの方が痛い！」

グーで殴りました。私も手が痛い。

というか、前にも別の人に同じようなことを言われましたね。

そんな事を思いながら私はパンの袋を申し訳程度に設置されたサ
イドテーブルに置き、今入った扉を背中にして立ちます。もし私が想
定する最悪の結果になれば、廊下にいた従業員さんが巻き込まれてし
まいますからね。

「モミジさん。私はあなたに聞きたいことがあります」

「なんでござるか？ なんでも聞いてくれていいでござるよ」

私は服の中で杖を握りながら緊張感に包まれているのに、彼女はに
ぱーと今までと変わらない顔で呑気に首を傾げました。

もしかしたら、この質問が私達の決別を招くかもしれない。

もしかしたら、この質問さえ飲み込んでしまえば私達は今まで通りの仲良くなった旅人のままでいられるかもしれない。

それでも聞かなければなりません。でなければ、私はモミジさんを本当の意味で信用できません。

「あなたはあんなに強いのに、どうして山賊なんかに襲われていたんですか？」

その瞬間、モミジさんの表情が……、

「あなたはどうして、襲われたとき抵抗しなかったんですか？」

どんどんと……無くなっていき……、

「——あなたの目的はなんですか？」

スツと消えました。

そして——チャキ、と。静かに刀の柄へと手を掛けます。彼女が魔法を行使する為の杖へと。

武士の少女 後編

最初に違和感を感じたのは昨晚。彼女からベッドの中で実家のお話を聞いた時です。

初めて剣を持った日、手練手管やら智略戦略を凝らして内弟子50人以上と父親を倒したと言いました。しかしそんな事が可能なのでしょうか？

答えはわかりませんでした。

もしかしたら剣の神様がモミジさんにデレデレで冗談のような才能を授けたのかもしれない。

逆に、ちよつと見栄を張って話を誇張してるかもしれない。

その場に居合わせず、話だけでしかその状況を知らない私には判断出来ませんでした。

ですが、先ほどのパン屋さんで見せた剣と魔法を組み回せた戦闘技術。あれは間違いなく本物です。あまりにも使い慣れていました。過重力を自分に掛けて室内を飛び回る。それだけなら私にもできます。

しかしそれは、杖であれば、という注釈が付きます。

刀のような長物を持って、あそこまで変幻自在な軌道はできません。確実に体捌きが間に合わず、5回も保たず壁や床に激突するでしょう。

だから、彼女の技術は本物です。

ですが、彼女の技術が本物ならば今度は別の疑問が生まれます。それは私達の初対面の時まで遡ります。

モミジさんは、土下座で魔法使いでもなんでもない山賊に許しを乞うていました。刀で撃退しようとしたけど錆びて抜けず、テンパって魔法も使えなかった、と。

それは本当でしょうか。あの狭い室内の中、剣にも槍にも怯まず戦える彼女が、本当にそんな事態に陥るのでしょうか。

私ならば、こう結論します。——ありえない。

「あなたの目的は何ですか？」

質問すると、モミジさんは右手を刀の柄——杖に掛けました。私は身構えます。

先ほどまでのニコニコふわふわした雰囲気はありません。彼女の目は、覚悟を決めた武人のそれです。

なんの覚悟でしょう？ 例えば……殺害。

「気付いてしまったのでござるな」

さらに左手が鞘を掴み、腰から抜かれました。そして体の前面を通して——ポイ。無造作にベッドへ放りました。あれ？

「あれ？」

「うん？ どうしたでござる？」

「いや、あれ……？ 刀、抜かないんですか？」

「何故でござる？ 拙者、刀の柄を持って食事を摂る習慣はないでござるよ？」

「あ、はい」

どうやらモミジさんは単に座る為に腰から刀を抜いたそうです。確かに腰にあんな長物があつたら座りにくいですね。

……って！ いやそうではなくて！！？

「ここは『ならば仕方なし。口封じの為に死んでもらうでござる』と成って、激しいバトルに突入……って流れじゃないんですか？」

「拙者、激しいバトルをしながら食事を摂る習慣もござらん」

「あ、はい。すみません」

なんか正論言われました。さっきまで『子どもは2人欲しい』とか『受け攻め』とか戯言のたまってた口から言われると、非常に悔しいものを感じます。

怪訝な顔でこちらを見るモミジさんですが、チラチラとパンの入った袋に視線が泳いでいます。どうやら早く食べたいようです。

「どうぞ」

「かたじけない」

察しの良い私は、話を中断して彼女に食事を促します。すると先ほどまでと変わらないニコニコふわふわな表情でパンに舌鼓を打ち始めました。なんですか、さっきの一瞬作ったシリアス顔は。

なんだか激しい勘違いをしていた自分に対して、恥ずかしいやら悔しいやらで顔に熱が集まるのがわかります。ああもう！ほんとにもう！

「郷に入りては郷に従え、でござる」

「はい？」

「拙者はただ、ルールを守ることを念頭において行動していただけでござるよ」

「……あの、なんの話ですか？」

「うん？ 拙者が山賊に土下座で謝っていたことを聞きたいのではござらぬか？」

「ええ、まあ」

今度は私が怪訝な顔をする番でした。後ろを向いて羞恥に悶えていた私は、もう一度モミジへと目を向けます。

彼女は微笑んでいました。しかし、その笑みは今まで見てきた幼さが多分に含まれたものではありません。

どこか達観した、変えようのない価値観を語るような。母親が子どもに言い聞かせるような。そんな諦観と慈愛が混ざったような、どこか大人っぽい笑みです。

こんな顔ができたんですね。

「すみません。どういう意味でしょう？」

だから私は居ず舞いを正して向き合いました。これはもしかしたら、彼女にとってかなり重要な話をするかもしれないから。

「あ、そんなに重い話はしないでござるよ」

私はベッドに寝転がって話を聞くと決めました。お布団好き。

「郷に入りては郷に従え。旅人の基本でござるな」

「そうですね。私達は結局のところ、ただの通りすがりですから」

「然り。旅をしていれば、色々な価値観に出会うでござる。それは食べ物、マナー、コミュニケーション、果ては家族の在り方まで。多種

多様で、旅を始めた頃は目が回りそうだったでござる」

あはは、と照れ笑いを浮かべてモミジさんはパンを齧ります。

「村の数だけ、街の数だけ、国の数だけルールがあるでござる。旅人である以上、他所者である拙者達はそのルールに異を唱えることは……まあ自分に火の粉が降り掛からなければ少ないであろう?」

「そう…ですな」

私は目を逸らしました。わりと何度か…いえそれなりに…：頻繁に? 異を唱えた記憶がそこそこあります。

いえ、でもあれは正当防衛とか依頼であつたとかですし、別にいいですよね……?」

「規模に関わらず、人里にルールが生まれるのは当然の帰結でござる。じゃあ——人里以外では?」

「っ!?」

それは…：どうなんでしょうか。私は国と国の間を移動する際、ほとんどほうきの上にあります。なので当然山賊に絡まれるという経験はほぼ無く、攻撃されることもありませんでした。いつだって私が巻き込まれる厄介事は人里で起きています。

「正解は、自分のルールに従う、でござるよ」

まあそうでしょう。この話の流れからなんとなく察していました。

「それだとモミジさんは、旅の道中襲われたら抵抗せず許しを乞うのがルールってことになりませんか?」

「残念ながら違うでござる。イレイナ殿が見た姿は、自身のルールを実行している前段階でござる」

「じゃあ、あなたは何をしようとしていたんですか?」

そう聞いた瞬間、モミジさんは表情を消しました。ゾツとするほど美しく、けれど肝が冷えるほど恐ろしい。

「拙者は——彼らを殺そうとしていたでござるよ」

殺す。それは私の知っている彼女に世界で一番遠い言葉のように感じられました。でも、今の表情を消した彼女には何故か当たり前の

ようにも感じられました。

意図せず早まる鼓動を誤魔化すように、私はもう一度服の中で杖を握ります。

「拙者は旅を始める時、最初にこのルールを作ったでござる。もし治安維持機関や法執行機関が無い場所で襲われた場合、下手人は殺すと。あの時もそうでござった。……幸せなことに、まだ経験はないでござるが」

そう言って、またモミジさんは私の知ってるモミジさんに戻ってくれました。

「でも待つてください。私が助けた後、あなたは『命の恩人でござる』とか言ってたじゃないですか。あれは嘘だったんですか?」

「恩人でござるよ? イレイナ殿は、あの山賊の命の恩人でござる」

「それでどうしてあなたが感謝するんですか?」

「拙者、元々あの時は物を全て奪わせた上で後ろから頸をへし折る腹積りでござった。油断したところを苦しませないよう一息に」

そうして、モミジさんはため息を吐いて一言。

「それでもやっぱり殺すのが怖かったんだよ。自分で決めたルールでも」

あの取って付けたような口調をやめて、言いました。

それで泣いていたんですね。ただ泣き虫なだけかと思いましたが、あの時は自分へと害をなす山賊の方々の無事を喜んで。

「だから、拙者はイレイナ殿に星の数ほど感謝しているでござる」

「そうですか」

「……未遂とはいえ人を殺そうと考えた拙者のこと、嫌いになったでござるか?」

モミジさんは、不安げに涙目で尋ねてきます。やっぱりただの泣き虫です。

——嫌いになるわけじゃないじゃないですか。

自分が決めたルールに従おうとして。でも怖くて泣いて。だけど頑固なところがあるから変えられなくて。結果的に殺そうとした人達が助かったことに安堵して。それを喜んで。

自分を襲ってきた相手が助かったことに喜べる優しいあなたを、嫌いになるわけないじゃないですか。

ですが素直じゃない私はそれを口に出さず、まったく別の提案をします。

「モミジさん。パン食べ終わったら、もう一度街に出ましょう。私は本屋さんに行きたいです」

「イレイナ殿……？」

「一緒に来てくれますか？」

私は、彼女に手のひらを向けて差し出しました。

その手を不思議そうに眺めて、それから私の意図を察したモミジさんは嬉しそうに頷きました。

それから私達は1日中遊び倒しました。最初は本屋さんに行く予定でしたが、その道中で見つけた雑貨屋さんを冷やかしたり、露店で売っていたクレープを食べたり、あとは大道芸を眺めたり。

やっと本屋に着いたと思えば、すぐに飽きたモミジさんは退屈そうにあくびしていましたね。あまり本は読まないタイプのようですし。手早く買い物済ませると、2人揃ってお腹の虫が鳴きました。少し遅めのランチは、パン屋さんではなくパスタにして、お互いのを半分こずつして食べました。

もちろん、お昼を食べた後も私達は止まりません。

ブティックでモミジさんが試着したり、逆に私がモミジさんの服を着てもみました。意外にも私の方が似合ってたようです。その時何故かブティックの店員さんが、着物は胸が小さい方が似合うという俗説を教えてくれたのですが……おやおや、このお店は客に服だけでなく喧嘩も売るそうですね。

よくよく考えれば私は小さい頃から魔女になるための勉強ばかりでしたので、こういった年頃の女の子同士のようなことをする機会は滅多にありませんでした。

結局夕方までこのどこまでも普通な国で遊び通し、宿に戻る頃には心地良い疲労感が私達を包んでいました。

そして軽くシャワーで汗を流し、私達は当たり前のように同じベッドで横になります。さらに当たり前のように、モミジさんは私の首に手を回します。抱き枕でも買ったらどうでしょう。

「イレイナ殿」

「なんですか?」

「今日は楽しかったでござるな」

「……ええ」

「拙者、もしかしたらこの日の為に旅をしていたのかもしれないでござる」

「またそうやって重い事を言う……」

「あはは…冗談でござる」

そう言つて、またもやモミジさんは私の首元に顔を埋めます。

「イレイナ殿」

「なんですか?」

「拙者を……人殺しにしないでくれてありがとうございます」

ボソリと蚊の鳴くような声で呟かれた言葉は、静かな安宿の中で驚くほど鮮明に響きました。

「……はい」

私は目の前の綺麗な黒髪をできるだけ優しく撫でました。どうかあなたが、このまま優しく穏やかな気持ちで夢を見れますようにと。願いを込めて。

あつという間に朝になり、私達は国の門を出て向かい合います。お別れの時間です。

やっぱりモミジさんは瞳にたくさん涙を浮かべて私に抱き着いています。

「それではモミジさん。さよならです」

「あと5分だけ、ダメでござるか?」

「このやり取り、もう6回目なんです?」

「じゃああと50分」

「魔法ブチ込みますよ?」

既に30分はこの状態でした。私の首はミシミシと悲鳴を挙げ始めています。痛いのです。寝違えてないのに、寝違えたみたいな痛みが突っ走ってます。

どうやら首の音はモミジさんにも聞こえていたらしく、渋々といった様子で離れてくれます。ストレッチがたら軽く回すと、バキバキつとえげつない音が上がりました。

「…イレイナ殿。これを」

「これは？」

モミジさんは袖の中から一つ、箱を出してこちらに差し出してきます。

「開けてみるでござる」

「ええ…？ あっ、綺麗…」

箱を開けると、中には櫛が入っていました。普段私が使っているブラッシングタイプのもではなく、楕円形を真つ二つに割った感じのものです。さらにその櫛は、紅地の中に美しい黄葉が散っていました。

「飾り櫛でござる。髪を梳かすのはもちろん、髪飾りとしても使える優れものでござるよ」

得意げに彼女は語りますが、正直、旅の途中で出会った人から物を受け取るのは嬉しくありません。

だって…それを見たら思い出してしまうからです。どうしようもなく会いたくなってしまうから。

だから、できれば受け取りたくありません。

「拙者の国では、櫛を贈ることはプロポーズの意味でござる」

「次の国に着いたら売りますね」

「ひどい…」

涙目になるモミジさん。ちよつとだけセンチメンタルになった私の時間を返してください。

しかし、めげずに口だけは止めませんでした。

「紅葉や黄葉は、拙者の国で『櫛』と呼ぶでござる。だから、その櫛を拙者だと思って毎日身に着けてほしいでござる」

「え、重い」

東国出身の女性はこんなものばかりなのでしょう。 ちょっと彼女の祖国に行くのが怖くなりました。

ですが、まあ…今回に限ってはお互い様かもしれませんね。

私は櫛を箱に戻して鞆に大事に仕舞い、代わりに一冊の本を取り出しました。

本というより、ノートみたいなものですが。

「では私からはコレをあげます」

「えっ!?? そんな…貰えないでござるよ!」

「交換です。私だけ貰ってばかりでは不公平でしょう?」

「でも……」

「いいからいいから」

私は彼女の胸にその本を押し付けました。サラシが巻かれてもなお弾力を返してきた彼女の胸に少しイラツときたのは内緒です。

モミジさんは私から受け取った本をパラパラとめくり、首を傾げました。

「これ、何も書いてないでござるよ?」

「当然です。その本は、これからあなたが書くんですから」

「拙者が……?」

「日記帳ですよ」

コレが、私が本屋さんで買ったものです。恐らくモミジさんは雑貨屋さんで櫛を買ったのでしよう。

お互い相手がこっそり買っていたことに気付いてなかったんですね。そんな小さな事実にも、くすりと笑みが溢れてしまします。

私は大事そうに日記帳を抱き締める彼女へ、小指を立てて突き出しました。

「イレイナ殿……?」

「確かこれは、あなたの国に伝わる約束のおまじないですよ?」

「……っ!」

少し前に別の人と交わしたものです。あの時は、私が差し出された側でした。

モミジさんは涙を堪えるように一瞬俯き、しかし堪えられなかったのか開き直ったように涙を流しながらとびきりの笑顔で小指を絡ませてきます。

「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ーます♪ 指切った！ でござる」

「待ってくださいこれってそんなにヤバイやつなんですか!?!?」

リスクの大きさが半端じゃありません。というかあの人、私とおまじないした時なにも言いませんでしたけど、そういう意味があったんですか……。

やっぱり東国の女性は重いです……。

どうにも締まらずげんなりする私に、もう一度モミジさんは抱き着いてきました。好きですね、抱き着くの。

「また……会えるでござるか?」

「私達は旅人ですから保証はできません。だけど、きっと会えますよ。そういうおまじないなんでしょう?」

「……ん」

「今ではない、いつか。ここではない、どこか。いつかどこかのまだ知らない場所でまた会いましょう。その時にでも、あなたの旅の物語を聞かせてください」

「……承知したのでござる」

力強く頷いたモミジさんの頭を軽く撫で、私達は体を離しました。今度こそお別れの時です。もちろん、一時いっときの。

私はほうきに横座りになり、浮かび上がります。

「それじゃあ」

「ん。あつ、最後に1つだけいいでござるか?」

「ここはもう素直に別れましょうよ……」

「櫛を受け取ったということは、拙者のプロポーズはOKということでござるから?」」

「贈り物ではなく日記帳との交換ですので、当然ながらプロポーズはノーカンです」

「ええ〜!」

不満げなモミジさんの声について笑い出してしまいつつ、私はほうきで高く高く飛び上がりました。小さくなつていくモミジさんへと手を振りながら。

自身と同じ名前の景色を眺めながら、刀の鞘に乗った少女が飛んでいきます。

きつとこの先も丘を超え、真澄の空に照らされて、時には口笛を吹きながら。山越え谷超え、目的地もない一人旅をするのでしょうか。

年齢はまだ若く、10代半ば。長い黒髪と今の季節の風物詩とは真逆のものが刺繍されたローブをなびかせ、飛び続けていきました。

さて、そんな旅人とは一体誰でしょう？　そう、拙者でござ……

「やべっ。刀の刃、鍛冶屋に忘れたでござる」

私が拙者になった3日間

1日目

とある街のベンチで、拙者は露店で買ったパンを齧りながら目の前の大通りをぼけ々と眺めていたでござる。

「えへへ」

傍らには、拙者の運命の相手であり、想い人である灰の魔女さんから贈られた日記帳が置かれているでござる。1ページめくると、まるでタイトルのように綺麗な文字で『武士の旅々』と記されてあった。

拙者は、彼女からの贈り物を眺めるたびに頬を緩ませていたでござる。

(日記帳かあ……。あの子、元気でござろうか)

突然でござるが、拙者のこの一人称と語尾、実を言うところ………キャラ付けでござる。いやまあ、普通に考えたら分かると思うでござろうが、こんなしゃべり方をしてる人なんていないでござる。

……以前、あまりに特徴が無すぎて無理にこのような口調を方言にしようとしていた村もあったほど。あの時はまさかこの口調が被るとはと驚き、その村とどちらがござる口調の正統な使い手かを決める勝負をしたでござるな。

風の噂で聞いたところ、どうやらその村はもうござる口調に飽きて別の方言を模索中とのこと。方言を模索中ってなに？

そんな事をふと思いつ出したのは、全て目の前的大通りを行く人混みと傍らの日記帳がきつかけでござった。

拙者が拙者を拙者と呼ぶようになったのは……そう。絶対に日記帳を手放せない、毎日眠るたびに記憶を失ってしまう不思議で優しい女子おなじと出会ったことが、そもそもの始まりでござった。

潮風香る街道を、1人の少女が歩いていました。長い黒髪を揺ら

し、この夏の照りつける陽射しから肌を守るように羽織られたローブには雪の結晶が刺繍されています。

薄手の生地を用いた着物と袴を纏い、足元は裸足に草履と涼しげでした。

そのまま真っ直ぐ街道を進みます。彼女の目指す先には雄大な海と、そこへ通せんぼするように築かれた国の門がありました。

さて。夏の陽射しに雪のような柔肌を輝かせ、調子外れの鼻歌を機嫌良く歌う腰に刀を佩いた女の子とは一体誰でしょう。

そう、私なんだよ。

「あれが平安の国カイヤナイトかあ」

てくてくてくてく。歩を進める度に強くなる潮の香りが、私の心を弾ませます。ぴよんぴよん弾ませます。なにせ、この季節では海水浴の名所として多くの王族貴族がバカンスに訪れる観光名所なんだからね。

「……うん？」

入国審査をするための門兵さんが見えるくらいまで来ると、なにやら国の前で一悶着起きているのが見えます。

目を凝らすと、門兵が騎士のような格好をした女の子を通せんぼしているのです。

『ダメだ。何度も言うが、この国は武器の持ち込みは禁止である』

『そこをなんとかお願いします！ わたし、これが無いと自衛もままならないの』

『ダメと言ったらダメだ。そもそも自衛をする必要が無いだろう。我が国は平安の国なのだぞ？』

『えー。でも、平和だからって自衛が必要無いってことないでしょー』
不満げに頬を膨らます騎士のような女の子に、門兵さんは困ったように頭をかいています。

さすがにこの炎天下の中で言い争うのは体を鍛え抜いた門兵でもきつみみたいだね。

すると、門兵さんはキョロキョロ周りを伺い始めました。何故か普通に歩いて来る私には気付いてないみたいだけど……その目の部分

にはまつてるものはガラクタなのかな？

『…………』

『…………ここだけの話だが、今この国では事件が起きていたな。しかも面倒なことに、武器を使った強盗なのだ。だから今、入国者の武器持ち込みには非常に敏感になっている』

『そんな事件、警察とかが簡単に解決できるんじゃないの？ 別に珍しい事件じゃないんじゃない？』

『他の国ではそうだろうな。しかし、我が国では事情が異なる』

『…………』

『この国は武器の持ち込みはもちろん、製造販売も禁止——武器など存在するはずがない国なのだからな』

以上が、2人の声が届かない位置で交わされた会話のようです。

え？ 私がどうやって聞こえない距離の会話を理解できたのか？
読唇術だよ。

さてさて困りましたね。郷に入りては郷に従えが信条のわたしだけど、この刀は、刀である前に魔法を行使する為の杖でもあるの。だから、これを取り上げられてしまうと万一の事態には素手で対応するしかなくなるね。

というわけで私はいったんローブを脱ぎ、刀をショルダーバッグみたいに背中へと斜め掛けにします。この上からもう一度ローブを羽織れば…………はい！ 刀は見えませんが！ すごくいでしょー？

「おい貴様！ 背中に隠したものはなんだ！ いや…隠したのか？ わりと堂々としていたが…………」

「……………」

門兵さんの目はどうやらガラクタじゃなかったみたい。ちよつと涙出た。

いきなり近くで大声を出された女の子もビックリして、私の方を向いています。

女の子はボブカットって言うのかな？ そんな感じの白髪を黒のカチューシャで飾り、瞳はちょうど今の季節の草花のような翡翠色。

白のローブの下は黒のスカートにロングブーツ。あと腰にはサー

ベルだね。たぶん門兵さんが彼女を通さない理由はこれだね。

魔法使いなのか剣士なのか、よく分からないなあ。てか、私とキヤラ被ってない？

「こんにちは。旅の者です。この国に入りたいのですが、よろしいでしょうか？」

「その前にまず背中の中のをこちらに見せろ」

「はい。……ちっ」

「貴様あ！ 今舌打ちしたか！」

「ちよつと歯茎が痒かったから舌でかいてただけですよ」

「それは女性としてどうなのだ？」

「……もつとも。正直言つてすぐ後悔しました。騎士の女の子引いてますし。」

「これは刀じゃないか！ この少女といい貴様といい、今の旅人は刃物を持ち歩くのがトレンドなのか？」

「どうなんでしょう？」

「いやわたしに聞かれても……」

質問を質問で返すのはマナー違反なので、女の子の方にきいてみました。ほら、3人集まるとそのうち2人だけで会話が盛り上がって、自分だけあぶれるって事よくあるよね。それを防ぐ為に話振ってみたんだけど、困らせちゃったみたい。困り眉可愛い。

とはいえ、ここは門兵さんを言いくるめ……もといご理解頂かないとダメな場面だね。

「それ、刀じゃないんですよ」

「ふざけるな。この刃の反り具合。鏢と柄の造形。刃に映る見事な刃紋。鏑の深さ。どこからどう見ても刀だろうが！」

「門兵さん詳しいですね」

「これでも刀剣オタクとしてその界限ではブイブイ言わせている」

「どうやって？ だいぶ気になりましたが、とりあえず置いといて。」

「これはね、調理器具です」

「調理器具？」

「はい。調理器具です」

「調理器具か……」

「うん」

「そうか…調理器具か」

「はい」

「……………」

「……………」

お、イケるかな？

「いやそれは無理があるだろう！」

「本当です。食材を切ってもよし、突いてもよし。銚としても使える
優れものなんですよ」

「銚……？ 銚とはなんだ？」

「魚を突いて取る狩猟器……じゃなくて調理器具です。知らない？」

「知らない」

「そうですか……。あ、ちなみにそちらの方が持つてるサーベルっぽい
のも銚ですよ。文化が違くと、同じ用途の物でも形が変わるんです
ね」

「えっそうなの!?!」

女の子、衝撃の事実だったようです。嘘を吐くのは大変心苦しいで
すが、背に腹は変えられないもんね。私自身この刀が無いと困るし。
「論より証拠です。これの使い方をお見せしますね」

私は女の子と両手を拘束されて仲良く国の中へ連行されました。

いや絵面だけ見れば連行なんだけど、正確には違うよ？

「(´▽`)でいいか?」

場所は国の貿易の要、港です。周囲には船が多数停泊しています
ね。

あと警察なのか警備員さんなのか、筋肉モリモリマッチョな男性が
多いかな。武器の持ち込み禁止って言うくらいだし、たぶん交易品に
そういうものが混ざってないかを厳しく監視しているのかも。

港から海を見下ろすと、よく澄んでいます。小魚が多く、たまにそ
こそこ大きめの魚が通るので、まあ問題ないでしょう。

私はサラシと禪を残して服を脱ぎました。

「ちよつとなにしてるのあなた!!?」

「うん? 海に入る時って服脱がない?」

「脱ぐけど! ここ公共の場だから!」

「別に気にしないよ」

「気にしなさい!」

女の子に怒られました。ぐすん。

「門兵さん。水着売ってるお店って近くにありません?」

「ふむ。この国は海水浴場の名所でもある。しかし購入するよりレンタルの方が良いのではないか?」

「安く済むのはどちらです?」

「レンタルだな」

「じゃあそのお店はどこにあります?」

「そこだ」

私達が来た道を数歩戻ったところにある水着屋さん。どうやらレンタルもやっているようです。

「じゃあちよつと借りてきます。はい」

「……なんだこの手は?」

「レンタル料くださいな?」

「俺が払うのか?」

「経費で落とせばいいじゃないですか」

「落ちると思うか?」

「落ちないんですか?」

「……………」

門兵さんは雄大な大海原へ振り向き、目を細めました。

「落ちない」

彼の背中には、安月給の公務員が日々流す汗と涙の物語が滲み出ています。哀れな。

……なんか可哀想だから自分で払おうかな。

そして――

「獲ったどーどー!!」

私は初挑戦のビキニを身に纏い、刀での素潜り漁を完了しました。なんか見たことない魚だけど、まあ食べられるでしょう。

ついでに女の子のサーベルも同じものだと証明する為に使ってみました。刃が真っ直ぐな分、こっちの方が銛として使いやすいね。

さてさて。そうして私達は、どこか釈然としない様子の門兵さんの詰所へと連行……ではなく、歩行して向かいます。これは私の提案ですね。

ちようどお昼時だし、このお魚を使って何か作ろうと思うわけだよ。

詰所に入るため扉を開けると、むわっと私の実家と同じような臭気が鼻をつきました。つまり、

「うわっ…最悪」

「男臭い……」

というわけ。私と女の子は即座に鼻をつまみます。

「ああ、キッチンどこですか？」

「あちらだ。好きに使うといい」

「おえんなあ。ああいお外で待ってる……」

「テラス席も一応ある。案内しよう」

どこか申し訳なきような門兵さんに連れられて女の子は入ったばかりの扉を潜って外に戻っていくのでした。私も外に戻りたいよ。

でも、たぶん自由に使えるキッチンなんてこういうところしかないよね。その辺のおうちに「お邪魔しまーす。キッチン貸してください」って言うわけにいかないもん。

「よし。久しぶりに頑張るか！」

流石にキッチンには男臭くなくて一安心。男所帯の門兵さん達の中に料理する人もいないらしく、調理器具全般も新品同様だね。

しかも、ほとんどの調味料も減ってない。若干期限が気になるけど、そういったものはここに来るついでに市場で買っておきました。私できる子。

まずは鍋に食用油をタップと6分目くらいまで注ぎ入れ、火にかけます。

油の温度が上がるまでに食材をカット。市場で買った野菜と、さつき獲ったどーしたお魚さん達だよ。包丁とか刃物の類は武器になるからなのか、見当たらなかつたので刀を使いました。調理器具って言っちゃったしね。

さらに市場で買った卵も茹でます。

そして目の粗い小麦粉、水、卵を溶いて混ぜ合わせ、最初に捌いた魚の切り身をビチャビチャ。混ぜ合わせたやつを油に入れてちゃんと温度が上がっていることを確認して投入しました。ジュワアアアと、揚げ物特有の音と共に衣が固まっていきました。

そんな感じで、私はテキパキと調理していきます。やっぱり食べてくれる人がいると、気合も入るってもんだよ。

「お待たせ〜」

私はテラス席で談笑していた女の子と門兵さんの前に作った料理の盛られたお皿を置きます。

きつね色の衣を纏い、濃いながらも食欲をそそる油の香り。盛り付けにもこだわり、さらに野菜の鮮やかさを加えて目にも楽しい！さて、これは一体なんでしょう。

そう、天ぷらです！

「おおー！」

「これは……フライの類か？　自分が知っているものと大分違うが」

「天ぷらです」

「てんぷら……？？」

「私の国の伝統的な揚げ物料理だよ。あつたかいウチに召し上がれ」

そう言いながら、私はフォークで魚の天ぷらを刺して女の子に差し出します。

「はい、あーん」

「あーん」

どうやらお腹が空いていたらしく、私が差し出した天ぷらを素直に口に入れてくれました。ちよつと熱かつたらしく、はふはふ言いなが

らサクサク咀嚼する様子はちよつと面白い。

「ん〜ん〜！ 美味しい！」

「でしょでしょ？」

「うん！ 外はサクサク、中はホロホロだよ！ あ、そっちの鳥の巣みたいなのやつも欲しいな〜」

「これは野菜かき揚げって言うんだよ」

最初に食べてもらう部分には塩を付け、一口。その後は何も付けずにもう一口食べてもらいます。

なんか小鳥に餌を上げる母鳥になった気分だなあ。私、妹属性のはずなんだけど。

でも、妹がママでも問題ないよね！

それから私は女の子に天ぷらを与え続けます。

そこで気付きました。私、この白髪の騎士さんのお名前まだ聞いてないや。

「そういえば、あなたのお名前はなんていうの？」

「はぐはぐ。ん？ わたし？ アムネシアっていうらしいわ。あなたは？」

「うん？ ……あ、モミジだよ」

自分の名前に対してどうして推量が付くんだろう？ まあいいや。

「……あの？」

「はい？」

「自分のは…その……ないのか？」

「食べたいですか？」

「食べたい」

門兵さん。切実だね。

でもこれはチャンスだと私の勘が教えてくれてるよ。

「私達〜まだ正式に入学してないんだよね〜」
「ね〜」

「はい、あーん」

「あーん」

「ああ…っつ」

女の子改めアムネシアさんに天ぷらを食べさせて、さらにお皿の盛り付けを減らします。

それを見て、門兵さんは悲しげな声をあげました。私の言いたいこと、わかるよね？

「だって〜門兵さんが〜私の調理器具を武器って言うから〜」

「ね〜」

「はい、あーん」

「あーん」

「あ…あ…あ…」

アムネシアさんの小さいお口に消えていく天ぷら。それをただ何も抵抗できず見ていることしかできない門兵さん。

「もし私達のを〜武器じゃないって証明してくれたら〜天ぷらあげてもいいよ〜」

「ね〜」

「はい、あーん」

「あーん」

「わ、わかった!」

門兵さん、ついに観念したようです。食べ物の方は偉大なり。

門兵さんは腰の雑囊から古ぼけた紙を2枚取り出し、私達の前に置きました。

そこにはサラツと短い文章と既に門兵さんの捺印が押さえています。その文章を要約すると――

『この人の持つてる物は武器に見えるけど武器じゃないよ』

とのことでした。つまり、これに私達の名前を記入すれば刀もサーベルも腰に引っ提げたまま正式に入国できるらしいね。やった!・

私とアムネシアさんは素早く名前を書き、取り上げられないよう仕舞い込みました。

「じゃあ今から門兵さんの作ってくるから、少しだけ待っててね?」

「今からか?」

「揚げたての方が美味しいもん」

「なるほど、ありがたい。それはそうと、敬語が消えているようだが

「？」

「天ぷら欲しくないの？」

「欲しいです」

「食べ物には時に立場を逆転させる力を持っています。食べ物の力は偉大なり。」

「あ、わたしもおかわりほしい」

「アムネシアさん、まだ食べますか。」

「アムネシアさんと同じメニューに加え、味の染みた茹で卵をさらに天ぷらにしたもの——温玉揚げを2人に追加で出しました。これがめっちゃ美味いんだよね。私これ大好き。」

「さすがに門兵さんにあーんをしてあげる気にはならなかったのですが、彼には自分で食べてもらいます。」

「そのついでに、私とアムネシアさんはこの国の観光地などを尋ねます。」

「うむ。この国ならやはり『武器博物館』だろうな」

「武器博物館？」

「ああ」

「この国って武器はあっちゃダメなんじゃないの？」

「だからだ。国に武器がないからこそ、博物館として使えるのだよ」

「ふーん。あ、この温玉揚げって言うの？ わたし好きだよ」

「良かった。コツはね、卵を半熟に茹でるとこなんだよ」

「話聞いている？」

「聞いている聞いてる」

「正直、武器博物館よりアムネシアさんが温玉揚げを気に入ってくれたほうが私としては大きな収穫なんだけど。」

「武器博物館について何があるのか考えていると、ふと私の中で1つの疑問が浮かびました。」

「ていうか、武器博物館の職員の誰かがさつき言ってた強盗なんじゃないの？」

「……………」

「門兵さん？」

私が疑問を述べると、門兵さんは青い顔になってしまいました。なんでだろうとアムネシアさんと一緒に首を傾げると、今度は挙動不審に周囲をキョロキョロ。

どうしたの？

「……これは食事中に単なる噂話を雑談として語るものだが」

意識を周囲に拡大して、私達の会話に注意を向けていないかを確認した時、門兵さんは声を潜めて顔を寄せてきました。

自ずと私達も顔を寄せます。あ、アムネシアさんまつ毛長い可愛い。

「実を言うと、その推論でほぼ確定なのだ」

「……つまり、博物館の職員さんの誰かが犯人ってこと？」

「ああ。まず間違いない」

「だったら早く捕まえればいいんじゃない？」

「事はそう単純ではない」

「というと？」

門兵さんの話はこうです。

——武器博物館の職員の大半は魔法使いなんだそうです。理由は、犯罪をする時わざわざ武器を使わなくてもいい存在だから。

つまり博物館の職員は魔法も使えて、さらに武装までしてる。完全にこの国で最強の組織が出来あがっちゃったわけだね。

さらに、『必要ないから展示している』というのがこの博物館の売りであり、国の象徴としても機能しています。

その職員が武器を使って罪を犯したとあれば、外交問題的にも取り壊しは確実。門兵さんは口を滑らせて私達には話したけど、そもそもこの事件自体が緘口令を敷かれたものらしいので一般の方は知らないんだってさ。

確かにこんなバレたら、バカンスに来てる王族貴族の人たちは寄り付かなくなっちゃうしね。

まあ、そんな感じで色々と面倒な大人の事情が重なって国内だけでは対処できない状況らしい。

と、ここまで聞いて私はジト目を門兵さんに向けます。

「……そんな危険な場所を観光名所として教えるのはどうかと思うよ？」

「昼間のうちは安全なのだ。実際、博物館に来た客を襲ったという事例はない。奴らも犯人であることを喧伝してるわけではないのだよ」「ちなみにあなた達は犯罪者にどう立ち向かってるのかしら？」

「これだ」

アムネシアさんの質問に、門兵さんはワンツ―と拳を前に突き出します。まさかの素手……っ？！

いやまあ、相手が武器を持ってないって前提なのかもしれないけどさ。実際の警備員さんや警察の方々も屈強な男性ばかりだし。でも素手って。

「国の名誉の為に言っておくが、博物館自体は大変素晴らしい場所だ。国の宝とも言える」

「問題は職員だ、って？」

「ああ」

そこに住む人もひっくるめて、『場所』だと思うけどなあ。私は。

門兵さんと別れた私は、なんとなく流れでアムネシアさんと一緒に武器博物館に向かいました。

ただまあ、この博物館さ……くっそつまんねえんだよね。

「この国の人にとっては珍しくても、旅人には面白みがないね」

「そう？ わたしは結構面白いわよ？」

「マジで？」

「うん。ほら、あんな輪っかも武器なんだって思うと不思議じゃない？」

アムネシアさんが指差しているのは、チャクラムと呼ばれる輪っかの外側が刃になってるものです。説明文を読むと、どうやら投擲武器らしい。

「絶対指でクルクルして遊びそう」

「スリル満点ね」

「ミスったらだいぶ危ないけど…あ、刀だ」

「おお。モミジちゃんが持つてるやつ?」

「そうそう」

そんな感じのゆる〜い会話が繰り返され、見終わる頃には、

「天ぷらってさつき食べたもの以外でも作れるの?」

「わりとなんでもできるよ。キノコ類の天ぷらは結構美味しい。特に舞茸」

天ぷらの話に花を咲かせる黒髪の武士と白髪の騎士ができあがり
ました。

もう展示品の銃とか刃物とかどうでもいいや。職員さんも出てきたけど、一緒に天ぷらトークで盛り上がったし。

なんならアムネシアさんは天ぷらトークの内容を立ちながら日記帳に書いてるし。

めちやくちや意気投合したアムネシアさんと私は、同じ宿に泊まることになりました。

節約のため、部屋も同じでいいやということになり同室に。

ベッドは2個あるのか……残念。

「明日はどうしようか。モミジちゃん、何か予定ある?」

「特にないかなー。食べ歩きでもしようかと」

やっぱり港に来たなら海産物が食べたいよね。今日は魚食べたし、貝類がいい。

「おお。それはアリかも」

「一緒に回る?」

「うん」

なんかもう今日出会ったとは思えないほどの以心伝心ぶり。明日も楽しみだなあ。

そんな事を思いながら私はベッドに潜り込むと……あれ? アムネシアさんも入ってきた。

「んふー」

むぎゆ! 私、アムネシアさんの腕の中に収まりました。

「どうしたの?」

「せっかくだから一緒に寝たいなーって。ダメ?」

「全然」

私もそう思ってたし。あ、アムネシアさんいい匂いする。

くんかくんか。くんかくんか。昼間は門兵さんの詰所で鼻腔を汚染されたからね。この機会にアムネシアさんの匂いで清浄しないと。

「すーはーすーはー……幸せえ……」

「モミジちゃんわたしの匂い嗅いでない?」

「腹式呼吸だよ。リラックス効果があつてよく眠れるの」

「そうなんだ!」

適当な言い訳でも信じちやうアムネシアさん可愛い。そのまま匂いを堪能すること数分。唐突に頭を撫で撫でされました。

「ん?」

「嫌じゃない?」

「もつと撫でて〜」

「は〜い」

ここが天国かな? 可愛い女の子に抱き寄せられて、さらに撫で撫でまでされて眠ることのできる今この瞬間、間違いなく私は世界の誰よりも幸福の最絶頂だと確信しています。

羨ましい? 羨ましいでしょう?

そんなこんなで、私は幸せ鬼増しな状態で眠りにつくことができました。にっこり。

「ぐへっ!?」

突如、顔面への強烈な一撃で私は目を覚ました。鼻が痛い……。

「ひぐ…痛いよお……」

鉄臭い…。鼻の中が鉄臭いよ。うわ血出てきた!?

真夜中の突然の鼻血に泣き出す私をよそに、アムネシアさんは白い頭頂部をこちらに向けてすやすや眠っています。……うん? なんか髪の一部が赤黒く変色してる……?」

いや血だね。私の血だ。アムネシアさんに頭突きされたっぽい。
ティツシユペーパーで鼻を抑えながらカーテンを開けると、朝日が
部屋に飛び込んでベッドで寝ているアムネシアさんの顔を照らしま
した。

「ん…む……」

「起きて、アムネシアさん」

——ブンツ!

突如顔面目掛けて放たれる裏拳を避けます。

何事!?!?

「アムネシアさん?」

その流れのまま小さくて柔らかかそうな足裏がまたも私のお顔に飛
んできました。踏むのは構わないしむしろちよつと踏まれたい気持
ちはあるけど、これは完全に蹴りだね。

パシツと片手のひらで受け止めてホールド。逆の手で足裏をこ
ちよちよしてやります。

仕返しだー!

「うひゃつ! えっ? えっ!?!? なになにくすぐったい!?!?」

突然の感触に飛び起きたアムネシアさんですが、顔面へ頭突きする
という斬新なモーニングコールに若干イラツとしていた私は構わず
くすぐり続けます。

「あははははっ! ちよつ、くすぐりたい! ていうかあなた誰っ!?!?
ここどこ!?!? それより何よりわたしは誰!?!?」

どうやら寝ぼけてるみたいだね。昨日あんなに仲良くなったのに
そんな事を言われちゃうと傷ついちゃうなあ! ねえ!

「あはははははっ! 待って! お願いだから待って! もう止め
てえ! あはははははっ!」

「……………」

こちよこちよこちよこちよ。私のくすぐり攻撃は、アムネシアさん
の声がうるさくてブチギレた隣室の宿泊客が怒鳴り込んでくるまで
続きました。

「すみませんでした」

私とアムネシアさんは並んで頭を下げました。いやホントすみませんマジで。

「次同じことしたら殺すわよ、小娘ども」

私、怖くて泣いた。扉を閉めてアムネシアさんにしがみつきます。

「おーよしよし怖かったねえ。ほぼほあなたが原因だけどねえ？」

「あれちよつと怒ってる？」

「んー？ だいぶ怒ってる」

「ごめんなさい」

怖い……。あ、でも寝起きのアムネシアさんもいい匂い。ぐへへ。

ビビって顔を合わせられないと見せかけて鼻腔に幸福を送り込む私を、アムネシアさんは引き剥がします。あれれ？ 昨日みたいに撫で撫でしてくれないの？

「アムネシアさん？」

「えつと……」

私は自分で言うのもアレだけど、庇護欲を掻き立てる涙目で彼女を眺めます。なにやら困り事があるみたいだね。

でも、一晩一緒にいてアムネシアさんが困る事なんてあったかな？

むしろ寝相の悪さで困らされたの私なんだけど。

「まず最初に聞きたいんだけど——」

「——あなた、誰？」

「はっ？」

「……はっ？」

2日目

——あなた、誰？

アムネシアさんにそう問われた私の反応がどんなものだったか。

「うわあああん！　なんでそんなひどい事言うの！」

はい、ガチ泣きです。

いや泣くよ！　確かに隣室の人に怒られたのは私が悪かったかもしれないけど、そんなに怒らなくてもいいじゃん！

わんわん泣く私をアムネシアさんはオロオロしながら宥めてくれるけど、もう遅いんだから！　可愛い女の子に冷たい態度取られるのが一番辛いんだからね！

「あ、いや……えつと……ええ……」

「ひぐつ……ぐすん……」

「その……ごめんなさい。わたし、本当にあなたが誰だかわからないみたいなの」

「うわあああああん！　アムネシアさんのバカー！　天然たらし！

昨晚あんな事しといて、起きたら他人のふりなんてひどいよお……」

「あんな事!?？あんな事つてどんな事!?？」

「うわあああああああん!!」

朝っぱらからギャン泣きする私。何がなんだかわかってない様子のアムネシアさん。

そして——

「殺すつて言ったわよね……小娘ども?」

——ブチギレる隣室の方。

「……………」

「すみませんでした」

私達は揃って頭を下げました。2分くらい前と同じように。

ボタン！　と乱暴に閉じられた扉の音に肩を竦ませ、私達はゆっくり見合わせます。

「ぐすん……」

「あつ、もう泣かないで？　ね？」

また泣き出しそうになる私を抱き締めてくれました。やっぱりアムネシアさんいい匂い最高この夏の草原に咲き乱れるお花畑のような香りが冷静さを取り戻させてくれるよ結婚したい。

さてさて、冷静さを取り戻した私達はベッドに向かい合わせに座ります。

始めに口を開いたのはアムネシアさん。

「わたしのことアムネシアって呼ぶけど、それがわたしの名前？」

その謎の問いかけに私は首を傾げるしかありません。自分の名前を他人に聞くとはい、これ如何に。

でも、明らかにふざけてる様子じゃないんだよね。むしろどうしてここに自分がいるのかも分からないって感じで、不安気な雰囲気が漂ってるもん。

(そういえば昨日名前を覚えてくれた時も、アムネシア「らしい」って自分で言ってたっけ……?)

つまり記憶喪失？　しかも昨日の今日でもう1度？

とりあえず生まれた推論を一旦横に置き、私は彼女の問いかけに答えます。

「そうだよ。あなたの名前はアムネシア。少なくとも、私にはそう名乗ってた」

「アムネシア……あーなんかしつくりくるかも」

ぼそぼそと小声で自分の名前を呟く彼女を見ると、もしかしたら私の推論は当たりっばい。

そこで1つ思い出しました。昨日天ぷらトークをしていた時に、アムネシアさんは立ちながらメモ書きのようなことをしていました。

「アムネシアさん。ちよつと荷物漁っていい？」

「それがわたしの荷物なの？」

「うん」

どうぞ、と手で示されたので留め口を開いて失敬。中にあった本を1冊取り出します。

昨日は気付かなかったけど、表紙には『朝起きたらこれを読みなさい』って書いてあるね。私はそれをアムネシアさんに手渡します。

「とりあえず読んでみて？」

「あ、うん」

失礼ながら、私も彼女の横から日記帳を覗き込みます。

そこに書いてあることを要約すると、このようになります。

彼女は17歳でアムネシアという名前であること。

この平安の国からはまだだいたい離れた位置にある国、信仰の都エストの出身であること。

その出身の国に向かって旅をしていること。

そして、眠るたびに記憶がなくなってしまうこと。

それ以外にもこれまでの私に会うまでの旅路や、そこで出会った人達とのエピソードも記されていました。

もちろん昨日の私とのことも。ほぼ天ぷらのことしか書いてなかったけど。

(信仰の都エストか……)

その国の名前を見て、彼女の状況に納得しました。

実を言うと、私は1ヶ月ほど前にその国に訪れた……らしい。

「らしい」というのは、ちょうど今のアムネシアさんのように、記憶が抜け落ちているのです。

私が覚えているのは信仰の都エストの商人さんの荷馬車が泥にハマっていたところを助けて、その縁で入国したところまで。そして気付いてたら出国の為に門を出ていました。

門兵さんに聞いたところ、私は3日間滞在したらしいとのこと。確かに、門兵さん達の暇つぶし用に置いてある新聞は全て私が入国した日から3日経った日付だったし、服も身体も清潔そのもので良い香りだったのでそれなりに手厚くもてなされたってことだね。

信仰の都エストはかなりの秘密主義で魔法至上主義という情報しかなく、国民でなければ出国する時その国に関する記憶を全て消されちゃうんだってさ。

その結果、記録はあるのに記憶はないっていうややこしい状況に陥

るわけだ。

(でもおかしいな…。日記帳に書かれていることが本当なら、アムネシアさんはエストの国民のはずなんだけど……?)

何か事情があるのかもかもしれないね。記憶のない彼女に聞いてもわかるはずないし、考えても仕方ないや。

私が結論を出すと同時に、アムネシアさんもパタンと日記帳を閉じました。

「読み終わった?」

「……うん」

「結構驚いてる?」

「まあ、それなりに」

「私もね、結構驚いてるんだ」

「そうなの?」

そりゃあ、驚くよ。日記帳に書かれていたことは驚愕の事実だよ。

「アムネシアさん——年上だったんだね」

「そこっ!?」

「いやなんというか……うん、あまりお姉さんっぽくなかったから」

「そ、そんなことないわよ! 本当は大人の女性だけど、敢えて親しみを持つてもらうために子どもっぽく振る舞ってただけだと思うな!

なあ!」

「記憶がないの?」

「なくても覚えてるものなのよ! 心がね!」

ぷくーつと頬を膨らます姿から、あーたぶん今の姿が偽りなく彼女の本質だと察せられました。少なくとも、昨日一緒に寝ていいかと尋ねてきた人とは間違いなく同一人物です。

……もしかしたら記憶がなくなっちゃう恐怖からの行動だったかもしれないけど、そんなたれば論を話す必要は無いよね。

私は膨らんだアムネシアさんのほっぺを指で突いて空気を抜きながら、手を差し出します。

「んじゃ、出掛けよっか!」

「どっか?」

「寝る前の話だから日記帳に書かれてなかったけど、今日は食べ歩きしようって約束してたんだよ」

私はにっこり笑って、パジャマを脱ぎます。

「ほら行くこう！ アムネシアさん」

食べ歩きのコツは、1つ1つのお店で少量食べること。意外かもしれないけど、食べ歩きは人数が多い方がいいんだよね。1人分をシェアできるし、色々な種類を楽しめるわけだよ。

「うふ……ちよつと休憩……」

海の見えるテラス席でアムネシアさんダウン。テーブルに突っ伏しました。

私達の間に置かれているのは貝のアヒージョとバケツト。にんにくとオリーブオイルの濃い香りに浸かった貝を切り分けられたパンの上に乗せ、パクリ。硬めのバケツトはオリーブオイルが染み込んで程良い食感に生まれ変わり、ストレス無く飲み込めます。美味しい。「すみませーん。りんごジュース2つお願いしまーす」

店員さんに注文すると、素早く持ってきてくれました。

食べ歩きしているとはいえ、私達も年頃の女の子。濃いにんにく臭が口から漂っちゃうのは気になるので、匂い消しも兼ねて喉を潤します。

よく冷えてて、夏の陽射しの中で煮込み料理を食べてる狂気の私達は思わずにっこり。やっぱり美味しい。

ちなみに私達の食べ歩きはこのお店で6軒目です。アクアパッツア、カルパッチョ、冷製パスタ、白身魚のクリームシチューパイ、マリネ、フィッシュバーガーetc. 1人分を注文して、それを2人で分けてきました。

「そんなに食べてモミジちゃんは太らないの？」

「なんかよく分からないけど、太らない体質なんだよね。その割には身長も全然伸びないし、摂取した栄養どこ行っちゃったんだろ？」

私の身長はアムネシアさんの口と鼻の間くらい。つまり、私の頭の

てっぺんは彼女の視界に入っちゃうんだよ。やっぱり人種の違いつて大きいっばい。

「あーうん……まあ、どこに行ってるかはなんとなく察しがつくわよ」
「なんで胸抑えてるの？ 胸焼けしちやっただ？」

「いや……言い知れない敗北感に打ちのめされてるだけ」
「……？」

確かにこのりんごジュース甘いし、アヒージョのオリーブオイルも若干クるけど、それほどかな？

私は首を傾げながら最後の一口を食べ切りました。ご馳走さま♪

「ふー食べた食べた！」

「……もう少しこのまま食休みとつていい？」

「いいよ。……大丈夫？」

「なんとか……」

別に無理しなくても良かったのに。でもまあ、誰かと一緒に同じ物を食べるって旅をしているとあまりできないし、嬉しかったなあ。

私は感謝の意味を込めてテーブルに突っ伏すアムネシアさんの頭を撫で撫で。短くもサラサラの触り心地がクセになりそうだよ。

そうやってしばらくアムネシアさんの髪の毛を堪能していると、こちらへ人影が近付いてきているのが分かりました。

「おーい！ 君達！」

「お？」

炎天下の中を走ってきたのは、昨日私達と昼食を一緒に摂った門兵さん。汗だくになりながら私達の前まで来ました。うわ汗臭い最悪。

「はあ……はあ……」

「大丈夫？ お水飲む？」

「あ、ああ。助かる」

私は席を立ち、汗臭さから逃げる意味もあってアムネシアさん側に座ります。ついでにアムネシアさんの髪の毛の匂いも嗅いでおきましようくんかくんか。

まだ口を付けてなかったお水もあつたので、それを門兵さんに差し

出しておきます。それを一息に飲み、彼は息を整えてから口を開きました。

「君達に頼みがあつて探していたんだ」

「……武器じゃないって証明書なら返さないよ?」

「それではない。……が、まあそれに関係する」

そう言うと、門兵さんはクイクイって人差し指を曲げて顔を寄せてきます。どうやら内緒話がしたいみたい。

「だけど……やっぱり臭い。」

「すみませーん。紙コップ3つと風呂つてあります?」

「申し訳ございませんお客様。そういった物はちよつと……」

「なん……だと……!?」

「ウチ飲食店ですので」

さすがに食事の後に汗臭い男に顔を寄せると、さつきまで摂取した食べ物を地面にぶち撒けちゃう。なので糸電話でも作ろうかと思つたけど、まさかの材料がないとは。

あ、門兵さんがちよつと傷付いた顔してる。

「そんなに臭いか……?」

「あなたが、つて言うよりもはや汗だくの男つて大体臭いよね」

「爽やかな笑顔でなんて事を言うのだ……」

それに比べてアムネシアさんはいい匂いししません。しゅき♡

「んでんで、お話つて何? くんかくんか」

「……モミジちゃん、さつきからわたしにセクハラしてない?」

「してないしてない。……す……は……」

私はアムネシアさんに密着しながら深呼吸を3回。

「まあいい。この雑踏の中ならば大丈夫だろう」

「すうううううう……はあ」

「吸つた空気と吐いた空気の比率おかしくないか?」

なんかだんだんと門兵さんの私を見る目が人間じゃない何かを見るものになつてくる気がする。心外な。

門兵さんはコホンと咳払いを1つして、真剣な眼差しを向けてきました。どうにもおふざけはここまでなのです。

「昨日話した武器博物館の件、覚えているか？」

「博物館の職員が強盗をしてるって話でしょ？」

「ああ。それが昨日も起きた」

隣のアムネシアさんは『え？ なんの話？』みたいな眼差しを向けてきてるけど、状況がややこしくなるので一旦無視。

なんだか深刻そうな門兵さんの表情を見ると、話の腰を折らないほうが良いっぽいし。

「しかも、ついに奴らは発砲したのだ…っ！」

「…ついに」ってことは、今まではなかったの？」

「ああ。ただ武器をチラつかせて金品を脅し取るだけであつたからな。だから国の方で被害額をそのまま弁償できたし、緘口令を敷くことも容易であつた」

「…つまり発砲しただけに留まらず、怪我人も出たってこと？」

「そういうことだ」

門兵さんの声は震えていました。でもそれは恐怖からくるものではなく、底知れない怒りを滲ませたものです。

「もう…国民に隠しておく事は不可能だ。幸い被害者は軽傷だが、銃で撃たれたことに代わりはない。被害者の治療を担当した医療機関では、既に噂が広まっているとのことだ」

「……………」

「ツケが…回ってきたのだろう。国の威信のために、問題解決を先延ばしにしてきたツケが。結果として、收拾のつかない事態が起きてしまった」

門兵さんは、その屈強な肉体を小さく折り曲げて頭を下げました。「頼む。この事態収束の為、力を貸してほしい。これはこの国の依頼であると共に、自分個人のお願いだ」

こちらに向けられた彼の頭頂部からは、どこまでも深い真摯さと正義感が伝わってきます。

(そんなに真剣に頼まれたら…断れないよ)

きつとこの国の人々が私達に頼むのは、色々あつて武器を持ち込めるからなのでしょう。そして言いにくるめられたとはいえ、その許可を

くれたのは、今私達の目の前で頭を下げている門兵さんです。

だったら——やらないとね。私は武士だもん。

「わかっ……」

「わかりました。引き受けます！」

「アムネシアさん？」

あれ？　なんとなくこの門兵さん、私に頼んでなかった？　ほら、

『えっ、君が返事するの？』みたいな感じで目を丸くしてるし。

「この国の事情はわからないし、正直あなたが誰だか知らないけど、わたし達に頼むってことはそれ相応に理由があるってことだもの！
わたしは引き受けるわ」

アムネシアさん、誰だか知らないとか言っちゃあかん。

あゝあ…門兵さんがまた傷付いた顔しちやってるよ。あとで彼女の事も教えておいてあげよう。

「私も引き受けるよ。たぶんこの国の将来の為に、私達が解決したほうが良い気がする」

「どういう意味だ……？」

私の意図が分からず、門兵さんは首を傾げます。そういえば、私の国以外では刀剣の類はただの武器でしかないんだもんね。

だからあんまりしんみりした雰囲気を作らないように、ウイソクをしながら茶目っ気混じりに教えてあげましょう。

「——刀は武士の魂だもん。私は私の魂を以て、この依頼を完遂するよ」

私の持ち歩く魂が必ずしも悪い物じゃないって、少しは知ってもらいたいしね。

依頼の内容は単純です。

1つ。博物館に赴き、職員を確保する。

2つ。もし盗品の類があれば、それも証拠として押収する。

1つ目を最優先事項とし、2つ目はできれば程度とのことでした。

「アムネシアさんはそんな格好してるけど、結局魔法は使えないんだ

よね?」

「そうね。なんとなく使える気もしないし、杖よりこのサーベル握ってる方がしっくりくるわ」

日の落ちた暗い街中を、黒髪の武士と白髪の騎士が雑談混じりに歩いています。昼間依頼を受け、今夜それを完遂する為でした。

彼女達は髪の色も服装も、ほどほどに正反対と言えました。外見的特徴だけで言えば、似通っているのは羽織っているローブくらいでしょう。

片や、腰には刀を。

片や、腰にはサーベルを。

武器が禁じられた国で腰に提げているものすら、真逆でした。

「ここだね」

「うん」

しかし、見ている物は同じです。昨日訪れた場所ではありませんが、夜ともなると雰囲気は違って見えます。

そこは武器博物館。その前の閉ざされた木製の門の前で2人は佇みます。

さて。こんな良い子は寝る時間にも関わらず、刃物を引っ提げて武器博物館にカチコミ掛けようとする武士と騎士は誰でしょう。

そう、私達です。

「良い子は寝る時間……今起きてるのは悪い子だもんね」

「それだとわたし達も悪い子にならない?」

「悪い子をシバき倒すんだから仕方ないよ」

私達は冗談を言い合って緊張感を程良くほぐします。肩の力を抜き、私は——ザッ。静かに抜刀の構えを取りました。

「アムネシアさん。作戦の最終確認するよ」

「OK」

「私が正面から突っ込む。アムネシアさんがその隙に裏側から突っ込む。以上!」

「ひどい作戦だ……」

実際、間違いではありません。魔法も剣術も使える私が正面から

突っ込んで敵の気を引き、その間にアムネシアさんが別の入り口から潜入。

盗品がある程度探して、ある程度タイミングを見て敵の裏から私の加勢をしてもらいます。

「私は魔法が使えるから銃くらいなら何丁相手でも平気。アムネシアさんは絶対に無理しないで。怪我したらやだよ」

「ありがとう。モミジちゃんにそう言われたら、怪我できないや」

「もし怪我したら、食事もベッドもお風呂もトイレも全部私が面倒見てあげるね」

「……モミジちゃん、やっぱり私にセクハラしようとしてない？」

「……………」

セクハラじゃないもん。ただちよつとアムネシアさんへの欲望やら煩惱やら劣情やらが溢れてるだけだもん。

でもこれを言うと言戦に支障をきたしそうなので、精神統一のふりをして黙りました。私できる子。

「じゃあ……やるよ」

「うん」

私は抜刀の構えから——シュツッ！ 抜刀一閃。片手での右斬り上げを放ち——ザン！ 両手に持ち直し先程の斬り上げと合わせてXを描く左袈裟斬り。

さらにその勢いを殺さず前宙。重力と遠心力を乗せた唐竹割り。

アスタリスク

* を描くような軌道で神速の3連撃を叩き込むと、ガラガラと音を立てて門は崩れました。

「……門崩し」

私は技名を呟きます。技名は後に言う派です。こっちの方がカッコいいでしょ？

この技は4年前、パピ上が思いつきで作ったものです。夜中まで街で飲み歩いて閉め出された結果、酔っ払ったパピ上が家の門に放った時でした。

当然マミ上ブチギレ。

私、寝てたのにその音で起こされてブチギレ。

内弟子の何人かも日頃のストレスからノリでブチギレ。

みんなで仲良くパピ上をフルボッコにしたのをよく覚えてるよ。

まあ……そんなゴミのようなパピ上は片手一本で鉄製の門を崩せるんだけどね。剣の腕しか存在価値ないんだから出来てもらわなきゃ困るけど。

閑話休題。さてさて、博物館の中からは今の音を聞いて人が戸惑う心配がするよ。閉館時間はとうに過ぎてるのに、警備員さんにしてはやけに数が多い。

クロで確定。

「じゃ、また後でね」

「モミジちゃんも気を付けて」

私は裏側の出入り口に走っていくアムネシアさんに手を振り、油断なく博物館へと入っていきます。長い夜になりそうだよ。

3日目

わたしは銃声や金属音が響く博物館を走る。モミジちゃんが派手に陽動してくれてるおかげで、今のところわたしの侵入はバレていないっぽい。

「早く証拠見つけないと」

足音を立てないように忍足で走れば、当然速度は落ちてしまう。それがじれったくて仕方ない。

わたしより年下の子が、わたしより危険な場所で命懸けで戦っているんだもの。早く加勢に行かないと！

「うっ、危な……」

モミジちゃんの方へ加勢に向かうであろう集団が目に入り、咄嗟に身を隠す。彼らも焦っていて視野が狭くなっていくらしく、気付かれずに済んだ。

逸る気持ちはあるけど、わたしはこの博物館の構造を知らない。聞いた話だと昨日モミジちゃんと回ったらしいけど、そんな記憶はわたしにはない。

でも一般の人が見て回る道と、従業員用の通路くらいは見分けがつく。感覚を研ぎ澄まして足音や人の気配を探って進めば、潜り込むのは難しくないわ。

「ここじゃない……ここでもない……」

わたしの視界の中で、多数のルームプレーが前から後ろへ流れていく。そのまま廊下の突き当たり、丁字路に飛び出した時。

「んっ!?」

「誰だあー!」

武器を持った3人組とバツタリ鉢合わせした。歩いてたから気付かなかった……!

荒っぽい口調に反して、服装は紳士然としたものを着てる。博物館の職員だ。

驚愕の時間はそのまま命取りになる。わたしの体はそれを理解してるみたいで、勝手に動き出してくれた。

「やつー！」

わたしの体は瞬時にサーベルを抜いて3人組に突撃。えっ、なにやっつんのわたしの体っ!!?」

そう思ったのも束の間、3人組は顔を顰めた。なんとか距離を離そうとするけど、それなりにくつついていたせいで互いの足をもつれさせてる。

……そっか。武器持つてるから、下手に振ると同士討ちしちゃうんだ。だからわたし自身が敢えて距離を詰めて、武器による対処を封じる。

そんな判断を一瞬でするなんて凄いじゃない、わたしの体！

「たあー！」

わたしの頭がわたしの体を褒めるといふ斬新な自画自賛をしながら、まずは目の前の1人の武器をサーベルで弾き飛ばす。そしてその人をすかさず掴み、ドン！ 2人目に押し出して通せんぼ。

その間にわたしへと剣で斬り掛かってきた3人目の懐へと潜り込んで、顎をサーベルの柄尻で殴って意識を飛ばしてやる。

倒れ込む3人目から剣をもぎ取って、重なってる2人へ無造作に投げつけて牽制。一気に距離を詰め、サーベルの腹——刃の付いてない部分で側頭部を殴りつけて気絶させる。

「えっ……わたし強いじゃん」

もしかして記憶失う前のわたしって人斬りとかじゃないよね……？

内心ちよつと引いていると、今倒したうちの誰かの懐からカランと音を立てて木製の棒が落ちました。

(これって……魔法使いの杖?)

楽団の指揮棒のような作りをしたものは、それで間違いないはずでも、どうしてこんな物を持つてるの？

……ううん、違う。どうして使わなかったの？

「もしかして……！」

わたしは1つ思い至り、この人たちの体をまさぐる。あ、もちろん変な意味じゃないわよ？

全身くまなくチェックすると……出てきたわね。

「……やつぱり」

3人のうち2人の懐からも杖が出てきた。この場には杖が3本。つまり、この3人は全員魔法使いだったわけだね。

さて、困ったわね。わたしは魔法が使えないから、今この3人を拘束する手段がない。とりあえず杖はまとめてへし折っておいて、各々の武器は回収しておこうかしら。それくらいしか出来ることないもの。

迅速な行動を求められる今、迷ってる時間はない。武装解除だけ済ませて引き続き館長室を探そうとすると——目の前に中年の男性が立っていた。

両手に剣が一振りずつ。倒した3人と同じような格好をしてるけど、その雰囲気からは只者じゃないことがヒシヒシと伝わってくる。

「もう閉館時間だというのに、忍び込んだねずみというのは君のことかな。お嬢さん？」

「あなたは？」

「これは失礼。この博物館の館長を務めるテノールという者だ」

慇懃無礼な態度は、果たしてわたしを見下しているからなのか。

それとも、問題なくわたしを倒せるという余裕から来るものなのか。

「一応聞いておこう。君は何をしに来たのかな？」

「あなたと、あなたの部下達を捕まえに来た。とっても悪い人達だから捕まえてつて、この国から依頼されたわ」

「ほう。あの愚図どもが遂に動いたか。やはり昨日発砲したのはまずかったかな」

まるで他人事のような物言いに、わたしは怒りが込み上げてくる。人を傷付けておいて……！

「まあいい。君を撃退すれば今日も明日も明後日もいつも通り活動できる。なにせここにはコレがあるのだからな」

そう言つて、両手の剣を構えた。それは堂に入ったもので、かなりの腕前であることを伺わせてくる。

(でも、やるしかない)

わたしはサーベルを構え、彼に向けて踏み込んでいく。

「ガツ……」

刀の峰で最後の1人を気絶させました。博物館内は私の大立ち回りと職員さんの作った弾痕のせいでひどい有様です。

(変だな。誰も魔法を使ってこなかった)

門兵さん曰く、この職員のほとんどは魔法使いだそうです。なので私も最大限警戒していたのですが、誰一人として魔法で攻撃してきませんでした。

わざわざ危なっかしい手付きで扱う武器の対処をただけ。正直、戦闘というよりは近付いて殴るっていう作業に近い印象だったよ。

一応私は刀——正確には柄を振って、倒れ伏してる職員を全員魔法で後ろ手に拘束します。もし魔法を使う相手なら、継続戦闘を考慮して両手首を斬り落とさないといけなかったけど、この人達なら普通の手錠で十分だね。

さらにその人達を背中合わせに丸く並べて、手錠同士を私自身ですらよく分らないくらい適当に繋げ合わせて……完成！これをすることで足枷が必要なくなるの。どう頑張ってもこの人数で息を合わせて歩くななんて無理だからね。逃走なんて以ての外。

「さてと……アムネシアさん、結局来なかったな」

証拠の盗品探しに没頭してるってだけなら問題無いけど、流石に時間がかかり過ぎてる。逃げてくれたならいいけど、もし何処かで敵と鉢合わせしていたらだいぶ危険だね。

「モミジちゃん！ 助けて〜！」

「っ!!??」

アムネシアさんの助けを呼ぶ声が聞こえて、私は振り向きみます。どうやら博物館の奥に続く通路からのようです。

私はすぐにそちらへと走り出しました。

「アムネシアさん！ 大丈夫!?!」

「よいしょ…よいしょ…つと。あつ、モミジちゃん」

見ると、アムネシアさんが男性4人をわっせわっせとまとめて引き摺っていました。すごく辛そう。顔真っ赤だし。

「その人達は？」

「わたしが鉢合わせした人達。この人が館長ね」

「アムネシアさん、怪我不い？」

「それは大丈夫。ていうか、怪我を言うなら館長の方が深刻かもしれないわ」

「あいたたた…お嬢さん、もう少し優しく運んでももらえないか？」

「んー？」

館長と呼ばれた人が抗議すると、アムネシアさんはイラツとした顔になります。美人がイラツとすると結構怖い…。

とりあえず私はその4人も魔法で拘束して過重力も起動。ここまですごく頑張つて運んでくれたアムネシアさんに代わって、ボールくらい軽くなつた彼らを先ほどまで戦っていた場所へ蹴り転がしていきます。

「あつ、痛い！ 腰が！ 腰から今までの人生で感じたこと無い痛みが駆け抜けていくう！」

「館長だけめちやくちや元気じゃん」

「まあ、腰以外は元気かも」

「…何があつたの？」

アムネシアさん曰く、超ラスボス感出して登場した館長テノールさんは剣を両手に持った二刀流スタイルだったそうです。その剣で向かってきたアムネシアさんを迎撃しようと振りかぶったところ、腰がギックリいつてしまったとのこと。

なんじゃそりや、と私は思いましたし、

「なんじゃそりや」

と口にも出しました。

「だから言ったじゃないか館長。2本はやめとけ、て」

「いやでも館長だよ？ やっぱり他の職員と一緒にだどキャラ立たないじゃん」

「そういう無駄な個性に拘るから腰やるんすよ」

「なんだと！ あっ…怒鳴ったら腰がいたたた…」

私が拘束したメンバーとそんなゆるい会話をしています。さては反省してないな？

「あっ、そういえば」

私と一緒に冷ややかな目を向けていたアムネシアさんは、突然ポンと手を叩きました。

「この人達、どうして魔法使わなかったんだろう？」

「あ、それ私も思った」

「あら？ モミジちゃんのほうも？」

「うん」

私1人がこれだけの人数をあっさり倒せたのは、やっぱりそれが1番の要因だと思います。もしあの中の半分でも魔法使いがいたら、未だに戦闘中だったことでしょう。魔女が1人でもいたら負けてただろうし。

でも、門兵さんから聞いた話だとほとんどの職員が魔法使い。これは不思議なものです。

とりあえず私は気絶してる全員を叩き起こし、1つ質問してみました。

「この中で僕、私は魔法使いだよって人？」

「…… はい！」

「ほぼ全員じゃん……」

拘束されてるので、お口でお返事してくれました。マジか。

すかさず今返事した連中の服の中をまさぐり、出てきた魔法の杖をへし折ります。危ない危ない。

「結果的にわたし達にとつては良い方向に働いたけど、なんであなたは魔法使わなかったの？」

「……」

アムネシアさんの疑問の声に、職員は顔を見回せ、

「…… ふっ」

何故か不敵に笑いました。

『まったくこのお子様は、何も分かってないな』とでも言いたげです。

「館長、言つてやつてくださいよ」

「そつすよ。この何も分かつてない甘ちゃんどもに」

「まったく…男の浪漫が分かつてねーな」

「ま、この浪漫に男も女もないと思うけど」

口々にこちらを小馬鹿にしてくるので、こめかみに青筋がビキッと浮かびました。パピ上もそうでしたが、大抵男の浪漫と名のつくものはゴミと同義です。

冷やかな目になっていく私達を他所にそのよく分からない浪漫について談笑を始める職員一同。その一同から視線を受け、腰の痛みを耐えて館長はドヤ顔を浮かべてのたまいました。

「——魔法使いなのに武器で戦うという一見非合理的な矛盾、めちやくちやカツコ良くない？」

「しよーもな」

アムネシアさんのどこまでも呆れきった声が博物館内を支配しました。

「モミジちゃんもそう思うわよね……あら？　どうして顔真っ赤にしてそっぽ向いてるの？」

「……いや、うん……ちよつとね……」

驚くほど私が魔法使いやつてる理由と被つてて、めちやくちや恥ずかしくなったのは内緒です。

(アムネシアさんにしよーもなつて言われた……)

密かに深めの傷を心に負つたのも、内緒です。…やべつ、ちよつと涙出た。

顔の熱が引けるのを待つてから、アムネシアさんに警察へ通報してもらいました。そのまま宿に戻ってもらいます。記憶を失つてる彼女からすれば、いきなり国から依頼されて、いきなり夜に行動開始でしたから、私との疲れ具合は比べ物にならないもんね。

駆けつけた警察の中には、あの門兵さんもいました。私は彼と並んで、連行されていく博物館の職員を眺めます。

「怪我はないか?」

「うん、大丈夫」

「そうか」

門兵さんは気まずそうに、しかし沈黙が流れればさらに気まずくなると分かっているようで無理矢理話し掛けてきます。

「成功報酬は明日……というかもう今日になってしまったな。昼頃に君達の泊まる宿に届ける」

「そう」

「助かったよ。君達はこの国の英雄だ」

「そんな大層なものじゃないよ」

「だが……」

「——ねえ」

私は昇り始めた朝日に照らされながら、彼の顔を見ないように言葉を遮ります。

「——無理に話し掛けないでいいんだよ?」

きつと、話すだけでも辛いはず。だって彼の声は震えてるんだから。

「……もしかして気付いているのか?」

「なんとなくね。本当は最初からおかしいと思うべきだったんだけど」

「そうか」

彼は空を仰ぎます。白み始めた空の光で顔を隠すように。

「——父を止めてくれて、ありがとう」

最初からおかしかったんだ。今も、そして依頼された時も。どうして門兵の彼がここにいるの?」

門兵の彼の仕事は、当然門を守ることに。入国者がいれば入国審査をすること。怪しい人や物が国に入らないよう見張ること。

この人が門兵であることは間違いない。でもじゃあ、どうしてこの門兵さんが今ここで職員が連行されている姿を眺めているのか。

そもそも違和感は最初からあった。

1つ。まずこの人が1人で門番をしていたこと——本来門番は有事の際を考慮して2人以上立てるのがセオリーなはず。

2つ。私とアムネシアさんが武器ではないと証明する為に一旦入国した時も着いてきたこと——明らかにそれは門兵の仕事じゃないはず。

3つ。私達が詰所に行った時、誰も話し掛けてこなかったこと——本来部外者である私達が入ってくれば、1人くらいは私達の素性を彼に尋ねるはず。

1つめと2つめは人手不足だからで説明がつくけど、それにしても港にたくさん警備の人がいた。だからそれはない。

3つめは、明らかに不可思議でしかない。でも1つだけ上手く説明ができる。しかもこの説明なら、1つめと2つめもの理由にもなりま

す。
彼が避けてられているから。

避けられているから、1人で門番をやらされていた。

避けられているから、誰も彼の持つてくる仕事を引き受けてくれる人がいなかった。

避けられているから、誰も彼に質問しなかった。

じゃあ避けられている理由は何？ この平安の国カイヤナイトで、わざわざ一介の門兵を村八分のような状況に陥らせるものは？

簡単だよ。どこの国でも大して変わらない。彼の親族の誰かが、犯罪に関わっていたってこと。

そして目下この国で下手人が分かっても手が出せない犯罪なんて、1つしかなかったんだからね。

「父は……いつから変わってしまったんだろうな。小さい頃はただ博物館を良い物にしようと奮闘するだけの普通の館長だったのに」

「……………」

「父が自慢気に語るから、自分も刀剣が好きになっていった。この国じゃ大して役に立たない知識ばかり入れるのが、楽しかったのに」

「……………」

「入国する人達に父の博物館を観てほしくて、宣伝する為に門兵にま
でなつたというのに」

ポタポタと彼の足下に小さな染みがいくつも出来ては、朝日がそれ
を乾かしていきます。まるで彼が悲しむことを許さないように。

「あなたは、1人で耐えてたんだね」

「違う。ただ目を背けていただけだ」

「もう意地張らなくていいのに」

私は彼の顔を見ないようにして背中をさすってあげます。本当は
抱き締めるくらいした方がいいのかもしれないけど、男を抱くのは
ちよつと勘弁。

「あなたの名前、なんて言うの?」

「アルトだ」

「そっか」

門兵改めアルトさんに、私は笑い掛けます。

「この国の人はさ、英雄のお願いなら聞いてくれるかな?」

「ある程度ならば叶えてくれるだろうな」

「そっか。じゃあ、1つ頼んでみようかな」

彼の名前も分かったことだしね。

「ただいま〜」

私は寝ているであろうアムネシアさんを起こさないよう小さな声
で安宿の扉を開きます。

「あ、おかえりモミジちゃん!」

「あれ? 起きてたの?」

予想に反して、アムネシアさんは起きていました。パジャマ姿で
ベッドに腰掛けで枕を抱いてるの可愛い。

「えへへ。モミジちゃんと一緒に寝たいなって思って待ってたの
よ」

「それはもう死ぬほど嬉しいけど、疲れてるんじゃない?」

「それはモミジちゃんもでしょ。ほら、こつちおいで?」

「でもまだお風呂入ってないし」

「起きてから入れればいいじゃない」

まあ、確かに疲れ果ててるからそうしたいけど……。でも一緒に寝るのにそれはちよつとね。

「軽くお湯だけ浴びてくる」

アムネシアさんに臭いとか思われたら自害する自信があります。可愛い女の子の言葉はそれだけの効力があるのです。

なので私は彼女を待たせないよう迅速かつ丁寧に全身くまなく洗い、髪を乾かしながらお風呂場から出ました。

すると、既にウトウトと船を漕いでるアムネシアさん。やっぱり疲れてるじゃん。

私は軽く彼女の体を押し倒して、添い寝の姿勢を取ります。相変わらぬいい匂いするしゆき♡

眠気まなこのアムネシアさんを抱いて、すーはーすーはーすーはーすーはーすーはーすーはーすーはー癒しを鼻から脳へと送り込みます。

あゝあゝあゝ 疲れが消えて無くなるうゝうゝ。

「その…迷惑じゃない?」

「なにも迷惑じゃないよ。どうして?」

「いや、あの…一緒に寝たら疲れが取れないかもって思ってた」

「今まさに疲れを浄化してる最中だから大丈夫だよアムネシアさんいい匂いするし」

「……………」

「冗談だよ?」

不思議だな。眠たくて体温が高くなってはるはずなのに、アムネシアさんの視線は凍えるように冷たいです。うまくバランス取ってる?

「……ま、モミジちゃんならいいや」

「いいんだ」

「だって朝起きた時も鼻血出してたし。えっちなのはなんとなく分かるけど、良くないと思います」

「あれはアムネシアさんが頭突きしたからだから！」

「……もしかしてわたしって寝相悪い？」

「寝ながら裏拳とスタンピングキックを顔面に見舞ってくるくらいには」

「えっ……まじ……?」

「まじ」

まさかの事実ドン引きのアムネシアさん。

「ま、明日には……ていうかも今日か。起きたら忘れちゃうから気にしても仕方ないか！」

「その開き直りはだいぶ危険じゃない？ 主に私が」

「えへへ」

照れ笑いを漏らすアムネシアさんは、寝返りを打って私の胸に顔を埋めます。えっちです。でも悪い気はしません。むしろもつと来いや！

そんな心構えでいると、さらに首に手を回されました。お？これはキスくる？キスくる？いいよ全然カモンカモン！

徹夜のテンションで浮かれる私。それに反して、沈んだ声色でアムネシアさんは静かに呟きました。

「———忘れたくないなあ……」

その言葉には、寂寥、悲嘆、後悔……私のボキャブラリーでは足りないほどの感情が滲んでいます。

「わたし、今日のこと忘れたくないよ」

ギョツと私にしがみついてくるアムネシアさん。

「朝起きて隣の部屋の人に2人で怒られたことも。満腹になるまで食べ歩きしたことも。一緒に国からの依頼を受けたことも。悪い人達を捕まえたことも。モミジちゃんがたまたま言って帰ってきてくれたことも」

———こうやって、一緒にいてくれる人のことも。

「アムネシアさん……」

「わたしね、怖い。今寝て次起きたら、こんなに色々あつて楽しかった1日が消えちゃうんだって」

滔々と紡がれる彼女の言葉に、私の心は張り裂けてしまいそうな痛みが走りました。

きつとアムネシアさんがこんな風に不安を抱えながら眠りにつくのは、今が初めてじゃないのでしょうか。記憶を失うようになってから何度も……いや、彼女の性格を考えれば毎晩かもしれない。

ずっと不安で。でも助けてくれる人なんて誰もいなくて。それでも人間の睡眠欲には勝てなくて。

「今日大切だと思つた物が大切に思えなくなっちゃうのも、大切だと思つた人が大切じゃなくなっちゃうのも……嫌だよ……」

なんて応えたら良いんだろう……。なんて言葉を掛ければ安心してもらえるんだろう……。

彼女の不安を本当の意味で理解することができない私は、途方に暮れるしかありません。

「……でも何か言わないと……！」

「……アムネシアさんが忘れても、私は忘れないよ」

「……っ……」

「アムネシアさんが何度忘れても、私が何度だって思い出すよ」

「……っ……っ……っ！」

「朝起きて、自分が誰かも分からないのは怖いよね……どこにいるのか知らないのは不安だよね……」

私は、アムネシアさんを抱き締めて頭を撫でます。奇しくも、昨晩とは逆の構図だね。

「……アムネシアさんの友達はここにいるから」

記憶が無くなっても、その事実は無くならない。無くさせるもんか！

「アムネシアさんが私のことを大切だと思えなくても、私はずっとアムネシアさんを大切に思い続ける」

きつと、私と出会う前の旅路でも彼女に同じことを言った人はいるはずです。

「私はアムネシアさんが好きだから」

記憶が無いから、この国の事情を知らなかった。

記憶が無いから、あの門兵さんのことも知らなかった。

そうでなくても、ただの旅人であるアムネシアさんにとって、この国の事件なんて関係なかった。

それでも自分達を頼るには相応の理由があるはずというただの推測だけで危険な依頼を受けてしまう、能天気で、考えなしで、どこか甘えん坊で——— だけど底抜けに優しいアムネシアさんが、私は好きだよ。

本当は私だって忘れてほしくない。でもそれを伝えたら、優しい彼女は自分を責めちゃうから。だから、無責任に月並みな言葉を選択します。

「記憶は無くなっても記録は残ってる。次起きても、私がアムネシアさんのこと教えてあげる。だから、安心して眠って」

「……うん」

次起きる時も、きつと彼女にど突かれるかもしれない。でもまあ、別にいいか。

「おやすみ。モミジちゃん」

「おやすみなさい。アムネシアさん」

そうして私達は、朝日で明るくなった部屋の中で抱き合って眠りにつきました。

遅めの昼食を済ませた私達は出国とお別れの為に門の前にはいました。そこには門兵さん———アルトさんがお見送りをしてくれています。

なんとなく、平安の国カイヤナイトではこの2人との思い出がほとんどなように感じます。

そんな私からすればイツメンと呼びたくなるメンバーですが、変わったところが2つあります。

「武器博物館は取り壊しになった。まあ、あんな事件を起こしたのだから当然だろうな」

「そっか」

「次にああいった勢力が現れても対処できるよう、騎士団も設立することになったよ。平安の国が騎士団とは何事かと、今は国民の反発が凄まじいが……まあ、必要悪ではあるな」

「うん」

「あと、何故かその初代騎士団長に自分が選ばれた。……これは君の差し金か？」

「まず1つは、アルトさんの腰に私と同じ刀があることです。」

「この国の騎士団の設立とその初代団長は、私が安宿に帰る前にパッと推薦状としてこの国の役人に提出したものでした。」

「まさか昨日の今日……というより今日の今日でここまでトントン拍子に話が進むとは思わなかったので結構びっくりです。」

「きつとお主なら良い騎士になれるでござるよ」

「自信はないが善処しよう」

「なにゆえ騎士なのに刀を持っているのかは、聞いて良いでござるか？」

「……できれば察してほしいところだが」

「ではそうするでござる」

「大方、事件を解決した私とアムネシアさんへのリスペクトでしょう。」

「アムネシアさん同様、騎士となった彼。ですが、私の武士という要素もどこかに残したいと考えた。その結果が腰の刀、と。」

「たぶん改めて口で言われちゃうと私も照れちゃうので、これは察して正解だね。」

「じゃあ別の質問をしてもよろしいでござるか？」

「なんだ？」

「どうして初代騎士団長が今日も門兵の真似事をしてるでござる？」

「君達の見送りをしたくてな。代わってもらった」

「あれ？ これは素直に答えるのでござるな」

「言葉にしなければ伝わらない。そうではないか？」

「……然り」

アルトさんは目を細めて遠くへと視線を向けていました。彼なりに、下手人である父親に対して思うところがあつたのかもしれない。目を背け続けたとも言っていました。

どこか誓いを立てるような雰囲気には私が何も言えずにいると、突然アルトさんは男らしい拳をこちらに向けてきました。

「近くまで来たら是非また来てくれ。歓迎する」

「約束するでござるよ」

私が男と触れ合うのをあまり好まないと理解してのことでしょう。確かに、握手やハグよりもやりやすく助かります。

コツンと軽くお互いの拳を当て、私達は笑い合いました。

すると、ずっと蚊帳の外だったアムネシアさんが間に入ってきました。どこか膨れっ面です。フニフニほっぺがぶつくりです。きやわわ！

「どうしたでござる？」

「……なんか置いてけぼり感あつたから」

「ははっ、すまない。君にも世話になつたな」

アルトさんはアムネシアさんにも拳を向け、2人も当て合います。何のことか理解できていないようで首を傾げていましたが、空気読める子アムネシアさん。ノリでコツン。

「そういうえば、先ほどから気になつていたのだが」

アルトさんは首を傾げて、私に言葉を投げかけます。

「何故君はそんな変なしゃべり方になつているんだ？」

変わったこと2つめ。私の口調が気になつたようです。

まあ、眠りにつくまで私も色々考えてね。結局こんな方法しか思いつかなかったんだよ。良いのか悪いのかわからないけど。

だけど、それでも私は胸を張って応えます。これが今の最善だと。ここでお別れの彼女の為に私が取れる最善手だと。

「——忘れっぽい友達が、拙者のことを思い出しやすいようにでござるよ」

思い出から現実に帰還した拙者は、最後のパン一切れを口に放り込んでゴクン。

なんでこんな事を回想したのかは、まあイレイナ殿からもらった日記のこともあるわけでござるが……。

——いるでござるよ。目の前の大通りに。アムネシア殿が。妹のような瓜二つだけど髪が長い女の子と一緒に。

拙者はベンチから立ち上がり、再会に高鳴る胸を抑えて歩み寄っていきます。

もしかしたら、まだ何も思い出していないかもしれない。もしかしたら、拙者のことを忘れたままかもしれない。

あなた誰とか言われたら拙者泣いちゃう。もうこの大通りにいる全員がドン引きするくらいめっちゃ泣く！ この国の歴史の教科書に載つちゃうくらいギャン泣きする！

そんな迷惑すぎる決意と不安を胸に、彼女の名前を呼びました。

「アムネシア殿！」

すると、アムネシア殿は妹らしき女子と一緒に綺麗な白髪を揺らしてキョロキョロ。人混みの中で、自身の名前を呼んだ相手を探しているでござる。

拙者はチビっちゃんなので、ピョンピョン跳ねながらアピール。拙者ここだよ。

「お姉ちゃん。あの人じゃないですか？」

「んー？……あつー！」

妹らしき女子おなせの指先を辿って、ついにアムネシア殿は拙者を視界に捉えたでござる。

今拙者はどんな顔をしているでござろう。

不安そうな顔？

再会を喜ぶ笑顔？

それともただただ無表情？

自分のことすら分からないほど胸がいっぱいな拙者に向けてアムネシア殿は、

「——モミジちゃん！」
名前を、呼んでくれたでござるよ。

望み望まれない亡霊

愛悼の霊園 雪

切りつけるような寒風の中、とある国の門前では衛士と旅人がこのようなやり取りをしていたでござる。

「お名前は？」

「モミジと申す」

「ご職業や役職などはありませんか？」

「武士で旅人で魔法使いでござる」

「つまりマジカルニートトラベラー、と」

「一瞬カツコいいと思った自分を殴りたいでござる」

「どうぞ。それで入国の目的は？」

「観光と路銀調達でござる。てかどうぞって……」

「滞在日数は？」

「3日ほど予定してるでござるよ」

「3日も寄生するんですか」

「あれ？ 喧嘩売ってる？」

「ようこそ。愛悼の霊園へ」

さてさて。長い黒髪のポニーテールを揺らし、黒のリブ生地ハイネックセーターと黒タイツの上から明るい着物と袴を纏い、冬の寒さを吹き飛ばすような大輪の向日葵を刺繍したローブを靡かせて編み上げブーツで1人のサムライガールが門の中へと踏み出していきます。

入国審査を担当してくれた衛士とメンチを切り合いつつ、腰の刀に手を掛けて威嚇しつつ、それでも足を止めないマジカルニートトラベラーとは一体誰でしょう？

そう、拙者でござる。

寒空の下、本日拙者が入国したのは敷地の半分以上がお墓というなんとも奇妙な国でござった。

この愛悼の霊園は、どの国からでも最低歩いて2日は掛かる陸の島国のような場所にあり、拙者もまた刀に乗ったら歩いたりを繰り返して辿り着いたでござる。その結果、お財布の中身は季節感溢れることに寒々しい。閑古鳥がぴーちくぱーちく鳴いているでござるよ……。とほほ。

「銀貨が1枚と銅貨が……えっ、6枚？」

ちなみに銅貨1枚が露店のパン一個相当。銀貨1枚で安宿一泊相当。金貨1枚で高級な装飾品一個相当でござる。

つまり拙者は今、安宿一泊分と露店のパン六個分しか持ち合わせがないという事でござる。これはやばい……。

「うう…マミ上のおしるこが飲みたいでござる」

そんな拙者を嘲笑うかのように吹いた風に身を震わせ、泣き言が漏れたでござる。

この時期は特に恋しくなるでござるなあ。外で大量にある汗臭い道着の洗濯を終えたあと炬燵で食べたおしるこは絶品でござった。

兎にも角にも、先立つ物が無ければ拙者が先立つ者になつちやうので、お仕事探しと行くでござる。この国は辺境にこそあれど、それなりに大きくもあるので魔法統括協会の支部があるでござるからな。

「ごめんください。仕事ください！」

というわけで、拙者は窓口で二ート丸出し発言。いや、働く意思がある時点で二ートではござらぬな。ドヤー！

魔法統括協会とは、魔法というののついた事件や事故にやたらと首を突っ込みたがる組織の名称にござる。基本的には協会所属のエージェントが問題解決に動くでござるが、ちよくちよく一般の魔法使いにも簡単なお仕事をくれる拙者旅の魔法使いいのような者達にとっては命綱のような存在でござる。

もちろん一般の魔法使いにしてくれる仕事は迷い猫探しや失せ物探しなどぶっちゃけ魔法いらなくね？　と思うようなものがほとんど。まあ協会としても所属してない人間に責任重大な仕事は渡せないで、その辺が落とし所でござろうな。

ちなみに仲介料としてそこそこ持つてくので、お財布事情によつて

は悪魔と思える時もあるでござる。そして、今がそうだ。

「何か特技などはございますか？　今まで経験したことのあるものでも構いません」

「特技は料理でござるな。あとは博物館へのカチコミや、パン屋で聖剣、魔槍、魔導書を持った強盗をシバき倒した経験もあるでござるよ」

「社会不適合者……」

「失敬な」

せつかくならインパクトあった方が窓口の事務員さんも助かると思ったのでござるが、余計なことをしたかも？

「失礼しました。では、何か好きなことはありませんか？」

「綺麗だったり可愛かったり、とにかく女の子に抱き着くのは大好きでござる」

「……………」

「そんな仕事ござらぬか？」

「ねーよ」

おや？　事務員さんのお口が大変悪くなったでござる。……よく見るとこの事務員さんも綺麗な方でござるな。こういった美人に冷たく睨まれると、拙者ゾクゾクするでござる。

「うーん…あつ！　わりと肉体労働は得意でござるよ」

事務員さんをジツと見て涎が垂れ始めたあたりで、彼女が常駐している警備員さんっぽい人に目配せ。拙者は慌てて簡潔にそれだけ述べました。

「ふむ。ではこちらのお仕事などいかがでしょう？」

「……………うん？　これが仕事でござるか？」

「はい」

渡された紙束の表紙には、ちよつと目を疑う仕事内容が書かれていたでござる。

——幽霊退治、と。

協会の支部を出ながら紙束を読み進めていくと、拙者自身の仕事は幽霊退治のお手伝いということであった。実際に退治を行うのは協

会所属の魔女さんで、今この国に向かっていると事務員さんが教えてくれたでござる。

魔女さんが到着するまで、拙者はこの国で出現している幽霊についての聞き込み調査をして、ある程度の情報を集めておいて欲しいとのことでござった。

報酬は聞き込み3人につき銅貨1枚。有益な情報であればその都合いによって報酬アップもあり。足で稼ぐ完全歩合制でござるが、それは逆に言えばお金稼ぎ放題ということでござる。やったー。

「聞き込みといったら、やっぱり人の多いところでござるな」

拙者は食事がてら目の前にあつた露店のパン屋さんで商売するマダムへと近付いていく。

「そちらのコロネを1個とクロワッサン2個をお願いするでござる」

「あいよ！ お嬢ちゃん、旅人？」

「然り」

「へえ！ まだ若いのに。こっちのブリオツシュもおまけしといえげなきやね」

「かたじけない！ ありがとうでござる」

「いやいや。こんなおばさんになつてくるとね、頑張ってる若い子を応援したくなつてくるもんなのよ。まさに老婆心だね」

なんかこの国に着いてから初めて人に優しくされた気がするでござる……。

瞳のうるうるを抑えて、拙者は銅貨3枚をマダムへ。せっかくなのでお仕事もこなしておくでござる。

「拙者、路銀調達の為に軽いお仕事を預かったのでござるが、マダムはこの国で幽霊が出ていることはご存知でござるか？」

「幽霊？ うーん…あたしはまだ見たことないけど、それはありがたいねえ」

「ありがたいでござるか？」

「あぁー」

幽霊ありがたいとはこれ如何に。普通は怖がられるものなのでは？

そんな思いで首を傾げる拙者を見て、マダムはポンと手を叩いたでござる。

「不思議かい？」

「それはまあ」

「生まれも育ちもこの国のあたしにとっては普通なんだけどねえ。突然だけど、お嬢ちゃんにとって『死』ってのはどんなもんだい？」

「哲学でござるか？」

「そんな小難しいもんじゃないよ。思っていることをそのまま言っちゃうだい」

「死」でござるか……。改めて聞かれると説明が難しいでござる。

拙者はあまりよろしくない頭を回転させて、マダムへとなんとか言葉を紡いでいく。

「嬉しいものではないでござるな。親しい人、愛した人、愛してる人、そんな人達との永遠の別れでござる。一言で言うなら辛いものでござる」

「そうだねえ。まあ、辛いつてのはあたしも同じさ」

マダムはさり気なく拙者にもう1個コロネを差し出しながら、話を続けるでござる。

「この国ではね、死はご褒美って認識なのさ。頑張って生きた証って言えば分かるかい？」

「理屈だけならばなんとか」

「それで充分。……確かに大切な人との永遠のお別れは辛いし悲しいものだけど、それだけだとやっぱり虚しいじゃない？ だから死ぬ事を赤ん坊が生まれた時と同じくらい祝うってのが、この国の流儀ってわけさ」

「……………」

死を祝福する。拙者の価値観で言えばそれはとても不謹慎なことに思えるでござる。

でも根底にあるのはやっぱり死者への敬意と親愛で、ただその表現方法が真逆なだけでござるな。その考えでいけば幽霊ありがたい存在だと言うのも、なんとなく納得できるとござる。

「素敵な国でござる」

「お！ そう言ってくれると嬉しいねえ」

ポンと拙者の頭に温かい手を置かれたでござる。チビっちゃん拙者の頭は平均的な女性の身長からだとちょうど撫でやすい位置にあるのか、こういったことは珍しくない。

男からはお断りでござるが、女性に撫でられるのは心地良いでござる。

「えへへ。あつ、それと一つ伺いたいでござるが、この国に観光スポットはあるでござるか？」

「あるよ。この国らしき溢れる場所が」

「ほうー」

「あそこさ」

マダムが指差す先。そこは愛悼の霊園が誇る最大面積の施設。

「墓地……？」

えっ、まさかの……？

墓石の花畑。そう表現するのがしっくりくるような場所だ。た。た。

匠の技巧が凝らされた墓石の数々は、一色であるにも関わらずこの場所を華やかに彩っているでござる。

咲き誇る花。躍動感溢れる羽ばたく鳥。慈愛に満ちた聖母。一定の間隔で置かれた墓石は、一つ一つが極上の芸術品が如く拙者の目を樂しませてくれるでござる。

しかし、それより気になるのが……

「ママあれ欲しいー！」「あらあら。そんなに走ったら転んじゃうわよ」「ねえ？ 私のことどれくらい好き？」「このくらいだよ！」「それってどのくらい？」「これくらい♡」「このくらい？」「もつともつ♡」「次どこ行く？」「あーしロランさんのところ行ってみるわ」

愛悼の霊園が誇る墓地は大変な賑わいを見せているでござる。マジか……。

「……本当にお墓でござるか？」

ニコニコ手を繋ぎながらお菓子の露店へと歩く親子、イチヤイチャ手を繋ぎながらいちやつくカップル、キャツキヤ仲良くはしやく女学生。

周囲を見回せば、それ以外にも休日でも満喫するたくさんの人と多くの露店が溢れてるでござる。お墓なのに。

「ロランさんのお墓どこだっけ？」

「あっちじゃね？」

「お供え物買つといたよ」

「何買ったの？」

「シヨートケーキ」

シヨートケーキ……お供え物にシヨートケーキ？

ちよつと拙者の頭はパンク寸前。お墓とは？

「ま、まあ！ 人は多いし、聞き込みには最適でござるな！」

ちよつと受け止めきれない現実から逃避する為、拙者はお仕事をするでござる。お金必要だし。

さあ！ 張り切つて行くでござるよ！

「有益な情報が……全然ない！」

ないでござる！ 全然ないでござるよ！ 30人以上も聞いたのになんで？

「うう……今日寝る場所どうしよお……」

流石にこの寒さの中で野宿などしようものなら、文字通り冷たくなってしまうでござるよ。まだ死にたくないでござる。イレイナ殿と結婚してないので！ イレイナ殿と結婚したい！

「あのお、何かお困りですか？」

「イレイナ殿と結婚したいでござる」

「イレイナ殿……？」

「灰色の髪に瑠璃色の瞳で女神と天使が子ども作ったらたぶんこんなのだろうな、という女性でござるよ」

「そうなのですね」

イレイナ殿との結婚生活を妄想して心だけでも温めていたら、なにやら誰かに話しかけられているようであった。おっとつと、お恥ずかしい。

「失礼。ちよつとトリップしてたでござる」

「あら、そうでしたか。てつきり持病でもお持ちなのかと」

「見た目に反して毒を吐く御仁でござるな」

拙者に優しく毒を吐くのは、しゃべり方同様優しそうな女性でござった。

黒と白の一般的な修道服をスタイル抜群の体に纏わせているおっとりお姉さん系でござる。しかし：修道服という厳かな服装が作る体のラインがえらい！ えらいでござる！ 背徳でござるよ！

そんな彼女の胸元には星を模ったブローチ。頭には服装にミスマッチな三角帽子を被つてゐるでござる。

「おや？ 魔女さんでござったか」

「申し遅れました。お墓の魔女、マリーメリアです。こここの管理人を務めております」

「これはどうもご丁寧に。旅の魔法使いでモミジと申す」

「何か困っている様子だったのでお声がけしたのですが、必要ありませんでした？」

人差し指を唇に当ててコテン。おっとりお姉さんでお墓の魔女ことマリーメリア殿は、そんなあざとい仕草で首を傾げたでござる。

「実を言うと困っているのでござるよ」

「それは大変。何か力になれることはございますか？」

「かたじけない。拙者、魔法統括協会からちよつとした仕事を預かったのでござるが、最近出現している幽霊について何か知っていることがあれば教えてほしいでござる」

「幽霊……ですか」

マリーメリア殿は指の位置をそのままに首を逆方向へコテン。さらにその振動でお胸がポヨン。好き。

「幽霊でしたらよく見ますわ」

「おお！ そうでござったか。それはどちらに？」

「そこかしこにいるではありませんか。ほら、あなたの後ろにも……」
「ひゃう!? い、いいいいでござるか!?」

「うふふ。冗談ですわ」

クスクスとお上品に口元を隠して笑う彼女は、どうやらお茶目さんなようでごさる。

それはそれとして、実はホラーとか苦手な拙者は自分が発した恥ずかしい悲鳴に赤面してしまうでござる。

「うう…穴があつたら入りたい」

「あら。必要であればすぐにご用意できますわ。文字通りの墓穴を」

「結構なブラックジョークでござるな」

「お墓の魔女ですから」

「ちよつと気になったのでござるが、お墓の魔女って魔女名でござるか?」

魔女名とは、魔女の証の1つでござる。

魔女の称号は主に2つ。星を模ったブローチ。そしてもう1つが魔女名。

どちらも魔女となった時に師匠から貰うもので、魔女名はその魔女の二つ名のようなものでござるな。ちなみにこれはわりとどんな名前でも良いらしいでござる。

とはいえ……、

「随分とストレートな魔女名でござるな」

「この墓地を管理する魔女には代々お墓に因んだ魔女名が授けられるのですよ。『霊園の魔女』だったり、『墓守の魔女』だったり」

「急になんの捻りもなくなつたのはなにゆえ?」

「もうお墓ネタが尽きたからですわ」

「なんとまあ……」

ちよつとそれはどうなんだろう? いやまあ、部外者の拙者が気にすることでもないでござろうが。本人は気にしてないみたいだし。おっと、話がだいぶ脱線してしまったでござるな。どうもこのおつとりペースに乗せられてしまうでござる。

拙者は咳払いを1つ挟み、話を戻すことに。

「それで、幽霊について何か知ってることはあるでござるか？」

「うーん……幽霊ですか。この国ならありそうな話ですが、あいにくと存じてはおりませんねえ」

「むう……。そうでござるか」

「差し支えなければ、どのようなお仕事を預かったか聞いても？」

「幽霊退治でござるよ」

「まあ！　なんて不謹慎な！」

「マリーメア殿は腰に手を当ててぶりぶり。なにやら怒り出したでござる。」

「いいですかモミジさん。他の国ではどうか知りませんが、この国でそんな事をしてはいけませんよ。死者は敬遠するものではなく、尊ぶものです」

「それは他の方々からも聞いたでござる」

「でしたら間違ってもそのような事を口に出してはいけません」

「めっ！　と、人差し指を拙者の唇に当てられたでござる。……ちゅばちゅばしたらダメかな？」

「わたくしも魔法の端くれとして魔法統括協会のシステムはある程度存じております。そのお仕事の依頼者はこの国の方なのですか？」

「どうやらそうみたいでござる」

「となると奇妙ですね……」

「というと？」

「繰り返すようですが、この国では死者を尊ぶのです。なんなら幽霊が出るという触れ込みの家は普通の家より高く売れるくらいですから」

「急に俗っぽい話が出てきたでござるな。」

「ちなみにアパートメントでも、事故物件であれば他の部屋の3倍の値段が付きますわ」

「ふむ。正気を疑うでござる」

「死者とのシェアルームですよ？　夢のようではありませんか」

「夢ならばどれほど良かったでしょうと戦々恐々でござるよ」

「改めてかなり奇特な国民性であることを再認識したでござる。」

しかし、ここまで言われればマリーメリア殿の言いたいことは頭の悪い拙者でも察しが付いたでござる。

「つまりこの国では、幽霊を退治するなんてことはありえないと？」

「はい。まずメリットがありませんもの」

メリットだらけでは？　と思っただでござるが、ここは自分の常識を捨てる時でござるな。

「むう……。となると、この依頼は少し変でござるな」

魔法統括協会の支部で事務員をやっているということは当然あの事務員さんもこの国の者。他の国から飛ばされてきたとかでなければ、この国の価値観で物事を見るはずでござる。

（もしかして拙者の相手が面倒くさくて架空の仕事を渡した……とか？）

もしそうだったら拙者泣いちゃう。

でもちゃんとエージェントが来るって言ってたし、それはないか。

「どうしよう……」

「力及ばず申し訳ありません」

「あつ、いや！　マリーメリア殿が謝ることではないでござるよ！

こちらこそ時間を取らせてしまい申し訳ない」

「ふふつ、礼儀正しい方ですわね。もしよろしければこれからお茶でもいかがですか？」

「嬉しいお誘いでござるが、よろしいのでござるか？」

「ちようど休憩しようと思っただところですから。それに、モミジさんの旅のお話も……あら？」

突然マリーメリア殿は何か気付いたかのように辺りをキョロキョロ。そうして空に目を向け、頭上で旋回してる鳥さんを見つめ始めたでござる。

「申し訳ありません、モミジさん。お茶はまた今度でもよろしいでしょうか？」

「それは構わぬが、何かあったでござるか？」

「来客のようです。毎日来る方なのですが、今日は少し早いですね」

この人混みの中からどうやって見つけ出したのござろうか？ 拙者も常に意識を周囲へと広げているでござるが、特に変わった気配はなかったはず。

怪訝な表情を浮かべる拙者へ、マリーメリア殿は優しく微笑んで教えてくれる。

「使い魔です。流石にこの広大な墓地を1人で見張るのは難しいので、わたくしは20匹ほどの使い魔と常に視界を共有していますわ」
「20匹……」

さすがは魔女。魔導士の拙者には到底真似できぬ芸当を易々とやってのけるでござる。

ということは頭上で旋回している鳥さんも彼女の使い魔ということとでござるか。

「それはかなり疲れるのではないでござるか？」

「まあ疲れると言えば疲れますね。でも、それ以上にこのお仕事が好きですから」

マリーメリア殿は周囲の人々——墓石に花を手向けたり、お供え物をしたり、黙祷を捧げる人々を見回してふんわりと微笑み、ただ一言。

「——わたくしはこの場所を愛していますから」

おっとり美人と話せたことで拙者の心は羽のように軽くなったが、羽のように軽いのはお財布も同様でござった。

聞き込みのメモを見返しても、有益な情報は皆無。なんならどこで幽霊が出るのか逆に聞かれる始末でござったよ。びえん。

日が暮れ始め、さらに気温が下がってきたでござる。あつ、ホットワイン売ってる。飲みたい……。

「ぐぬぬ……致し方なし」

濃い葡萄の香りと温かい湯気を上げる露店は繁盛しているらしく、そこかしこでホットワインを口にする人達が散見しているでござる。

それも手伝ってか、拙者は残り少ない銅貨をお財布から取り出し購

入。

ワインとは名乗っているでござるが、これは熱してアルコールを飛ばしたものだ。苦いくらいの濃さがクセになる一品でござるな。

「ポカポカでござる〜」

貧乏な拙者はお行儀悪くちびちび飲みながら協会へ。しょーもない情報ばかりでござるが、それなりの人数に聞いたおかげで銅貨の枚数は期待できそうでござる。

協会の扉を潜ると、昼間拙者の相手をしてくれた事務員さんと白い三角帽子を被った女性が話し合ってるのを見つけたでござる。

事務員さんがこちらに気付き、それに合わせて女性も拙者を見る。

「あちらの方です」

「おお、お前か。……随分とちんちくりんだな」

「初対面でいきなり失敬でござるな」

むすつと頬を膨らませつつも事実なので気にしないことに。案外この身長のおかげで得をすることもあるでござる。たまにお店でおまけして貰える。

「えっと…お主が幽霊退治を担当する協会のエージェントでござるか？」

拙者をちんちくりん呼ばわりするだけあつてすらり背が高いその女性は、白い三角帽子を金髪の長いポニーテールの上に乗せ、胸には魔女の証である星を模ったブローチと協会所属の証である月を模ったブローチ。

どこかやさぐれた目つきと口元の煙管から、恐らく元ヤンであると推測できるとござる。やんきー怖い。

「ああ。夜闇の魔女、シーラだ。よろしくな」

「武士兼旅人兼魔法使いのモミジでござる。よろしく」

差し出された手を握り、とりあえずご挨拶。ついでに拙者は彼女をくんかくんか。くさつ……。

……いや、待つでござる。確かに煙管のせいでその匂いが染み付いてるでござるが、その奥！ その奥には確かにこのスタイル抜群金髪

美人の大人スメルがあるでござるよ！

「おい」

「……くんくん」

「おいって」

「くんかくんか」

「おいこら」

「すーはーすーはーすーはーすーはー」

「やめろ馬鹿！」

「痛いっ!?!?」

ゴツン！ つい匂いの探索に夢中になってシーラ殿に抱き着いてしまっていたら、頭頂部にゲンコツを貰ったでござる。痛いよお……。

拙者は殴られた箇所をホットワインを持つ手で抑えて抗議の目。

「暴力は良くないでござる」

「セクハラは良いのかよ」

「セクハラじゃないもん。スメハラに對抗しただけでござる」

「なんであたしの匂いを嗅ぐことが対抗になるんだよ」

「シーラ殿の匂いを用いてその煙管からの不快感から逃れようかと」

「やっぱりセクハラじゃねーか」

グリグリグリ。拙者の頭をシーラ殿は両拳で挟んでグリグリしてきたでござる。

「あっ！ 痛いでござる。いたついたたた！ 離してほしいでござる

！ ホットワイン溢れちゃう!!?」

「この期に及んでそっちの心配するのか!?!?」

なんとか根性で耐え抜き、一滴たりとも溢さなかった自分に拍手喝采でござる。拙者えらい！

「……おい、本当にこいつに情報収集任せちまったのか?」

「一応……」

「こんな社会不適合者に?」

「残念ながら」

「ひどい……」

何故かひどく諦めたような目で拙者を見るシーラ殿と事務員さん。これでも任された仕事はちゃんとこなす真面目ちゃんでござるよ。ぷんぷん！

「まったく……東の国の連中はこんなのかいねーのかよ」

「おや？ 拙者の国に知り合いでも？」

「あたしの弟子2人がその出でな。姉妹なんだが……ぶっちゃけ両方やばい」

「なんと」

「姉は灰の魔女つつー旅人にぞつこんで聞くに堪えない妄想を会うたんにぶちまけてくるし、妹は隠してるつもりだが姉にえげつない執着を見せてるな」

それはもはや世間に放つてはいけないレベルの狂人姉妹なのでは？

そんな感想が頭を過つたでござるが、それよりなにより気になる発言が。

「灰の魔女と言ったでござるか？」

「あ？ ああ、イレイナのことか。なんだ、お前もあいつの知り合いなのか？」

「知り合いなんて軽い関係じゃないでござる!!？」

突然大声を出した拙者に驚くシーラ殿。しかし拙者の熱く燃えたぎるイレイナ殿への想いは既にバックドラフト現象並みの爆発を起こしているでござるよー！

「拙者、イレイナ殿とは2回も同じベッドで朝を迎えた仲でござる！

もはや2回も同衾したとなれば、それはもう結婚したも同然！ ただ夫婦の契りこそ交わしていないものの、次会った時がその時になるのは必然でござる！ ちなみに拙者は上でも下でも構わぬが、もし上になつたらイレイナ殿のピーをスキューンしてそのままトロトロにズドドドしたいと思つてるでござるし、下になつたのならまずは拙者が舌で自主規制して準備万端に……あれ？ 聞いてるでござるか？」

なにやらシーラ殿が『こいつもかよ』とでも言いたげな目で拙者を

見つめてるでござる。

「おやおや事務員さん？それは人間を見る目では無く家に出現した害虫を見る目では？」

「もしやお2人は外で寒い中仕事をしてきた拙者を温めてくれてるでござるか？確かに美人2人にそんな目で見られてる興奮で体が温まってきたでござるよ。優しい。」

「ねー。本当にこいつに情報収集任せちゃったの？」

「残念ながら」

「むむむ……何か変なこと言ったでござるか？」

愛悼の霊園 月

「シーラ殿。そろそろ降ろしてほしいでござるよう」

今現在、拙者は魔法統括協会の窓口でシーラ殿のほうきに魔法で逆さ吊りにされているでござる。うぶっホットワイン出そう……。

「うるせー。檻にぶち込まれないだけ感謝しろ」

「拙者なにも悪いことしてないでござる」

「公然猥褻」

「してないでござる」

「自覚がないのか……」

ちよつと拙者の乙女な妄想を口に出したただけでこの扱いとは。シーラ殿は狭量でござるな。

「事務員さん。助けてほしいでござる」

「42人ですか。結構な人数に聞き込みできたんですね」

「拙者頑張ったでござる」

「でも使える情報はありませんね」

「それは申し訳ない」

「では契約に則り、報酬は銅貨14枚ということになります。後で取りに来てください」

「承知したでござる。それはそうと、助けてほしいでござる」

「私はもう退勤の時間なので失礼します」

「おう。お疲れさん」

「事務員さくくん」

協会の奥へ消えていく事務員さんに、シーラ殿はヒラヒラと手を振って見送ってしまった…。お主が助けなければ、誰が拙者を助けるでござるか。

「頭は冷えたか？」

「どちらかと言えば頭に血が昇ってきたでござる。…いや、逆さ吊りだから降りてきた？」

「お前実は結構余裕あるだろ？」

「バレちゃったでござるか」

てへぺろ☆と舌を出したら、いきなり魔法を解かれたでござる。

拙者は頭から落ちないよう身を翻し、着地。危ない危ない。

シーラ殿は今の拙者の身のこなしにちよっぴり驚いているでござるな。旅人なので、これくらいは問題無く可能でござるよ。

「して、シーラ殿。拙者の集めた情報は使えそうでござるか?」

「まったくもって使えねーな」

「うっ…申し訳ない」

「別に謝ることじゃないさ。この国、結構でけーからな」

しかし、それでも任された仕事を十全にこなしていないのは事実。報酬だけ貰って、はいさようならと行くのは流石に後味が悪いでござる。

「もしシーラ殿の邪魔にならないのであれば、事件解決のお手伝いをするでござるよ。」

「言つとくが報酬は出ねーぞ? ここからはお前への正規の仕事じゃないからな」

「乗りかかった船でござるよ」

それに、この依頼は色々と不可解でござる。拙者の考え過ぎでなければ良いのだが、その辺りも直接共有するに越したことはなからうて。

そんな本心は横に置いてニコリと笑い掛けると、シーラ殿はまたも『こいつもかよ』と言いたげな目をしてきたでござる。

しかしさつきとは違って、どこか温かみがあるでござるが。何故でござろう?..

ちようど良い時間でもあったので、拙者とシーラ殿は協会を出てから夕食の為にレストランへ来たでござる。

どうやら報酬が出ない代わりに奢ってくれるとのこと。ひゃっふー!

「ふうー! ご馳走さまでした!」

「こいつ…容赦なく注文しやがって……」

「やっぱり人のお金で食べる食事は絶品でござるな」

銅貨14枚貰ったとしても、未だ拙者が貧乏なことは代わりなし。なので明日明後日の栄養も補給しようとかくさん頼んだら、シーラ殿が涙目になっちゃったでござる。……ちよつぱり反省。

「そういうえば、シーラ殿はイレイナ殿とどういった関係でござるか?」「あいつとか?」初めて会ったのは事件の聞き込みをした時だな。女の髪ばかり狙う切り裂き魔にあいつもやられて、なんやかんや成り行きで一緒に捕まえたよ」

「ほう…イレイナ殿の髪を、ねえ……」

あのサラサラふんわりでめちやくちやいい匂いのする髪を切るとは……もしその下手人が目の前にいたら、是非とも生き地獄を味わってもらいたいものでござるな。

「そんな怖い顔すんなよ。ちゃんとあいつの髪は元に戻ったしな」

「でも拙者の未来の伴侶に手を出したことに変わりないでござる。ブツ殺ブツ殺!」

「お前見た目に反して物騒だな」

「人を見た目で判断するのは良くないでござる。シーラ殿見て学んだでござるよ」

「お前も見た目で判断してんじゃねえか」

ははっと白い歯を見せて笑う彼女には、どこか人懐っこさを感じるでござるな。

というか、2人も弟子を取ってて魔女まで育て上げた御仁でござる。わりと人格者なのかもしれないでござるな。いい匂いするし。

「他にはイレイナ殿とのエピソードあるでござるか?」

「あるぜ。実はな、あたしの姉弟子がイレイナの師匠なんだよ」

「なんと!??」

「すごい偶然だろ?」

「ふむ…そうしてシーラ殿の弟子はイレイナ殿に恋慕の情を寄せていると……。これ、近親婚では?」

「いやちげえよ絶対」

「なんか親戚みたいでずるいでござる」

むすつと膨れる拙者に笑い、シーラ殿はさらにイレイナ殿の話をし

てくれるでござる。

自由の街クノーツという港町でまだ仲の悪かった姉弟子と一緒に魔法に匹敵する道具を使って悪さをする骨董堂なる組織を潰したこと。

その骨董堂が復活して、今度はイレイナ殿とシーラ殿の弟子が潰したこと。

その場所でたまたま姉弟子と共に出くわし、5人でお茶をしたこと。

はたまた、静寂の国バラードで狼の使い魔にされた少女を救う為に姉弟子、イレイナ殿、シーラ殿の3人で奔走したこと。

合計で3回も一緒にイレイナ殿と事件解決をしているシーラ殿に、拙者は嫉妬の感情が抑えきれないでござるよ。

「ずるい……。ていうか、イレイナ殿って巻き込まれ体質でござるか？」

「それ思ったわ。あいつなんであんなに事件に巻き込まれてんだろうな」

「ちなみに拙者の場合は、お気に入りのパン屋さんにいた時に強盗が入ってきたでござる」

「間が悪過ぎんだろ……」

いくら魔女とはいえ、ここまで事件に巻き込まれているといつか取り返しのつかないことになるかもと心配になるでござるよ。

共通の知り合い（未来の嫁で旦那）について盛り上がっていると、いつの間にかだいたい時間が経っていたでござる。

そろそろ宿を探さないと。本格的に野宿確定になってしまうでござる。寒いのでござる。

「それでは、改めてご馳走さまでござる」

「ああ。気を付けてな」

「明日は何時に何処集合にするでござるか？」

「あー……。じゃあ9時に協会支部の前でどうだ？」

「承知したでござる」

拙者はペコリと頭を下げて、まだレストランに居座るつもりでシー

ラ殿とその日は別れたでござる。

安宿でなんとか一泊分の料金だけ払い、夜を明かした拙者。ついに銀貨が尽きたでござる……。

今日マジでどうしようかと顔を青くしながら協会支部まで行くと、既に入り口の前でシーラ殿が待ってあった。

「おはようでござる」

「おう、おはよう。……おい、顔色悪いぞ?」

「拙者、今晚が命日になるかもしれないでござるよ」

昨晚栄養を蓄えたのは良いでござるが、よくよく考えたら人間は寒いだけで死ぬ生き物でござる。つまり凍死したら水の泡。

「でも大丈夫でござる。マリーメア殿が管理しているお墓で眠れるなら……」

「誰だそれ?」

「この国の墓地の管理人で、背徳的なえろさを携えたお姉さんでござる」

「お前そればかりだな」

呆れた目を拙者に向けるシーラ殿。それから、その視線は墓地の方向にスライドしていったでござる。

「お前、昨日あの墓地には行ったんだよな?」

「然り。幽霊といえはお墓でござるから」

「そんで管理人の魔女にも会った、と」

「はい」

お仕事モードに入ったのか、ただでさえあまりよろしくない目つきをさらに鋭くしたシーラ殿は、拙者にそんな質問をしてくるでござる。質問というより尋問かと感じさせるほどで、ちよつと怖いでござるな。

「お前、こういうった事件でまず最初にすべきことって何かわかるか?」

「こういうった事件? 幽霊退治のことでござるか?」

「幽霊退治だけに限らず、だ。人の生き死にが関わってるもの全般だな」

「やはり被害者の人間関係とか……?」

でも、そもそもこの事件に被害者はいないでござる。というかそもそも事件かどうかも怪しいほど。

確かに生き死には関わってるでござるが、拙者達が探すべきは死人の方でござるし。

なんとか頭を回して答えたでござるが、シーラ殿はふるふると首を横に振ってみせる。あつ、金髪からいい匂いが。

「20点。確かに必要だが、最初ではないな」

「いつの間にテストになったでござるか」

「おっと悪い。一応協会のひよつこ共に教える立場でもあるから、つい癖だな。——正解は、文化体系を調べるだ」

「この国のでござるか?」

首肯を返されたでござる。

でも、それなら昨日聞き込みしたおかげである程度は知ってるでござるよ。

「この国は死者を尊ぶでござる。祝福に始まり祝福に終わる人生こそ至高という考えでござった」

「そうだな。それはあたしも知ってる。じゃあ、この国の歴史に関してはどうだ?」

「歴史?」

「この国の成り立ち。文化ってのは歴史から生まれるものだろ?」

「それは……」

思わず口籠ってしまったでござる。人に聞くことだけしか拙者の頭には無かったでござるからな。

言葉に詰まった拙者を見て、シーラ殿は意外にも堂に入った説明を披露してくれる。

「まずこの国を知る上で押さえておかなきゃならねえのは、あの墓地だ。この国の名前はさすがに分かるよな?」

「愛悼の霊園でござる」

「それは元々あの墓地の名前なんだよ」

「墓地の名前が国に奪われたでござるか？」

「奪われたって言う用語と語弊があるな。そもそもあの墓地は、この国の中に作られたわけじゃない」

「……どういふことでござるか？」

「最初に墓地があつて、その後国が出来たつてことだ。もう千年近く前の話だな」

むむむ？ それは常識的に考えてありえないような……。

いまいち理解の追いついていない拙者を見て、シーラ殿はもう少し噛み砕いた方がいいかと呟き、続けるでござる。

「あの墓地はな、旅の途中で死んだ旅人の為に作られたのが起源なんだ」

「ほう」

「で、その旅人にも家族がいるわけだろ？ 当然墓参りがしたくなる」

「道理でござるな」

「だけど旅の途中で死んだから、生家からだいぶ距離がある。墓参りするのにも一苦労なわけだ。ここまで言えば分かるだろ？」

「つまりこの国は、道半ばで死んだ旅人の家族がお墓参りしやすいように引越してきたのが始まりと？」

「そういうこと」

唇の端を上げ、シーラ殿は拙者の頭をポン。まるで弟子を褒めるように撫でてくるでござる。

……なるほど。だから死んだ者を尊ぶのでござるな。幽霊をありがたがるのも、死に目に会えなかった家族に再会できるから。

うん？ でもそれだと……

「おかしいでござるよ」

「——気付いたか？」

昨日感じた違和感がさらに浮き彫りになってきたでござる。

「幽霊をありがたがる国民性なら、幽霊退治なんて依頼は尚更ありえないでござる」

「ああ。だが今の話は千年前の話だ。千年経った今、見ての通りここ

は国になつてゐる。人が大勢集まる国にな」

まるで教え導くように、シーラ殿は人差し指を立てた。

「突然だが、人が死ぬ時つてのはどんな時だ？」

「本当に突然でござるな……」

「いいから答えてみ？」

「えつと……天寿を全うした大往生。家族に囲まれて惜しまれながら逝くのが一般的には幸せでござるな。そこから連想されるのだと病死もでござるか。あとはまあ、この国の始まりのように事故死もあるでござる」

人の死因を指折り数えていると、なんだか鬱になりそうでござるな……。気分が沈むでござる。

しかしそんな拙者に、シーラ殿はさらに沈むようなことを一言。

「じゃあ第三者が関わるものは？」

「……っ……!?」

ここまで言われれば、頭の悪い拙者にもようやく理解できたでござる。そして理解すると同時に、ゾワリと背筋が凍る。

第三者が関わる死因。事故死でも病死でもなく、さらに幽霊が関わりそうな死因など1つしかないでござる。

拙者の国では、幽霊が発する常套句にこんなものがあるでござるよ。

——恨めしや。

ならば導き出される結論は……

「——殺人」

この事件は、人殺しが関わっているでござるか……?」

拙者が不安げに上目遣いで見上げると、シーラ殿はどこからともなく新聞紙を取り出し、広げて渡してきたでござる。この見出しを読めという意味でござろう。

『一家殺害。穏やかに暮らす3人の家族を襲った惨劇』……この事件が関わっている?」

「十中八九な。それとこれも見てみな」

さらにもう一枚。別の新聞紙を渡されたでござる。そこには1人

の男性の写真付きで大きな見出しがあったでござる。

『惨劇の犯人逮捕。疑いの余地無く、すぐさま極刑へ』。おろ？ 犯人捕まってるでござるよ。極刑つてことは死刑でござるか？」

「意外か？」

「それはまあ」

死者を尊ぶ国でござる。わざわざ殺して極悪人を尊い存在に祭り上げるのも変な話だな、と思うのは当然でござるよ。

しかしシーラ殿は首をふりふり。

「悪人も死んで償うことで同じ人となる、つてのが死刑の理由だそう。簡単に言えば、刑罰の死じゃなくて贖罪の死つてことだな」

「それって同じなのでは？」

「この国にとつては違うんだろうよ」

長話で口が疲れたのか、シーラ殿は煙管を取り出して吹かし始めたでござる。くさい……。

「んでんで、どうしてこの事件が幽霊と関係があるの？」

「依頼書の日付とその事件の日付を見比べてみな」

「ふむ……あつ。ほぼ同じ頃でござる」

依頼書の紙束に記された日付は、この依頼が出された日。極刑に処したと報じられている新聞紙の3日後でござった。

「それ以外でここ最近この国では大きな事件は起きてない。まあ確定だな」

「……………」

「なんだよ。急に黙って」

「ここまで理路整然とした推理を聞かされ、拙者はポカンと口を開けてシーラ殿の端正な顔を見上げるしかないでござる。

「……………」

もうそれしか感想が浮かばぬ。

幽霊だけに囚われていた拙者と違い、シーラ殿はこの国の歴史まで視野を広げ、あらゆる視点と観点からこの事件の全容を推理していたでござる。しかもたった一晩のうちに。

逆立ちしても真似できないでござるよ。拙者のお目目は彼女への

尊敬でキラキラでござる。

すると、シーラ殿は目を逸らして解説してくれる。もしかして照れてる？

「ただの慣れだよ。この仕事やってりゃ誰でもできるようになるし、そもそも事前に渡された情報量がお前とは違うんだ」

「いやでも、それにしたってここまで辿り着くのにたったの一晚でござるよ？」

「この国に来るまでに推論をいくつか立ててたからな。あとは協会にある資料やら軽い聞き込みやらで組み立てていくだけ。パズルみたいなもんだよ」

「聞き込みなんていつしたでござるか？」

「昨晚のレストラン。お前と別れた後でな。レストランは聞き込みに最適なんだよ。待ってれば勝手に人が出入りするし、情報を洩られても酒奢って酔わせちまえば大体口を滑らすからな」

なるほど。そういう意図もあってあの時は居座ったのでござるな。てつきり一人酒に溺れる為かと思っただでござる。

「んま、今回の件でポイントになるのはあの墓地だ。あそこの管理人と顔見知りなんだよな？ 顔繋ぎ頼むわ」

「承知したでござる」

というわけで拙者はシーラ殿と共に墓地へ。今日も今日とて、この墓地は大変な賑わいを見せているでござる。

「噂には聞いてたが、実際見ると凄まじい光景だな」

「墓地で普通に露店が商売してる様は度肝ぶち抜かれたでござるよ」

昨日の拙者と同じようにドン引きするシーラ殿。

ていうか煙管は吹かしたままで良いのでござろうか…とも思っただでござるが、よくよく考えたら露店の食品の匂いが充満してるので問題なからうて。

拙者はポタージュを販売している露店に熱い視線を送りつつ、頭上で旋回してる鳥さんに手をふりふり。

「何やってんだ？」

「あの鳥さん、マリーメア殿の使い魔でござるよ。20匹くらいの

使い魔でこの墓地を見張ってるそうでござる」

「ふーん」

何か考え事をするように一瞬目を細めたシーラ殿は、拙者がポタージュ屋さんを物欲しそうな目で見ていることに気付き、チャリン。銅貨を取り出して握らせてきたでござる。

これはもしや…？

「寒いからな。そのマリーメイアっていう魔女の分も合わせて3人分買ってきてくれ」

「よろしいのでござるか！」

「聞き込みは人の善意が頼りなんだよ。…：相手にもよるが」

最後にポソリと呟かれた一言は聞かなかったことにして、拙者はウキウキでポタージュ屋さんへと走って行くでござる。

おっ！ ちょうど3種類あるでござるよ。カボチャ、ジャガイモ、コーン。ちよつとはしたないけど、1つずつ買って3人で回し飲みすれば全種類楽しめるでござる！

腕に蓋付きの紙コップを3つ抱えて戻ると、既にマリーメイア殿が来ていたのでござる。

「おはようございます、モミジさん」

「おはようでございまする！ マリーメイア殿、カボチャとジャガイモとコーン、どれがいいでござるか？」

「あら、よろしいのですか？ ではカボチャを」

「はい！ シーラ殿が奢ってくれたでござるよ」

両手が塞がってるので視線でシーラ殿を紹介すると、彼女は一歩前へ。

「魔法統括協会所属で夜闇の魔女、シーラです。ちよつと話を聞かせてもらえますか？」

「おや？ 髪型がモミジさんと一緒…：もしやお母様ですか？」

「いや違うわ」

「ふふ。冗談です」

口元に手を当ててお上品に笑う姿はまさに聖女。実際は魔女だけど、でも聖女！

あと笑うたびにお胸がポヨンポヨンでござる。好き。

「ポタージユご馳走さまです。お話というのは、昨日モミジさんが言っていた幽霊のことです?」

「はい」

「とは言われましたも、あいにくと昨日彼女に話した以上のことはわたくしも知らないのですわ」

「まあそうでしょうね。おい、さっきの新聞貸してくれ」

マリーメリア殿のお胸とちよつとやさぐれながらも敬語を使うシーラ殿に驚いている拙者は、慌てて袖の中から新聞紙を取り出して渡す。

「こちらの事件についてはどうです?」

「これは……痛ましい事件でしたね。多くの人の心に傷が残りましたわ。ですが、この事件は解決済みですよ?」

「まーそうなんですがね。ちよつと捜査したところ、この事件と今探してる幽霊はどうにも関係があるようなんですよ」

「……なるほど。そういつたことであれば、微力ながらお力添えをさせていただきますわ」

マリーメリア殿は胸に手を当てて、一度深呼吸。

見出しだけでも凄惨と分かる事件の詳細を語るのでござる。いくら他人事とはいえ、この国を愛していると言う彼女からすれば辛いものでござろうな。

それはシーラ殿にも察せられているようで、拙者達は急かすことなく語り出すのを静かに待つでござる。

「あの事件の被害者……3名は仲の良い理想的な家族でした。特にお金に不自由があったわけではなく、かと言って毎日遊んで暮らせるほどでは無い、とても普通の誰もが羨むようなご家庭ですわ。その3名のご遺体もこちらの墓地に埋葬させていただきました。どうやら息子さんには交際されていた女性がいたようで、ほぼ毎日夕方頃に墓前へと足を運んでおられるのを目にします」

3人家族……拙者と同じでござるな。内弟子もたくさん居たから、あまりそのようには感じなかったでござるが。

「わたくし個人との交流があつたわけでは無いので、被害者の方達で知っていることはこのくらいしかありません」

「なるほど。加害者の方は？」

「加害者……ですか？」

「ええ」

怪訝な表情を浮かべつつも、マリーメア殿は求められた通りに口を動かす。

「殺人を犯したのはそちらの新聞にも記載されている男性です。動機は金銭類で、強盗目的で被害者宅に押し入ったそうですわ。確か父親が幼い頃に事故で亡くなっていて、お母様との2人暮らしでしたね。あつ、今は極刑に処されましたので、1人ということになります。男性のご遺体もこちらの墓地に埋葬されていますわ」

「被害者と同じ墓地に……でござるか？」

「この国はここしか墓地がありませんから。墓石はできるだけ離すようにしましたが」

確かにこれだけ広大な墓地であれば、その処置で十分なのでござろう。

そもそも、この事件の詳細を聞く限り文句を言う存在がいなのでござるな。

「なるほど、ありがとうございます。ちなみにそのお墓つてのはどこにありますっ？」

「被害者の方ですか？」

「いや——両方です」

シーラ殿は煙管を口から離し、すっかり冷めたポタージュを一口飲んでござる。

一旦昼食を挟み、まず最初に拙者達が向かったのは加害者側のお墓でござった。

「まさかとは思うでござるが、墓を暴くわけではないでござるよな？」

「あたりまえだろ。そんな非常識なことするように見えるか？」

「まあわりと」

「ぶっ飛ばすぞ」

見た目で判断するのは良くないと昨晚学んだでござるが、意外なほど職務に忠実なシーラ殿を見てるとやりかねないと思ってしまうでござるよ。

しかし、相変わらず煙を吸って吐いてしている彼女の目はどこか憂鬱そうでござる。ポタージュが冷めてたからでござろうか。話中に夢中で渡し忘れていたでござるよ。ごめんね。

「……もしあたしの推測が正しければ、あのマリーメイアつつー魔女は幽霊の件に一枚噛んでる」

「……っ……どういうことでござる!?？」

「その証拠を今から確認するんだよ」

確証を得るまでは教えない、ということにござるか。

シーラ殿には、この事件の何が見えているのでござろう……？ 先

ほどから軽口こそ叩けど、拙者と目を合わせてくれないでござる。

「……シーラ殿、もしかして怒ってるでござるっ？」

「あ？ 別にこのくらいでいちいち怒らねえよ」

「いや、今ではなく」

「じゃあなんでだよ」

「もしかしたら、拙者の調査力がゴミ過ぎて愛想尽かしちやつたのかな……っ」

目を合わせるの怖いでござるが、でもそれも失礼な気がして、結果上目遣いで横に並ぶ彼女をチラチラと見る拙者。

どうやら拙者自身、シーラ殿に対してかなり信頼を寄せているようでござるな。

彼女の答えにビクビク身構えていると、ポンと頭に冷たい手を乗せられたでござる。

「別にそんなんじゃねえよ。ちよつと考える事が多くてな」

「本当でござるか……？」

「本当でござるよ」

ちよつと戯けた答えに、一安心でござる。ニカツとヤニ汚れ1つな

い綺麗な歯を見せて笑いかけられ、拙者は乗せられた手を温めるように包みこむ。

「これはフラグ立ったでござるか？」

「お前はほんつとにそればかりだなー！」

「えへへ」

これはまあ、なんというか……拙者なりの照れ隠しでござる。

それが伝わっているらしく、わしゃわしゃと髪をかき乱されたでござる。おいマジか。

「もう！ ポニーテール…じゃなくてちょんまげでそれやられると毛根が痛いでござるよ」

「だからやったんだよ」

「もう！」

むすつと抗議の目で見上げながら一度解き、結び直す。長いせいで結び直すの結構手間でござるよ。

女子として携帯している櫛を駆使して直していると、シーラ殿が立ち止まったでござる。それにつられて拙者も足を止める。

「あれだな。加害者の墓は」

「えらく侘しいところでござるな。心なしか他よりも墓石の間隔が広いように見えるでござるよ」

「なんだかんだで殺人犯の墓だからな。それくらいの配慮はするんだろ。ちよつと待つぞ」

「何をでござる？」

「この時間に来るであろう人さ。昨日お前がここに来た時もちょうど今くらいの時間だろ？」

確かにお昼時を少し過ぎたあたりでござるが…。

あつ、そういえばこのくらいの時間に毎日来客があるってマリーメイア殿が言ってたでござるな。そのせいであの背徳お姉さんとお茶ができなかったでござる。ぐぬぬ……。

拙者はシーラ殿に髪を直してもらいながら雑談をしつつ、その時を待つでござる。

そして、待ち人來たり。どこか憔悴したような、生気を感じられな

い中年のご婦人がヨタヨタと現れたでござる。

一瞬あの方が幽霊かとも思ったで、どうも違うようでござるな。猫背でフードを目深に被っていて、周囲からの視線に怯えているよう。

その女性は、加害者のお墓の前で立ち止まったでござる。

「加害者の母親でござろうか」

「だろいな」

「あの方に話を聞くでござるか？」

「いや。まあ見てろよ」

シーラ殿の意味深な言葉に頷き、お墓に黙祷を捧げるご婦人を眺めること数分。

墓石の後ろから、まるでずっとそこに居たかのように青年が現れたでござる。

「……………？」

「ビンゴ」

その青年は——極刑に処されたはずの事件の犯人。あのご婦人の息子であり、一家3人を殺した殺人犯でござる。

拙者はマジモンの幽霊にビビりながらもシーラ殿の袖を引き、新聞紙を出してもらおう。

……………間違いないでござる。新聞の写真とまったく同じ顔。

ご婦人は涙を流しながら青年を抱きしめ、青年もご婦人の背中へと手を回す。そこには確かな親子愛を感じるが、それは同時に死人と生者の交流というあつてはならない光景でござる。

驚きと恐怖に言葉を失う拙者の頭を、シーラ殿はペシッと軽く叩かれたでござる。ちよつと痛い。

「よし。帰るぞ」

「えっ……………あのまま放置でござるか？ 退治しないでござるか？」

「あれは幽霊じゃねーよ」

「おろろ？」

意味が分からないでござる。幽霊は別にいるってことでござるか？

しかし、シーラ殿は追及を躲すように出口へと歩き出してしまい、

慌てて小走りで横に並ぶ。

「あれが幽霊じゃないとはどういう事でござる?」

「あれはマリーメイアの使い魔だな」

「何故彼女のものだと?」

「あいつは使い魔の使役が得意なんだろう?」

「それだけで!?!」

あまりにも薄い根拠なのでは? そんな視線をぶつけると、シーラ殿は煙管を一吸い。そうして人差し指を空に向けたでござる。

「お空が何か?」

「違う。あの鳥だ」

「あれはマリーメイア殿の使い魔でござるよ」

「あとはその蝶と時々うろちよろして猫も使い魔だな」

「……それがどうかしたでござるか?」

要領を得ない説明にむすつと頬を膨らますと、彼女は煙を吐き出して続ける。

「お前、昨日マリーメイアに幽霊のことを聞いて、なんて答えられたの
か思い出してみろ」

「ふむ……」

—— うくん……幽霊ですか。この国ならありそうな話ですが、
あいにくと存じてはおりませんねえ。

「——?!?!」

「仮にあれが本物の幽霊だとして、なんで24時間この墓を使い魔で
監視してる魔女が知らないんだ? 事件の概要をあれだけスラスラ
言えたのに、加害者の顔を知らなかったなんてありえないだろう?」

「……でも、あれは人間の姿でござった」

「昨晚、レストランでイレイナと一緒に解決した事件の話をしただろ
? その中に、狼の使い魔に変えられた女の子の話もしたはずだぜ」
「使い魔はどんな姿にでも変えられると」

「そういうこと。20匹以上も同時に使い魔を使役できる魔女なら朝
飯前だろうな」

首を締められているような気持ちでござる。この国を愛している

と言ったマリーメア殿が、そんな……。

「……これから彼女を捕まえるでござるか？」

「いや、それは明日にしようかと考えてる。急にマリーメアしよつ引いたら、今日ここにいる人達が困るだろ」

「……………」

「それに、ちよつとばかし用事ができちまったからな。あたしは一旦協会に戻るが、お前は どうする？」

「拙者は…ちよつと気持ちの整理をつけるでござるよ」

「そうか。じゃあ今日は解散だな」

言葉すら発するのが難しいほど胸が締めつけられている拙者を、シーラ殿は気遣うように覗き込んでくるでござる。

「大丈夫か？」

「……………」

目を合わせることができず、唇を噛んで頷くことしかできない。

「明日、協会の前で9時まで待ってる。来たいなら来い」

「……………承知」

パシツと。シーラ殿は拙者の手に3枚ほど銀貨を握らせてきたでござる。少し良い宿に泊まって冷静に考えろってことでござるか。

しかし、感謝を告げる精神状態にないので首肯を返すだけで精一杯。

そんな拙者に、シーラ殿は一言。

「この依頼、もしかしたらあたし達が思っている以上に複雑かもしれないぜ」

それだけ言い残し、協会へと歩いて行ったでござる。

愛悼の霊園 花

いつも泊まるような安宿の物とは一線を画すフカフカベッドで、拙者を体を起こしたでござる。

「寒っ……」

そしてすぐさまベッドへ戻る。いやめっちゃ寒いでござるよ何これ!!?

ポカポカの羽毛布団を体に巻きつけて部屋の窓から外を見ると、答えは明白。銀世界が広がっているでござる。つまり雪。曇り空から雪の積もった地面まで、街は真っ白けっけでござるよ。

「はあ……」

実家にいた頃ならばしやぎ回ったであろうその景色を見ても、拙者の口からは重いため息しか出ない。うわっ、ため息真っ白でござる。別に雪が嫌いなわけではないでござる。ただ、昨日からの考え事で憂鬱な気分が抜けないだけでござる。

(あのマリーメア殿が……)

頭を過るのは、修道服に三角帽子というミスマッチな格好が不思議と似合う魔女さん。おっとりとして、だけど案外冗談好きなどころがあるお茶目さんでござった。

たった2日、数分ずつ言葉を交わしただけでござるが、それでも拙者はあの人に好感を抱いていたでござる。

墓地で休日を満喫する人々を眺めるあの目。ただただ慈愛に満ちてて、まるでママ上のようにでござった。無条件で抱き着きたくなるような優しさを称えてござった。

そんな彼女を逮捕する。その手伝いを自分もする。

確かにこの仕事を受けたのも、自身の領分で無いところまで首を突っ込んだのも拙者でござる。だけどそれでも……、

「……気が進まないでござるよ」

小さな呟きは、白い息となって天井へ流れて行くでござる。

雪で覆われた開園前の墓地は、芸術品のような墓石も相まって非日常のような空間でござった。

雪の白。墓石の暗い灰色。その2色に囲まれて拙者とシーラ殿はマリーメリア殿と向き合っているでござる。

「今回の幽霊退治。あんたが幽霊を生み出していたんだろ？」

「……やはり、バレてしまいましたか」

「隠す気もなかったくせに」

昨日、拙者とシーラ殿が加害者側の墓を尋ねた後もあの幽霊……いや、使い魔は出現した。隠す気ならばシーラ殿がこの国を出るまで息を潜ませた方が得策なのに、それをしなかったでござる。

「何故でござる？ 何故、あのような事をしたでござるか？」

「放っておけなかったのですよ」

「でも、あのご婦人は殺人犯の母親でござる」

「だから嘆き悲しむあの姿を見ないふりしろと？」

「……………」

間髪入れず答えを返す彼女の目に迷いはない。自身の行った所業に恥じるところなど無いと、強く物語っているでござる。

「確かにあの方のご子息は許されない行いを働きました。彼の行いがこの国に沢山の悲しみを振り撒いたのも事実です。下された罰も妥当なものだと思います」

目を閉じて語るマリーメリア殿の言葉を遮らず、拙者とシーラ殿は静かに耳を傾けるでござる。きつとこれは、拙者のこれからの行動を決める大事なことから。

「それでも……やはり人の子だったのです。彼の誕生を祝福し、とびきりの愛情を与えて育てた方がいました。わたくしは知っています。この墓地の管理人になってから、ずっとこの国を見てきたのですから。笑顔も涙も、息子を亡くしたあの人のものは他の人と変わらないものでしたわ」

「……………」

「誰もあの方の味方になってくれませんでしたわ。だったら、わたくしが味方になるしかないではありませんか。この国の誰よりも、あの

方の悲しむ姿を知っているわたくしが」

語り終わったことを知らせるよう静かに目を開いたマリーメリア殿は、シーラ殿へ両手を揃えて突き出してくる。

「自分のしたことは理解しております。まさかここまで大事になるとは思わなかったのですが、とはいえない逃げ逃れる気はありません」

「ああ。協会まで来てもらうぞ」

「——待ってほしいでござる」

いつの間にか杖を握り、マリーメリア殿へと近づくシーラ殿を拙者は通せんぼ。

左手の親指で鐙を押し、鯉口を切っておく。

「……なんのつもりだ？」

「拙者は、マリーメリア殿を捕らえることに反対でござる」

「別に捕まえるつもりはないさ。単に協会までご同行願うだけだよ」

「それを捕らえると言うのでござろう」

この国に来て、シーラ殿には世話になったでござる。食事を奢ってもらい、昨日は宿代まで出してくれた。イレイナ殿との共通の知り合いと言うだけで、出来れば手荒な手段は取りたくない相手でござる。

マリーメリア殿の話聞いて真っ先に頭を過つたのは、今も港町で騎士団長として慣れない仕事に四苦八苦してあるう元門兵の姿。

父親の博物館を見てもらいたくて門兵にまでなったのに、その父親にしよーもない理由で裏切られた加害者の家族。

同僚からも疎まれ職場では一人きりで、味方になってくれる人もいなかった。それでも事態を収束する為に来るかも分からない誰かを待ち続けた拙者の友人でござる。

彼と、マリーメリア殿が手を差し伸べたご婦人は似ている。拙者もあのご婦人の助けになりたいと思ってしまうたでござるよ。

「一人でなに盛り上がってんのか知らねーけど、要はあたしの邪魔をするってことか？」

「然り。もし手を引いてくれるのであれば、丸く収まるでござるが」

「悪いがこつちも一応仕事なんぞな。やるべき事はやらなきやならねーんだよ」

煙管に葉を入れ、火をつけて紫煙を燻らせるシーラ殿は杖をこちらに向けている。邪魔するなら武力を以って排除するという意思表示でござるな。……残念でござる。

右手で刀の束を握り、抜刀。鈍色の刃を氷点下の空気に晒す。

(カッコつけたけど、正直勝てる気がしないでござるな)

魔女見習いですらない拙者が魔女を打ち負かす為の主な条件は2つ。

1つ。障害物の多い室内であること。

2つ。相手が初見であること。

この2つのどちらかが欠けるだけで、拙者の勝率は著しく下がるでござる。

彼女は初見の相手。それはクリア。

しかし、ここは障害物臺石が多いとはいえ屋外。加えて、シーラ殿は協会でも歴戦の強者。不届き千万な魔女を多く下してきた実力者であることは想像に難くないでござる。

(でも、自分の意見を通すというのは困難が付き纏うものでござるか
らな)

一瞬目を瞑り、開く。すると、まるでそれを見計らったかのように雲間からお日様が墓地を照らし始めたでござる。

拙者は握る刀の腹で反射させた陽光の角度を徐々に調整し：調整し……、

「……………」

——今！ 反射光によってシーラ殿が一瞬左目を瞑った。その隙を見逃さず、ダツ！ 拙者は彼女の左側へと弧を描く軌道で走り込んでいくでござる。

過重力を併用し、通常の人間を遥かに超えた速度で編み上げブーツの足跡を雪に付けていく。魔女であるシーラ殿がどんな魔法で迎撃してきても良いように、油断なく目は彼女へ向けて。

「へえ。面白い使い方だな」

余裕の笑みを浮かべるシーラ殿は何度もバックステップを踏みながら杖を振るうでござる。その瞬間、彼女の前方に剣や槍、斧が多数

出現。刃先は全て拙者に向いてる。

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドツ！

まさに鉄の台風。拙者に向かって飛んでくる刃物の数々は、避けられることも想定されているらしく、時間差がある。

シーラ殿も拙者を殺すつもりまでは無いらしく、よく見れば刃引きされているでござるが、それでもあの速度の金属が1発でも当たったら即刻行動不能でござるよ！

1 発目の顔面を狙った剣は当然ブラフ。首を傾けて避ける。

次の右肩と左腿を同時に潰そうとする2本の槍は前宙を切つて躲し、それすら読んで飛んでくる斧は刀で弾き飛ばす。

拙者が知覚できたのはここまででござる。あとは勘と運と気合と気力と元気でなんとか捌くしかない。でも足は止めちやダメでござる。その場に縫い止められれば、どんな魔法が飛んで来るか分からぬ。

「ちよつ…、あつぶつ……ない！」

飛来する刀剣類の密度が上がり、流石に当初の速度で走っていると相対速度的に反応が間に合わなくなってきたでござる。拙者はシーラ殿へ詰め寄ることは諦めずとも一旦速度を落とし、側宙、前宙、片手側転を駆使してなんとか避け続ける。

だが、状況は既にピンチでござる。というのも、拙者が避けたり弾いたりした刀剣類は乱立している墓石を掠めもしない。シーラ殿がそうなるように射出してるでござる。つまり余裕綽々でござるよ。コンチクショー！

(罅が開かないでござるな……！)

ほんの一瞬。コンマ1秒にも満たない時間だけ彼我の距離を測ることに集中。その結果分かったのは、彼女との距離が約36歩。

さらに未だシーラ殿からこちらに向けて飛んでくる刀剣類は空中にあるだけで52本。彼女の前方で発射の時を待っているのは13本。

(これだけあれば……いけるでござる！)

拙者は弧を描く軌道から真っ直ぐシーラ殿へ向かう。飛んでくる

刃物は気にしないでござる。それは今、拙者の足場。

「ほう。やるな」

こちらを賞賛する余裕を見せているシーラ殿へ、拙者は52本の剣や槍、斧の中から36本を足場にして向かうでござる。

過重力を使っても尚できるか不安でござったが、やろうと思えばできるものでござるな。

「ほら」

「ぐっ……」

自画自賛の時間は与えてもらえない。シーラ殿は待機させてあつた13本を発射。もはや逃げ道すらない拙者には、真正面からこれらを対処するしかないでござる。

先ほど選択した36本：いや、既に5歩歩いたからあと31本。その中から飛来する13本を避けられるように選び直す。

もはや足だけで動いていれば直撃は免れない。拙者は思考するうちに28歩まで迫ったところで、ここでも側宙、前宙、槍に手をついて片手側転を交えた変態軌道でなんとか避け続けるでござるが：しくじった！

31本目の足場の位置に来たら、斧に鎖骨を砕かれることが直前になって判明したでござる。

拙者は慌てて腰から刀の鞘を抜き、ポイ。前方上側に投げて、さらに自身もその方向へジャンプするでござる。

「やっと辿り着いたでござるな」

自分の投げた鞘を新しい足場に、過重力を使って上下逆さまの姿勢になった拙者は、こちらを静かに見据えるシーラ殿へ刀を構えながら語り掛ける。

左手は開いて狙いを定めるように前へ。右手の刀は切先を真っ直ぐ向けて引く。まるで見えない弓に矢を番えるような構えでござる。

その姿勢のまま、ダン！ 上からと見せかけてさらに地面に着地し、深い踏み込みと共に斜め下から正確無比の八連突きを放つ。狙いは下から両膝、両股関節、両肘、両肩。

敵を生捕にする為にパピ上が編み出した、当たれば龍さえ捕らえる

という技——龍捕りゆうほでござる。何故龍が人間と同じ構造をしてる前提なのか、というツツコミはこの際無視。

「まだまだだな」

「ちっ……」

一撃目が届く寸前、シーラ殿が杖を振って魔法を使ってきたでござる。拙者の攻撃を阻むように、下から水の壁が出現。切先が水壁を掠めた瞬間、刀が上に弾き飛ばされそうになったことからかなりの水圧も内包してるとござるな。

(……っ……?)

後退か。前進か。一瞬次の行動を迷った時、水壁の奥でシーラ殿がこちらに杖を向けていることに気付いたでござる。

次の瞬間——ジュウワアアアアアアアアアア!

杖から放たれた炎が水壁に当たり、拙者に向けて高温の水蒸気が浴びせかけられたでござる。熱っつい!

思わず過重力で後退する拙者。それを追撃せず見るだけのシーラ殿。

さらに2人の間では、すぐさま凍った水蒸気が太陽光を反射してキラキラ光っているでござる。この幻想的な光景は……ダイヤモンドダスト。

出来ればもつと穏やかな状況で見たかったものでござるな。

「うう……ビショビショでござる……」

「水も滴る良い女になったんじゃねーの?」

「やかましいでござる」

水蒸気のせいですぶ濡れになった拙者は、ペタペタ貼りついてくる衣服の不快感もあってシーラ殿を睨む。

(やられたでござるな)

拙者の服装はいつも袴と着物にローブという全体的にヒラヒラとしたものでござる。これらは布面積が通常の服より広いため、濡れるとだいぶ重くなる。かなり戦い難くなったでござるよ……!

「……!」

「おっと」

拙者に意識を向けたところを好機と見て、先ほど投げた拙者にとってはほうきとしても使える鞆で後ろから殴り倒そうとするでござるが、平然と避けられたでござる。

さらに拙者自身も踏み込み、今度はこちらが波状攻撃。ダイヤモンドダストを突つ切つて刀を振りかぶると、シーラ殿はポイ。なにやら白い粉末が入った瓶を投げてきたでござる。

(毒物…？ いや、魔法薬でござるか？)

少なくともこのタイミングで投げられた粉末が拙者に良いように働くとは考えられず、濡れたローブを脱いでバサア！ 目の前に広げて、粉末の瓶を防ぐと同時に視線を遮る。

さらに濡れたローブの分も軽くなり、拙者は過重力で手近な墓石へと飛ぶでござる。

バチ当たりを承知でさらに別の墓石に飛び、シーラ殿の後ろを取る。そこで鞆を手元に呼び寄せ、左手でキャッチ。右手に刀、左手に鞆の変則二刀流でシーラ殿に迫るでござる。

「おっ……！」

加えてシーラ殿を過重力で逃げられないように上から押さえつける。急に魔法での抵抗が無くなったのは不可解でござるが、彼女の鎮圧が最優先でござる。

「ハッ！」

短い呼吸と共に双手を振るう。右の峰打ちで二の腕、左の鞆打ちで腿を狙うでござるよ。

——ギンツ！ カン！

しかし、シーラ殿が攻撃の軌道上に剣を召喚して盾に。金属音を響かせるだけで、防がれたでござる。

(だったら……！)

拙者は彼女の周囲をグルグル回りながら打ち込みを続ける。膝、脇腹、首、肩甲骨、脛、鎖骨、前腕、手首……とにかく1発でも当てれば、その隙を突いて食い破れるはず。

だがその1発が、どうしても入らないでござるよ……！

まるで全身隈なく目があるかのように、拙者が打ち込む変則二刀の

軌道上に剣は必ず現れ阻まれる。何度繰り返しても、シーラ殿は涼しい顔で杖を振るだけ。

「はあ…はあ……」

「終わりでいいか？」

パリン！ 同じように召喚された剣。その上に先ほど投げられた粉末の瓶も召喚され、拙者の刀と盾になった剣に挟まれて割れた。ま
ずい！

慌てて口と鼻を袖で塞ぐでござるが、息切れを起こしていたせいで
少量吸ってしまったでござる。これは……しよっぱい？ 塩？

「——もう満足しただろ？」

口の中の塩味に気を取られたせいで、こちらに向けられている杖に
一瞬反応が遅れた。バチバチバチイと音を鳴らして紫電が放たれて
いたでござる。

濡れた服…塩を浴びた……やばっ！

下がったり横に飛んでも追撃されれば終わり。そう考えた拙者は、
敢えてシーラ殿に向かって飛ぶ。体を捻った背面飛びでシーラ殿を
飛び越え、肩に一閃。当たり前のように剣で防がれたでござる。

着地からすかさず攻撃を再開しようとすると、ズン！ シーラ殿の
長い足による振り返り様のヤクザキックが拙者の胸を捉え、吹っ飛ば
される。

「う……けほっ……」

咄嗟に後ろへ飛んで衝撃を殺したことで、おっぱいによってなんと
か行動不能になるのは避けられたでござる。おっぱいデカくて良
かったでござる！ ロリ巨乳で良かったでござる！

咳き込みつつおっぱいに感謝していると、ガクン。唐突に膝を着か
される。

「…？ ……？」

何かの魔法かと一瞬疑ったでござるが…違う。動きを止めて分
かったでござるが——寒いでござるよ。猛烈に。

「案外時間掛かったな。あんだだけ動き回ってればもう少し早くなると

思ったんだが」

「……うっ……くうう……」

「無理すんな。低体温症だ」

「なんで……？」

「びしょ濡れのままこの寒さの中にいたら、そうなのは当たり前だろ」

「……っ……？」

「やられた……！ あの水蒸気は拙者の服を濡らすと同時に、そういった狙いもあつたでござるか？！」

しかも、ダイヤモンドダストが発生するほど……つまり氷点下10度を下回る気温の中を、濡れた服のまま過重力で飛び回れば体が冷える速度は格段に早くなるでござる。ちようど濡らしたタオルを氷点下の中で振り回すと、すぐ凍ってしまうように。

確かに、実力の劣る者が勝る者に勝利しようとするならば、持久戦になることは必至。あの水蒸気で拙者を濡らしたのは、それを避けるためでもあつたのでござるな。

一度自覚してしまうと、体の不調はすぐに表面化してくるでござる。低体温症のせいで上手く立ち上がれない拙者へ、煙管を吹かしながらシーラ殿は語りかけてくる。

「もうやめろ。そろそろ手加減できなくなってきたぞ」

「けほっけほっ……嫌でござる。マリーメア殿は、何も悪いことしてないでござるよ」

「……………」

拙者は戦闘に巻き込まれないよう距離を取りながらもこちらを心配そうに見守っているマリーメア殿へ、安心させるように笑いかけ続ける。

「誰もが、辛いことに立ち向かえるほど強いわけではござらん。息子を亡くして嘆き悲しむご婦人を支えようとしたマリーメア殿が捕まるなんて、そんなのおかしいでござるよー」

「だから捕まえるわけじゃないって……」

「誤魔化されないで……ござるよー」

刀を支えにして無理矢理立ち上がる。低体温症を発症している以上、時間はかけられないでござるよ。

このお喋りさえ、シーラ殿の狙いのうちである可能性もあるでござるからな。

拙者は刀を左手の鞘に納め、左腰に——抜刀の構え。

「これで終わりにするでござる」

狙うのは杖。あれさえ斬ってしまったえば、シーラ殿はただのスタイル抜群金髪美人になるでござる。そうなれば刀を持つてる拙者が優位になるのは確實。

正直なところ、この技の成功率は五分五分。しかもそれは自主練の時であり、この実戦の緊張感の中であればさらに下がるでござろう。だが、もうシーラ殿を打ち倒すにはこれしかないでござる。

呼吸は3回。鼻から吸って口から吐く。雪で覆われた地面を踏みしめ……いざ！

——スツ……と。拙者は右側に踏み込む動きで左側へ走り込む。

パピ上が編み出した対中距離戦の歩法——かみだま神騙し。体の動きと実際の移動が明らかに噛み合わず、相手を惑わす歩法でござる。極めれば神さえ騙すという意味を込めて、無駄に壮大な名前が付けられた歩みの奥義。

本来は体捌き、呼吸、死角、その他多くの要素を駆使して身体能力のみで行うものを、拙者は過重力を用いることで再現しているでござる。

「——っ!?」

初めてシーラ殿の表情が驚愕に染まる。それでも慌てず迎撃の構えを取るところには舌を巻くばかりでござる。

彼女まであと5歩というところまで迫った拙者は、バックステップの動きでさらに加速。左手親指で鯉口を切る。

そうして刀の間合いに捉えたところで——バチバチバチイ！雷撃がシーラ殿の両肩あたりからクロスを組むように拙者へと放たれる。

でも、そこに拙者はいない。

間合いに入った瞬間、拙者は音すら置き去りにする速さで片膝立ち。シーラ殿の腰の辺りまで屈んだ姿勢で急停止していたでござる。

「シィッ！」

そして、抜刀。加速からの急停止で生まれた慣性を全て乗せた鞘走りは彗星の如く。シーラ殿の握る杖目掛けて斬撃が奔る。

しかし、その軌道上には既に召喚された剣が5本。杖を守るように重なった状態で拙者の刀を阻む。

何度も防がれたから分かるでござる。魔法で生み出されているでござるが、この剣の強度は鑄造されたものに近い。それを5本も並べられれば、拙者の一撃などいとも容易く防がれてしまうでござるよ。

だったら——

「チエエスウトオオオオオオオオ!!」

元気いっぱい裂帛と共に既に抜かれた刀の刃線刃筋を寸分違わず微調整し、片手抜刀逆袈裟斬り。

キイイイイイイイイイイイイイイイイッ!!

鼓膜を劈くような甲高い音を墓地に響かせ、5本の剣と握られた杖をまとめて斬り捨てる。

突撃からの急停止で生まれた慣性を余すことなく乗せ、最後に片膝立ちになるほど姿勢を落として相手の攻撃を潜り抜けた先で放つ居合い一閃。

最速最大威力を誇る騙し打ちの最高傑作——パピ上が編み出したためちやくちや狡こすい技にして奥義は、見事拙者に勝利をもたらしたでござる。

「——虚像水月」
きよぞうすいげつ

自身が勝ったこと。そしてカツコつけること。2つの意味を持たせて技名をシーラ殿へ呟く。

「残念。お前の負けだ」

「ほえっ」

「ふう」

シーラ殿の言葉に驚いて顔を向けると、煙管の紫煙を吹きかけられたでござる。くっさ！ ヤニくさっ！

「ナイフを抜く時はセクシーに、てな」

ザクツ…とシャツの下から取り出したナイフを、同性である拙者すらドキッとしてしまうほどの、恋^{いと}しさとせつなさど心強さが籠ったセクシーな流し目で右腕へと突き刺してくる。

「くっ……」

まずいでござる。刺された場所は前腕手首寄りの内側……握力を司る筋肉でござるよ。

拙者の意に反して刀を離してしまう右腕。このままでは負けると判断した拙者は、左手一本の峰打ちでシーラ殿の側頭部を狙う。

十分に力が入らないとはいえ、当たれば昏倒は免れないはず。

しかし——バシッ！ 彼女の長い足が拙者の左手から刀を蹴り飛ばしたでござる。

「もう寝てろ」

さらに予備の杖を取り出したシーラ殿は、拙者の頭をコツン。杖で軽く叩かれる。

その瞬間…拙者の意識が……これは、…睡眠誘…導…の魔法…ご…ご…ざ…るか…？

時間は1日遡り、あたしがこの国に来てから2日目。モミジと別れて協会支部まで行った時のことだ。

「よお。お疲れ」

「お疲れ様です」

昨日と同じ事務員が帰り支度をしてたので、軽く手を上げて挨拶をする。

あたしはこう見えても挨拶はちゃんとする方だ。立派な大人だしな。

だが、あたしを見る事務員の目は外の空気に負けず劣らず冷たい。

「シーラ様、ここは禁煙ですよ。喫煙所はあちらです」

「喫煙所は煙草を吸う場所だろ？ これは煙管だからセーフ」

「アウトです」

立派な大人やっつてれば、嫌なことなんてたくさんある。それを一時でも忘れさせてくれるヤニを禁止するとか、ここの連中は正気なのか？

そんな疑問を込めて事務員を見やるが…あつ、ダメだな。これ吸い続けたら怒られるやつだわ。

「はあ…。それで、幽霊退治の進捗はいかがですか？」

「ああ。それなら幽霊出してる奴見つけたよ」

「おお！ さすがは夜闇の魔女ですね。たった1日でもうですか」

あたしの報告に、事務員は手を合わせて喜んでくれる。

「嬉しそうだな」

「もちろんです。この国の方々には、いつまでも心安らかに過ごしてもらいたいですからね」

「この国の方々…：…ね」

「あの、なにか？」

ジツと見つめられて、事務員はたじろいじまう。

確かにあたしの目つきは悪いが、本当にそれだけか？

「まったく苦労したぜ。昨晚あたしもサラツと聞き込みしたが、誰も知らなくてよ？ 結局足で捜査することになっちまった」

「それは本当にお疲れ様です。この国の民として、お礼申し上げます」

「ホント、聞く奴がことごとく知らないんだよ。まるで——誰も幽霊退治なんて望んでないみたいだ」

「…：…申し訳ありません。何が言いたいのでしょう？」

含みを持たせた言い方に、事務員は作り笑いで対応してくる。窓口対応の事務員らしい、プロ意識を感じさせる作り笑いだな。

「今日はもう退勤か？」

「ええ。寄るところがあるので、用があれば別の職員にお願いしたいんですけど」

「悪いが、あたしの用事はアンタにある」

おかしいと思ったのは昨晚。閉店間際までレストランで粘って聞き込みをしていた時だ。正確な人数は覚えてないが、ざっと30人は

聞いたと思う。

それに加えてモミジが聞き込みをした42人。
合わせて72人以上。

その誰もが、幽霊のことなんて知らなかった。むしろどこに出たのか聞いてくる始末だ。

あまりにも手掛かりが無い。

いや、手掛かりが無さ過ぎる。

だからあたしは1番確率の高い墓場の聞き込みよりも文化体系の調査を優先した。

協会に依頼が出されるということは、その国の住人じゃどうにもならない事態が起きたということだ。それなのに、あたしとモミジが聞いた72人以上の住人は何も知らない。

たまたまあたし達が聞いた奴らが知らなかった、という可能性も捨てきれないだろう。

でも、もつとあり得る可能性のものがある。

「この幽霊退治の依頼——本当にアンタの言う国の方々からのものか？」

この国は死者を尊ぶ。大体の国は幽霊を恐ろしいものとして扱うが、この愛悼の霊園に関してはありがたい存在だ。

それを退治しようなんて普通考えない。これはモミジがマリーメ
イアから聞いた話とも一致するこの国の常識だ。

今日マリーメイアから一家3人が殺された事件の概要を聞かされて、あの加害者の幽霊を憎む人間が1人だけいることに気が付いた。

殺された3人家族——父親、母親、息子。そして息子には恋人がいて、その恋人は毎日夕方頃に墓参りへ訪れるらしい。

今は夕方。あたしの目の前にはちょうど退勤の女性事務員。さらにこれから寄るところがあるらしい。

ここまでピースが揃えば、子どもだって分かるだろう。

「アンタじゃないのか？ この依頼を出したのは」

正確には、自分で依頼を出して自分で受理した。協会の事務員ならそのくらいの工作は簡単だ。

「……………」

黙り込む職員を見据えながら、あたしは万一の事態に備えて杖を握っておく。暴れ出してもすぐに制圧できるように。

だけど、それは杞憂だったみたいだな。

「誰が許せるものですか……………」

弱々しく、事務員は言葉を紡ぎ出す。

「ずっと好きだった。小さい頃からずっと好きで、その思いが通じた時どれほど嬉しかったか！ 結婚しようって言うてくれた時、どれほど幸せだったか！ 結婚して、子どもも作って、お爺さんお婆さんになるまでずっと一緒に暮らせるって、そう思ったのに！ それをあの男は奪ったんですよ！」

床のタイルに、事務員の涙がシミを作っていた。強まる語気と共に頭を振り乱す彼女は、明らかにまともな精神状態とは思えない。

でも、あたしは何も言わず怨嗟の言葉に耳を傾け続けた。

「極刑になったところで彼は帰って来ないんです！ それなのに、ずっと忘れられなくて泣いてる私に周囲のみんなは、『死者になったんだから許してやれ』って：『どんな人間も死ねば尊い存在だ』って……………綺麗事ばかり……………！ 死んだからなんだって言うのよ！！……………」

「私がこんなに苦しいのに：辛いのに……………あの男を生んだ母親はマリーメイエあの魔女が作った幽霊と抱き合って救われたような顔してる：許せるわけないじゃない!! どうしてあんな奴の親を助けるのよ……………だつたら私を助けてよ……………！ 彼のこと返してよ……………」

堪え切れず床に蹲る事務員に、何の言葉も掛けてやることができな

い。本当なら慰めるべきなんだろうな……………。

「……………協会の依頼を私的利用するのは重大な職務規律違反だ」

職務を忠実に全うする、立派な大人のあたしには。

「お前を拘束する」

立派な大人やってれば、嫌なことなんてたくさんある。

こんな誰も救われない結末に遭遇することだってあるさ。クソが

……。

どうやら拙者は1日中眠り続けていたようでござる。宿のベッドで体を起こすと、むしろ体調は良い。

シーラ殿に刺された右腕には包帯を巻かれているけど、時間逆転の魔法で治療されたらしく傷跡すらないでござる。閉じたり開いたりしても、全く問題無し。綺麗さっぱり治ってるでござるよ。

サイドテーブルに目を向けると、綺麗な字で書き置きがされていたでござる。

この宿の料金は既に支払ってあること。傷の具合。低体温症の後遺症は無いか。そして、書き置きを残した人物の名前。

「シーラ殿……」

彼女がここまで運んでくれたでござるか？ 自分に襲い掛かってきた拙者を？ しかも傷まで治して、濡れた服を着替えさせてくれたでござるか。

「お人好しが過ぎるでござるよ」

紙の裏には、目が覚めたらここに来い、と喫茶店の位置が記されてござった。時間の指定まで無いということは、拙者が起きる時間は魔法をかけられた時点で設定されてたでござるな。

ちよつと気まずくはあるでござるが、だからといってここまで世話になったのに無視するわけにはいかぬ。

着ていたバスローブを脱ぎ、いつもの格好に着替えた拙者は宿を出て喫茶店に向かう。

「よお。待ってたぜ」

恐らく禁煙なのでござろうが、テラス席で平然と煙管を吹かすシーラ殿がこちらに気付いて手を上げてきたでござる。というか、周りのお客さんの露骨に迷惑そうな視線が拙者にも向いてきて辛い……。

「……………、禁煙ではござらぬか？」

「ダメなのは煙草だろ？ これ煙管だから」

「同じでは？」

「全然違えよ。これだから非喫煙者は」

「なんで拙者が悪いみたいに言うでござるか」

『アマチュアめ』とでも言いたげな顔へ、呆れた目を返す。

拙者はシーラ殿の向かいの席へ腰を下ろし、店員さんへ砂糖増し増しのカフェオレを注文。雪が溶け始めているとはいえ、テラス席はやっぱり寒いでござる。

「まず、お前に渡すものがある」

「……指名手配書でござるか？」

「自分がやったことは理解してるみたいだな」

「それはまあ……」

普通に考えて拙者の行いは暴行。それこそ捕まっても文句言えないでござるよ。

「残念ながら違う。てか、指名手配書は渡すもんじゃない。貼るもんだろ」

「ではなんでござるか？」

「これだ」

ドン、とテーブルに置かれたのは金貨が詰まった小振りな巾着袋。

えっ、なにこれ保釈金？

「迷惑料と口止め料」

「これと同じ分だけ払えつてことでござるか？」

「違う。お前に渡すって言ってんだろ」

「なにゆえ？」

わけが分からないでござる。迷惑をかけたのは明らかに拙者のほうで、迷惑を被ったのはシーラ殿のはず。なのにどうしてシーラ殿が拙者にお金を渡すでござるか？

もし迷惑かけられた方がお金を払うシステムなら、拙者遠慮なく迷惑かけまくるでござるよ。

「今回の依頼の真相を話す。あまりデカイ声で言えないから耳貸せ」

「おっっっ」

ヤニくさいから嫌でござる、とは言えない雰囲気でござるな。シーラ殿の目が本気でござるよ。

とはいえ、美人に耳打ちされるといふなかなか美味しい体験はあまりできない。ヤニくさは、シーラ殿の髪の匂いでも嗅いで我慢するでござる。

——と、呑気にそんな事を考えていたでござるが、彼女の話す内容を聞くうちに拙者の心は鬱々と暗くなつたでござる。

顔を離れたシーラ殿へ、拙者は涙を堪えて質問する。

「……じゃあ、あの事務員さんが拙者に情報収集を任せたのは……」

「単なるカモフラージュ。この依頼が本物であるつていう箔付けに使われたんだよ。この国の死人に対する考えを知らなかつたお前は都合が良かったからな」

「それで……ござつたか」

確かに、職員が私的感情で依頼を作り上げたというのは、魔法統括協会の信用問題に関わるでござる。

これだけの大金を口止め料に払うのも納得できるというもの。

「事務員さんはどうなるでござるか？」

「転職活動でもするんじゃないか。少なくとも協会からは追放だな」

この事を公に出来ない以上、それがちょうどいい落とし所でござるか。

彼女自身、別に悪人というわけではなかつたでござる。きっと問題無く新しい職に就けるでござろう。

どちらかと言えば心の方が心配でござるが、それは彼女が自分自身でなんとかするしかない。拙者にできることは、ただ祈るだけでござる。

となると、拙者にはもう一つ心配事があるでござる。

「じゃあマリーメイア殿を捕えるというのも無しでござるか？」

「元々あいつを捕まえる気はない。一応協会に来てもらつて、紛らわしいことはするなよ程度の軽い口頭注意をするつもりだけただけだぜ」

「なーんだ。それならどうして拙者に教えてくれなかつたでござるか？」

「お・ま・え・が！ 勝手に勘違いしたんだろが……よー！」

「痛たたたたたたた!??痛いでござる!」

身を乗り出して拙者のお顔をアイアンクローでキリキリと締め上げてくるシーラ殿。

「あたしは何度も言ったよな? 捕まえるつもり無いって言ったよな?」

「縦長になっちゃうでござるよ! 痛いでござるよお!」

その白魚のようになやかで長い指が側頭部にめり込んできてちよつと意識が遠のいてきたでござる。あつ、川の向こうでイレイナ殿が手を振ってるでござる。

『モミジさん。大丈夫ですか? 人口呼吸しますか?』

「するでござる。ペロペロ」

「なんで舐めてくるんだよ汚ねえな!」

おっと。イレイナ殿の唇かと思ったらシーラ殿の手の平だったでござる。これはお恥ずかしい。

禁煙席で煙管吸うわ、突然アイアンクローしだすわ、その手を舐めるわで奇行極まりない拙者達にドン引きしながら運んできてくれた砂糖増し増しのカフェオレを飲んで一息。

拙者は気を取り直して、まずは頭を下げる。

「シーラ殿。この度は拙者の早とちり故に大変な迷惑をかけてしまつたでござる。大変申し訳ない」

「……………」

きつと、拙者は少し調子に乗つたのでござろうな。

ここ最近が良いこと尽くしでござつたから、どこか世界が自分の思い通りになると勘違いしてたでござるよ。

事件を解決して英雄ともてはやされて、一生を捧げたいと思える女性に出会えて、また会いたいと思つていた人に望む形で再会できて。

こんな風に嬉しいことばかりだから自惚れてたでござる。その結果、良いように利用されて、事件を引つ掻き回すだけ引つ掻き回した。シーラ殿にとんでもない迷惑をかけてしまったでござる。

彼女の顔を伺うわけではないけれど、それでも何か言うまで顔を上げるつもりはない。

「……そうだな。お前のやったことは、その場その場の可哀想な人に勝手に同情しただけだ」

「然り」

「そして場合によっては人生を棒に振るところまで来ていた」

「然り」

「もしあたしがお前より弱かったら、本当に指名手配もんだったよ」

「然り」

言い訳はしない。拙者の心境がどうであれ、やってしまった事の責任は持たなければならぬ。それが例え、善意からのものであったとしても。

この事件の発端も、確かにマリーメイヤ殿の善意でござった。国を愛する彼女が、悲しむ人を放っておけなかっただけのこと。

その善意が、事務員さんの憎しみを生んだ。誰かに望まれ、誰かに望まれない亡霊を生み出してしまった。本当にただの善意でも、それが誰かにとつては悪意と取られてしまうこともあるでござる。

拙者はそれをもっと早く理解するべきだった。旅人という無責任な立場に甘えて、考えなしの行動を取った結果が今でござるよ。

「——モミジ。顔を上げろ」

初めてシーラ殿に名前を呼ばれたでござる。出来ればこのような謝罪の場では無く、普通に楽しくお喋りしてた時が望ましかった。

「大人として言うが、お前は優しさと甘さの区別をもっと弁えるべきだ」

「うっ……」

「それができない奴に人助けができるほど、この世の中は単純じゃない」

説教を垂れるわけでもなく、威張っているわけでもない。

ただ厳然とした事実を、まぎまぎと提示してくる。

「……ごめんなさい。今度からは、もっと考えて行動します」

「そうしてくれ」

「ござる口調もやめて、誠心誠意謝ります。」

そんな拙者の頭に、ポンと優しく手を乗せられる。

「でもな——たぶんお前はそれで良い」

「はい？」

「誰かの為に権力に立ち向かえる奴は多くない。それが昨日今日会ったような相手なら尚更だ」

ガシガシと乱暴に撫で回されて、拙者の髪は昨日と同じようにくしゃくしゃにされるでござる。

「たぶんな、あたしの弟子がお前と同じような状況だったら、同じように怒ったと思うぜ。あいつも真面目なくせして優しいからな」

「……………」

「まあ、要は優しさと甘さの区別さえつけられれば無理に変わる必要はないってことだよ」

まるで眩しいものを見るように目を細めて笑うシーラ殿は、一体拙者を通して誰を見ているのでござろう…。

「これからも旅続けんだろ？」

「はい」

シーラ殿つて、わりと人たらしでござるな。あんなにボコボコにされたのに、全然嫌いになれないでござるよ。むしろ好き。

先にイレイナ殿に会ってなかったら、たぶん恋してたでござる。

シーラ殿はお金を置いて席を立つ。

「んじや、あたしは行くわ。次の仕事が詰まってるんでな」

「…………もう少し、ゆっくり話したかったでござるよ」

「世辞か？」

「本心でござる」

悪戯っぽく笑って、指をパチン。背もたれの付いたほうきを出して、ゆったり腰掛けるシーラ殿。

ほうきの上からもう一度拙者の頭を撫でて、飛び上がっていくでござる。

「またな。もしあたしの弟子に会ったら良くしてやってくれ」

「承知したでござる」

門の方に飛んでいくシーラ殿へ、拙者は手を振り続ける。

最近は…………また会いたいと思う人が、増えてばつかでござるな。

あんこ争奪祭り

NO ANKO NO LIFE

麗かな春の日差しに照らされて、漆塗りの下駄をカランコロン鳴らして歩く女の子がおりました。

桜色の着物に紅色の袴。腰には刀。その上から羽織る黒いローブには美しい椀が刺繍されています。

彼女の目の前には世にも珍しい十角形の国。その一面には国の中へと続く門があります。

「おや？ 旅人ですか？」

「然り。入国したいでござる。よろしいか？」

「もちろんでございます」

門に隣接した小屋から出てきた恰幅の良い門番さんはにこやか且つ速やかに入国審査をしてくれました。

それにつつがなく答えた女の子は、国の中から香る甘い匂いに頬を緩めます。

「ここがお菓子の国というのは本当なのでござるな」

「はい。我が国は砂糖の輸出量が世界で5番か6番か7番くらいですから。お菓子を愛し、お菓子に愛された国民性でございます」

「この国に来れば世界中のお菓子を食べられるというのはマジでござるか？」

「マジです」

なんとも言えない上にアバウト過ぎる砂糖の輸出量はともかく、質問を即答されて女の子の頬はさらに緩みます。はしたなく涎も垂れています。ばっちいです。

「さらに！ 3日後にはこの国最大のお祭りもあります。我が国の製菓業に携わる全ての人が腕を振りますよ。旅人さんは運が良い！」

「おおー！」

太鼓腹をポン！ と鳴らして、門番さんは胸を張ります。胸よりお腹の方が前に出っ張っているのはご愛嬌。きつとこの国は平和なの

でしょう。

「滞在中はきつと夢のような日々となること請け合いです」

そう言つて門番さんは一旦小屋に戻つてから、何やらそこそこ大きなお皿を持つて戻つてきました。一瞬遅れて濃いアーモンドクリームが女子の女子の鼻腔をくすぐります。

お皿の上には8等分に切り分かれている、葉っぱの模様が刻まれた折りパイ。

「これはなんでござる？」

「ガレット・デ・ロワです。8等分されたパイの1つにフェーヴと呼ばれる小さな人形が入つております。もしそれを旅人さんが口にすれば、幸福が訪れます」

「つまり運試しでござるな」

ふむふむと女子の女子は頷きました。人形とかどうでもいいけど、これ食べたい。

「ではこれを」

見た目は全て同じなので、1番手前にあるものを選び口に放り込みます。

ガリッ！ 女子の女子は歯を負傷しました。

「痛つた…当たり前でござる……」

「おめでとうございます。きつと貴女に幸福が訪れることでしょう。もぐもぐ」

口を抑えてぶるぶる震える女子へ、わりとどうでも良さそうに、しかしめちやくちや幸せそうに門番さんは残つた8分の7のガレット・デ・ロワを食べながら言いました。太鼓腹の理由が分かりました。

「では、ようこそ！ お菓子の国へ！」

パイをもぐもぐしながら門を開ける門番さんに見送られて、女子は入国します。

さてさて。アーモンドクリームのパイに舌鼓を打ち、一歩進むごとに強まる甘い匂いに機嫌良く艶やかな黒いポニーテールを揺らす女子は一体誰でしょう。

そう、拙者でござるよ！ ……齒、痛った。

世にも珍しい十角形をしたお菓子の国は、バームクーヘンのように何層も重なった道と、十角形の角から中心に向かって走る通りで出来ているでござる。

そして、中心に近いお店ほど国の中で人気があるとされているでござるよ。つまり人気な店ほど訪れやすい構造になっているでござる。いつも気の向くままに旅をしている拙者でござるが、このお菓子の国には明確な意思を持って訪れたでござるよ。

なにせお菓子の国！ しかも門番さんは言ってなかったでござるが、国内での砂糖消費量は世界一でござる！ 主な輸出品を国民が消費することは世界的に見ても珍しく、やろうと思えば砂糖の輸出量世界一も普通に取れる国でござる。

それをしないのは、ひとえに国民が砂糖を愛しているから。ぶっちゃけ『余所者に渡すくらいなら我らに寄越せ！』と思っているらしいと何かの雑誌のインタビューに載ってたでござる。その甲斐あって、道行く人達は老若男女問わずみんな丸々とおデブりになっているでござるな。

きつとあのお腹の中には、『砂糖愛』という名の内臓と脂肪が詰まっているのでござろう。

それはそうと、

「おおー、美味しそうー！」

通りを見れば、右も左も多種多様なお菓子屋さんばかりでござる。アムネシア殿の妹さんが喜びそうな光景でござるな。

ケーキ、クッキー、マドレーヌのようなわりとメジャーなものから、アップルパイやフルーツタルトなど果物を使ったもの。さらにグミや飴といった安価な駄菓子。

ちよつとした変わり種として、羊の乳から作ったクリームチーズをたっぷり詰めている筒状の揚げ菓子——カノーリ。

クッキーはクッキーでも、バニラシュガーをたっぷりまぶしたアーモンド風味の三日月型クッキー——ヴァニレキプファルン。

外は固めだけど中はふんわり、ラム酒とバニラが香るスポンジを、焦がしバターでコーティングした『溝の付いた』という意味のお菓子——カヌレ。

その他、周囲を見回せばつい涎が垂れてしまうお菓子屋さんばかりでござるよ！

拙者、この国の子になる！

そんな風に目を輝かせて、めちやくちやお金が詰まった財布片手にどのお店へ入ろうか検討していると、この場に似つかわしくない威圧的な声が耳へ飛び込んできたでござる。

「いたぞー！ あいつだー！」「黒髪の魔法使い……間違いない！」「捕まえろー！！」「絶対に逃すなー！」

捕物とりものでござろうか？ この国の治安維持組織らしき人達が集団で何やらこちらに向かって来てるでござるな。

平和と思っていたが、やはり人が集まって出来ているのが国でござる。人が複数いれば自然とトラブルは発生するもの。悲しいでござるな。

さて！ そんな事は気にせず、拙者はこの国のお菓子を堪能するでござるよ！

見せてもらおうか。この国のお菓子の実力とやらを……！

「動くなあー！」「貴様！ 動くなど言っている！」「動くな！ おい動くなってマジで！」「あのー！ 聞こえてますか！ 動かないで！ ね？」

「お願いだから動かないでえー！」

どんどん下からお願ひする形になっていく治安維持組織の皆さんの声をBGMに、拙者はまずカノーリのお店に決めたでござる。羊の乳から作ったクリームチーズ……実に興味深いでござるよ。

「おろろ？」

いざ行かん！ カノーリのお店！ と、踏み出して行く拙者。

そんな拙者の前に立ち塞がる治安維持組織の皆々様。

これは良くないでござるな。

「ちよつと！ 横入りしないで欲しいでござるよ！ そういうの、拙者の国だと『ズル込み』って言うでござるよ！ ズルでござるズル！」

きつとズル込みしてでも食べたいほど美味しいのでござろう。しかし、それはそれとしてモラルは守るべきでござる。ぷんぷん！

ほっぺを膨らませて抗議する拙者へ、治安維持組織の皆さんは呆気に取られた顔。まさか…この国ではズル込みアリなのでござるか……!!??

「ちよつ、違う！」「我々は貴様に用があるのだ！」「何故動くなど言われても動き続けた！」「いいから来てもらおう」「ほら！ キリキリ歩け！」

「おろろろ？」

両脇をデブツチヨな男性2人に掴まれ、チビツチヨな拙者はプレーン。キリキリ歩けつて言うわりに足が地面から離れちゃったでござる。あと太ってるせいなのか、この人達の体臭がちよつとキツイ。ふあつきゅー。

「何用でござるか？ 見たところ、警察とか衛兵とかその類のようにお見受けするでござるが」

「とぼけるな！ 貴様、自分が通報を受けた自覚が無いのか！」

「無いでござる。てか、拙者ついさつき入国したばかりでござるよ？」
強いて言うなら腰の刀でござるが、門番さんにはこの状態でも何も言われなかつたでござる。恐らく問題ないはず。

ふむ…皆目見当がつかぬ。

「別に暴れたりしないから、とりあえず離してほしいでござる。自分で歩くでござるよ。それに、人間が横に3人並んで歩いたら往来の邪魔でござる」

「ダメだ！ 貴様がさり気なく我々から距離を取ろうとしていることを気付いて無いでも思っているのか！ あまり舐めてくれるなよ」
「それはお主らの体臭がキツイからでござる。ぶっちゃけ臭い。ちやんとお風呂入ってる？」

「入ってる！」

「じゃあきつと内臓から来るタイプの臭いでござるな。痩せるでござる」

「失礼な！ 我々はこの国の男性の平均的な体型であるぞ！ 貴様こ

「そもそも少し体に肉をつけたらどうだ？」

「むかつ。ちゃんとおっぱいにたくさん付いてるもん。」

拙者、ロリ巨乳でござるよ。甘やかしたいお姉さんにはロリな部分がある。甘えたい女の子には巨乳な部分がある。年上から年下までどこまでも需要がある、言ってみればフェチの化身でござる。

「そんな拙者に向かって肉をつける…？ デブの分際で何をほざき散らしてるでござる！」

と、流石にこれを出すと普通にぶん殴られそうなので、拙者はクールダウン。落ち着いて彼らの意見を聞くことに。

「そもそも、なんと通報を受けたでござる？」

「どう考えても拙者ではないので、わざわざ面倒事を増やす必要も無いでござる。その場のノリで行動すると痛い目に遭うと少し前に学んだので。」

拙者、学習できる子。

「子どもからイタズラを受けた黒髪の魔法使いが、魔法を使ってオーバリアクションするせいで周りがドン引きしてる」と

「えっ…被害ってドン引きだけ？」

「そうだ。まったく…まさか祭りの3日前に仕事初めになるとは」

「いや、年明けたの3ヶ月以上前でござるよ？」

「それほど平和ということだ」

平和過ぎでは…？ いやまあ、良いことでござるが。周りがドン引きしてるって言う理由だけで出勤するんだから、彼らは相当暇を持って余してるでござるな。

「来い！ 話はマリトッツォでも食いながらじっくり聴いてやる」

「マリトッツォとはなんでござる？」

「小麦粉とバターとハチミツで作った生地を生クリームを挟んだものだ。我が国の取り調べでは定番の菓子だな」

「美味しいでござるか？」

「めっちゃくちゃ美味しい」

「どうしよう…ちよつと取り調べされたくなくてきたでござるよ。」

流石はお菓子の国。

ちなみに取り調べ中に食事を出すというのは、意外にも自供を促す効果があるのでござる。食事中にお喋りする習慣がある人は多いし、満腹中枢が刺激されることで安心感も覚える。その結果、空腹時より口が軽くなるらしいとのこと。昔ママミ上が言ってた豆知識でござる。

でも食事が出るということは、つまりそれだけ取り調べが長くなるということ。マリトツツオなるお菓子は魅力的でござるが、その辺のお店を何軒か巡れば出会えるでござろう。

(さて、どうしたものか)

拙者はプラーンの状態で連行されながら頭を回す。見たところ彼らは魔法使いでも無さそうだし、適当に抵抗すればこの場から逃げる事は難しくないでござる。

しかしここで逃げるという事は、この国にいる間はお尋ね者になるということと同義。それでは、せつかくのお菓子が堪能できないでござる。

むむむ…困ったでござるな。

腕を組んでこの状況の打開策を考える拙者の耳に、突如として少女の叫び声が叩き込まれたでござる。

「グワアアアアアアアッ!? やら…れ…たああ…:…バタン」

倒れる効果音までセルフという大変サービス精神旺盛な絶叫の方に目を向けると、そこには子どもに囲まれている魔法使いの姿が。

黒のローブを纏い、ショートカットの黒髪の上に黒の三角帽子。黒のショートパンツと黒のソックスの間から覗く健康的な太ももが魅力的な全身真っ黒黒すけな女の子が、子どもの輪の中心で全身の関節が全て外れたかのような動きで地面に崩れ落ちたでござるよ。きもっ。

たぶん通報受けたのこいつでござるな。

しかし、そんな衝撃場面を囲む子どもたちは嬉しそうにはしゃいでるでござる。周りの大人は顔を真っ青にしてドン引きしてるでござるが。

(あの三角帽子、イレイナ殿と同じものでは?)

いいなあ羨ましい。拙者も欲しいでござる。帽子嫌いだから被ら

ないけど。

とはいえ、

「たぶんお主らが探してる黒髪の魔法使って彼女のことではござらぬか？」

ていうか、情報伝達どうなってるでござるか。彼女は確かに拙者と同じ黒髪といえど、帽子被ってるし長さも全然違うでござるよ。

ジトくと拙者を抱える男どもを睨むと、彼らは時折あちらの黒髪さんに視線を送りながら顔を突き合わせているでござる。

「確かに黒髪だな」「じゃあこの子は冤罪ということか?」「いやしかし、この子も髪が黒いぞ」「じゃあどちらも捕まえた方が良くないか?」「なるほど。それなら犯人が2倍。俺たちの手柄も2倍だ!」

「お主ら、髪の色以外で人の判別できないの?」

色々ツツコミたいでござるが、特に最後の奴の発想が地味に怖いでござる。あまりに暇だと、人はこうもアホになるでござるか。

「もつとやって! もう一回やって!」

「ええー仕方ないですねえー」

子どもの声に応えて黒髪さんは先ほど崩れ落ちたものを逆再生したかのような動きで起き上がる。きもつ。

でも黒髪さん、たぶん良い人でござるな。子どもの純粹無垢な期待の眼差しを向けられてまんざらでも無さそう。むしろめちやくちや嬉しそう。だらしなく表情緩みまくってるでござるよ。

情報量が多くて面倒くさくなった拙者は、黒髪さんをポーと眺めることにしたでござる。

すると、周りの子ども達が小さなお手々を鉄砲の形にしてバンと撃つふり。それに合わせて黒髪さんは杖を振って何やら魔法を使い、グシャッと全身が液体化したかのように地面へと倒れる。確かにこれはドン引きでござるな。だって明らかにそこまで曲がらんだらうつとどこまで関節曲がってるでござるよ。きもつ。

未だに男達からは離してもらえずプラーンな状態の拙者は、崩れ落ちた拍子に首が真後ろを向いて倒れた黒髪さんと目が合う。めっちゃ見てるでござるよ拙者の顔。やだ怖い。泣こうかな。

「……？」

「そのあなた！ ちょっとほっぺ触っていいですか!?!？」

「は？」

グググググギッ！ ここまで聞こえる音を体中から鳴らして元に戻った黒髪さんは、丁寧に子どもたち一人一人に別れを告げてこちらに駆けてくるでござる。意味不明なことを言いながら。いやいやいや怖い怖い怖い！

助けを求めるように治安維持組織の皆さんへ目配せすると、バツ。全員目を逸らす。どうやら彼らでさえちよつとこの黒髪さんとは関わりになりたくないようでござるな。げしげし下駄で蹴りを入れるでござるが、完全に無視。ならせめて拙者を下ろしてほしいでござる。逃げることにすままならず、黒髪さんの接近を許してしまった拙者はガシ！

「ひい!?？」

ほっぺを両手で挟まれたでござる。明らかに初対面の相手にやっていいスキンシップじゃないでござる。

「……………」

「あう…な、なにするでござるか…………？」

「……………」

すごい真剣な顔で拙者のほっぺたムニムニ。さらにクンクンと匂いまで嗅いできたでござるよ。セクハラが止まらないでござるな。

怯える拙者など見向きもせず、ほっぺだけを弄ぶ黒髪さん。遊ばれてる…拙者、この人に遊ばれてるでござるよ！

「どうして…………」

「な、なんでござるか?」

「どうしてあなたのほっぺから…………」

「はい?」

ガタガタ震える拙者に対して俯きながらプルプル震える黒髪さん。それはなんの震えでござるか? 怒り? 恐怖? それとも病気?

拙者は病気に一票でござる。

千切れん勢いで顔を上げた黒髪さんのお顔は意外にもベリーキュート。しかしそんなベリーキュートなお顔は筆舌に尽くし難い歪み方をしているでござる。

そうして――

「どおおおしてあなたのほっぺからイレイナさんのほっぺを感じるんですかああー!!」

ふむ。ただの狂人でござったか。…誰か助けて。

拙者の人生史上最高にやべー奴――黒髪さん。治安維持組織の方々にめちやくちや怒られてるでござる。

このまま拙者はさよならバイバイしても良いのでござるが、黒髪さんが言つてた『イレイナさんのほっぺ』……もとい、『イレイナさん』がめちやくちや気になったので、お説教が終わるのを待つことに。「……あの、ぼくのせいでご迷惑かけてしまったみたいで、どうもすみません」

先ほどの元気いっぱいの様子が嘘だったかのように、黒髪さんはしゅんとしてトボトボ拙者の方へ歩いてきたでござる。治安維持組織の方々がこちらに背を向けて歩き去るところを見るに、口頭注意で済んだようでござるな。それはそうと、拙者への謝罪はどうした？

「はあ……。どうしてあんな事してたでござるか？」

「いやその…子ども達に『お菓子くれないやイタズラしちゃうぞ』って言われてしまって、ちょうどその時お菓子持ってなかったのでイタズラを受けたんです。でもそのイタズラが凄く可愛くて、ちよつと魔法で本気のリアクションをと……」

「端から見たらえげつないホラーでござったよ？」

「でも子ども達は喜んでくれました」

「大人達がドン引きでござった」

「この子ども達は独特な感性をしてるでござるな。体がコロコロとして確かに可愛かったでござるが。抱き心地良さそう。」

「『お菓子くれないやイタズラしちゃうぞ』…とは？」

「この国の合言葉です。お祭りの準備期間から終わるまでの1週間、

子ども達はこれを言って好きなだけお菓子をせしめるんですって。元々は別の国にあった文化が旅人に持ち込まれて、この国に合わせて変わったらしいですよ」

「へえ」

良いことを聞いたでござる。拙者も世間的に見ればまだ子ども。つまりこの手法を使えば無料でお菓子食べ放題でござるよ！ひゃっふー！

「ちなみにこれが許されるのは10歳までだそうです」

「ちっ……」

「あなた、やろうとしましたね」

ジト目を寄越す黒髪さんからバツと目を逸らす。だってお菓子欲しいもん。

誤魔化すように愛想笑いを浮かべ、拙者は自分の胸に手を置く。

「申し遅れたでござる。拙者はモミジ。武士で旅人で魔法使いでござる」

「あ、ご丁寧にどうも。ぼくはサヤ。炭の魔女のサヤです。一応旅人でもあります」

胸元の星を模ったブローチを指して黒髪さん——サヤ殿は言っただでござる。

拙者はその隣にある月を模ったブローチを見て苦い顔になる。

「魔法統括協会にも所属してるでござるか」

「はい！ 旅にはお金が必要ですからね。路銀調達するなら協会所属の魔女になった方が稼げますし」

「……なるほど」

「おや？ 顔色が悪いですねえ……もしかして、何か悪いことでもしました？」

いや、あれはもう決着ついたでござるから。もう終わったことだからセーフでござる。

迷惑料と口止め料を貰っている上、事件が事件だけにいくら協会所属のサヤ殿にも言えないので、さてどうしたものか……。

こういう時は誤魔化す！ 誤魔化すに限るでござるよ！

「そ、それより！ サヤ殿はもしや東の国の出身ではござらぬか？」
「露骨に話題逸らしてきましたね……。まあ、そうですね。そう聞くことはモミジさんもですか？」

「然り。まさか同郷の者にこんな所で会うとは、意外でござるよ」
「ですね。ぼくも結構驚いています」

よし。逸れたでござる。逸れ逸れでござる。

「拙者は観光でござるが、サヤ殿は？」

「ぼくも観光ですよ。お仕事はお休みです」

「おお！ ではここで会ったのも何かの縁。もし良ければ、一緒に国を回らぬか？」

「いいですよ——あなたには聞きたいことがありますし」

「奇遇でござるな——拙者もお主に聞きたいことがあるでござる」

なにやら拙者とサヤ殿の間に背筋が凍るほどの緊張感が走ったでござるが……。まあ気のせいではござるな。

「そろそろお昼時でござるな。拙者、この国の中心にあるお菓子屋さんで昼食をと思ってるでござるが」

「いいですね。あつ、でもこの国の中心にあるのお菓子屋さんじゃないですよ。ホットドッグ屋さんでした」

「ホットドッグ屋さん……。？ お菓子屋さんでは無く？」

「はい。さつきぼく見てきましたから間違いないです」

それが事実なら、この十角形のお菓子の国で一番人気なのはそのホットドッグ屋さんってことになるでござる。変でござるな。

しかしサヤ殿が嘘をついているようにも見えないでござる。そもそもそんな嘘を吐くメリットないし。

「でもその周りにはお菓子屋さんありましたし、なんならパン屋さんもありましたよ？ 菓子パン専門店でしたけど、良かったらそこ行きませんか？ 外から見たら可愛い動物パンたくさん置いてたんですよ」

「菓子パン専門店！ あんぱんあったでござるか？ 拙者、この国に来ればあんこが食べられると聞いて来たでござるよ」

「たぶんあるんじゃないですか」

そう！ 拙者がこの国に来た1番の目的は、拙者の大好物であるあんこを食べること！

あんこは砂糖を大量に使って作るので、国によっては超高級品だったり、そもそも伝わっていないことがほとんどでござる。

でも、ここにはあるでござる。だって砂糖の輸出量が世界で5番か6番か7番くらい高いから！

あんこ！ あんこ！ あーんこー！！

「ごめんねえ。お祭り前だから今あんこ切らしてるのよ」
「……………」

菓子パン専門店のおばちゃん言葉に、拙者は絶句。…………死のうかな。

「あんこ…………あんこが無い…」

「大丈夫ですかモミジさん？」

「あんこ食べたいでござる。…………あんぱん食べたいよお…………ふええ」

「あんぱん無いくらいで泣かないでください。ただだけあんこ好きなんですか。あつ、ぼくは動物パン全種類を1個ずつください」

「あいよ」

おばちゃんは拙者のことを無視してサヤ殿の注文の品を袋へ手際良く詰めていくでござる。

菓子パンが並ぶショーウィンドウの1番左端にはあんぱんと書かれた小さな立て札。その横には虚しくsold outの立て札。いと悲し。

「お祭り前だとどうしてあんこが切れるんですか？ なんかに使うんです？」

「おや、知らないのか。お嬢ちゃん達、旅人？」

「はい」

「3日後にこの国最大のお祭りがあるのは知ってるだろう？ 国中の菓子屋が参加するってやつさ」

「らしいですね。なんか競うんですか？」

「そうさ！ この国で1番の菓子屋を決めるのよ。正確には、あんこ

菓子屋を1番美味しく作れる店を決めるの。そこで1番になった菓子屋には、次の祭りまでの1年間あんこを優先的に国から支給されるってわけ」

「あんこって支給品なんですね」

「それなりに希少だからね。あんこは人気過ぎるから揉め事が起こらないように国が一括管理してんのよ。その争奪戦をする祭りだから、通称『あんこ争奪祭り』って呼ばれてるのさ」

なにやらサヤ殿とおばちゃんが話してるでござるが、それより拙者はあんこが食べたいでござるよ。あんこあんこあんこ……。

「じゃあみんなあんこが欲しくて参加するんですか」

「大体はそうさね。あとはまあ、祭り期間中の売り上げで店舗移動する権利が貰えたりか。この国の菓子屋は国の中心に行くほど人気が高いつてのは知ってるだろう？」

あんこ……あんこ食べたいよお……。

拙者この国であんこをお腹いっぱい食べるために、道中はほぼ雑草しか食べてないのに。それでも胃袋が小さくなって、いざ食べる時になつたらあまり入らないってことが起きないように色々調整してきたのに。

そのおかげでお金もたくさん貯まったのに……。お金があるのに欲しいものが買えない。諸行無常でござる。わろし！いとわろし!!?

「あー……どこかあんこが食べられるお菓子屋さん知りませんか？なんか連れの精神状態がやばいんですけど」

「たぶん中心に近い店は大体ダメだね。外周寄りの店なら探せばあるんじゃないかい」

「本場でござるか!??あんこあるでござるか!??」

「た、たぶんだよ?。もしかしたら……ね」

「情報感謝するでござる!。あつ、拙者はそちらのネコちゃんブルーベリーを1ついただきますたい」

「毎度あり」

数が少ないのでペーパーに包まれただけのネコちゃんを受け取り、

拙者はサヤ殿の手を引いて店を出る。

拙者、今日はあるこを口にするまで宿を取るつもりは無いでござるよ！

「あんこが全然ないでござる！」

ガンツ！ 悲しさのあまり膝をつき、両拳で地面をハンマーパンチ。超痛い……。

「もうお祭りが終わるまで待つしかないんじゃないですか？ もぐもぐ」

「やっぱりそうなのかなあ……」

拙者の必死さに若干引きながら、サヤ殿は動物パンをもぐもぐ。

「ほら、そんなところで蹲ってたら人通りの邪魔ですよ。みんな見えますし」

「サヤ殿が言うでござるか」

体をグニャグニャさせて何度も倒れたり起きたりしていた彼女に言われるのは大変遺憾でござる。

「そういうえば、先ほど子どもに見せていた狂気のパフォーマンスはどうやってたでござる？ 関節の着脱が自由自在でござるか？」

パピ上は当たり前のように関節外して刀の間合いを広げるみたいなこととしてたでござるが、あれは武芸を極めた者だからこそその技術。

見たところサヤ殿は何か武道を嗜んでいる様子はないでござる。もちろん巧妙に隠しているというのもあり得るでござるが、この年で

魔女になる為の訓練を行いながら別のことを極められたとは考えにくい。

「ああ、あれですか。簡単ですよ。魔法で関節の可動域をギリギリまで広げるんです。痛覚も弄れば……ほら、この通り」

「ひやあ……」

やべつ、変な悲鳴出た。

杖を出したサヤ殿は魔法で動物パンが詰まった紙袋を浮かせながらグニャン。いきなり目の前でやられたら心臓止まるでござるよ……。

「少し前にイレイナさんがやってた事の真似っこです。協会の隠し芸大会でやったら結構ウケたんですよね〜」

「イレイナ殿もそれやったでござるか?」

「イレイナさんがこんなはしたない事するわけないじゃないですか! あの人がやったのは、これを使って拷も……じゃなくて情報提供のお願いですよ」

……今拷問って言うおうとしなかったでござるか? 気のせいではござるか? 気のせいではござるか? よし、気のせいってことにしよう。

あんこを求めて雑談しながら歩いてみると、拙者のお腹がグーつとなつたでござる。そういえば、朝から今の時間までで食べたのはネコちゃんブルーベリーだけ。

「ふふっ」

「~~~~~」

わりと大きめの音だった上、サヤ殿に笑われた拙者は恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になるのを感じるでござる。うう……穴があつたら入りたい……。

「……笑うなんてひどいでござる。お腹が鳴るくらい誰でもあるでござるよ」

「まあそうなんですけどね……ふふっ。すみません。すごい大きかったので」

「むう……」

むすつと頬を膨らませる拙者へ、サヤ殿はヘラヘラ笑いながら動物パンを一つ差し出してくるでござる。

「良かったらどうぞ。まだまだあんこ探し続けるんでしょ?」

「それはもちろん。でもいいでござるか?」

「1個くらい構いませんよ。いっぱいありますから」

紙袋を指して、にっこり笑い掛けてくれるサヤ殿。優しい。

最初の出会いこそちよつとやべー奴感をこれでもか放っていたでござるが、話してみれば普通でござるな。何故か親近感が湧くでござる。

「かたじけない」

「いえいえ」

齧ると中身に栗が詰まったクマさんのパンをもぐもぐ。美味しいでござる。さすが中心寄りのお店。

もぐもぐと味わって食べる拙者と、何故かそれを優しく見守るサヤ殿。

さつきとは別の恥ずかしさを感じながらも道の脇で食べていると、遠くから聞いたような威圧的な声がこちらに向かってきたでござる。

「いたぞー！ あいつらだー！」黒髪の魔法使い……間違いない！
「捕まえろー!!」「絶対に逃すなー！」

目を向けると、先ほど拙者をとつ捕まえた治安維持組織の皆さん。それを見て呆然としている拙者とサヤ殿をあっという間に囲んできたでござる。なにゆえ？

「貴様ら！ 何も聞かず我々について来てもらうぞー！」

「えっ？ えっ？ なんですかいきなり！」

「……………」

これは……厄介事の予感しかしないでござるよ。いとわろし。

あんこ好きにあらずんば、人にあらず

小柄な拙者とサヤ殿が猫掴みで連行された場所は治安維持組織の本部……ではなく、お菓子屋さんでござった。しかも拙者がこの国に来て最初に入ろうとしたカノーリのお店。

「……………」

顔を見合わせて首を傾げる拙者達は、そのまま店内に降ろされる。

カスタードホワイトに統一された店内はお菓子屋さん特有の甘い香りが広がっており、さらに油で揚げた小麦粉特有の匂いも鼻腔を撫でてくる。小さなお店でござるが、床はよく磨かれていて埃一つ落ちてないでござる。ショーウィンドウも水垢が一切残っておらず、まるで新品のように綺麗。しかし小ぢんまりしたイトインコーナーに並ぶ小さな2つの円卓からはそれなりの年季を感じるでござる。

店のどの部分を赤ちゃんが舐めても問題無いくらい掃除が行き届いてるでござるな。きつと大事にされているのでござろう。

「ママ〜！ 連れてきたよ〜！」

拙者達を運んできた彼らのうち、恐らくリーダー格のような男性が店内奥の厨房へと声を張り上げる。ママってことは、彼の実家でもあるでござるか。てかその年でママって……。

少し待っていると、厨房からカウンターに姿を現したのは……え？

白と水色を基調とした可愛らしいウエイトレス服に身を包んだ――

――スキンヘッドのおじさん。

髪を剃り落とした頭部にはファンシーにデフォルメされたイチゴやりんご、ブドウにメロンその他諸々のたくさんの果物が刺青で掘られているでござる。その上からはフリルたっぷりのホワイトプリモ。

さらにこちらにもフリルがあしらわれた袖とスカートから覗く肢体は筋骨隆々に鍛え込まれ、両手にはケーキナイフとパン切り包丁が握られているでござる。

……これはなんという妖怪でござるか？ ママでござるか？

ちよつと拙者が知ってるママと違うんだけど。

「逃げますよモミジさん！」

「承知！ 退くでござるよお主ら！」

柄と杖を掴み、明らかに一般人とは思えないビジュアルの妖怪、通称ママから逃亡を図る拙者達。

しかし店の出入り口では、治安維持組織の皆さんが通せんぼしてるでござる。

流星に彼らを実力行使で排除するのはまずい為、右往左往するうちに——ガシツ！ 拙者の肩をケーキナイフが握られた左手、サヤ殿の肩をパン切り包丁が握られた右手でそれぞれ掴まれたでござるよ。ひええ！

「あわわわわわ……」

あまりの恐怖に抱き合いながら震える拙者たちへ、妖怪ママはニタアと怖すぎる笑顔を向けてくる。なに!? 解体されんの!??

「あアーらー！ 話で聞いてたより断然可愛い子達じゃない！」

上品なルージュが引かれた口から繰り出される野太いオネエ言葉。見上げると山のようにデカく、拙者とサヤ殿を重ねてもまだ足りないくらい分厚い体をしているでござる。マフィアが女神と考えるような強面は、やや厚化粧ながらも丁寧店長に彩られてるでござる。

「ソフツ。アタクシ、この店のママ。ちょうどカノーリが揚がったところなのよオ！ 今持つてくるから待つて？」

「……………」

キャラの大渋滞を起こしている妖怪ママ改め店長さんに、拙者達は思考回路を停止させられ領くしかなかったでござる。

「……サヤ殿！ お主、魔女でござろう！ ここは拙者が逃げるから、囹こゝろになってほしいでござるよー！」

「……いやいやいや！ モミジさんこそ武士でしょう！ 武士道とは死ぬことと見つけたりでしょう！ ここはぼくよりモミジさんが囹こゝろになってくださいー！」

「……なら拙者もう武士やめる！ はいやめた！」

「……あつずるい！ ならばくも魔女やめます！」

年季が入つていながらも綺麗な円卓でサヤ殿と顔を寄せ、小声で囀の押し付けあい。クソ、自分が助かれればそれでいいでござるか！ 卑怯な！

「お・ま・た・せエー！ 飲み物は紅茶で良かったかしら？」

「はい！ いただきます！」

ママさんの声に、拙者達は背筋ぴーん。ニコニコ怖さ増し増しの笑顔で円卓にカノーリと紅茶を並べる彼(?)の手元を静かに見守るでござる。いや腕の血管めちやくちや浮き出てるでござるよやばっ。

「ソフフ。ごめんなさいねエ、急に來てもらつて。本当は自分で行くのが礼儀なんだろうけど、アタクシー人だからお店空けられないのよオ」

「そ、そうでござつたか」

「……あらア? もしかして緊張してる?」

「いや、これは嬉しさの震えでござるよ。この店のカノーリは食べてみたいと思つていたのでござるよ」

ガクブル震える手でカノーリを持つと、グシャ。恐怖のあまり力を入れすぎて握り潰しちやつたでござる。

(……あ、これ死んだわ)

潰れたカノーリを見て目を細めるママさん。

その姿を見て顔を青くし、杖を取り出して逃亡を図るサヤ殿。

サヤ殿を逃さぬよう円卓の下で恋人繋ぎする拙者。

死なば諸共でござるよ。 My 麗 fair の lady 嬢さん。

「あらちよつと！ 大丈夫!? 熱くないかしら? 火傷してない?」

死を覚悟した拙者に対して、野太い声で心配してくれるママさんはすぐに厨房から氷嚢を持ってきてくれたでござる。

……あれ? 意外と良い人? てつきり謝罪として指の2、3本は詰めろとか言われると思つたでござるが。

「もう、おつちよちよちよいなんだから！ めっ！」

ちよん。拙者の指3本をまとめたような太さの人差し指でおでこ

を突かれたでござる。まるで母親が子どもを叱るように。見た目ウエイトレスの格好した強面だけど。

流れのままに氷嚢を握る拙者の横では、サヤ殿が出されたカノーリを一口。サクつと良い音をさせながらもぐもぐしてでござる。小声で「食べなきや死ぬ食べなきや死ぬ」と連呼してるけど、お味の方はいかがでござろう？

「~~~~っ!!?なにこれめちやくちや美味しいですよ!」

「ソッフ、ありがと。ほら、ポニテちゃんも。あーん」

「い、いただきます……あつ、美味しいでござる」

氷嚢とサヤ殿の手で両手が塞がっている拙者には、ママさん自らの手でカノーリをあーん。

まず口の中に広がるのは、一般的なクリームチーズとは一線を画す優しいさっぱりとした甘さのリコッタチーズ。それを包む生地は揚げたてと言うだけあつてまだ温かく、サクサクの食感が楽しいでござる。

さらにリコッタチーズにはいくつかのシロップ漬けたチェリーが乗り、その酸味のおかげで最後まですつきり食べられるでござるよ。

美味しい…文句無しで美味しい! いくらでも食べられるでござる!

「アタクシ、これ^{カノーリ}くらいしか上手に作れないから。満足して貰えて嬉しいわア」

強面をもつと強面に…たぶん優しく緩めたんでござろうがさらに怖くなつてでござるよ。

とりあえず円卓にカノーリがある限りサヤ殿は逃げることがないと思うので、彼女の手を離して拙者もムシャムシャいただくでござる。

今食べたもの以外のカノーリの中にも、別の果物が色々入ってるでござるな。なんだろう?

首を傾げながらも止まらない舌鼓を打つ拙者にママさんは優しく教えてくれる。

「それに入ってるのはイチゴ。そっちはシナモンを馴染ませたりんごね。今魔女ちゃん食べたのにはブルーベリーを詰めてみたのよオ」
スキンヘッドに彫り込まれた果物を1つ1つ丁寧に指差して教えてくれるでござる。いやそれ怖いから。

しかし、美味しいお菓子と美味しい紅茶をいただいたことで拙者達の恐怖は薄れ、食べ終わる頃には普通に会話ができるくらいにはなっていたでござる。

紅茶のおかわりをいただきつつ、拙者達の前に腰を下ろしたママさんへサヤ殿が問いかける。

「それで、ママさんでしたっけ？ 一体ぼく達になんの用があるんです？！」

「あなた達、東の国の出身よね？」

「はい」

「然り」

「あんこを使ったお菓子、食べたことあるわよね？」

「それはもちろん」

「なら話が早いわ……」

神妙な顔で頷いたママさんは一度顔を伏せて、バツ！ 強面を素早く上げてビビらせてくる。

「お願い！ アタクシと協力して、あんこ争奪祭りに出場してほしいのー！」

あっ…それお願いの表情でござったか。心臓悪い人なら死んでたでござるよ。それはそうと、

「なにゆえ？」

拙者は率直な疑問を一言。

確かあの祭りは、この国のお菓子屋さんがあんこをどれだけ美味しくできるか競うもの。聞いた話だと、3日間開催されるお祭り期間の1日目に用意された目玉イベント。これの戦績によって次の祭りまでの1年間、国から支給してもらえるあんこの優先度が決まるとのこと。

そのお祭りで、あんこの国としては代表的な拙者とサヤ殿を戦力に

迎えたいとのことでござろう。

しかし、拙者達は旅人。サヤ殿はどうか分からぬが、拙者は軽く料理ができるとはいえ所詮は素人でござる。焼き石に水ではござらぬか？

「実はね……この店、経営がピンチなの。次の争奪戦で一旗上げないと潰れちゃうのよオ」

「ほほう。それは大変ですね」

「でしょオ？　だ・か・ら、力を貸してほしいのよオ」

「……………」

サヤ殿？　なんで拙者を見るでござる？

なにやら言いたげな視線を向けてくるので、頭を傾けて彼女の口元に耳を寄せる。……サヤ殿、なんか赤ちゃんみたいな匂いするでござるな。

「…………ぼく、お菓子作りとかほとんどしたことないんですけど」

「はあ……そうでござったか。拙者はちよくちよく作ってたでござるが」

「いやそういう話ではなくて。ぼく達、東の国の出身だからって理由だけで頼られてません？」

これは旅人をしてると分かるでござるが、いわゆる偏見というやつでござるな。

きつとママさんの中では、東の国出身なんだからあんこ菓子が作れて当然、みたいな認識なのでござろう。

「ちなみにモミジさんは協力するつもりですか？」

「もう少し話を聞いてみてから決めようかと。さすがに『協力してほしいのよ』『はいやります』と即答する気はないでござる」

「……意外と慎重に考える人だったんですね」

「どういう意味でござるか」

即断即決は美德でござるが、それで痛い目に遭ったことを忘れるほどおバカちゃんではござらぬ。

「サヤ殿はっ！」

「うくん……正直ぼく達が協力してもしなくても、結果は変わらない

「と思いますよ」

「どうして?」

「いいですか、モミジさん」

サヤ殿は指を一本立てて、耳打ちを続ける。

「中心寄りのお店は普段からお客さんが多いんです。つまりリピーターさんが多いわけです。その時点で、既にこのお店とは雲泥の差です。天と地の差です。月とスッポンなんです」

「ううん? どういう意味でござる?」

「例えばですね、普通はあり得ませんが、味も匂いも食感も全部同じクロワッサンがここに2つあるとするでしょう? 1つは知らない人が捏ねたやつ。もう1つはイレイナさんが捏ねたやつ。モミジさんならどつちを美味しいって言います?」

「……待つてほしいでござる。イレイナ殿が捏ねたパンを食べるということは、それすなわち拙者の消化器官をイレイナ殿がコネコネしてくれているのと同義ではござらぬか?」

「そうなんですよ! さらにイレイナさんに頭を撫で撫でされたら?」

「それはもう全身をコネコネされているのと同じでござるな! 中かからも外からもコネコネでござる! 滾るでござるよ!!?」

「そうです! つまりイレイナさんこそ至上で極上で特上ということですよ!」

なるほど。つまり采配をあげるならば……

「イレイナ殿が捏ねたクロワッサンでござるな。それはもう美味しいでござるよ。色んな意味で」

「ぐへへくそうですね!。ぼくも自分で言つててテンション上がってききましたよお」

「あのオ、2人とも? 涎垂れてるわよ?」

耳打ちで話すサヤ殿と、それを聞いて普通に話す拙者にママさんはナフキンを渡してくれる。おっとお恥ずかしい。乙女としてはしたないでござる。

「うん? でも、つまりどういうことでござる? イレイナ殿が素晴

らしいという事は全世界共通の認識でござるよ?」

「今さらそんな常識を再確認するわけないでしょう。ぼくが言いたいのは、リピーターが多い分中心寄りのお店の方が最良されるってことですよ」

「ああ! 確かに!」

言われてみれば当たり前でござる。味が同じなら…いや、多少劣っていたとしても、いざという時には誰だって馴染みの店を優先する。

このお祭りは、あんこを美味しくする為というお題目を掲げただけの出来レースでござる。

「つまり、味はもうほとんど関係ない」と

「ですね。ぼく達が協力して万に一つめちやくちや美味しいものを使っても、一旗上げるっていうのは不可能なわけですよ」

サヤ殿……めっちゃ頭良いじゃん。正直舐めてたでござるよ。ただのやべー奴とか思ってたごめんね。

「話はまとまったかしら?」

拙者達が無言になったところで、ママさんは強面を緊張気味に強張らせたでござる。スキンヘッドの上にあるホワイトプリモを揺らしながら首を傾げる。

「一応聞いておきたいでござる。ママさんはどうして経営がピンチのこのお店をまだ続けたいと思ってるでござる?」

味は素晴らしいでござるが、ママさんのビジュアル的にちよつと客商売は向いてないでござる。いっそのこと店を畳んで別の仕事をした方が楽でござろう。借金の取り立てとか。

質問の意図は伝わったらしく、ママさんは神妙な顔で語り出してくる。

「この国はね、製菓店以外がお菓子を作るのを禁じているのよ。だから店を閉めちゃうとカノーリが作れなくなるの」

お菓子を作りたいなら生活を賭けろってことでござるか。

「カノーリはね、あの人の絆でもあるのよオ。アタクシとあの子とあの人と、3人が笑って過ごした思い出なの」

「あの人は?」

「妻。もう遠くに行っちゃったけどね」

ママさんは切なげに店の外へと視線を流す。これはなんというか……軽い気持ちで聞いたのは良くなかったでござるな。

なんとなく、話が見えてきたでござるよ。いなくなってしまった奥さんとの思い出にはいつもカノーリがあつたのでござろう。

そしてママさんがウエイトレス——女装しているのも、母親がいないことで息子さんに寂しい想いをさせない為。

どこかズレてて、ちよつと不思議で、それでもありふれた家族の繋がりでござるな。それはきつと、世間一般で『家族愛』と呼ばれるのでござろう。

「だから、この店を潰すわけにはいかないのよ。カノーリにはね、アタクシの家族との思い出がリコツタチーズよりもたくさん詰まってるの！」

「……………」

カノーリを揚げるための油よりも熱いママさんの弁舌に、拙者はサヤ殿と顔を見合わせる。

見た目こそふざけているとしか思えないママさんでござるが、それは全て自分の大切なものを守るため。一家の大黒柱の務めでござるな。

感動で涙目になる拙者は、ガシツとママさんの手を握る。

「拙者は協力するでござるよ」

「ポニテちゃん……………」

「拙者はモミジ。武士で旅人で魔法使いでござる」

「モミジちゃんね。アタクシはまア…店長よ。ママでパパで菓子職人と言えば良いかしら？」

「然り。ママさんでござるな」

もう、この見た目に恐怖は感じないでござる。あるのはただ、家族のために頑張る父親へと尊敬だけ。

拙者はにっこり笑い、サヤ殿を見る。……うわっ、目だけで『これほく巻き込まれてません？』と言いたげでござるな。安心するでござる。ちゃんと巻き込まれてるでござるよ。てへっ。

「……………」

「ほら、サヤ殿も自己紹介でござるよ。サヤ殿は何でござるか？ 何で何で何でござるか？」

「そのフリーズ気に入ってるんですか？」

「わりと」

簡潔明瞭かつそこそこの語呂が良いので気に入ってるでござる。コツは1つめから3つめにかけて文字数を増やすこと。

「ぼくはサヤです。魔女で旅人で…えっと…炭の魔女です！」

「…魔女が2回出てきたでござる。40点」

「魔女で旅人でイレイナさんの愛人です！」

「100点でござる。よく身の程を弁えてるでござるな。まあ拙者は未来の伴侶でござるが！」

「は？」

「お？」

ここに、武士と魔女とママ（おっさん）の同盟が誕生したでござる。甘い香りの中にちよっぴりの殺気が混ざりながら。

刀と魔法で小突きあった拙者とサヤ殿は、もう一度国の観光に戻ることにしたでござる。

否、観光ではござらぬ。敵情視察でござるな。こう言った方がカツコいいー。

「うまあ〜」

「サヤ殿、こつちも一口いかがでござる？」

「いいんですか！ むぐっ…うわあ〜こつちも美味しいです！ お返しに、はい」

「あーん」

……………敵情視察でござる！！

拙者達の手には中心寄りのお店で買ったクレープが2種類。焼いた小麦粉生地で巻かれた色とりどりの果物によるアンサンブルを心から楽しむでござる。

すごい……生クリームがまったくしつこくないでござるよ！
チューブから飲みたい！

「あ、サヤ殿のは栗が入ってるでござるか。季節外れだけど、全然アリ
でござるな」

「モミジさんのオーソドックスなイチゴですね。…ん？ これつて
お餅？」

「そうでござるよ！ クレープにお餅！ 斬新でござるー！」

思わぬ組み合わせに興奮する拙者。お餅はきめ細かなもので、伸び
るけど噛み切りやすい。生地と一緒に切れるので、ストレスなく伸ば
せるでござる。お年寄りも全然食べられそう。

イチゴとお餅……ここにあんこなんかあったら最高でござるな。イ
チゴ大福でござる。

「モミジさん。涎垂れてますよ」

「おっと失礼」

「口元ゆるゆるですね」

「こんなに素敵な国で財布と口元が緩まない者は、きつと人間ではご
ざらぬ」

「あはは……」

クレープを食べ切り、次はどこのお菓子を堪能……ではなく敵情視
察しようか考えていると、サヤ殿に袖を引かれる。

振り返ると、彼女はベリーキュートなお顔を不安の色に染めていた
でござる。

「いかがでした？ 太るのが心配でござるか？」

「いやまあ、正直その心配はありますけどそうじゃないです。お祭り
のことで」

「うん？」

「なんか流れで引き受けちゃったけど、大丈夫なんですか？」

「うくん……まあ大丈夫でござるよ」

「そんな適当な……」

そっか。そういえばまだ話してなかったでござる。

「別に適当に引き受けたわけではござらぬよ」

「本当に？」

「本当に。ちゃんと勝算があるから協力するでござる。ちなみに勝算に気付かせてくれたのはサヤ殿でござるよ」

「へ？」

いや、そんな鳩が豆鉄砲を食らったような顔しないでほしいでござる。萌えちゃうでござるよ。

拙者はクレープ屋さんの3軒隣り、スフレ屋さんでレモンスフレを注文して焼き上がるまでの時間を説明に充てることに。

「拙者もサヤ殿に言われて、ちよつと考えてみたでござるよ。確かにあんこ争奪祭りは出来レースでござる」

「ですな」

「常連客による鼻肩だけではござらぬ。中心寄りのお店は1年間優先的にあんこが支給される。もちろん外周寄りのお店よりも多いという事でござるな」

「もしかしてあんこのリソースが多い分、次の争奪祭りで出す為のあんこ菓子を練習できるつて言いたいんですか？」

「……然り」

得意げに話し出したのに、ちよつと聞いただけで言いたいことを当てられてちよつと膨れる。むう……。

「練習は本番のように。本番は練習のように。そもそも練習できる回数が違う時点で、この祭りは明らかに公平性を欠いているでござる」

「まあそうですね……」

「——でもそれが勝負の世界でござるよ。それをズルイというのは、ただの甘え。この程度の不公平を乗り越えることも出来ないような人間は、たとえ今回勝ったとしてもすぐに負け犬に墮ちるでござる」

正々堂々。いざ尋常に。真つ向勝負。騎士道精神。武士道精神。全て同じ意味でござる。旅人の立場から言わせて貰えば、そんなものは存在しない。

あつたとしても、子ども同士の遊びの中ぐらいでござる。

「……見た目に反して意外と言いますね」

「事実でござるからな」

「でも、それならどうするんですか」

「簡単でござるよ。諦めるでござる」

「はあ!?？」

拙者の言葉に驚きの声を発し、さらに襟首を掴まれたでござる。

えつなに脱がされるの? と思つたら、そのまま前後に拙者の体を

ガクガク揺さぶるといふ虐待に移行。ドメステイックバイオレンス

! ドメステイックバイオレンス!

「あうあうあう~~~~!」

「どーするんですかあああ! なに諦めてんですかバカなんです!!

?」

「やゝめゝてゝ!」

拙者の服は体の前で重ねて帯で留めているので、襟を持たれて揺さぶられるとどンドン着崩れていくでござるよ。えつち!

「落ち着いてほしいでござるよお……つて、ちよつ!??おっぱい溢れちやう! ストップストップ!」

「なにさり気なく巨乳アピールしてきてんですか! 腹立ちますね!」

「羨ましいでござるか?」

「……………」

「あああああ! サラシ解かないで!」

拙者、下着までならOKでござるが、流石にそれより先を公共の場で丸出しにする気はないでござる。それより先を見て良いのは――

―そう、イレイナ殿でござる!―

なんだか一方的なおっぱいへの私怨が行動理由に切り替わつてゐるようなサヤ殿に下から上への過重力を掛けてぶん投げ、強制的にやめていただくことに。

あつ、ほうき出して空中で乗った。すごい。

と、そのタイミングでスフレ屋さんから声が掛かったでござる。服も直さないといけないので、ちよつど良いでござるな。

店主の女性に説明してちよつと中まで入れてもらい、そこで直した

拙者はスフレを持ってサヤ殿の元へ戻る。

「いいでござるかサヤ殿。拙者が言いたいのには、お菓子作りで勝負することを諦めるって意味でござる。あんこ争奪祭りでの勝利を諦めるという意味ではござらん」

「あ、そういう……」

「別に拙者のおっぱい見たいなら素直に言ってくればいいのに」

「いやあなたのおっぱいには一切興味ないです。どちらかと言えばイレイナさんの……」

「拙者の未来の伴侶で邪な想像するのはやめていただけぬか？」

「は？」

「お？」

さつきは決着つかなかつたし、今ここでやるでござるか？ おお？

煽りたい気持ちでいっぱいではござるが、拙者達の目の前には白いココットに乗せられて粉砂糖を被ったスフレがあるでござる。これは温かいうちに食べねば台無しでござるな。

スプーンを入れれば、中からはレモンピールが混ざった卵液と湯気が溢れるでござる。ふわくと湯気と共に広がる匂いに頬を緩め、熱々のスフレを口に運ぶ。

…おお……おお!! 外側の薄い生地と内側のとろけるような舌触りは、柑橘類特有のさっぱりした味と絶妙に混ざり合う。ほっぺが落ちちやうでござるよお。

サヤ殿を見れば、おそらく拙者と同じ感想を抱いたのでござろう。先ほどから発していた殺気はすぐさま引っ込み、ニッコニコでほっぺに手を当ててるでござる。可愛い。

「わざわざ相手の土俵で戦うことは無いでござるよ」

同郷ならば伝わるであろう有名な慣用語で拙者はサヤ殿の危惧を取っ払う。

「はい？」

「あんこ争奪祭りでお菓子作りの勝負は不毛でござる。だったら拙者達は別の戦い方をすれば良いでござる」

武士と魔女とママ（おっさん）。この3人ならではの戦い方を見せてやるぞい！やるよー！

I a m t h e b o n e o f m y a n k
o .

あつという間に3日が経ち、今日はお祭り初日！　そしてあんこ争奪祭りでござる。

ガヤガヤと喧騒が響く中、拙者は緊張の面持ちで会場の舞台を見つめるでござる。

舞台はこの十角形の国の中心であるホットドッグ屋さんを囲み、外側を向くように円形になってるでござる。ちょうどドーナツ型でござるな。

そしてドーナツの上で拙者達は各々あんこ菓子を作り、出来たものからお客さんに配るでござる。時間は10時～17時まで。その間ノンストップで作り続け、最後にお客さんの投票で美味しかったお店の順位を付けていくというもの。

3日間行われる祭りの期間中このイベントを初日にもって来る理由は、恐らくここで上位になったお店が利益を上げやすくする為でござるな。残りの2日間で売り上げを伸ばし、国の中心に近い場所への店舗移動権を獲得しやすいようにでござろう。

ていうか、ホットドッグ屋さんは争奪祭り中お客さんが入らないけどいいのかな？　王者の余裕？　それともハンデ？

「あのホットドッグ屋さんねエ、一度も中心から移動したことないのよ。このお祭りが始まってから、ずうっと売り上げ一位なの」

「ずっと疑問だったのでござるが、どうしてでござる？　ここはお菓子子の国でござろう？」

「そ・れ・はア、お祭りが終わる頃になれば分かるわ」
「むう……」

茶目つ気たつぷりにウインクでもつたいぶるママさんへ、拙者はほっぺを膨らませる。教えてくれてもいいのに……。

「サヤ殿は知ってるでござ……サヤ殿？」

「な、ななななんですかかかかか？」

「いや緊張し過ぎでは?」

「実を言うとおぼく、あまりこういった舞台に立つっていう経験がなく
てですね……」

「それはそれは」

「逆にモミジさんは大丈夫なんですか?」

「うくん……まあ緊張してるっちゃしてるでござるな」

ぶっっちゃけ拙者とサヤ殿は脇役でござる。主役はあくまでママさん。
ん。

そこを押さえておけば、ある程度は解れるでござるよ。

なので、

「えいー!」

「ふにやつ!?!?」

プニン。拙者はサヤ殿のほっぺを痛くならない程度につまんで軽く伸ばしたり、手の平でふにふにしたり。おお! もっちもち!

「いいでござるかサヤ殿。お主の緊張感はほっぺでござる」

「ひやに言っでしゅか……?」

「ほくら柔らかくなってきたく柔らかくなってきたく」

「あによ……」

やばい。赤ちゃんのほっぺみたい。めちやくちやくセになるでござるよ。ずつとこうして遊んでたい。

「そういうえば、会った時はサヤ殿が拙者のほっぺを引っ張ったでござるな」

笑いかけ、さらにサヤ殿のほっぺを上につ張って無理やり笑顔を作るでござる。うん。相変わらずベリーキュート!

「……あなた達、可愛すぎじゃない?」

「あ、やっぱりそう思うでござる?」

「こんな可愛い子達に力を貸して貰えるなんて、アタクシは幸せ者ね」
「そういうのは、終わってから言うものでござるよ。ね、サヤ殿?」

「ひやいー!」

良い感じに緊張が解けたサヤ殿は元気にお返事。やっぱりそういう顔の方が似合うでござるな。

「ぎっ！ 入場よ。気合入れていきましょオ！」

「おおお!!」

ママさんの声に合わせて、拙者達は拳を合わせる。さあ！ やってやるでござるよ！

あんこ争奪祭りは、全お菓子屋さんの準備が整った後、5分間のアピールタイムが設けられるでござる。

アピールタイムでは各々が自慢の腕前を振るい、手際の良い菓子職人はアピールと調理を平行して見せることもあるとのこと。

かくいう拙者達も、ここでお菓子の準備をアピールとして使うでござる。

周りを見回せば、凄技のオンパレードでござるよ。

果物を使うお店では、皮を剥いたメロンをドラゴンに彫刻。

なにやら生地を使うであろうお店では、冗談みたいな大きさの生地を頭上でグルグル回してるでござる。

拙者とサヤ殿には馴染み深い飴細工の店では、固まりやすいという特性を利用して人間大の動物を作り上げている。

見える範囲の全てが神業。この祭りでの力の入れようがよく伝わるでござる。

確かにその練度からは弛まぬ努力を感じる。

確かにその密度からは技術の高さを感じる。

確かにその深度からは年季の深さを感じる。

しかしそれは所詮お菓子屋さんの粋の話でござる。

——だからそこに、拙者は可能性を見出した。

(さあ、始めるでござるよ)

抜刀しながら目配せすれば、サヤ殿は杖を振って頷いてくれる。拙者の周りには、今回ママさんが使うと言った果物が魔法で浮いてるでござる。

その浮いた果物の中心で拙者は刀片手に舞う——剣舞でござるよ。

さらに刀の刀身には消毒も兼ねてアルコール度数の高いお酒をぶっかけておいたでござる。そこにサヤ殿の魔法で火を着け、舞えば——ボオオオオ！ アルコール特有の青白い炎が剣舞の遠心力によつて周囲を靡くでござる。

拙者の国の剣舞といえれば基本はスローテンポ、そこに緩急をつけて舞うもの。しかし今回は見映えを意識して、かなり激しめに踊るでござるよ。これはもはや「舞う」というより「打つ」という表現が適切な踊り方でござる。

「おっと！ もうちよい右！ からの：上！ なんの！ これしき！」

後ろで拙者に負けないくらい杖を振るサヤ殿の声。実を言うと、この剣舞を披露している中で一番頑張っているのはサヤ殿でござる。

振られる刀の軌道上に果物を浮かせる。切られた果物を落とさず回収する。刀身に付着したアルコールを舞いの間ずっと一定量供給し続ける。拙者のヒラヒラした衣服や長い髪に着火しないギリギリの火力を、絶え間なく動く刀身に当て続ける。

それを全て1人でやらなければならぬでござる。1つ1つがかなり神経を使う作業を同時に。さすがは魔女。……いや、魔女の中でもこれは規格外のレベルなのでは？

少なくとも、5分間激しく打ち続けて体力を使うだけの拙者とは労働量が違うでござる。

あとママさん。合いの手代わりに投げキッスとかやめるでござる。たぶん衛生的にアウト。

ここまでやれば誰もが察するでござろう。武士と魔女がいるママさんチームならではの勝算。唯一のアドバンテージを最大限まで活かすのは、そう——目立つこと！

水平斬り。回転。斬り上げてからの唐竹割り。動き自体は単純なものばかり。ただで周囲で切られる果物や、流れる刀身の炎が拙者を彩るでござる。

さあ！ Look at me！ めっちゃ見て！ 超見て！

「ぜえ…はあ…ぜえ…はああ…死にそう…で、ござる…」

「お疲れ様です、モミジさん」

5分間踊りきった…もとい打ち切った拙者は、作業台の裏で笑えないレベルの息切れをなんとか堪えるでござる。

これでも体力には自信ある方でござるが、流石に全力で5分間は無理！ 死ぬ！ 内臓のどれか口から出そう！

「ぜえ…サヤ殿…も、お疲おえ！」

「はい、お水です。カノーリ揚がるまでに色々直しておいてください」

魔法でこちらに水の入ったコップを渡すサヤ殿は、既に調理に入ってるでござる。

余裕の笑みを浮かべながら杖を振る姿は、さながら有名楽団の指揮者のよう。しかし内心おっかなびつくりやつてるのはなんとなく察せるでござる。

拙者は手拭いで大量の汗を拭き、乱れた髪を直しながら彼女の作業に目を向ける。本来作業台の上で行われるカノーリの生地を筒状に巻く作業を、魔法で浮かせてお客さんに見えるようにしてるでござる。

滞在しててわかったでござるが、この国には魔法使いはいない。だからこそ、魔法を使つての調理は目を引くものがあるでござるよ。おかげで、お客さんのサヤ殿への注目が凄い。めちやくちゃ目立ってる。あと子どもや女性から黄色い声援が飛んでる。みんな丸々と太ってるけど、それでも羨ましいでござる……。

「…五感を研ぎ澄ますのよ、アタクシ。カノーリの揚げ時間は一定じゃない。揚げ具合を表す色、音、匂い。トングで挟んだ時の硬さ。全てを司るのよ……！」

そしてなにやらブツブツと呟きながら、サヤ殿が作ったカノーリを油へと入れるママさん。毎回これを言いながら揚げてるとのこと。ルーティンと言ったでござろうか。

文字だけにすれば職人の厳かさがこれでもかと伝わってくるでござるが、残念ながら服装はいつものウェイトレス。筋骨隆々の四肢が

フリルを大量にあしらわれた場所から生えているのは、ある意味圧巻の光景でござる。こちらはこちらでえらい目立ってるでござるな。ママさんに関しては何年出てるはずでござるが、きつと何度見ても飽きないのでござろう。

「揚がったわよオ！ モミジちゃん駆け足！」

ママさんの声に、拙者は慌てて油切り用の網とトレイを持っていくでござる。

ここからの拙者はウエイトレスでござる。出来上がったカノーリを、今か今かと目を輝かせているお客さんのもとに運ぶでござる。もちろん素敵な笑顔付きで。

「お待たせしました！ イチゴ大福カノーリでござる！」

思い返せばあつという間。しかしその時は確かに地獄でござった。

「二 疲れた〜！」

17時になり、あんこ争奪祭りは終了。7時間ぶつ通しで働き通した拙者とサヤ殿は、背中合わせで地面に座り込んでしまっでござる。

あつ、視線の先にサヤ殿のショートパンツとソックスの間から覗く健康的な太ももが。あれを枕にして今すぐ寝転がりたいでござる。なんならちよつと吸いたい。

「お疲れ様。こんな食べてもらえたのは初めてかもしれないわア。アタクシ感激！」

太ももに熱い視線を向けていると、ママさんが両手を合わせて睨みつけてくる。……違っでござるな。これたぶん喜んでる笑顔でござる。3日経つても未だ慣れない強面でござる。

それでも、心からルンルンしてるのは分かるでござるよ。内股でぴよんぴよん跳ねてるし。

そうして、油を切ったイチゴ大福カノーリを拙者達に渡してくれ

る。「はい。投票結果が出るまで休憩しましょ」

「然り」

「いただきます」

まず一口噛めば、もはや慣れ親しんだカノーリの食感。中には熱で程良く溶けたお餅、あんこ、リコッタチーズが詰まってるでござる。

さらに砂糖というものは温度が高いとより甘く感じるもの。それを見越して、舌がだれないようにママさんは酸味強めのイチゴを中に入れたでござる。

懐かしさ溢れ、さらになつと食べられたあんこに拙者は歓喜でござるよ！ あんこ美味えでござる。幸せえ。

「頑張った甲斐がありましたね」

「そうでござるな……ぐすん」

「泣くほど!?」

「やつとあんこ食べれたよお……」

元々あんこを食べる為にこの国まで来たでござる。あんこを大量に買うために、この国までの道中は雑草ばかり食べてたでござるよ。ちなみにごま油とソイソース醬油で炒めれば大体の雑草は美味しい。これ旅人豆知識でござる。

涙をボロボロ流してイチゴ大福カノーリをサクサク。すぐに食べ終わつちやつたでござる。そういえば、昼食も抜いてたでござるな。

「あ、モミジさん。食べカス付いてますよ」

「んむ」

「ほら。これで綺麗になりました」

ガツガツつと少々はしたなく食べたせいで口の周りに付いてしまった食べカスを、サヤ殿がハンカチで取ってくれたでござる。なにその唐突なお姉さんムーブ。不覚にもきゅんきゅんしたでござるよ！

……そういえば、妹がいるみたいなことをシーラ殿が言ってたでござるな。

そんな感じで、労働の後の心地良い疲労感というマジカルニートトラベラーの拙者には縁遠い余韻を楽しんでいると、あんこ争奪祭りの運営委員から結果発表でござる。

結果、拙者達は全参加チームの中で3位。トップスリーに入ったで

「ござるよ！ やったー！」

ママさん曰く、去年の順位は下から5番目。これはこの祭り始まって以来の快挙なのではござらぬか。知らんけど。

「まさか、あなたがここまでやるとは思わなかったね」

ハイタッチしたり小躍りしたりで喜びを分かち合う拙者達3人に

——正確にはママさんに、突然そんな声が掛けられたでござる。

「あら、久しぶりねエ。あんたは何位だったのかしら？」

「当然1位さ」

声の主はサヤ殿と一緒に入った中心寄りの菓子パン屋さんのおばちゃん店主でござった。お友達でござろうか？ それともライバルとか？ ママさんの姿を難なく受け入れてるし。

「はん！ 旅人の女の子を使つて目立とうなんて、カノーリしか作れないあなたらしい手さね」

「なに言つてんのよ。店を守るためなんだから手段なんて選んでられるわけではないでしょ」

あ、違うでござる。普通に仲悪いだけでござる。

ちよつぱり雲行きの怪しくなってきた会話にハラハラ見守る拙者とサヤ殿。そんな空間に、さらに別の声が飛び込んで来たでござる。

「ママー！ お袋ー！」

ママさんの息子さんで、治安維持組織のリーダー格的な人でござつた。制服のボタンが悲鳴を上げているのも気にせず、こちらにポヨンポヨンと腹を弾ませて走ってくる。

ていうか、ママとお袋は辞書で調べると同じ意味でござるが…もしかして…

「坊や！ 相変わらず元気そうじゃないか！ ちゃんとご飯食べてるかいか？」

「もちろんだよお袋。食べて食べて食べまくってる。この間の健康診断で、ついに医者から痩せろって言われたくらいだ！」

「まあ！ なんて非常識な医者だい！」

「……ママさん。もしかしてあのおばちゃんって……」

「元妻よ」

「亡くなったのでは？」

「あら？ アタクシ、死んだなんて言ったかしら？」

「……言ってない。言ってないでござるよ！ 確か、遠くに行ったと。」

「同じ国の中なのに『遠く』という表現は少々ややこしいでござる」

ママさんのお店からおばちゃんの子。菓子パン屋さんまで大体歩いて10分くらいでござった。

「歩いて10分は遠いよ。特に、あの子にはね」

「あの息子さんでござるか？」

「10分歩くと膝にくるそうなの」

痩せろ。

「なんかぼく達、すごい勘違いをしてたみたいですね」

「言わないでほしいでござる……」

「モミジさんなんか感動して泣いてましたよね」

「言わないでえ……」

あの時の涙を返してほしいでござるよ切実に！

サヤ殿がからかうように拙者のほっぺをツンツンしてくるでござる。穴があつたら入りたい……。

サヤ殿にイジられながら顔を真っ赤にする拙者でござるが、ここでふと思いつたでござる。

「復縁はしないでござるか？」

「なによ急に」

「だって拙者達を助っ人にした理由って、そもそもあのお店を守るためでござろう。あのおばちゃんとの思い出がりコツタチーズよりも詰まったっていう」

今もなんだかんだ言ってるママさんは、元奥さんと息子さんが話す光景を眩しそうに眺めているでござる。

「今さら言い出せないわよ。もうアタクシ達の関係は終わったの」

「そうでござろうか？」

本当に終わっていたら、わざわざ話し掛けてこないでござる。

お互い相手を嫌悪してるようにも見えないし、先ほどのやり取りか

らも夫婦ならではの距離感が感じられたでござるよ。

「大体どうして別れたでござる?」

「価値観の不一致……かしら」

「もっと具体的に」

離婚理由の大半はそれでござろう。それとも、あまり突っ込んじやいけないものでござるか。でもサヤ殿も気になるのか、チラチラ見てるし。これでも拙者達だって年頃。他人の恋愛事情ほど面白いものはないでござるよ。

「はあ…正直今でも分からないのよ。アタクシの作る食事が原因らしいけど」

「どんなのを作ってたでござる?」

「うわグイグイ来るウ……。カノーリよ」

「うん? 昔は不味かったとか?」

「そんなはずないわよオ。昔も今も、アタクシのカノーリの味は変わらないわ」

ではなにゆえ? ママさんのカノーリは絶品なはずでござる。

「色々なものを作ったわねエ。りんごのカノーリ。オレンジのカノーリ。レモンのカノーリ……」

「おお! 美味しそう!」

「クロワッサンのカノーリ。プレッツェルのカノーリ。バジルチキンのカノーリ」

「お、おろ? ちよつと変わり種でござるな」

「パンケーキのカノーリ。クレープのカノーリ。ハンバーグのカノーリ。ビーフシチューの……」

「ビーフシチューの?」

「カノーリ」

「離婚の原因は100%ママさんでござる」

そりゃあ別れたくもなるでござるよ。うん。なんでござるかビーフシチューのカノーリって。ちよつと気になるけど!

てか、『カノーリしか満足に作れない』ってそういう意味でござったか! てつきりお菓子全般は作れるけど、その中でもカノーリが1番

得意って意味かと思ったでござるよ!

それがまさか、本当にそのまんまの意味とは……。

とりあえず拙者はママさんの背中を押して、未だ息子さんと談笑するおぼちゃんのところまで連れて行くでござる。

もうさつさと復縁するでござるよ。たぶん問題なくできるから。

3日間のお祭りは終わり、ぼくはその最終日の夜にモミジさんの泊まる宿に呼び出されました。なにやら大事な話があるとかですが……はっ! もしかしてぼくを口説くつもりですか!? イレイナさんに会えない寂しさを、ぼくを使って埋めるつもりなんですか!??

たぶん間違いないありません。だって夜に宿に呼び出すとか、もうそういう目的しかないじゃないですか! ひゃああ! モミジさん、ちっちゃくて子犬みたいに可愛いのに大胆!

でも、ぼくの操はイレイナさんが予約済み(押し売り)なので、求められてもしっかりNOを突きつけないといけませんね! 別に悪い気はしませんけど!

ぼくは緊張で高鳴る胸を押さえながら、モミジさんが泊まるお部屋の扉をノックしました。

「あつ、サヤ殿! 待ってたでござるよ!」

すると、すぐに扉からピョコつとモミジさんが顔を覗かせてきます。ポニーテールがそれこそ尻尾みたいに揺れて可愛いですね。あとお部屋から懐かしい匂いが。

「ささ、入るでござる」

鼻をすんすんしてたら手を引いて部屋に連れ込まれました。ちよつと強引だけど、悪い気はしません。まあぼくはイレイナさん一筋ですけど!

いや、そんなことより……

「良い宿泊まっていますね」

いや、皮肉じゃないですよ? 本当にそこそこ高い宿ですもん、(こ)。

まあ、お高い理由はキッチン完備でお料理し放題ってとこなんです

けどね。だから値段の割にお客さんは少ないです。

基本的に宿は旅行者や旅人が利用します。そんな人たちは、『自分で食事作らなきゃならねーんだよバーカ』って人ばかりなので、宿にキッチンが必要ってほとんど無いんですよ。だったらキッチン取っ払ってその分お値段を安くした方がお客さん入りますし。

ぼくは以前宿屋で働いてたので、その辺のことはちよっぴり詳しいんです。ドヤ！

「えへへ。あんこを買ったら是非作りたいものがあつたから、頑張ってお金貯めたでござるよ」

「作りたいもの、ですか？」

「これでござる！」

自慢気にちよろ火に掛けてある状態の鍋の蓋を持ち上げるモミジさん。その瞬間良い匂いがさらに部屋中に広がります。……おお！

この匂い、もしやと思いましたか！

「おしるこですか！」

「然り！ サヤ殿、好きでござるか？」

「はい！」

モミジさんはあんこ争奪祭りでお手伝いをした報酬として、ママさんから渡されるはずの金貨を断っていました。その代わりに貰ったものがなんなのか、ぼくは知らなかったですが、あんこだったんですね。

「いっぱい作ったでござる。お餅も入れる？」

「いただきます！」

春になったとはいえ、早朝や日が沈んだ夜はまだ冷え込みます。この宿に来るまででぼくの体もすっかり冷えていました。

そしてぼくは知っています！ 冷えた時のおしるこはめちゃくちゃ美味しい！

モミジさんから湯気が立ち上る器を受け取り、さっそく一啜り。この懐かしい味、最高です……！

さらにフォークでお餅を噛むと、絶妙な温まり具合で伸びる伸びる。この感覚も懐かしい。

(そういえば、何年ぶりだろう。おしるごなんて食べたの)

シーラさんに師事して、魔女になる為に妹と一緒に魔法使いの国まで出向いて、妹だけ先に魔女見習いになって、その後イレイナさんに特訓してもらって、それから半年後にやっと魔女見習いになれて、それからすぐに魔法統括協会の新人として協会の魔女から講義を受けて、同時に魔女になるための特訓もして、晴れて炭の魔女になれて、旅人をしながら協会の仕事をこなして、たまにイレイナさんに再会したり、知らない誰かに出会ったり、大切な友達と別れたり——思えば随分と遠くまで来たなあ……。場所も、時間も。

別に郷愁に駆られたわけではありません。でも、ぼくの目から自然と涙が溢れます。

「な、泣くほど美味しいでござるか?」

突然泣き出すぼくに若干引きながらも、モミジさんは背中をさすつてくれます。優しい。

「泣き虫は拙者のアイデンティティでござるよ」

あ、違いますね。自分のキャラ奪われるの心配してるだけですこの人。

「ぐす…すみません。ちよつと色々思い出しちゃって」

「たまにあるでござる。実は拙者も、味見した時にちよつとだけ泣いたでござるよ。……不思議でござるなあ。マミ上のおしるごには到底届かないのに」

そう言っって軽くぼくの頭を撫でた後、モミジさんはもう一度キッチンに向かいます。この宿はオープンキッチンを採用しているようなので、ぼくからも彼女の後ろ姿が見えます。冷蔵庫から何かを出した後、抜刀しました。

……なんで?

「故郷の味って、なんだかんだ恋しくなるでござるな」

そして抜いた刀で取り出した物を切っています。異様に手慣れているのはなんでなのでしょう? もしかして普段から刀使って料理してるんでしょうか?

「どうぞ召し上がれ」

「これって羊羹……羊羹じゃないですか！」

「さすがにこれは初めて作ったから、味は期待しないでほしいでございますよ」

羊羹が乗ったお皿を、てへへっと照れ笑いを浮かべながらぼくの前に置いてくれました。ぼく餌付けされてません？

……はっ！

「もしかして……食べ物でぼくの心を掴むつもりですか!?？」

「違うでござる」

「でもそんなものでぼくの心は掴めませんよ！ 胃袋は掴まれかけましたけどね！」

「なにちよつと上手いこと言ってるでござるか」

呆れた目でぼくを見てから、モミジさんは羊羹をフォークで刺して一口。お口に合ったのか、笑顔で長いポニーテールが咀嚼に合わせて揺れる光景は、まるで子犬が嬉しくて尻尾を振ってるみたいです。可愛い。

そんなちんちくりんなぼくより、さらにちんちくりんなモミジさんを見てみると、ふと1つ疑問が湧いてきました。

「モミジさんはずつと1人で旅をしてるんですか？」

「概ね1人でござるな。訪れた国で会った女性と一緒に過ごすこともちよくちよくあるでござるが、出国と同時に別れることにしてるでござる。例えばイレイナ殿とかイレイナ殿とか、あとイレイナ殿とか！」

相変わらずイレイナさんマウントを取ってくるこのちよつと腐った根性は、まさにイレイナさんを感じます。ちなみに未だ彼女のほっぺからはイレイナさんのほっぺを感じます。万死に値しますね。

でも、そんなちよつと闇で病みな感情は横に置いて。ぼくはモミジさんに聞きました。

「——1人ぼっちは、寂しくないですか？」

正確な年齢を聞いたわけではないですが、たぶんモミジさんはぼくと同い年か1つ下。そんな彼女は、1人で過ごすことをどう思っているのかぼくは気になりました。

だって…ぼくはあの時耐えられなかったから。

モミジさんの答えがどちらであつても何か起こるわけではないのに、思わず手元に置いておいた三角帽子を握つてしまします。

ぼくが真剣に質問をしていることを察したのか、鼻につくドヤ顔を引き締めて答えてくれます。

「寂しいと思う時もあるでござる。でも、その寂しさを楽しむのも一人旅の醍醐味でござるよ」

「寂しさを…楽しむ」

「然り」

そんなこと、ぼくにはできませんでした。ただただ嫌で、怖くて、耐えられなくて……。

「強いんですね。モミジさんは」

暗い雰囲気にならないように笑みを浮かべて言いました。もう平気だと思つてたのにな……。

時々、こうやつて他人と自分を比べてしまうのはぼくの悪い癖なんでしょうね。

「別に強いわけではござらぬ。本当に嫌になったら帰ればいいから、気にしてないだけでござるよ」

「帰る…ですか？」

「はい。もう本当に嫌になつて、旅なんかしたくないって思つたら拙者は家に帰るでござる」

「……………」

「——帰れる場所があるから、安心して旅ができるでござるよ」

モミジさんは、「いってきます」と言つて旅に出たそうです。「いつてらっしゃい」という言葉を受けて、進み出したそうです。

「サヤ殿にもいるでござらう？ 『ただいま』って言つたら、『おかえり』と返してくれる相手が」

「……あなた、どこまでぼくのこと知ってるんですか」

「わりと知ってるでござるよ。実を言うと、拙者はサヤ殿に会えるのを楽しみにしてたでござる」

初対面の日からずっと疑問でした。この人は、どうにも距離感がお

かしかつたんです。

ぼく達はまだ、イレイナさんとの関係について深く語り合っていないでした。なのに、彼女はぼくがイレイナさんと深い親交があることを前提に話しているフシがありました。同じ帽子というだけでは明らかに理由が弱過ぎます。

ぼくがモミジさんとイレイナさんの関係に気付いたのは特に疑問を挟む余地なんてないでしょう。答えは「イレイナさんへの愛故に」。
“以上！”

「サヤ殿が拙者に会う前の旅路で、何か辛いことがあったことはなんとなく分かるでござる。新たな人との出会いが嬉しいことばかりではないし、訪れる国が全て美しいわけではござらん。旅人なんてやってれば、そんな事にぶち当たることは稀にあるでござるよ」

「……………」

「でも、後悔はしてないでござろう?」

ぼくの旅は、どこから始まったのか。たぶん妹と一緒に故郷を飛び出した時かな。あれから確かに色々なことがあったと思う。

あの時あすれば良かったと思うことはあるし、たればの選択肢の先が今と違う人間関係を作っていたかもしれない。

「お主が弱いと思うその感情も旅から得たものでござろう。でもね、サヤさん」

「……………なんですか」

「自分の弱さを認められるなら、それはもう強さでござるよ」

ずっと見てきたにばあつとしたものとは違う、モミジさんの優しく大人っぽい笑顔に少しだけ胸がきゅんとしました。その不意打ちは卑怯です。

「……………イレイナさんに会う前にあなたと会わなくて良かったです」

「おろろ? なにゆえ?」

「もし先にモミジさんと出会ってたら、ぼくはずっと自分の弱さから目を背け続けてました」

イレイナさんから貰った帽子を抱き寄せました。もうぼくは、1人であつても1人孤ぼつち独ではありませんから。

「甘すぎですよ」

「うっ…マジでぎぐるか」

「甘々ですよ。この羊羹よりも、甘々です」

ちよつと屈しかけた八つ当たりにも、意地悪を言ってみました。

……あれ？　なんか思ったよりも効いてるんですけど…えっ、『甘い』ってモミジさんには禁句なんでしょうか。

「うう……シーラ殿にも言われたでござるよ。甘さと優しさの区別をつけるって」

「あー言いそう。仕事柄、師匠はその辺厳しいですからね」

「少しは区別できるようになったと思うんだけどなあ…」

ぼくの言葉が想像以上に刺さったらしく、心なしかポニーテールもしょんぼりしてしまっています。

「そういうえば、サヤ殿にとってシーラ殿はどんな人でござるか？」

「なんですか突然」

「答えてくれないと泣くでござる。いいでござるか？　泣くでござるよ？　拙者が泣いたら隣室の人に怒られるでござるよ。100%」

「それ実際に迷惑被るのモミジさんですよね…？」

ぼく別にこの宿に泊まってないですし。いやまあ、泣かれたら普通に困るんですけど。

まあ、ちようど良いです。普段の愚痴も含めてモミジさんの質問には答えるとしましょう。下手に協会の誰かにこぼして、師匠の耳に入ったら後が怖いですしね！

「師匠はまあ、一言で表すなら適当な人ですね」

「適当でぎぐるか？」

「いや、仕事は普通に真面目ですよ。だけどそれ以外がもう酷いんですよ！　服は脱いだら脱ぎっぱなし、洗濯物は溜め込む雑用は押し付けてくるわで…。この間なんて喫煙所が近くにあるのに、『これは煙管だから良いんだよ』とか言って迷惑千万なことやってましたからねー！」

「……………」

おや？　モミジさんが凄く後悔してるかのような顔をしています

ね。でもぼくの愚痴は止まりませんよ。だって質問してきたのはモミジさんなんですからね！

「あ……そういえば、この間は珍しく適当な仕事をしてきました」「というの？」

「冬に国土の半分くらいがお墓っていう変な国に幽霊退治しに行つたんですよ？　でも結局退治しないで帰ってきて、なんて言つたと思ひます？」

あの時の師匠は例に漏れず煙管を吹かして、

『『あんだだけ墓があつたら幽霊ぐらい居んだろ』ですよ！　どう思ひます？　……って、なんで嬉しそうな顔してんですか』

「いや、なんでもないでござるよ」

口ではそう言つても、モミジさんの顔はポワポワと綻んでいます。あとポニーテールが元気を取り戻しています。それどういう仕組みなのか気になるんですけど……。

彼女はそのままだまもう一度キッチンに移動して、刀を振り始めました。たぶん羊羹を切り分けているんでしょうけど、普通に包丁を使うって発想ないんですか。

何か包んでるみたいだけど、とりあえずぼくは冷めないうちにおしるこをいただくことにします。お餅が固くなつたら嫌ですし。

そして、おしるここと羊羹を食べ終わる頃になるとモミジさんは何かを包んだ風呂敷……まあ流れるに残りの羊羹ですね。それをぼくの前に差し出してきました。

「はい、お土産でござる。シーラ殿と妹さんに渡してほしいでござる。もちろんサヤ殿の分もあるでござるよ」

「えっ……？　……いいんですか？」

「ふっふっふっ……まだまだたくさんあるでござる。ママさんに貰えるだけ貰つておいたでござるよ」

たぶんワースト5位から3位にまで上り詰めてテンション上がつてたんでしょね。

とはいえ、羊羹は正直かなり嬉しいです。日持ちがしますし、なにより甘いものを食べれば元気が出ます。

それに、師匠と妹にも食べさせてあげたいですしね。ふふっ、2人も喜んでくれるかな？

「ありがとうございます。なんかお返しができたらいいんですけど……」

「別に気を遣わなくていいでござるよ。拙者が好きでやったことござる」

「でも……」

こういう時、何かをパツと渡せたらカッコいいんですけどね…。レイナさんみたいに。

でも、なんかモミジさんとの関係って違う気がするんですよ。何かを贈り合うようなものじゃなく…どう言ったら良いんだろう……？

うくと腕を組んで悩んでいると、モミジさんは名案を思い付いたと言わんばかりに手をポンと打ちました。

「じゃあレイナ殿は拙者が幸せにするから、サヤ殿は自分の幸せを探してほしいでござる」

「嫌です無理です何言ってますかレイナさんを幸せにできるのはぼくしかいませんからモミジさんこそ身を引いてください」

「愛人までなら許してあげるでござるよ？　まあ！　拙者は未来の伴侶でござるが!!？」

「は?..」

「お?..」

おしるこの匂いの中でメンチを切りながら、なんとなくぼくは腑に落ちたような気がしました。

きつとぼくとモミジさんは、こういう関係がちょうどいいんですね。

難しいことじゃない。時には一緒に参加して、時には一緒にお菓子を食べて歩いて、時にはレイナさんを巡ってケンカして。でも、お互い絶対に相手のことを嫌いになることはない。

信頼してるから安心してケンカできるんです。信用してるから片膝張らず、意地だけを張り合えるんです。

こう言う関係、なんて言うんだらう？

——もしかしたら、「親友」って言うのかな？

拙者とサヤ殿は、同じ日に出国することにしたでござる。

先ほど無事復縁したママさんにも挨拶を済ませてきたところ。ちなみにめっちゃカノーリくれたでござる。……これ、悪くなる前に食べ切れるかな？

なんか小さな心配事が新たに生まれた気もするでござるが、その程度は旅人にはつきもの。むしろちよつとした心配事は、良い旅のスパイスでござる。それはまさに、おしるこの中に浮かぶお餅のように！

「いや、意味分かんないんですけど」

「良い締め言葉が思いつかなかったでござる」

拙者と同じようにカノーリが大量に入った紙袋を下げるサヤ殿は、ジト目でツツコミを入れてきたでござる。

いつも上手いこと言えるとは思わないで欲しいでござるよ。

とりあえず、向こう3日間は3食カノーリ決定でござるな。拙者たち。

「お別れですね」

「然り」

「お祭りを楽しむつもりが、なんだかんだで参加者になっちゃったのは良い土産話になりそうですよ。たぶん師匠には呆れられちゃうけど」

「そこは『貴重な経験をした』的なことを言っとけば、一目置かれるでござるよ」

ダメでござるな。旅人ならば、別れる時にはパツと別れねば。ここに時間を掛ければかけるほど、お別れは辛くなるでござる。

それはサヤ殿も承知しているのか、先に背中を向けてくれた。

「じゃあ、行きますね。またどこかで会いましょう」

「そうでござるな。今ではない、いつか。ここではない、どこか。いつ

かどこかのまだ知らない場所で、また一緒にお菓子を食べたいでござる」

「ぼくもです」

ニコツと笑ってサヤ殿は門へと歩き出そうとした、その時。

「あれ、サヤさん？ それとモミジさん？ 奇遇ですね」

聞き間違いようもない、愛しの彼女の声に拙者たちは千切れん勢いで振り返る。やべつ、首からグキツて音した。

まず目を引くのは、月と雪が愛の共同作業で作りに出したとしか思えない見ているだけで悶死してしまいそうな艶のある長い灰色の髪。

並べられると嫉妬で焼死するんじゃないかと思うような、サヤ殿と同じ三角帽子。

どんな服でも全て着こなしてしまう端麗な容姿は、見ているだけで心臓が止まりそう。

聞くだけで脳殺されてしまいそうな、だけどずっと聞いていたくなるような美声。

存在そのものが拙者を尊死させてくる、未来の伴侶——イレイナ殿がほうきを抱えてそこに立っていたでござる。

「なにやらこの国でお祭りが開かれていると聞いて来たんですけど、出遅れてしまったみたいですね。残念です。お二人は今から出国ですか？」

「いえ！ 今来たところでごござる!!？」

お菓子^すの国の物語は、まだ終わらない。

幕間 イレイナ争奪祭り

「あの……」

想い人の声と息遣いを耳元で感じながら、ニコニコ歩く女の子がいます。

大好きな彼女の左腕にしがみつき、ご機嫌に長い黒髪のポニーテールを揺らす10代半ばの女の子は、着物、袴、ローブと全体的にヒラヒラした服装をしています。さらに腰の刀もご機嫌にカツチャカツチャと音を立てて揺れています。

髪も服も刀も上機嫌にゆらゆらヒラヒラさせている、子犬系サムライガールとは一体誰でしょう。そう――

「――モミジさん。一旦離れてくれませんか？」

「そうです！ ちよつとくつつき過ぎですよ」

「まったく同じ体勢でどの口が言うんですか。サヤさんもです」

「サヤ殿。相手の気持ちを受け入れず、自分の気持ちだけをぶつけるのは良くないでござるよ。なので可及的速やかにイレイナ殿の右腕を離すでござる」

「あなた達は会話のキャッチボールをブーメランで行うんですか？」

身長の関係でイレイナ殿の疲れたため息を右耳に感じて密かにゾクゾクしながら、拙者は少し考えるでござる。

確かに、イレイナ殿はこの国に来たばかりで少し疲れてるでござろう。これでも拙者はできる女。そんな疲れた彼女を癒すのも未来の伴侶の務め。

さて、どうしたものか……。拙者はイレイナ殿の腕に回したまま胸に手を当てて考え――ピコン！ すぐに思いついたでござる。

「だいぶお疲れのようでござるな」

「ええ。入国するまでの疲れが1割、入国してからの疲れが9割とあったところですね」

「大丈夫でござるか？ おっぱい揉むでござるか？」

「……いきなり何言ってるんですか」

「モミジの桃の実モミモミして良いでござるよ」

「だから何言ってるんですか……」

おかしいでござる。確かどつかの国の偉い人がおっぱいでストレス緩和できるのことを言ってたはずでござるが、あれは嘘だったの
でござろうか？ イレイナ殿、めちやくちや引いてるでござる。

逆にサヤ殿はこれでもかと悔しそうな様子。

「……ふっ」

「きいー！ー！ なんですかその勝ち誇った顔はあー！」

「イレイナ殿は、ちよつとえつちな女の子が好みでござろう？」

「いや、モミジさんはえつちというか……下品？」

「なんとっ！？」

「ぶっぶっぶっ！ やっぱイレイナさんは、ぼくみたいに落ち着き
のある子が好きですよね？」

「サヤさん。鏡って見たことあります？」

「ひどいー！」

下品…下品かあ……。下品なのかあ…。ちよつと小悪魔な妹ポジ
ション狙ってたけど、もしかしてアムネシア殿とかシーラ殿とかにも
下品って思われてたのかな…。

やべっ、涙出てきたでござる。

「あ、泣いた。イレイナさんが泣かした」

「ええっ！？ちよつ…モミジさん？」

「ひぐ…ぐすん……」

「だ、大体！ あなた初めて会った時はもう少しお淑やかだったじや
ないですか」

「猫を被ってたでござるよ。にゃんにゃん♪」

ここはいつそ切り替え、年下という部分を活かして別の属性にクラ
スチエンジでござる。

腕を絡めたまま、上目遣いで両手を猫の手にして猫ちゃんのモノマ
ネ。

待って今の拙者めちやくちや可愛いのでは！

「うわ…あざとい」

「サヤ殿も一緒にやるでござる。たぶんイレイナ殿の性癖に刺さるで

「ぎぐるー！」

「……。あ、はい。そつすね」

「いやこれ絶対面倒くさくなってますよモミジさん」

「でも嫌がってはいないでござろう？」

「普通に嫌がっているの分かりませんか？」

「嫌よ嫌よ好きのうちでござる！　つまりイレイナ殿は拙者のこと好き！」

「ポジティブの化身ですかあなた」

「褒めてもらえた！　やったー！」

嬉しさのあまり、さらにイレイナ殿の左腕にほっぺをすりすり。拙者の匂いを擦り付けるでござる。他の女が寄ってこないように。

「何度も言ってますが離れてくれませんか」

「えー」

「えー、じゃなくて」

「……サヤ殿が離れたら拙者も離れるでござる」

「え、死が2人を別つまで離れる気ありませんけど？」

「重おつも……」

「愛の重さなら拙者も負けないでござるよ。なにせ拙者、今流行りの過重力女子でござる」

「どこの界限の話ですか。対抗しないでください」

もう一度、疲れたようにため息をこぼすイレイナ殿は大丈夫でござろうか。ため息を吐くと幸せが逃げちやうでござるよ。

まあ、拙者が末永く幸せにするので何も問題無いでござるが。

「とりあえずほうきを飛ばして来たのでお腹空きました。お2人も、どこか良いお店にでも連れて行ってください。今来たところとか言ってみましたけど、どうせ何日か滞在していたんでしよう」

「それでは！　この炭の魔女、サヤにお任せを！」

「はい。お願いします」

イレイナ殿はサヤ殿にニコリと笑いかけたでござる。……羨ましい。

そんな気持ちでイレイナ殿の横顔をまじまじ見ていると、サヤ殿が

拙者を見る。そして、

「……ふっ」

勝ち誇ったように唇の端を上げたでござるよ！　ぐぬぬ……！

悔しさのあまり小さく歯軋りをする拙者は、それを隠すように組んだイレイナ殿の左腕を少しだけ強めに抱き寄せるでござる。

いくら相手がサヤ殿と言えど、拙者以外の女の子を見ちやイヤでござるよお。

「どうしました？」

「むう……なんでもないでござる」

「うん？」

「サヤ殿。どちらのお店にイレイナ殿を連れて行く気でござるか？」

「うん色々考えたんですけど、やっぱりママさんのお店が良いかなって」

「ああ、それなら安心でござるな」

ママさんのお店ならもうすぐそこでござる。味も絶品だし、カノーリもあまり食べられるものではないので、イレイナ殿も喜んでくれるはず。

いくらお祭りです位になって売り上げが伸びたとはいえ、昨日の今日で引越したわけではないでござろう。

それならと、拙者達はイレイナ殿の腕を引いてママさんの店に向かうでござるが……

「あの……ここですか？　空き家みたいですけど」

「……………」

ママさんの店、テナント募集中になってるでござる。……マジかな。外から窓越しに中を覗くと、綺麗さっぱり片付いてるでござるな。

一瞬場所を間違えたかとも思ったでござるが、なんだかんだでこの国に来てから祭りが終わるまでの約1週間通い続けた場所。周囲を見回せば、普通に見慣れた風景でござる。

「ええ……」

「昨日あいさつした時は普通にありましたよね？」

「然り。どこ行っちゃったんでござろう」

まあ、奥さんの菓子パン屋さんに行けば行方くらいは分かるでござろうが、今はイレイナ殿の空腹を満たすことが先決でござる。

ならば、と拙者は1つ思いついたでござる。

「拙者、良いお店知ってるでござるよ。2人が良ければ行ってみたいでござる」

テラス席のパラソルが作る日陰の下で、拙者達は円形のテーブルに置かれたメニュー表を眺めるでござる。

拙者はグラントメニュー——所謂いつでもあるメニュー。

イレイナ殿はドリリンクメニュー。

サヤ殿は期間限定メニュー。

「ふむ。拙者は決めたでござる」

「あれ？ こっちのメニューにモミジさんが好きそうなありますよ。ほら」

「あつ、本当だ。迷うでござるな」

「ぼくと半分こします？」

「うーん……もう少し考えてみるでござる」
「……………」

「うん？ どうしたんですイレイナさん？」

サヤ殿の声にメニューからイレイナ殿へ視線を移すと、彼女は拙者達を交互に見ていたでござる。

戸惑ったようにお口が半開きになってるのが可愛いでござるな。

あのお口食べたい。吸いたい。飲み込みたい。

「2人とも普通に仲良いじゃないですか」

「嫉妬でござるか？」

「違います」

即答されたでござる。ぐすん。

「てつきりピリピリした関係だと思ってました」

「なんだかんだで1週間くらいずっと一緒にいましたしね」

「お祭りでのアピールタイムの練習はめちやくちや大変でござったな」

「ですね。最初なんてモミジさん、切ったイチゴの果汁で真っ赤になっちゃいましたし」

「それはサヤ殿が果汁が飛ぶことを想定してなかったからでござろう。洗濯大変だったでござるよ」

「あはは、すみません」

「まあ…拙者が自分に飛ばないよう切れば良かっただけでござるが」

笑い合う拙者とサヤ殿は、そのタイミングで注文も決めたでござる。イレイナ殿に目配せをすれば、頷いてくれる。

というわけで、店員さんにご注文。

「お2人はお祭りに参加できたんですね」

「何故か楽しむ側じゃなくて、楽しませる側に回っちゃったけどね」

「……いいなあ」

「いや、わりと本当に大変でござったよ。過重労働とはあの事でござるな……。労働ってマジクソでござる」

「あ、それに関しては私も同意見です」

「ダメですよ。生きるということは働くことです。2人とも、ぼくを見習ってください」

そういえば、この3人の中で唯一サヤ殿だけはちゃんと就職してるでござるな…。意外なことに。

「生きるということが働くことなら、協会で働くのって矛盾してないでござるか?」

「どういう意味です?」

「だって、結構命懸けの仕事があるでござろう? 生きる為に働くのに、その働く場所で死ぬ可能性があるでござる」

「あつ、確かに」

「サヤ殿く。ニートは良いでござるよお。今日が楽しければもう最高でござる。明日のことは明日考えれば良いでござるよ」

「……………」

『今日』の積み重ねが『今』であり『明日』でござる。今を大切にで

きない者に、明日はないでござる」

「なんか良いこと言ってるように聞こえますけど、結局のところそれって無計画なことですよね？」

「イレイナ殿、痛いところを突いてくるでござるな」

「でも、共感できる部分はあります」

「おお！ それは嬉しいでござる。ちよつとくっついて良いでござるか？ 唇とか」

「キモいです無理です拒否します」

「ぐすん……」

椅子ごとイレイナ殿にくっつくこうとしたら、椅子の脚を蹴られたでござる。

でも、何故でござろう……。このぞんざいな扱いに、拙者の心臓は一瞬ときめいたでござるよ！

ちよつと言い知れない新感覚に体温を上昇させ息を荒らげる拙者に、イレイナ殿は氷のように冷たい眼差し。ふっ、今の拙者には逆効果でござるよ。むしろ体温上がっちゃう！

「話を戻しますが、お祭りに参加って具体的に何したんです？ 何をしたらイチゴの果汁で真っ赤になるんですか？」

「あつ、気になるでござるか？ それならこれを読むでござる」

拙者は鞆からイレイナ殿に貰った日記帳「武士の旅々」を取り出して渡すでござる。

それを受け取った彼女は、何かを感じ入ったように目を細めてページを開く。たぶん拙者の愛かな？

ついでに、サヤ殿にはドヤア。

「あの日記帳、少し前にイレイナ殿から貰ったでござる。しかもイレイナ殿の直筆付きで。羨ましいでござるか？」

「この三角帽子、イレイナさんに貰ったんですよ。あと首から提げてるネックレスあるでしょ？ あればくとお揃いです」

「マウント女子は嫌われるでござるよ」

「どの口がほざいてんですか」

バチバチ。拙者とサヤ殿の間で不可視の火花が散る。

睨み合う2人と日記帳を読み込む1人。そんな端から見たら奇妙のテーブルに、明るいウエイトレスさんの声と共に美味しそうな料理が乗せられたお皿が置かれるでござる。

「おおー。美味しそう！」

「然り。結構楽しみにしてたでござる」

お皿に乗せられ、カラフルなソースに彩られたものにサヤ殿は無邪気に目を輝かせているでござる。可愛い。

拙者が2人を連れてきたここは、デザートバーガーのお店でござる。

ハンバーガーに使われるバンズはそのままでござるが、その間に挟まれているのはお肉ではなく、果物と生クリーム！ 拙者はイチゴとあんこで、サヤ殿はチョコバナナでござるな。

「本当にあんこ好きですね」

「はい！ 大好きでござる！」

「あはは…。イレイナさん、お食事来ましたよ」

「あつ…はい。すみません」

「そんなに拙者の日記面白いでござるか？」

「いやその…：…なんか尽く私こいつの知ってるお名前があつたもので」

さすがイレイナ殿！ 顔が広いでござる。

そういえば、以前アムnesia殿と再会した時にもイレイナ殿にお世話になったと言ってたでござるよ。ちよつと女の子を引っ掛けすぎでは？

「色々あつたでござるよ。——本当に、色々」

「そうみたいですな」

ニコリと拙者に笑い掛け、イレイナ殿も自身の目の前に置かれたレアチーズブルーベリーバーガーを見て…：…あ、顔顰めたでござる。

「これは…：…あまりにも砂糖の暴力が過ぎますね」

「この国の主食でござるよ。ね、サヤ殿？」

「はい」

「そういえばサヤさん、少し顔が丸くなったような…：…」

「嘘っ!?!?えっ、マジですか!?!?」

言われてみれば、初めて会った時に比べて少しサヤ殿の顔が丸みを帯びたような気がするでござる。ずっと一緒だったから気付かなかったでござるよ。

「じゃ、じゃあ！ モミジさんはどうなんです!?？ほとんどぼくと同じ食事してましたよね！」

「モミジさんは変わらないですね」

「拙者、体質的に太らないでござるよ」

「そんなあ〜……」

両手でほっぺを覆って肩を落とすサヤ殿。ちよつと気になったの
で手を伸ばして摘み、引つ張ると……おお！ 伸びるでござる！ 楽
しいー！

フニフニほっぺで遊んでいると、ぷくう。膨らみましたでござるよ。
そして、自身が注文したチョコバナナバーガーをずいつと拙者の前
へ。

「うう…モミジさん、良かったら半分食べてください」

「よろしいのでござるか？ ここのお店、あんこ争奪祭りで2位だっ
たお店でござるよ」

「だって太っちゃいますし……」

別に少し丸くなったというだけで、太ったという印象はないでござ
るが…。わりと生き恥を晒し尽くしていたサヤ殿も、やっぱり女の子
でござるな。

「あらア？ あなた達、こんなところで何してんのよオ」

「おろろ？」

「あ、ママさん」

サヤ殿のバーガーをどうしようかと考えていると、拙者達に掛かる
クセ強めのオネエ言葉。

振り返れば、そこには血管の浮きまくった逞しい両腕に食材が山ほ
ど入った紙袋を抱えているママさんがいたでござる。相変わらずフ
リルだらけのウェイトレス服を着て。うわ、イレイナ殿ドン引き。

「もオ出国したと思ってたけど、もしかしてまだ滞在するつもりなの
かしらっ？」

「いや、ちよつと想い人に再会したから観光案内中でござる」

「エツ!!? 想い人!!? 確かモミジちゃんとサヤちゃんの好きな人って同じ人よね!」

ママさん、大興奮。平然とテラス席に残っていたもう一つの席に腰を下ろしたでござる。

「然り。紹介するでござる。こちら、イレイナ殿でござる」

「よろしくウゥ! 2人にはこの間のお祭りでほんつつつとうにお世話になったよオ」

「……あ、はい。どうも」

「あらやだ! 2人に負けず劣らずバチクソ可愛いじゃないのもオ! もしかして緊張してるのかしらア?」

見た目のインパクトがブチ上がってるママさんに、イレイナ殿は珍しくたじたじでござる。ちよつと困ってるイレイナ殿は貴重でござるな!

記憶を司る脳の部位、海馬に刻み込んでおくでござる。うへへ。

「あ、聞いてほしいでござるよママさん! サヤ殿が太るのを気にしてこのチョコバナナバーガーを半分食べてほしいって言ってきたでござる」

「そうなのオ! ダメじゃないサヤちゃん! その年でそんなの気にしちゃうダ・メ!」

「うっ……」

「アタクシのようにナイスバディになれないわよ?」

「いや、ママさんのそれはナイスバディじゃなくて筋骨隆々だと…」

「エエ?」

「そ、そういえばママさん! お店が無くなってましたけど、もう引越したんですか?」

「再婚してあつちの店でカノーリ作る事にしたのよ。そんな事よりサヤちゃんのは・な・しー!」

「……モミジさん。あの狂気の産物は一体?」

「見た目はアレでござるが、問題無く良い人でござるよ」

「……見た目はアレですけど」

「然り。見た目はアレでござるけど」

人を見た目で判断するのは良くないでござるよ。いやまあ、見た目がこんなニヤバければ中身も大体ヤバいでござるが。

ママさんに問い詰められて気まずそうにしているサヤ殿を尻目に、イレイナ殿は拙者の耳元へ口を寄せてくるでござる。キスでござるか？　ちゅーでござるか？　接吻でござるか！　ヘイカモン!!？

「モミジさん、どうしてこのお店知ってたんですか？」

「さつきも言ったでござろう？　このお店、あんこ争奪祭りです。2位だったでござる。ちなみに拙者とサヤ殿はあのママさんと一緒に出場して3位でござる」

「それはさつき日記で読みました。——でも、それだけじゃないでしょう？」

「……キスしてくれたら教えてあげるでござるよっ」

「イヤです」

「いけず」

ぷくつとほっぺを膨らまして抗議するでござるが、イレイナ殿は拙者を静かに見据えるだけ。

「あなた、意外と隠し事多いですよね」

「そうでござろうか？」

「ええ。初めて会った時もそうでした」

「思い出すでござるな。あの熱い夜のこと」

「紛らわしい言い方しないでくれませんか？」

「ちよつと待ってください！　なんですかその初めての熱い夜ってえ!!？」

「ほらこういう事になるからあ……」

瞬時に疲れた顔になるイレイナ殿でござる。大丈夫？　おっぱい揉む？

「別に隠してるわけではないでござるが……」

今度は拙者がイレイナ殿の耳に口を寄せるでござる。

うわ、イレイナ殿って耳の形まで綺麗でござるな。まああの夜に舐め舐めしたので知ってるでござるが。

「——サヤ殿と一緒に食べに来たかっただけでござるよ」

ちよつぱり、自分の顔が赤くなるのが分かるでござる。照れちゃうでござるな。こういう事を改めて言うのは。

流石に本人に伝えるのは恥ずかしいので、それだけ言ってイレイナ殿の耳元から顔を離す。一応、サヤ殿が筆舌に尽くし難い表情でこちらを見ているというのもあるでござる。その顔は年頃の女の子がして良いものではないでござるよ？

「だから、先ほどイレイナ殿に会えたのは色々な意味でラッキーでござったよ」

それだけはサヤ殿とママさんにも聞こえるように言って、サヤ殿にドヤア。イレイナ殿との内緒話、羨ましいでござるか？ 羨ましいでござるな。

ギリギリと齒軋りして睨んでくるサヤ殿を拙者も顔面で煽りつつ、イチゴあんこバーガーを一口。

おお！ 中にヨーグルトソースが入ってるでござるな。意外にもあんことヨーグルトの相性は良いでござる。美味！

勝者の貫禄を演出しつつパクパクバーガーを食べていると、イレイナ殿がナイフでサヤ殿のチョコバナナバーガーをカット。さらにフォークで一口大に切ったものを彼女の口元にお届け。

……これはもしや？

「ほら、注文したものを食べないのは作ってくれた方にも失礼ですよ」

あ…あーん、でござるよ!?？イレイナ殿がサヤ殿にあーんしてるでござるよ!!？拙者も妄想の中でしかやってもらったことないの!!
?

「……………」

突然のことに目を丸くしているサヤ殿。

「……………」

めちやくちや羨ましそうにその光景を指を咥えて凝視する拙者。

「……………ふっ」

勝ち誇った笑みをこれでもかと拙者に向けるサヤ殿。

「……………っ」

刀の鯉口を切り、ついでに自身もキレる拙者。

サヤ殿……お主は生かしておけぬ。生かしておけぬでござるよ！

「モミジさん。着席」

「ずるいでござる！ サヤ殿ばかりずるいでござるよ!!?」

「ぷっぷっぷく。羨ましいですか？ 羨ましいですよね？ だってイレイナさんからのあーんですもんね？ 羨ましくないはずがないですよね?」

「……殺すか」

「煽り耐性低すぎませんか?」

先ほどとは逆に煽り返してくるサヤ殿に、拙者は顔真っ赤でござる。法律なかつたら殺してるレベルでござるよ。

「もういいでござる！ ママさんに言いつけてやるでござる!!?」

「しかもキレ方が小さい子どもと同じ!?」

「いや、アタクシここで全部見てただけどオ」

「ママえもくん！ サヤ殿がいじめる〜!」

「あなた自分のこと棚上げにするの大得意ね」

なにやら拙者が悪いみたいな雰囲気が出来上がっているでござるが……。それでも楽しく賑やかに、武士と魔女2人とママ(おっさん)の濃いメンバーが織りなすお食事は、2時間ほど続いたでござる。

夕方。陽も暮れかけた頃、拙者とサヤ殿はお菓子(の国の門前で朝と同じようにイレイナ殿の腕へしがみついている。

「拙者、イレイナ殿と離れたくないでござる」

「ぼくも、イレイナさんと離れたくありません」

「私はさつさと2人に離れてほしいです」

「またまた〜」

「本心ですよ」

そんな……ありえないでござるよ……っ！

「えっイレイナ殿は離れてほしい……でも拙者は離れたくない……この感情はどうすればいいでござるか?」

「胸にしまっておいてください」

「うう…あー…うー…あー…あー…はっ！ イレイナ殿の左腕を斬り落とせば良いのでは！」

「いや絶対ダメなのは」

「でもそうすれば拙者はイレイナ殿と一緒にいられるし、イレイナ殿も拙者に離れてもらえなくていいよ」

「私の左腕が無くなってるじゃないですか」

「安心するでござる。ちゃんとサイズぴったしの指輪を薬指に着けてあげるでござるよ」

「サイコですか」

「そんな最高サイコウなんて！ 照れちゃうでござるよ！ もう！」

「あなたの聴覚キコウが臨終してます？」

「やっぱりイレイナ殿は拙者のこと大好きでござったか。まあ知っていたでござるが!!？」

「こーら、モミジさん。あまりイレイナさんを困らせちゃダメですよ」

「イレイナ殿、困ってるでござるか？」

「むしろ困ってないと思ってるんですか？」

「拙者イレイナ殿がお困りであれば、いつでも駆けつけるでござるよ！ たとえ火の中 水の中 草の中 森の中 土の中 雲の中 あのコのスカートの中であろうとも」

「ちようど入国してきた可愛らしいフレアスカートの女性旅人さんを指差して拙者は力強く告げるでござる。」

「ちなみにあのコのスカートの中で困ってくれるの希望でござる」

「……は？ キモ」

女性旅人さんから冷ややかな一言。こうかはばつぐんでござる。

「うわあああん！ キモいって言われたでござるううう！」

「安心してくださいモミジさん。あなたはキモいです」

「そのフォローはなんか違うでござるよ!!？」

えっ、拙者ってキモいの？ 泣くでござるよ。もう泣いてるけど。甘いですねモミジさん。あなたのイレイナさんへの愛はその程度ですか？」

「むっ…というと？」

「ぼくはイレイナさんのスカート中が良いです！」

「サヤさんも負けず劣らずキモいですね」

「負けないでござるよ！ だったら拙者はイレイナ殿のパン痛い!!？」

「どうやらパンチがご所望のようで」

「ああっ！ ぼくのイレイナさんの右腕があ!!？」

「もうやだこの2人……」

イレイナ殿が本日何度目か分からない疲れた表情になるでござる。旅って疲れるよね。

ま、おふぎはこれくらいにして……。拙者はサヤ殿と領き合い、同時にイレイナ殿から離れるでござる。これぞ平和的解決。

そして、2人揃ってイレイナ殿の前に並び、拙者は左手、サヤ殿は右手の小指をそれぞれ差し出すでござる。

「……………」

拙者達の意図を察したのでござろう。イレイナ殿は躊躇いがちにゆつくりと絡めてくれるでござる。

「……お別れの言葉は、必要ですか？」

「いえ」

「必要ないでござる」

拙者達は旅人。風の向くまま気の向くまま、どこからともなく流れる花びらのようなものござる。

だから、再会できなければそれまで。再会できればヒヤッハーでござる。

ただそれでも、また会いたいと願うこの気持ちも本物だから。

折衷案として、この小指のおまじないに託すでござるよ。次の可能性を。

拙者達は無言で。しかし笑顔で。きつとこの時、同じ想いを心の中で呟いた。

——また会えるときまで、さようなら。

仮釈放のリテラチュア ブチギレボブカット物語 幾

夏の茹だるような炎天下の中、時おり吹く温い風に長い黒髪ポニーテールを靡かせる女の子が1人、とある国に向けて歩いていました。水色の着物に紺色の袴。その上には着物が透けて見えるほど薄く、雪の結晶が刺繍されたローブ。揺れる袴から覗く白い足元は裸足に草履と涼しげです。

本来の年齢より幾らか幼く見える童顔を暑さに歪め、ちよくちよく腰から抜いた刀の刃を柔らかくそうなほっぺに当てて「ひんやりでござる」と呟いております。

さてさて。では、そんなちよつぴりおかしな、しかし大変キュートでラブリーでプリティイーな武士とは一体誰でしょう。

そう、拙者でござる！

このクソ暑い中、やっと辿り着いた国の名前は『収穫のガーベラ』。少しばかり面白い国民性の国でござる。

なんでも、新しいものが大好きとのこと。

どうやら、約1週間ごとに国の中で新しいブームが到来するらしいでござる。1週間で飽きられるものをブームと呼ぶのかどうかという疑問はあるでござるが、郷に入りては郷に従え。

小っちゃいことは気にせず、その国を楽しむのが旅人の作法でござるよ。

「今はお人形さんがブームでござろうか？」

特に問題なく入国できた拙者が道行く人を見回せば、多くの国民が肩にお人形さんに乗せて歩いているでござる。しかも、そこそこ精巧に作られているやつ。特に髪なんて凄まじいでござるな。夜な夜な伸びてそうでござる。是非匂いを嗅いでみたい。

ちなみに拙者、昔から『人形』というものがどうにも苦手でござった。

理由は上手く言語化できぬが、恐らく人の形をしているのに表情が常に同じというのが不気味だったのでござろう。

まだ小さい頃——今でも小さいでござるが年齢的に——内弟子の誰かが拙者にお人形さんをプレゼントしてくれたことがあったでござる。まあ、大体女の子の玩具と言ったらお人形さんでござるな。これは案外どこの国でも同じでござる。

とりあえず、首だけ腕いで捨てた。

首が無くなればもう大丈夫でござった。今でも拙者の生家の自室に大事に飾つてあるでござる。閑話休題。

「ふむ……。男性にも人気でござるか」

こう言つちや悪いでござるが、男がドレスを着た人形を肩に乗せてメロメロしてる光景は奇妙の一言に尽きるでござる。どうして男がメロメロしてる顔つて気色悪く見えるのでござろう？

あんまり長居したい国ではないでござるな。まあ、このお人形さんブームも1週間経てば過ぎ去るのでござろうが。

とりあえず適当に観光しよ。

そうと決まれば、まずは聞き込みでござるな！ ガイドに書いてないけど良い場所つて、現地の人しか知らないものでござるからな。

「あそこの人形屋が1番だね！」

「あの人形屋かなくやつぱり」

「あの人形屋しか勝たん」

どうやら現在の観光名所は人形屋さんらしいでござる。正気か。

(でもまあ郷に入りては郷に従え、でござるか……)

気は進まないでござるが、行ってみなければ分からないものもあるでござる。もしかしたら、拙者の性癖にぶつ刺さる素晴らしいお人形屋さんかもしれないでござるし。

なので、教えてもらったお人形屋さんとやらに來たでござるが……

「これはお店でござるか……？」

明らかにボロ倉庫でござる。なんかね、小さい男の子達が秘密基地として不法占拠した感じの。うん。そんな感じ。

もしかしたら場所を間違えたかも、と建物を注意深く見ると、看板

らしきものがあつたでござる。そこには『人形差し上げます』と。夕
夕でござるか!?!?

ついでに“Open”と表記されたプレートがお店のドアノブに
引っ掛かっているでござる。つまり営業中?

「ご、ごめんください」

戦々恐々と扉を開けて入店すると——バツ! 店内に所狭しと
並べられた人形が一斉に拙者を見たでござる。怖っ!!?

『やあー、いらっしやい』

「ひうつ!!?」

入店した瞬間に退店したくなった拙者へ、お人形さん達の口が一斉
に動いてお出迎えの言葉。だから怖いでござるよお……ぐすん。

涙目になりながらも、拙者は今の声に違和感を覚えたでござる。声
自体は1つしか聞こえなかったでござるよ。

「ど、どなたかいるでござるか?」

「うんー、ボクだよ」

すぐに逃げられるよう刀の柄を握りながら店内全体に問いかける
と、カウンターの奥からピヨコンと1人の女性顔を出したでござ
る。

まず目を引くのは、異常なまでに白い肌。健康的というよりは、ほ
とんど太陽に当たらず引きこもっていたせいという印象でござるな。

さらに伸ばしっぱなしの髪を乱雑に後頭部でまとめ、寝不足なのか
栄養不足なのか黒く落ち窪んだ目元。それに反してこれまた異常な
くらいキラキラした目。

身なりを整えればそれなりの美人さんでござろうが、彼女の優先事
項は他にあるようでござるな。総じて不健康そうという言葉がしつ
くりくる方でござる。

「あなた、人形は好き?」

「えっ……いや……」

「もし好きならどれでも持っていいよ? 好きじゃなくても、
これから好きになるかもしれないから持っていいよ。あ、もち
ろんお金はいらないよ。君の喜ぶ顔が見られればそれでOKさ」

「あう……」

「ちよつと待つてよく見たらあなた可愛い！　ねえ、嬉しい？　わたしのお人形貰えて嬉しい！？　良かったら喜ぶそのお顔もつとよく見せて！」

うわあ……ぐいぐい来るう……。人形と一緒にぐいぐい来るう。

拙者の可愛いお顔を見て唐突に興奮し出す女性にドン引きするでござるが、どうも察してもらえていない様子。むしろほっぺを両手で挟まれ、鼻と鼻がくつつきそうな距離でさらに顔をまじまじ見られ始めた。怖い怖い怖い！

「お、落ち着いてほしいでござるよー！」

「あらら」

彼女の肩を両手で押して、まずは距離を離す。勢い余つて唇奪われちやうところだったでござる。拙者はどちらかと言えば奪いたい派。

「もしかしてあなた、旅人？」

「然り。人形は嵩張つて荷物になる故、お気持ちだけありがたく頂戴するでござるよ」

「じゃあ尚更持つて行ってよ！」

「話聞いてる！？」

おかしいでござる……。あれでござるか？　はつきり『ノー』を突きつけないとダメでござるか。

確かに拙者の国の者は、『断らない国の人』として諸外国から舐められているでござる。

「あなたがいららないなら別の国に行った時にでも売っちゃっていいよ？　むしろ、そうしてくれた方が嬉しいんだ。ボクのお人形が他の国にいる誰かを喜ばせるなんて、想像しただけで心がポカポカするよ！」

「むう……」

「ちなみにボクが前暮らしてた国だと、ボクを作るお人形はそこそこ良い値段で売れてね？　その国の特産品になった程なんだよ。だから、あなたにとつても悪い話じゃないと思うんだ。どう？　もちろん後でお金を請求したりなんてしないよ？」

さて、どうしたものか。途端にここにあるお人形さんが欲しくなつたでござるよ。というか、今の話を聞いた直後からお人形さん達がお金に見えてきたでござるよ。

高く売れる人形がタダで貰える。拙者からすれば、次の国に行くまで少し荷物が嵩張るだけでござる。メリットとデメリットの天秤は、確実にメリット側へ傾いてる。

でも、こんな上手い話があるでござろうか。流石に怪しい……。

「拙者、別にお人形に詳しいわけではござらぬが、そんな素人目から見てもお主が作るお人形は素晴らしい一品だということが分かるでござる」

「でしよでしよ？」

「国の特産品になるのも領ける。でも、どうしてそんな品をタダで渡してしまおうでござる？」

そこそこハッキリと疑問を呈すると、店主は一瞬目をまん丸にしたでござる。

でも、すぐに血色の悪い顔を変えて説明してくれる。

「さつきも言ったでしよ？ ボクは誰かの喜ぶ顔が好きなんだよ。ボクの作るお人形で誰かが笑顔になる。嬉しいって思ってくれる。それだけで、ボクはいつまでも頑張れるんだ」

「……………」

なんとというか——感動したでござるよ！ なんと清らかな人でござろうか！ 他人の喜びを自分のことのように思えるなんて、素晴らしい人格者でござる！

「だから、はい！ 他の国に行った時に、質屋に入れちゃつてよ。出来れば、人の出入りが多いところが良いな。色んな人達にボクのお人形を知ってほしいから」

「承知したでござる。拙者、必ずやこのお人形を質屋に売り飛ばすでござるよー」

「うん。よろしく」

差し出されたのは綺麗な白髪のお人形。受け取る時に軽く触れた髪は、あまりにも滑らかでござる。心なしか、恋する乙女のような匂

いまでするでござるな。ずっと嗅いでたい。

拙者はその人形を傷付かないよう予備の着替えで包んで、大事に鞆に仕舞うでござる。

「あ、そうだ。化粧道具はお持ちでござるか？」

「うん？ それはあるけど、なんで？」

「ちよつと貸して欲しいでござる」

すると、彼女は不思議そうな顔をしながらカウンターに潜り込み、もう一度顔を上げるとその手には化粧道具の入った木箱が握られていたでござる。そこに置いてあるの？

意外なところから出てきた木箱を開けると……うつ、ちよつとカビ臭い。たぶん箱のせいだでござるな。化粧道具自体は問題無く使えそうでござる。

拙者はまずチューブ式の下地クリームを手に取り、店主を手招き。少し顔を寄せてもらう。本来は座ってやるものでござるが、残念ながら椅子がないので立ってやるでござるよ。

「前髪を上げておでこを出すでござる」
予想通りのノーメイク顔に、まずは下地を塗り塗り。血色悪いわりには化粧乗り良いでござるな。

下地が出来たら今度はパウダーファンデーションで軽く顔色に明るさをつけるでござる。ムラができないよう丁寧にまんべんなく。

拙者くらいの年齢であればこれで終わりにしても問題無いでござるが、悲しいことに彼女の顔色の悪さはそれだけでは隠せない様子。この上から、目元を中心にアイラインやチークを使って濃くならないように隈を目立たぬようカバーするでござる。

実家にいた頃にママ上のお化粧をしてあげた経験があったので、10分強くらいでなんとか完成。うん、やっぱり拙者の見立ては正しかったでござるよ。

「美人さんになったでござる」

「うえ？ ……これがボク？」

拙者は自分の手鏡で彼女の顔を映し、見せてみる。鏡に映る自分の姿に、大層驚いたようでござる。

「せめてものお礼でござる。そちらの方が素敵でござるよ」

元々の素材は良いので、そこを活かしただけでござるが。

こんな小娘でもできるお化粧でそれだけ美しくなるのだから、本格的にやればモテモテでござろう。

最後に拙者は彼女と笑みを交わし合い、お店を出たでござる。

時刻はお昼時を少し過ぎた頃。そろそろお店が空き始めた頃でござろう。

拙者は空腹感を訴えるお腹の音色に羞恥で少し顔を赤らめながら、この国の飲食店ガイドブックを片手に歩いでござる。

「ふむ、肉か魚か…もしくはパンもアリでござるな」

新しいもの好きの国民性というだけあって、各種様々な料理があるでござる。

料理というのは、飽きたと思ってもふとした時にまた食べたくなるもの。そのせいか、新しいもの好きと言っても飲食店はあまり廃れないようでござる。

どのお店も美味しそうで迷っちゃうでござるな。こんな時は、次に目についたお店に入ると決めていってござる。

その場その国で一期一会の出会いをするのは、食事と同じ。人も食事も一期一会というのが旅人の基本でござる。

さてきて。どこにしようかな。

(…うん？ あの後ろ姿は…)

現在ブームのお人形を肩に乗せた人々の間からお食事処を探していると、見覚えのある人物を発見。

柔らかかそうで良い匂いがしそうで実際いい匂いがするショートカットの白髪。シンプルながらも髪色と対比してよく映える黒色のリボンで飾りつけていってござる。そしてなにより白を基調としたローブ。

拙者が拙者を拙者と呼ぶようになった理由の彼女がいるでござるよ！

(でもなんか落ち込んでる?)

肩を落として俯きしよんぼりした姿に、拙者は少し不安を覚える。周囲の人達は自身の人形に夢中で気付いてないようでごさるな。

俯いている彼女と人形に夢中の通行人。この2人がごつつんこするのほまあ……当然の帰結でごさる。

「痛っ！」

ぶつかつた相手は不幸にも大柄な男性。しかし態度そのものは紳士的であり、尻餅を着いてしまった彼女に謝罪を一言述べて歩き去っていく。

しかし彼女は立ち上がらず、座り込んだままでごさる。

もしや腰を痛めたでごさろうか？ 拙者は冷たい汗を背中に感じながら駆け寄るでごさる。

「アムネシア殿！ 大丈夫でごさるか!?!？」

「ほえ？」

なんだか知ってるものよりも少々幼い声で拙者を見上げるアムネシア殿。……アムネシア殿？

あれ？ 前会った時よりも幼くなったでごさるか？ ほんのちよつぴりロリ を感じるでごさるよ。

「モミジさん……?？」

「あれ？ もしかして——アヴィリア殿？」

よくよく見れば彼女はアムネシア殿ではなかったでごさる。以前アムネシア殿と再会した時に顔を合わせた、彼女の妹。名前はアヴィリア。

（あれ？ でも確か、アヴィリア殿の髪はもつと長かったような……?）

旅をする上で邪魔になって切ったとか？

他愛もない疑問に首を傾げる拙者を見上げるアヴィリア殿の目に……涙が……どんどん涙が溜まっていくでごさるよ！ なんて!?!？」

「うわああああん！ モミジさああああん!!？」

「ごっつー！」

そして遂には拙者の腰に抱き着いて泣き出す始末。さり気なく彼女の可愛らしいおでこが鳩尾に刺さり……悶絶でごさるよ……。

お昼食べる前で良かったあ……。

拙者の昼食兼、アヴィリア殿を落ち着かせる目的で近くの喫茶店に入店。

とりあえず今は食い気よりも彼女が泣いていることの方が重要なので、りんごジュースを2つと甘いケーキをご注文でござる。確か甘いもの好きだったよね。

「まずは久し振りでござるな。お元気で……は無いようでござるが」「はい……無沙汰なのです」

ぐしゅぐしゅと鼻を鳴らしながらも、アヴィリア殿は行儀良く一礼。口調も相まって普段は年齢よりも大人っぽく感じるでござるが、今は泣いたせいで目が腫れてむしろ幼く見えるでござる。

アムネシア殿の妹さん、アヴィリア殿。元は『信仰の都エスト』の正統騎士団という治安維持組織に属していたでござるが、紆余曲折あつて今はお姉さんのアムネシア殿と共に短期バイトで食い繋ぎながら旅をしているでござる。

実を言うと拙者、以前アムネシア殿と再会して紹介してもらうよりもさらに前に、一度会ったことがあるらしいでござる。

「らしい」というのは、アムネシア殿と初めて会うより1ヶ月前に訪れた『信仰の都エスト』でのことだったから。

あそこは国民以外が出国する時、エストに関する記憶を全て消されてしまうでござる。つまりその消された記憶の中に、正統騎士団時代のアヴィリア殿との交流があつたということにござるな。

再会した時にサラツと本人から説明されたのでござるが、拙者は文字通り記憶にござらん。あの時は日記もつけていなかったなので、記録もござらん。

しかし、どうにも拙者はアヴィリア殿に懐かれている様子。一体拙者はエストで彼女に何をしたでござる……？

注文したケーキが来たので、拙者は「まずは食べるでござる」とおすすぬ。悲しいことがあつた時は、好きなものを食べるに限るでござる。

るよ。

ちびちびと小動物のように食べるアヴィリア殿に頬を緩ませつつ、拙者もりんごジュースを一口。

そして彼女が落ち着いたのを見計らって、優しく言葉を投げかける。

「アムネシア殿はどうしたでござるか?」

「お姉ちゃんなら今頃宿で寝ているのです」

「寝坊でござるか?」

「違うのです。夜のアルバイトだったから、朝帰りだったのです」

「夜のアルバイト!?」

なんでござるか夜のアルバイトってえ! えっちなお仕事でござるか!? オトナなお仕事でござるか!? ダメでござるよアムネシア殿!

「……一応誤解のないように言っておくと、いかがわしいお仕事ではないのです。ただの夜間警備なのですよ」

「モチロンワカッテルデゴザルヨ」

「目が泳いでいるのです」

ジト〜とジト目で見られてしまい、思わず目を逸らす。これに関しては若干紛らわしい言い方をしたアヴィリア殿にも原因があると思うでござる。

しかし、今のやり取りで少しだけ元気を取り戻したことが分かったでござるよ。もう少しおしゃべりを続けるでござる。

「そういえば、髪切ったでござるな。アムネシア殿とお揃いで可愛いでござるよ」

「……………」

「アヴィリア殿…………?」

「う、うう…………」

えっ、なんかまた涙目になっちゃったでござるよ!? 地雷踏み抜いた?

「…て…ないの…………」

「え?」

「切って…ないので…」

「切っていないでござるか？」

「わたしは切っていないのです！ 宿で寝てる間に誰かに切られたのです！」

それだけ大声で叫び、アヴィリア殿はテーブルに突っ伏してまたも泣き出してしまおうでござる。ど、どうしよう…。

喫茶店にいた他の客からは、明らかに拙者が泣かしたみたいな冷たい視線を向けられる。いやまあ、確かに拙者の質問が原因だけ…。

てか、アヴィリア殿ってもっとクールな印象だったはずなんだけど、こんな風になってしまっただけでショックだったのでござろうな。髪は女の命でござる。

「な、泣かないでほしいでござる！ ほら、ケーキでござるよ」

「あーん…美味しいのです」

ケロツと泣き止んだでござる。食べ物の方は偉大なり。

「それで、いつ頃髪を切られたでござる？ もし良ければ拙者も犯人探しを手伝うでござるよ」

「本当ですか！！？」

「然り」

さすがにこんな状態の知人を放置する気にはならないでござるよ。拙者は安心させるように笑いかけ、りんごジュースを一口。

先ほどの質問に対する答えをアヴィリア殿に促す。

「いつ頃切られたのかは正確には分からないのです。クローゼットで寝てて、起きたらいつの間にか髪が無くなっていたのです」

「さも当たり前のように言ったでござるが、何故クローゼットで寝てるでござるっ！」

「それは…」

言い淀むように口をモゴモゴさせるアヴィリア殿。何か言い難い理由でござろうか。

「朝帰ってくるお姉ちゃんをビックリさせようと思って隠れてたのです。そうしたら、いつの間にか寝落ちしちゃって…」

え、なにその可愛い理由。

「モミジさん？ 鼻血が出てるのです」

「おっと失敬。のぼせてしまったでござる」

「外は暑いですもんね」

「……そうでござるな」

のぼせたのはアヴィリア殿の可愛さでござるが、話の腰を折らぬように合わせるでござる。

「ていうか、アムネシア殿を驚かせたいなら帰ってくる直前に隠れれば良かったのでは？」

「はっ!!?……それは盲点だったのです」

「マジでござるか」

この子ちよつと天然でござるな。そんなところもきゅんきゅんポイントでござるが。

「アヴィリア殿の髪のこと、アムネシア殿は知ってるでござるか？」

「知らないはずなのです。もしこんな姿を見せたら心配かけてしまうので、お姉ちゃんが帰ってくる前に急いで宿を出たのです」

「いやそれは尚更心配すると思うでござるが」

「大丈夫なのです。ちゃんと『探さないでください』と書き置きも残しておいたので」

それもはや家出じゃね？ アムネシア殿から見たら。

それでいいでござるか？

「お姉ちゃんは優しいから、きつとわたしのこんな姿を見たら悲しんでしまうのです。——わたしはもう、お姉ちゃんを悲しませない心に誓っているのです」

「固い決意を全面に出したキメ顔してるところ悪いでござるが、恐らくアムネシア殿の性格からして、こういう時に頼ってもらえない方が悲しいと思うでござるよ？」

「でも夜勤明けで疲れているお姉ちゃんを頼るのは気が引けるのです」

「それは確かに」

基本的にこの姉妹の2人旅は国で短期バイトをして路銀を稼ぎ、別

の国へという流れでござる。

しかもアムネシア殿は魔法が使えないので、バイトに採用される確率も低い。以前再会した時もそうでござったが、滞在中はほぼ毎日シフトを入れてたでござる。

つまり、アヴィリア殿は自身の髪を切った犯人を自分1人で探さなければならぬ。……いや、拙者もいるから2人でござるな。

拙者はもう一口りんごジュースを口にしようとして、空になっていたことに気付いたでござる。

この店は何故か客が店員のところまで行つて注文しないといけな
いので、アヴィリア殿に何が飲みたいかを聞いてからもう一度注文す
る為に列へ並ぶでござる。

「グラスフェッド・バターコーヒー。深煎りフレッシュ少なめで」
「かしこまりました。こちらの席へどうぞ」

拙者の前の人が呪文のような注文をすると、店員さんがその人を店
の奥側へご案内。その方向を見ると2階へ行くための階段があつた
でござる。どうやら2階も喫食スペースになつてるようでござるな。

目についてパツと入った店でござるが、2階まで使うつてことはそ
れなりに繁盛しているお店の証拠。どうやら当たりのお店に来たよ
うでござるな。ラッキー。

「お待たせしました。ご注文をお伺い致します」

「えっと…グラスフィット…：…コーヒー？」

「グラスフェッド・バターコーヒーでございますか？」

「あ、それでござる。何か特別なコーヒーでござるか？」

そう尋ねると、店員さんは意味ありげに目を細めて笑顔に。

しかし、それもすぐに消して元の営業スマイルに戻つたでござる。

「グラスフェッド・バターコーヒーとは、当店自慢の看板商品でござい
ます。失礼ですがお客様、もしや旅人の方で？」

「然り」

「であれば、是非1度ご賞味ください。グラスフェッド・バターを混ぜ
たコーヒーはふわりとした豊かな風味が特徴です。普通のコーヒー
よりも格段に飲みやすく、シュガーやフレッシュとの相性もバツグン

でございます」

「なるほど。では砂糖増し増しのそちらを一つと、りんごジュースを一つお願ひするでござる」

「かしこまりました。一緒にバターシュトレンもいかがですか？」

「……いただくでござる。2個」

少し考えたでござるが、シューウインドウから見える美味しそうなシュトレンに拙者の理性は完敗したでござる。コーヒーには甘いお菓子が合うでござるからな。

看板商品というだけあって、席に待つまでもなくトレーに載せられて渡される。これはきつと繁盛しているので一々店員さんに運ばせるよりも効率を追求しているでござろう。まあ、このくらいの面倒は我慢でござる。

席に戻り、シュトレンとりんごジュースをアヴィリア殿の前へ。あつ、目がキラキラしてるでござるきゃわわ！

「モミジさん…それはブラックコーヒーなのですか？」

「そうでござる。この店の看板商品らしいでござる。飲んでみるでござるか？」

「うっ…わたしはブラック飲めないのです。モミジさんは大人なのです！」

コーヒー一つで尊敬の眼差しを向けてくるアヴィリア殿に、拙者はドヤ〜！ 超絶ドヤ顔になるでござる。

ちなみに砂糖増し増しのコーヒーをブラックと言ったのは、別に嘘をついた訳ではないでござる。この国がどうかは知らぬが、ブラックコーヒーというのは文字通り黒いままのコーヒーを指す。砂糖だけを入れたコーヒーは色が変わらないので、国によってはブラックコーヒーと表現しても嘘にはならないでござるよ。これ旅人豆知識。

拙者はシュトレンを本来ならフォークぶつ刺して丸ごとかぶりつくところを、上品にナイフで切って一口ずつ食べる。そして大人っぽい余裕の笑みを薄く称え、コーヒーも一口。

(……苦っ)

砂糖増し増しって言ったのにくっ…っ…っ!!??

しかし…っ…耐えるで…ござるよ…！　ここで顔を顰めたら『ブラックコーヒー飲める大人なモミジさん』というアヴィリア殿のイメージが崩れてしまうでござる！

拙者は咀嚼する口を抑えるフリして引き攣った口元を隠し、なんとか元の顔に戻して微笑む。

「美味しいでござる」

あの店員さん、マジ許すまじ。

なんとか威厳を保ち抜いた拙者は、とりあえず宿を確保してアヴィリア殿をご招待。

クローゼットで寝落ちして髪を切られたことに気付いたアヴィリア殿は、早朝から意味もなく国の中を徘徊していたらしいので、若干睡眠不足でござる。だからと言ってもう一部屋別の宿で取れるほどお金に余裕もない為なんとか耐えてたそうでござるが、食事をしたら強い眠気が湧いてきたとのこと。

流石にそんな彼女を引き連れて切り裂き魔（髪を切ったことから命名）の手掛かりを調査するわけにもいかず、結果として拙者の宿で仮眠を取ってもらうことに決めただござるよ。

「部屋は好きに使って良いでござるよ」

さっそくベッドにダイブしたアヴィリア殿へそう言って、拙者はすぐにもう一度部屋を出ようと扉に手を掛ける。

「どこに行くのです？」

「切り裂き魔の手掛かりを探しに。こう見えても拙者、聞き込みは得意でござる」

「……………」

無駄に胸を張ってできる奴アピールをするでござるが、アヴィリア殿の反応は薄め。かけ布団を被り、口元を隠して何か言いたげな視線を向けてくるでござる。…もしかしてカツコつけすぎて呆れられた？

「どうしたでござる？　何か欲しい物があれば買ってくるでござるよ」

「……行っちゃやなのです」

「なにゆえ？」

時間は有効活用するべきでござる。なにより、こういった犯罪は犯行後に犯人が逃げることのほうが多い。ちんたらしていると、最悪取り逃すということもあるでござるよ。

ベッドサイドにしゃがみ、アヴィリア殿の顔がよく見える位置につくと……ぷい。顔を逸らされたでござる。泣きそう。

見られていないことを良いことに涙を目に浮かべていると、ぎゅ……。控えめな手つきで拙者の袖が掴まれる。

「おろっ？」

「……一人で眠るのは怖いのです」

「——っ！」

そつか。アヴィリア殿は寝ている間に髪を切られたでござる。

拙者と同じように彼女も髪を伸ばしていたのであれば、毎日の手入れは欠かしていなかったはず。それは短くなっても手触りの良さそうな白髪を見れば明らか。

であれば、それを寝ている間に切られた彼女のショックは計り知れないでござる。

「……申し訳ない。拙者の配慮不足だったでござるよ」

今アヴィリア殿を一人にしても、安眠することは不可能でござろう。同じ人物を短時間のうちにもう一度狙うとは考え難いでござるが、それが彼女にとって恐怖を打ち消すものにはなり得ない。

拙者はローブを脱ぎ髪を解いて、アヴィリア殿に添い寝する形でベッドへ潜り込むでござる。

「たまには昼寝をするのも良いでござるな」

「……すみません。わがまま言っつて」

「ありがとう、と言ってもらえた方が拙者は嬉しいでござるよっ。」

「ありがとう……なのです」

小さくそう零すと、アヴィリア殿は拙者の胸に顔を押し付けてくる。特に不快感はないので、そのまま苦しくならない程度に頭を抱き締めてあげるでござる。

すると、上目遣いで拙者を見てくる。待つて湧き上がる母性で溺死しそうでござるよ！

しかし……髪型のせいもあってアヴィリア殿は本当にアムネシア殿に瓜二つでござるな。

「こうしていると、平安の国カイヤナイトのことを思い出すでござるよ」

「モミジさんがお姉ちゃんと初めて会った国でしたっけ？」

「そうそう。たったの三日間だけでござったが、こうやって同じベッドで寝たでござる」

頭を撫でてあげながらその時のことを思い出していると、アヴィリア殿が蚊の鳴くような声で一言。

「……ずるい」

聞こえてしまったその言葉があまりにもいじらしくて、苦笑が漏れちやうでござる。

彼女を見やれば、対抗心と抗議がない混ぜになった目をしている。

「そもそも、どうやってあの寝相最悪のお姉ちゃんと同じベッドで寝られたのです？」

「コツがあるでござるよ。ちよつとした護身術の応用でござる」

「……難しい技なのですか？」

「もしかして習得しようとしてる？」

「迷惑でなければ教えてほしいのです」

そういえばアヴィリア殿、お姉さんであるアムネシア殿に姉妹愛を超えた特別な感情を抱いていたでござるな。

それ自体はまあ、珍しいとはいえ否定するものではないでござるが……アムネシア殿の寝相の悪さって、図らずも貞操の自衛になってい
るのではと考えてしまうでござるよ。

「他人である拙者にはそうやって素直に頼めるのに、お姉さんであるアムネシア殿には素直になれないってどういう事でござる？」

「うぐっ……ごめんなさい」

「別に責めてないでござるよ。単純に疑問に思っただけ。言い方が悪かったでござるな」

お詫び代わりに手櫛で前髪を整えてあげてください。これから寝るので無駄なことではござるが。

ただ、こういった無駄の積み重ねも信頼を築く一助になると拙者は知っているでござる。

「——わたしにお姉ちゃんを頼る資格なんて無いのです」

返された言葉の中には、どうしようもない後悔の色が冗談のような濃さで浮かんでいた。まるで、一生掛かっても償い切れない罪を告白するかのよう。

拙者は未だ治らない浅はかな自身に苛立ちを覚えつつも、それを感じさせないように努めて明るい声でアヴィリア殿へ問いかけるでござる。

「でも、アムネシア殿のことは好きでござろう?」

「はい。大好きなのです」

「そういえば拙者、小さい頃のアムネシア殿がどんなだったのか気になるでござるよ」

「ふふー! では特別にわたしが教えてあげるのはです。小さい頃のお姉ちゃんはですねえ——」

話題のチョイスが100点満点な自分に拍手喝采でござる。

恋する乙女のような匂いを髪から香らせるアヴィリア殿から幼少期のアムネシア殿の話の聞きながら、拙者は優しく彼女を撫でるでござる。

それは、アヴィリア殿が安心して睡魔に負けるまで続いたでござるよ。

あどけない寝顔のアヴィリア殿に釣られて眠ってしまった拙者が目覚めたのは夕方でござった。さすが姉妹でござる。顔が良い。

美人というよりはまだ可愛らしさが目立つ彼女の顔を寝起き1発目で見れたことで機嫌良く目覚めた拙者は——違和感に気付く。

普段は体を起こす時に顔に掛かる髪が、今はまったくくない。

拙者は急いで洗面所に向かい、鏡を覗き込めば——黒髪ボブカットのキュートでラブラーでプリティーな女の子が。

……無いでござる……拙者の自慢の黒髪が……無いでござるよ！
「やられたでござる……っ！」

ブチギレボブカット物語 星

「……………」

「……………」

「モミジさん」

「……なんでござるの？」

「なんでわたしを膝の上に乗せるのですか？」

サラサラのいい匂いがする白髪の間隙から、アヴィリア殿は拙者を恥ずかしそうに見てくるでござる。

場所は宿のベッドの上。胡座で座る拙者の足の中にいる彼女は、意外にも大人しいでござる。若干ツンケンしてるところがあるので、てつきり逃げちゃうかと思つたでござるが。

恐らく拙者への信頼でござろうが……拙者は一体どうやってこの子からここまで信頼を得たでござるの？

「なんとなくてござるよ。嫌でござるか？」

「いえ……」

なんでござろう……なんか凄くイケナイことをしてるような気分。いたいけな少女の信頼を利用してるような感じ。

「すー……はー……」

「ひゃう……」

後ろ髪に鼻を押し付け一気に匂いを吸い込む。うん、最高。……ではなく、

(やつぱりでござるか)

拙者は確信を得て、アヴィリア殿を解放。そして急いで自分の鞆を漁るでござる。

しかし、目当ての物は見当たらず。

「な、何を探しているのですか？」

「人形でござるよ。昼間この国の観光名所たる人形屋の店主から貰つたものでござる」

「それをどうして今？」

「貰つた人形の髪の毛、あれはたぶんアヴィリア殿の髪でござるよ」

「っ!!?」

どうも手触りが良いと思ったでござる。新品であればそれも領けると安易に納得してたでござるが、だとしても匂いが素晴らし過ぎたでござるよ。

早朝、アムネシア殿を驚かせようとしてクローゼットで寝落ちしたアヴィリア殿の髪が切られた。

切りたてホヤホヤのアヴィリア殿の髪が付けられた人形を、昼間拙者が受け取った。切られてから半日しか経っていない髪の毛だから、匂いもほぼほ残っていたでござる。

「マジですか!?!?」

「マジでござる。アヴィリア殿の髪の匂いと同じでござった」

「えっ」

「え?」

なんかみるみるうちにアヴィリア殿の目が名状しがたい何かを見るようなものになっていくでござる。さつきまであった信頼の色は何処へ?

「モミジさん。今のはいくら冗談でもキモいのです」

「冗談じゃないでござるよ。あの人形の髪、アヴィリア殿と同じ白でござったし」

「いやそこではなく」

「おろ?」

「〃同じ匂い〃ってところです」

「それも冗談じゃないでござる」

「キモいのです!」

解せぬ。

「あんまりキモいとか言わないでほしいでござるよお……」

うるうるうる。涙をたつぷり溜めた上目遣いをアヴィリア殿へ。

いつもならここで髪を一筋口に啜える演出も付けるでござるが、生憎と短くなったせいで啜えにくい。下手人マジ許すまじ。

内心ブチギレの拙者でござるが、今はアヴィリア殿の中で下落し始めた拙者の株を元に戻すことに集中するでござる。

「ただ拙者は、アヴィリア殿の髪を切った下手人の手掛かりを見つけようとしただけでござるう……」

「あつ、あつ、な、泣かないでほしいのです」

「撫で撫でしてくれたら泣き止むでござる」

「わ、わかりました」

えへへく。やっぱり可愛い子から撫でられるのは最高でござるな。昼寝前までの「大人なモミジさん」のイメージは跡形も無く崩れ去ったでござるうが。

まあ、嫌われるよりはマシでござる。

さてさて。アヴィリア殿に撫でられて元気100倍な拙者は、キリツと表情を引き締めて彼女へ告げる。

「とりあえず、明日はその人形店へ行くでござるよ。拙者が貰った人形が無いことから、十中八九人形に髪を切られたの考えて間違いないでござる」

「人形を使つて……ですか？ そんなこと可能なんでしょうか」

「恐らく。あの人形店の店主、魔法使いでござるよ。店に入った瞬間、飾られていた人形が一齐に拙者を見たでござるし」

あの時は微妙にズレた演出として流していたでござるが、魔法を使ったのであれば納得できる。『扉が開いて人が入る』という条件起動にすれば、さほど難しい魔法でもない。

しかし、店に行つたとしても問題が残っているでござるよ。それはアヴィリア殿から疑問の形で提示された。

「もしお店に向いてその店主を問い詰めたとして、シラを切られたらどうするのです？」

「ぶっちゃけ打つ手なしでござる」

「ええ……」

そう。この切り裂き魔の事件、証拠が無いでござるよ。

そもそも、『人形に髪を切られ、持ち去られた』と訴えかけても信じる者のほうが少ないでござるう。可愛いけど頭がおかしい女の子の妄言として処理されてしまうでござる。

「あんまり拷問はしたく無いでござるし……」

「サラツと怖いこと言わないでください」

「おつと失敬。アヴィリア殿の服、白だから血の汚れが目立つてござるな」

「いやその心配はしてないのです。もつと別の場所なのです」

可愛い女の子に頭撫でられて少しは機嫌が直ったでござるが、それでも拙者、かなり頭に來ているでござる。

10年近く切らないで大事に伸ばしていた髪を、寝ている間にバツサリ。

ふむ……仕返しに下手人の首をバツサリいつてしまおうか。

しかし拙者、人殺しになるつもりは毛頭なし。さてさてどうしたらものか。

顎に手を当ててて下手人の処遇を考えていると、

「あーっ!!?」

突然アヴィリア殿が大声を上げたでござる。えっ、なに!!?

「ど、どうしたでござる?」

「もうお姉ちゃんバイトに行く時間なのです!」

「ああ……夜間警備でござったか」

「そうなのです。やべーのです! お姉ちゃんお腹空かしているかも……」

「流石に食事くらい自分で用意するのでは?」

確かにアムネシア殿ってしっかり者に見えて甘やかしたくなる感じあるけど、それでも一人旅経験者でござる。一々誰かに用意してもらわないとダメな赤ちゃんとは違う。

「違うのです! そうじゃないのです! わたしの作ったご飯を食べ、仕事に向かうお姉ちゃんへ『いってらっしゃい』とお見送りすることで疑似新婚気分を味わうという1日の楽しみがあ……」

「それはまた……」

アレでござるな。拙者も人のこと言えないでござるが、この子も大概ロクでもないでござるな。

「それ以前に、家出した妹が心配で仕事も手に付かないのでは?」

「書き置きは残しましたよ?」

「あの文面は完全に家出でござるよ」

際限なく落ち込むアムネシア殿の顔が目には浮かぶでござる。

「でも、今書き置きをしに行ったらお姉ちゃんも鉢合わせしてしまうのです。そうしたら、やっぱりお姉ちゃんに心配をかけてしまうのです」

「まあ、アムネシア殿が出た後だと今度は宿自体が閉まってる可能性があるが……」

魔法使いのアヴィリア殿ならば窓から侵入するという手もあるでござるが、万が一誰かに見られて通報されたら明日の調査に差し支えるでござるし。

どうしたものか……と、頭を悩ませていると、アヴィリア殿はポンと手を打っておもむろにメモ帳へ文字を書き始めたでござる。

「こうすればいいのですー!」

そして書いたメモ帳を破り、折り折りして完成。ペーパー^紙ダーツ^{飛行機}でござるな。

そして杖を取り出し、窓からそれを飛ばしながら何かの魔法を付与したでござる。

「わたし達の泊まる部屋の窓の隙間に刺さるようにしたのです。これならきつと、お姉ちゃんも気付くのです」

「なるほど賢い!」

「ふっふー。もつと褒めてくれていいのです」

ちよつと褒めただけで偉そうに胸を張るアヴィリア殿可愛い。

拙者甘えるのも好きでござるが、甘やかすのも同じくらい好きでござる。特にアヴィリア殿のような美少女をトロツトロになるまで甘やかして、拙者抜きで生きられないように依存させたいという願望がちよくちよく顔を出してしまうでござるよ。まあ、第一希望はイレイナ殿でござるが!

拙者無しでは生きられないほど依存するイレイナ殿……良き!

いと良きはベリいまそかり!

「モミジさん、だらしない顔になってますよ」

「これは失敬。でもアヴィリア殿は本当に賢いでござるな」

「ふっふっふ。これでも元エリートですから」

……アヴィリア殿とイレイナ殿の髪の色、同系統の色じゃん。これで髪の長さが戻ったらもうほぼイレイナ殿なのでは？

「アヴィリア殿、拙者に依存したくないでござるか？」

「何言ってるんですか。というか目が怖いのです」

そういうアヴィリア殿の拙者に向ける目は、不審者へのそれと違って。解せぬ。

そんな風に駄弁っていると、部屋の中にぐくという腹の虫さんが鳴く音が響いたでござる。2人分。

「……………」

言うまでもなく、拙者とアヴィリア殿のでござるな。お互いに同じタイミングでお腹が鳴ったのに、やっぱり恥ずかしくて顔が赤くなるでござるよお…。穴があつたら入りたい。

まあ、拙者たちまだ成長期だし！寝てるだけでも成長にカロリー使うからお腹減るのは当たり前だし！別に食い意地張ってるわけじゃないでござるからね！

拙者は鞆を漁り、未だに残ってる羊羹を刀で切り分けて半分アヴィリア殿へ。

「どうぞ。美味しいでござるよ」

「……………」

「拙者の国のお菓子でござる。とりあえずこれでお腹の虫を止めて、どこか食べに行くでござるよ」

ツヤツヤした見た目に怪訝な顔を浮かべながらもパク。すると、ピヨコンっという擬音がつきそうなくらい目を開き、咀嚼するたび顔が蕩けていくでござる。めっちゃ可愛ええ。

……なんというか、やっぱりアムネシア殿の妹でござるな。この餌付けしたくなる顔は。カイヤナイトでアムネシア殿に天ぷらをあーんした時を思い出すでござる。ちょうど今は髪型も同じだし。

すぐに渡した分を食べ切り、拙者につぶらなお目々を甘えるように向けてくるでござる。…くっ、そんな顔されたらもつとあげたくなくなっちゃうでござるよ！

中途半端な時間にめっちゃ寝たせいで夜更かしを余儀なくされた拙者達は、結局お昼前まで惰眠を貪ってからお人形店へ向かう。

まあ、夜間警備から帰ってきたアムネシア殿が眠る時間を考慮すると、この時間であればエンカウントしないだろうという憶測もあるでござるが。

「フゥでござる」

「フゥは……ゴミ倉庫ですか？」

「聞いて驚くでござる。なんとここ、お店でござるよ」

率直に件の人形店への感想……というかもはや暴言を述べるアヴィリア殿に苦笑を漏らしながら、昨日と変わらない『人形差し上げます』の看板を見る。

よくよく考えれば、この店の外観からして既におかしかったでござる。

いくら一過性のブームが毎週起こるこの国『収穫のガーベラ』でも、ブームを作ったのならそれ相応に改修工事してもいいはず。

さらに言えば、あの店主は母国で特産品を作れるほどの人形職人。言ってしまうえば国の経済の一端を握る人材でござる。そんな人材を、みすみす他国に移住させるわけがない。

そして、かつて愛悼の霊園でシーラ殿から聞いたイレイナ殿とのエピソードの中に、人形を使って髪を切る切り裂き魔の話があったでござる。

これだけ材料が揃えばあとは簡単。シーラ殿とイレイナ殿の協力で捕まった切り裂き魔が牢屋から出てきたか脱走したかで、この『収穫のガーベラ』に流れ着き、またここで同じような悪事を働いているということでござる。悪い子ちゃんでござるな。ぶつ殺すぞ。

「足でドーン！」

——バンツ！ アヴィリア殿の手前、怒りを抑えて店の扉を蹴り開けるでござる。すていくーるでござる。

店に入ると、またもや飾られた人形が一斉にこちらを見てくるでござる。

ざるが無視。ズカズカと踏み込み、カウンターの裏へと入るでござる。

しかし、そこにはあの店主の姿が無い。どこ行ったでござるか！

店の中を見回すと、カウンターのの上に書き置きがあったでござる。それを手に取って読むと……

(そういう事でござるか)

書かれた内容に納得すると同時に、グシャ。その紙を怒りのあまり握りつぶす。

「モ、モミジさん……」

「なにか？」

「今このお店、『closed』なのです」
「……………」

アヴィリア殿に呼ばれて入り口まで戻ると、確かに扉のノブの部分にそんなプレートが。やべっ、蹴り開けたから鍵掛かったの気付かないかってござる。

鍵ぶっ壊しちゃったでござるな。でも別に犯罪者の住処だし…いやでも器物破損は別問題…………？

「ぐぬぬぬ…………」

押し入り強盗だと間違われても嫌なので、張り紙で言い訳しとこ。

『換気しておきました』っと。

「これでよし」

「……………」

「これで、よしー」

「あ、はい」

ジト目で見てくるアヴィリア殿を勢いで押し切り、その手を取って歩き出すでござる。逃走とも言う。

そして店から離れた所で、グシャグシャに握り潰した書き置きを彼女に渡す。

「これは？」

「店のカウンターに置いてあったでござる。つまりそこにあの店主がいる」

「う〜ん……変なコーヒーの名前が書いてあるだけなのです。これが犯人の居場所を指しているのですか？」

「然り」

書かれた文字を怪訝な顔で眺め、アヴィリア殿は改めて読み上げる。

「―― グラスフェッド・バターコーヒー。深煎りフレッシュ少なめ」を飲んで来ます」

持ち歩いていた飲食店ガイドによると、この『収穫のガーベラ』でグラスフェッド・バターコーヒーが飲める店は、昨日拙者とアヴィリア殿が昼食の為にいったあの店だけ。

しかし、何故書き置きで店の名前では無く商品名を記すのか。恐らく、それは店の名前を記す以上に意味があると推測できるとござる。「とどうと？」

「昨日、その商品名を一言一句違わず述べた客がいたでござる。ちょうど拙者の前に並んでた者なのでござるが。その人は、それを注文すると二階の席に案内されたでござる」

「はあ…」

「その注文を聞いて、拙者もそのコーヒーを頼んだでござるよ。砂糖増し増しで」

「砂糖増し増し……ですか」

「すると、すぐにそのコーヒーが出てきたでござる。店員さんが持つてくるまでもなく、注文したらすぐに渡された。これって変ではござらぬか？」

「つまりこの紙に書かれている『グラスフェッド・バターコーヒー。深煎りフレッシュ少なめ』という注文自体が、あの店では何かの合言葉なのではないか、と？」

「そういうことではござる」

看板メニューだからすぐに出てきた。これなら納得でござる。

しかし、それならば拙者の前にいた客にも提供出来たはず。しかもあの客が注文したのは件のコーヒーだけでござった。

対して拙者はコーヒーに加えてりんごジュースとバターシユトレン2つ。合計4品でござる。

看板メニューを1品頼んだ客は席で待たせて、看板メニュー以外のものも頼んだ拙者には素早く提供できる。普通の飲食店ならばクレームものでござるよ。

「……あの時のコーヒー、ブラックじゃなかったのですね」

「……………」

「……………」

「知ってるでござるか？　色が黒のままであればブラックコーヒーって言うでござるよ」

「……………」

アヴィリア殿の冷たい視線が痛い……。低温火傷しちゃう。

「と、ともかく！　あの店でその注文を試してみでござるよ！　運が良ければあの店主にも会えるでござる」

「……………」

「とりあえず引っ捕らえて、そこから拷問でもなんでもして髪を返してもらおうでござる」

「……………」

「何か言つてよお……………」

ひたすら冷たい目を向けてくるアヴィリア殿に追い込まれた拙者、涙目でござる。ぐすん。

もはや彼女の中で『大人なモミジさん』に戻るのは無理でござるな。だったら猫被るのやめる！　にやんにやんするのやめるでござる！

「別に……わたしに見栄なんて張る必要ないのです」

アヴィリア殿は、何故だかフニフニほっぺを膨らませてぷいっとそっぽを向いてしまったでござる。これは拗ねてる……でござるか？

女心と秋の空という慣用語があるでござる。変わりやすく予想し難いという意味で使われるでござるが、しかしそれは男から見た場合の話。

でも、今のアヴィリア殿の心は同性である拙者にも皆目見当がつかないでござるよ。確かに嘘を吐いたのは悪かったでござるが、そんなに怒るほど？

「怒らせてしまったのなら誠心誠意謝るでござる」

「……違うのです。別にモミジさんに怒っているわけではないのです」

「おろっ？」

「——情けない自分に怒ってるのです」

よく分からぬが、なにやら今のやり取りでアヴィリア殿が自省するきっかけがあったようでござるが……どの部分？　まるで分からないういじぎるよ。

なにやらちよつとした懸念事項が生まれたでござるが、とりあえず今は目の前のことに集中するでござる。

昨日も来た喫茶店に到着した拙者達は、肩に人形を乗せた客の中を突っ切って真っ直ぐカウンターへと向かう。そして、営業スマイルを浮かべる店員さんへご注文。

「グラスフェッド・バターコーヒー。深煎りフレッシュ少なめ」

「かしこまりました。そちらのお連れ様もでしょうか？」

「は、はい。そうなのです」

「承りました。こちらの席へどうぞ」

昨日拙者の前に並んでいた男性客が消えていった階段を上がるでござる。

上がりきると、目の前に広がっていたのは喫食スペース。

しかし1階とは違い、椅子も机もそこに品の良い物を揃えているでござる。明らかに街角の喫茶店には不似合いでござるな。キナ臭い。

「……アヴィリア殿。拙者の刀に認識阻害の魔法をかけて欲しいでござる」

「わかりました」

壁に耳あり障子に目あり。小声でアヴィリア殿へ頼み、刀を周囲から認識されないようにしてもらおう。本来ならここに来る前にやるべ

きでござったが、それをすると子どもなどの背の低い通行人が激突する可能性があるので取れなかったでござるよ。

「かたじけない」

「いえ」

「杖はそのまま、見えないように握っておくでござるよ」

ここからは本当に何が起こるか分からないでござる。特に、アヴィリア殿に方が一のことがあればアムネシア殿に顔向けできない。この子は拙者が守るでござるよ！

「お待たせしました。どうぞこちらへ」

密かに決意を固めたところで、拙者達が上がってきた階段とは逆の方向にある通路から声が掛かる。そこには明らかに一般人とは思えない筋肉の膨らみ方をしたスーツ姿の男性が2人。見るからに怪しげなサングラスを掛けているでござる。

男性達に促されるままそちらの通路へ進めば、幅の狭い下りの螺旋階段が。その階段を男性A、アヴィリア殿、拙者、男性Bと1列になって下りる。さりげなく挟まれたでござるな。

階段はそれほど長いわけではなかったでござるが、それでも体感で地下まで来たことは分かるでござる。一旦2階まで上った後に地下まで別の階段で下ろされたということ でござるな。二度手間 でござる！

階段を下り切ると、壁も床も天井も大理石で出来た狭い通路に出たでござる。幅は人間2人が横に並べるくらい。天井の高さは拙者の頭にもう1人拙者を乗せたらゴツツンコしそうなくらい低い。

——仕掛けるならここでござる！

「わりと長い道のりでござるなっ！」

拙者の後ろを歩く男性Bに質問するように振り向きながら、スナツプを効かせた指先で睾丸を弾く。

「はうっ……ん？？」

マミ上曰く、男性の睾丸は潰すように殴りつけるより、ペチンと弾いたほうが効きやすいとのこと。

拙者には存在しない臓器なので分からぬが、筆舌に尽くし難い苦悶の表情を見るにその通りのようでござるな。

内股になって両手で股間を抑える男性Bの両耳を、すかさず挟み込むように掌底打ち。三半規管にダメージを与える。

さらに刀の柄を左手で握り、拙者お得意の過重力を起動。魔法で羽のように軽くなった男性Bを右手一本で掴み……

「アヴィリア殿、伏せてー！」

——ブウン！ 先頭を歩いていた男性Aに向けて、伏せたアヴィリア殿の頭上を通してぶん投げる。

飛んでくる人間というのは、それだけで凶器になるでござる。これどおりあえずこの2人を無力化したかと思いきや——

「フツ」

驚異的な反射神経で潜るように避けたでござる。ちっ……！

拙者は過重力を使って飛び上がり、天井に着地。抜刀。

アヴィリア殿を飛び越える形の三角跳びで、今まさに伏せて無防備な彼女へ蹴りを入れようとする男性Aの大腿骨を峰打ちで殴り砕く。

しかしこれだけでは決め手に欠けるので、この男にも過重力を掛けて軽くし、砕いてない方の足首を掴んで——ゴッ！

アヴィリア殿を足蹴にしようとしたことに対する仕返しも兼ねて、振り回すように顔面から壁に叩きつけてやるでござる。

「ふう……。すまぬ、アヴィリア殿！ 怪我は無いでござるか？」

一瞬とはいえ、危険に晒してしまったでござる。蹴りが入ったようには見えなかったでござるが……。

「だ、大丈夫なのです。それより、その……殺したんですか？」

「いや、あの程度で人は死なないでござるよ」

顔面から叩きつけたのは、鼻や歯が頭蓋を守るクッションになるという理由もあるでござる。その代わりめちやくちや痛いけど。

拙者は安心するようにアヴィリア殿へ微笑みかける。

「人殺しはしないでござるよ。拙者の大切な人が、拙者を人殺しにしなかったから」

——あの日、イレイナ殿は拙者が人殺しになるのを止めてくれ

た。それが意図しないものだったとしても、その事実は変わらない。だから拙者は絶対に殺さないでござる。

もし殺してしまえば、イレイナ殿との繋がりが無くなってしまいううな気がするから。

「ぐっ……このメスガキ……」

「あ、まだ意識あるでござる。死ねえええ！」

「ガハア！」

ゴツン！ 最初に倒した男性Bが起き上がってきたので、慌てて殴り倒すでござる。危ない危ない。

「……………」

そしてアヴィリア殿の視線が冷たい冷たい。

「……まだこの人達が悪い人だと決まったわけでは無いのに倒しちゃって良かったのですか？」

「はっ！……やべ」

そういえば勝手に決めつけてやっちゃったでござるが、アヴィリア殿の言う通りでござる。髪切られた怒りと状況の有利さで気が逸っちゃったでござる。てへ！

「……違ったら全力で逃げるでござる」

「そこで謝らないの、良くないのです」

「謝ったら捕まるでござるよ。恐らくアヴィリア殿も共犯でござる」

「逃げる時はわたしも連れて行ってほしいのです」

「愛の逃避行でござるな」

ウインク混じりに軽口を叩けば、アヴィリア殿はくすりと笑ってくれたでござる。その笑みに拙者は内心安堵する。

——スカートを履いているのでよく見える白くて綺麗で舐め回したい彼女の生足。それが微かに震えているでござる。

怖かったのでござろう。未遂とはいえ、屈強な男の躊躇い無い暴力を向けられたでござる。それは仕方あるまい。

アヴィリア殿の目元あたりの身長しかない拙者でござるが、それでも優しく微笑んでフニフニほっぺを撫でる。

「大丈夫でござるよ。アヴィリア殿は拙者が守るでござる」

「わたしは…大丈夫なのです。もう守られてばかりのアヴィリアは卒業したのです」

「そうでござるか。怖かったら言うでござるよ」
「もうー！」

丁寧な口調のわりに動きが幼いので、どうしても庇護欲が湧いてきちやうでござるよ。だって仕方ないじゃん可愛いんだから！

「とにかく先を急ぐのです」
「然り」

少しからかい過ぎたのか、アヴィリア殿はズンズンと先に歩いてしまふ。あー可愛い♡

拙者はキュンキュンする気持ちを抑えて、過重力で今倒した男性達をボールくらいに軽くして蹴り転がしていくでござる。もし倒れている2人が見つかって騒ぎになったら面倒でござるからな。

3分ほど歩き、やっと通路の先に出たでござる。

そこは——劇場…というのでござろうか？

いやに静まり返っている空間を見下ろすと舞台があり、そこから扇型に段々畑のような感じで観客席が並んでいるでござる。

そして、その観客席にはチラホラと色とりどりの髪色をした後頭部が。顔こそ見えぬが、髪飾りや背もたれから覗く服の装飾からしてそこそこ高貴な立場の者達でござろう。

(えっ……マジでこの人たち無実でござるか)

若干顔を青くしながら、ここまで蹴り転がしてきた男性2人を見下ろす拙者。これはやらかしたでござるか…？

アヴィリア殿を見ると……あつ、目が泳ぎまくってる。たぶん心境は拙者と同じでござろう。

さてさて、どう逃げようか。周りを見回し即座に逃亡手段を模索する拙者に向けて、静寂を突き破って聞き覚えのある声が掛けられる。

「あれ？…随分早かったね！ まだ準備終わってないんだけどなあ」

観客席に座る者とアホみたいに近い距離で向かい合うよう立つその声の主は、あの人形店の店主。てかその人と近くない？ もしかし

てちゅーしてたでござるか？ もはやその距離でござるよ。

拙者は劇場の観客席でそんなけしからん事（疑い）をする背徳的な店主に詰め寄ろうと踏み出す。すると、アヴィリア殿に袖を掴まれたでござる。

「……モミジさん。おかしいのです」

「何がでござる？」

「今のあの人のセリフ——まるでわたし達が来ることを最初から分かっていたかのようなのです」

怒りのあまり聞き流してしまったでござるが、確かにおかしいでござる。

『随分早かった』なんて、拙者達の行動を理解していなければ出てこない。

つまり——誘い込まれた？ 一体どのタイミングで？

「どうしたの？ こっちにおいでよ。ボクに用があつて来たんでしょ。お話ししよう？」

拙者たちが思考を優先して動きを止めていても、店主は構わず声をかけてくる。ニコニコと笑い、まるでお茶にでも誘うような気軽さでござるな。

「ほら、おいで？」

警戒心丸出しで身構えているにも関わらず、店主は観客席に座つてその隣の席をポンポンと叩いているでござる。

（どうする……話が通じる相手でござるか）

会話で解決できるならば、それに越したことはない。しかし、そもそも彼女は問答無用で髪を切るようなやベー奴でござる。

ならば一度行動不能まで追い込んだほうが安全でござろうか。

拙者は頭の中で考えをまとめ、刀の鯉口を切る。アヴィリア殿の手を優しく外してやりながら一気呵成に過重力で店主のもとまでダッシュでござる。

観客席の背もたれを足場にして下りていき、抜刀一閃。抜くと同時に刃を返して、店主の右肩に叩き込む。

バキン！ 何かの粉碎音とその感触が手に伝わってくるでござる。

「ははっ、壊さないでよ」

「——っ!?」

その瞬間、理解する。一瞬前まで確かに人間の顔だった店主が、刀で殴った時には人形に変わっていたでござる。これは変わり身の術？

いや、違う。さつき拙者がアヴィリア殿にかけてもらった認識阻害の応用でござる。

拙者たちはこの人形を、確かに人間として認識していた。この店主、予想以上に魔法が達者のようでござるな。

拙者は本物の店主を探すように周りを見て……ひっ！ 心臓を鷲掴みにされたかのような恐怖に支配されたでござる。

拙者がいる位置はちょうど、アヴィリア殿の立つ出入り口と舞台の真ん中辺り。つまり劇場内の真ん中。

そこまで来て分かったのは、ここにいる観客が全員等身大の人形だということ。

なるほど。先ほど拙者と店主の会話に一切反応しなかったのはそういう事でござったか。

地下にある秘密の劇場。その観客席には等身大の人形。

明らかに異様な空間でござるよ。ここは。

「あんまりボクの大事なお人形を手荒に扱わないでほしいんだけど」すると、今度は舞台袖から店主が現れたでござる。手には黒髪と白髪の人形を大事そうに抱えて。あの白髪の人形、見覚えがあるでござるな。

「その人形の髪の毛。それは拙者たちのでござるか？」

「うん、そうだよ！ あなた達とっても綺麗な髪してるから欲しくなっちゃって」

この状況で分断されるのはまずいと考え、アヴィリア殿のもとに戻りながら会話に応じる。

正直、ここから逃げた方が良いかもしれぬ。明らかにここは彼女のホームでござるよ。

「それにしてもツイてたよ！ 綺麗な白髪が手に入ったと思ったら、

すぐに対称的な黒髪の君が現れたんだもん。もうこれは神様の思し召しかと思っちゃった」

そう言って店主は拙者とアヴィリア殿の髪が付けられた人形を左右に1つずつ頬に当ててすりすり。さらにすーはー、と匂いを嗅ぎ始めたでござる。

キモい……。

ドン引きする拙者たちを見て、店主はパアア！　みるみると血色の悪い顔が輝き出すでござる。

「ああん！　その顔良い！　最っ高！」

さらに何かに悶えるように体をくねくねさせ始めたでござる。うわあ……。

「結局のところ、たくさんの人を自分の人形で笑顔にしたいというのも嘘でござったか」

「ううん、それも本当だよ。人が喜ぶ顔を見るのが好きっていうのも本当。特にあなた達みたいに可愛い女の子のね！」

「だが拙者たちは今めちやくちや怒ってるでござる」

「うん！　そういう顔も大好きだよ！　できれば絶望したり悲しんでる顔も見せてくれると嬉しいな！」

あ、ダメだこの人。話通じないでござる。

「わ、わたしの髪は……そんな事の為に……切られたのですか……!!？」

そして隣で静かにブチギレる白髪ボブカットのアヴィリア殿。たぶんこの顔を店主に見せると喜んじゃうので、隠すように前に立つと、

「ちよつと何してるの!!？　その子の顔が見えない！　ねえ怒ってるの？　泣いてるの？　どっちでもいいから見せてちょうだい！」

なんか怒られた。たぶん拙者悪くないでござるよ。

舞台からなんとかアヴィリア殿の顔を見ようとする店主と、それを阻止する拙者の小競り合いを数分ほど続き、どうしても見られないと分かるため息を1つ。

それと同時に、観客席の人形が同時にバツと立ち上がる。

「ねえ、あなた達。もし良かったらボクの工房に来ない？」

「このタイミングでそんな話、受け入れると思うでござるか？」

「もちろんタダでは言わないよ。正当な金額のお給料は出すつもり。あなた達の髪が近くにあるだけで人形作りのインスピレーションがたくさん得られると思うんだ」

店主が言葉を続ける間にも、立ち上がった観客人形たちはジリジリと拙者たちに近付いてくるでござる。

多勢に無勢。このまま撤退しようかと後ろを見るが……クソツ。いつの間にか唯一の出入り口には音も無く鉄格子が嵌められていたでござる。会話を気を取られた隙に魔法で作ったでござるな。

「これでもお金は持つてるほうだからね。ボクのところに来ればなんでもあるよ？」

舞台上で店主は手に持った人形の髪の毛の匂いを存分に堪能しながら勧誘を続ける。すぐくやめてほしいでござる。

「美味しい食事は3食つけるし、昼寝だっていつしてくれても構わない。フツカフカのベッドも用意するし、希望があればどんなおやつでも出すよ？ この上の店で売ってるブターシユトレンなんか絶品だよね。欲しい服や宝石だってなくんでも買ってあげる」

優しい声で。しかし目をギラギラさせて、店主は笑みを作つて続ける。

その間にも、観客人形は拙者たちを包囲してくるでござる。既に刀が届く位置でござるな。

「まあ、無いものを強いて上げるなら——」

——あなた達の自由、かな。

そして、観客人形が拙者たちを捕らえようと襲いかかってくる。

ブチギレボブカット物語 霜

前方180°から迫る観客人形。後方には出入り口に嵌められた鉄格子。

準備が遅すぎたでござる。この距離まで迫られてしまえば、アヴィリア殿はほうきを出すことすらできない。

だったら——バツ。拙者はその場でバク宙。その動きで足元に転がる男性2人に過重力を掛けて前方へ蹴り飛ばす。

転がる男性2人に足を取られた観客人形は、狙い通り転んだでござる。

その結果、包囲網に隙間ができる。

拙者は着地と同時にアヴィリア殿に過重力をかけてお姫様抱っこしつつその隙間を突破するでござるよ！

「アヴィリア殿！ ほうきで上へ！」

「は、はい！」

幸い、劇場という構造ゆえに音が響きやすいよう天井はそこそこの高さがあるのでござる。アヴィリア殿は拙者の指示通りほうきを呼び出し、空中へ避難する。

いくら魔法で操っているとはいっても、所詮は人形でござる。空までは飛べないでござろう。

しかし、敵は人形だけではないでござる。むしろ本命はこちら。

「劇場を飛び回るのはマナー違反じゃないかな」

舞台上から店主が杖を振るって、浮かぶアヴィリア殿へ魔力の塊を無数に打ち込むでござる。

「くっ……うっ……」

アヴィリア殿もすぐに魔法で防ぐでござるが、不安定なほうきの上では分が悪い。危なっかしく揺れる姿は、いつ押し切られて落下するかヒヤヒヤさせるでござる。

拙者はすぐ後ろから追いついてきた観客人形の先頭にいる一体を掴みながら過重力で加速して一気に舞台へ駆け下りる。

「アヴィリア殿をいじめるのは止めるでござる」

ブウン！ 人形を投げつけ、強制的に攻撃の手を止めさせるでござるよ。

職人らしく自分の作品には愛着を持っているようでござるな。壊れないように魔法を使ってやんわりと受け止めた。

そのタイミングで拙者は刀を弓に番えるように右手一本で引き、

「——りゆうほ龍捕」

両膝、両股関節、両肘、両肩へ正確無比の八連突きを、受け止められた人形を潜るようにして放つ。

「おつと危ない」

一撃目が当たる瞬間、店主が杖を振ったでござる。すると頭上から明らかに人間用と思えるサイズの鳥籠が出現。

拙者を分断するように——ガシャン！ 降ってきた鳥籠が店主自身を閉じ込める。

えっ、なにこれ？ セルフ監禁プレイ？

「モミジさん！ 横に避けるのです！」

敵対していなければ是非とも拙者も混ぜてほしいと考えていたところにアヴィリア殿の声がかかり、それに合わせて左へ飛ぶ。

直後、拙者が今までいた場所を通して火炎や氷柱、さらに剣と雷撃が店主へと降り注ぐでござる。危なっ…！

一瞬でも移動するのが遅れたらと内心冷や汗を流す拙者でござったが、突如こちらに襲いかかってくる腕を屈んで躲す。

何かと思ったら、先ほど投げつけた人形が殴りかかってきたでござるよ。

「たあー」

人間でなければ気を遣う必要は無し。拙者は足払いで人形を転ばせ、過重力を併用して刀でカキーンとかつ飛ばすでござる。もちろん店主の方に向けて。

2度も乱暴に扱ったことで留め具が外れたのか、絶妙にリアルな人形の足が一本拙者の足元に落ちたでござる。一瞬ドキツとしたでござるよ。

アヴィリア殿の魔法が着弾したことによって漂っていた煙が晴れ

てくる。

まず目に入ったのは鳥籠の近くでボロボロになって転がる観客人形。でも、片足でカタカタ震えながら立ち上がったてきたでござる。案内外丈夫でござるな……面倒な。

しかし、特筆すべきはむしろ店主の方でござる。アヴィリア殿からあれだけの密度の魔法を食らったにも関わらず、鳥籠の中でピンピンしてるでござるよ。

「うん。やっぱり思った通りだ。あなた達は魔女じゃなかったね」

「なんで……？」

「前に少し油断しちゃったね。協会の魔女と旅の魔女に捕まっちゃったんだよ。だから少し対策を考えてみたわけ」

よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに顔を輝かせる店主に向けて、拙者は刀を振り習得して以来ほとんど使った記憶のない魔法——魔力の塊を放つという初歩的なものを打ち込んでみる。

だが、鳥籠の中に入った瞬間にポツと可愛らしい音を立てて霧散してしまっただでござる。

「まず、この鳥籠の中で魔法は存在できない。そういう世界を作ったからね」

「それは大変不便そうでござる……なっ！」

相手の言うことを鵜呑みにするわけではないでござるが、それでも魔力の塊が無効化されたのは事実。

ならば、と。拙者は足元に落ちている人形の足を拾って再度接近。鳥籠の隙間を通して店主をぶん殴ろうとするでござる。

それなりの力で振り下ろした人形の足は、籠の中に入った瞬間——グアンと一気に減速。まるでボールを水に叩き込んだかのように勢いを殺されたでござるよ。

「ついでに運動エネルギーが減退するようにしておいた。あなたは魔法使いなのに剣で戦うみたいだけど、ボクに傷が付くほどの威力は発揮されないよ」

厄介極まりないでござるな……っ！

拙者は過重力を自身にかけ、鳥籠を蹴ってアヴィリア殿のいる空中

まで戻る。彼女の隣に来たところで、ほうきとして使っている鞆の上に腰掛けるでござるよ。

「まづいですね」

「然り。持久戦になれば、不利なのはこちらでござる」

ほうきで浮くだけでも微量ではあるが、魔力を消耗するでござる。

対して、店主は鳥籠に籠っているだけ。おそらくあの鳥籠自体も維持するのに魔力を使うでござろうが、限定的とはいえ『魔法の無い世界』を構築できるほどを技量を持つ者でござる。九分九厘彼女は魔女でござろう。

魔法使いの最高位である魔女と魔力消耗の我慢比べ。

考える余地など無く、負けるのは拙者たちでござるな。

絶体絶命の文字が頭に浮かぶ拙者とアヴィリア殿は、揃って苦虫を噛み潰したような顔になる。

その顔を見て店主は——ガンツ！ 激突する勢いで鳥籠内から顔を寄せ、息を荒らげてこちらを凝視してくるでござる。

……本当に運動エネルギー減退してる？

「ああん！ ああああん!!？その顔！ その顔良いわあ！ ハア…ハア………」

「……………」

重ね重ねやつべーなこの人……。

「うふっうふふ…！ やっぱり誘い出した甲斐があったわ！ 可愛いのに頭が弱いところも萌え萌えしちゃう！ ……ハア」

「最初からわたし達を狙っていたのですか？」

「いや。狙ったのは黒髪ちゃんの方だけだよ。でもまさかの2人とも来てくれるなんてビックリしちゃった」

「どうやって………」

「え？ なに？」

「どうやってわたし達を誘き出したのです？」

「どうやって……か」

アヴィリア殿の質問に、店主は忍び笑いで返してくる。何か面白いことでも言ったでござろうか。

あとアヴィリア殿。そのイラツとした顔はやめるでござる。あの店主喜ばせるだけだから。いやまあ、気持ちは分かるでござるが。

「あなた達、ボクのお店の書き置きを読んでここまで来たんだよね？ わざわざ鍵を壊して」

怒りのあまり扉蹴り開けたらぶつ壊れただけでござるが、とりあえず領いておく。

「もうその時点で不思議に思わなかった？ どうして鍵を締めてるのに書き置きがあるの、て」

なるほど。そういうこととござるか。

拙者はこの店主の店を訪れて旅人であることを堂々と言ったでござる。さらに腰に刀を差していることから、戦闘能力もあることは見れば分かる。

そんな女の子が髪を切られてしまえば、当然怒り狂い武力を行使して取り返しに来るでござろう。

だからこそ、人形を使うという手段を取った。下手人は自分であると喧伝する為に。

店が閉まつていようと、武力行使に出た人間なら押し入ることは想像に難くなく、押し入った先で下手人の手掛かりがあれば迷わず向かうと。

クソツ！ まんまと引つ掛かったでござる！ しかもアヴィリア殿を巻き添えにして……！

「あつ、ああ！ その悔しそうな顔も良い！ 本当にあなた、わたしの性癖にドストライクだわ!!？」

「……………」

「やっぱり欲しい！ その声も！ その髪も！ その身体も！ ほんら、もつと色んな表情を見せてえ！」

拙者たちに向けて鳥籠の中から腕だけ出して伸ばしてくる店主。指がウネウネと触手みたいに動いて気持ち悪いでござる。何がそこまで彼女をそうさせるのか、いまいち理解できないでござるな。

「ああ……早く独り占めしたい。早く早く早くうー！」

そして鳥籠から出した指をパチンと鳴らす。すると、モゾモゾと観

客席の下から何やら小ぶりな影が出てきたでござる。

出てきたのは、子どもが持っているような人形。人形と呼ばれて真っ先に思いつくオーソドックスなサイズのものでござる。

それらが、全観客席の下から這い出てきたでござる。その数、200は超えているでござるな……!

「もう我慢できない! ほら、ずっとわたしのお人形として暮らしましょう?」

さらに、その人形たちは手に布切り鋏を持って浮かぶ。

(なるほど。ほうきで飛ばはこの人形たちが囲み、降りれば等身大の観客人形で捕らえる作戦でござったか)

人形は飛べないという拙者の想定が甘かったでござる。一度魔女に——イレイナ殿とシーラ殿に捕らえられて学習したというわけではござるか。

明らかに気狂いだが、腐っても魔女でござる。自身の目的の為ならば手間も手段も惜しまないその姿勢だけは見習いたいところでござるな。

刃物を持って浮かぶ人形と足元でこちらに手を伸ばしてくる等身大人形という悪夢のような光景に怯む拙者たちへ、店主は上気した頬を緩めて言う。

「最後にもう一度聞いてあげるね。せっかく飼う女の子が傷物になるのはできれば避けたいし。——ボクの工房において。大人しく来てくれれば、自由以外は保証してあげる」

口調こそ柔らかいものの、どこか有無を言わせない圧力のようなものを感じさせるでござるな。

しかも、断れば本気で攻撃すると仄めかしてきている。

アヴィリア殿を見れば、この絶体絶命の状況に彼女は動揺を隠せないでいるでござる。

圧倒的物量の人形。それを扱う魔女は、魔法も剣術も効かない絶対防御を誇る鳥籠の中に引き籠っている。

捕食者と被捕食者。狩人と獲物。狩る者と狩られる者。

どちらがどの役割かなど、一目瞭然でござろう。

だったら、苦しくない方を選びたい。それは理解できる。でも——
—その選択肢はダメでござるよ。

「残念ながら」

拙者はアヴィリア殿の震える手を握り、店主に向かって力強く叫ぶ。

「拙者たちは旅人でござる。食事が足りなくとも、綺麗な服が無くとも、屋根が無くとも、別に構わぬ。——自由があれば、それで良い」

旅人の特権とは、自由であること。

定職に就く必要も無い。どれだけ夜更かししても良いし、寝坊したければ好きなだけ惰眠を貪るのもアリでござる。好きな時に食べ、好きな時に飲み、好きな時に好きな事をやる。

改めて記述するとロクでもないことこの上ないでござるが、それが自由でござる。

何をしても構わない。ただしその責任は全て自分にある。

「自由を奪われた旅人なんて、もはや抜け殻と同義！ 拙者たちはお主の人形にはならないでござ……」

「じゃあ実力行使で捕まえるね」

「まだしゃべってる途中でしようが！」

アヴィリア殿の手前、めちやくちやカツコ良く啖呵を切ろうとしたのにい……！

何故でござる!? 拙者が可愛い女の子からの黄色い悲鳴を一身に浴びる日はいつ来るでござるか!? 拙者の時代はいつ来るでござるか!?

そんな拙者の願望なんて知るかと言わんばかりに、布切り鋏を持った人形が一斉に襲いかかって来る。コンチクショー！

拙者は刀身の分だけほうきよりも幅のある鞘に立ち、人形を斬り伏せる。これ以上自慢の髪の毛は渡さぬ！

……って、普通に腹とか足とか狙ってきたでござるよこの人形ども!?

「うんうん。必死な顔も良いね」

舞台上の鳥籠からはそんな店主の声。いちいちムカつくでござるよ。

鞘に立ちながらアヴィリア殿の周囲を三次元的に飛び回り、なんとか人形が行くのを防ぐ。一応彼女も抵抗を試みようとしてくれてるでござるが、

「うっ……あわわ……！」

拙者が好き勝手に動き回るせいで、魔法を放たないようでござるな。すぐくごめん！

鞘に乗って刀を振るう拙者と、純粹に魔法使いであるアヴィリア殿が息を合わせるのは至難の技でござる。しかもこれが初の共闘。明らかに無理がある。

拙者は人形の布切り鋏を奪い、アヴィリア殿に向かおうとする一体へ投げつけて阻止。その間に彼女の頭上3体の人形をまとめてぶつた斬る。

「モミジさん！何か切り札とか奥の手とか、そんな感じのものないんですか！」

このままではいずれ押し負けることが明白でござる。

だからって、そんな1発逆転できる都合の良いもの……そんなもの……

「無論あるでござるー！」

「じゃあ早くやってくださいよお！」

アヴィリア殿の声にちよつと情けなさが混ざったでござる。めっちゃ守ってあげたい。守るけど。

魔法は効かない。剣術も効かない。逃げることも叶わない。

加えて、そんな魔女が作った冗談のような数の人形が襲いかかってくる。しかも死ななければ問題無いと言わんばかりの容赦の無さで、でござる。

普通なら、魔女でも苦戦する相手でござろう。元々魔女2人に対抗する為に編み出された戦法なのだから当然でござるが。

魔法使いの最高位である魔女に対抗する為——ここに勝機があるでござる。

アヴィリア殿はともかく、拙者は真つ当な魔法使いとは程遠いでござるからな。

「その昔、どっかの王妃が言ったでござる。『魔法がダメなら、剣で斬ればいいじゃない』と」

アヴィリア殿からの株を上げる為、偉人の格言を引用して頭良いアピール。

「そして、『剣がダメなら、グーで殴ればいいじゃない』とも」

「そんなファイティングスピリッツに満ち溢れた王妃いますか」

「拙者の言ってる事…分かるでござるな？」

「わかりません」

どうやら拙者の言いたいことが伝わらなかったらしく、アヴィリア殿の声音からは失望を色濃く感じるでござる。なんで？

「論より証拠。アヴィリア殿は拙者が守るでござる。だから——拙者のことはアヴィリア殿が守ってほしいでござるよ」

この奥の手は、人形どもに邪魔をされたら使えないでござる。

この数の人形を突破しながらでは、どうしても奥の手が機能しない。アヴィリア殿が守ってくれなければ、このまま圧殺されて終わりでござるよ。

「もう…… 守られてばかりのアヴィリアは卒業したのです」

「任せたでござるよ」

「了解なのです」

拙者は鞘に乗り、アヴィリア殿と店主の対角線上に佇む。

拙者が飛び回らなくなったことで、アヴィリア殿に周囲の人形の対処を全て任せるでござる。さすがは元エリート。1体1体を丁寧に魔法で撃ち落としていく。

もしかしたら足引っ張ってたかもと不安になるほど。

「うんー？ 諦めたの？」

「いや。そろそろこのお人形遊びを終わらせるでござるよ」

「ふうん。そういう諦めない心、嫌いじゃないよ」

「そいつはどうも」

「希望をへし折られた女の子の絶望する顔は格別だもの」

「お主もブレないでござるな」

周囲の人形が落とされていくのを尻目に、拙者は鞆の上で半身なる。まるでボードに乗るかのような姿勢でござる。そして、

「突撃イイイイイ!!？」

——ギユウウン!!? 過重力を掛けて店主の鳥籠に向かつて突っ込んでいく。自身にかける重力は30倍。急加速によつて一気に後方へ流れる景色の中には、拙者を止めようとしたが、アヴィリア殿の魔法に落とされる人形ども。

てか今、アヴィリア殿から見たら拙者の影になつて見えないのにも弧を描く軌道で撃ち落としたござるよ。地味に神業でござる。

店主が鳥籠の絶対防御を説明した時、まず最初に思い付いたのは鳥籠の格子を切断——斬鉄すること。

これは昔、パピ上が内弟子に講義しているのを聴いた記憶でござる。

『時に戦場では、普通じゃ斬れないような防具を着けている者とも相対することがある。そんな時どうするのか。お前、答えてみる』

『防具の隙間を狙う、ですか?』

『それも悪くはない。だが決め手に欠けるな』

『では師範。どうすればいいのでしょうか?』

『防具ごと斬る。普通の斬撃が効かないなら、普通じゃない斬撃を放てばいい。簡単だろ?』

『』それが出来たら苦労しねえよ!』』

『あ、こら! 木刀を投げるんじゃない!』

おっと。余計なものまで思い出してしまったでござる。

『コホン。話を続ける。大半の者は何故かそんな簡単なこともできないようだからな。……だが、一見刀では斬れないような防具を着用しているような奴でも、弱点は存在する。それはな——』

——防具を着てるのは、やっぱり人間ということだ。

人1人を倒すのに、派手な魔法は必要無いでござる。

人1人を倒すのに、刀でぶつた斬る必要は無いでござる。

髪黒瞳のブチギレボブカット侍とは一体誰でしょう？

そう。モミジさんなのです。

「あ、やっと止まったのです」

もう一度鳥籠を転がそうとするモミジさんを見て店主が慌てて鳥籠を消した時、わたしに襲いかかってきた人形たちも動きを止めました。

人形からはある程度の規則性が見て取れたので、恐らくあの鳥籠の出現と同時に自動で襲うように設定されていたのでしよう。

それでもわたしは警戒を緩めず、床に落ちた人形を注視しながらモミジさんのいる舞台へとほうきで向かいます。

「モミジさん。そのあたりで」

「指でも詰めさせるでござるか？」

「違うのです」

マフィアですかあなた。

というか、この人のゲロがわたし達の髪を付けた人形に掛かっていないか心配でしたが……ふう、良かったあ。なんとか吐瀉物まみれになって無いのです。

流石に人のゲロを浴びた髪の毛をもう一度頭に戻す気にはならなかったのですよ。

わたしはゲロ臭い女性に近付きたくなかったので、魔法で人形2体を手元につけてきました。

「モミジさんは自分で髪の毛戻せますか？」

「残念ながらそれほどの魔法の技術は持ち合わせていないでござる。アヴィリア殿は？」

「できるのです。ほら」

使うのは時間逆転の魔法。杖を振ると、人形にくっついていたりわたしの白髪がブチブチ抜け、光の粒子に包まれて元に戻ります。お帰りなさいなのです。

お姉ちゃんとお揃いも悪くはなかったのですが、やっぱりわたしはこの長さが落ち着くのですよ。

続いて、モミジさんの髪も戻してあげるので。

解いた状態を見るのは初めてですが、やっぱり綺麗な黒髪なので。あれだけの毛量で枝毛一つ無く、毛先までしつかりキューティクルが閉じているのが一目で分かります。

「おおー。ありがとうございますー」

元通りになったことで機嫌も直ったのか、ニコニコ笑顔で自分の髪を撫で撫でしてるのです。ちよろい。

「結ばないのですか？」

すぐに彼女のトレードマークとも言えるポニーテールに戻すかとも思いましたが、そうしません。マフラーのように首に巻いたり、束ねてクルしたりと奇行に走っています。

「今は一日ぶりに帰ってきた髪を堪能するでござるよ。失って、初めて大切さに気付くものでござるな」

「はい。正直、あれだけショックを受けていた自分にビックリなのです」

「髪は女の命。それも当然でござろう」

そう穏やかに言つて、モミジさんは刀を納めました。どうやら指を詰めるという悪魔の如き処罰は行わないようです。

「さあ、お説教の時間でござる」

ポキポキ。指の関節を解す音が舞台に響きました。

どうやら、髪が戻ってもまだまだブチブチギレギレのようです。

そして、わたしの目の前で起きた肉体言語によるお説教は……劇場らしく、まさに惨劇と呼ぶのに相応しいものでした。

……あれ？ 店主の女性、ちよつと嬉しそうじゃありません？

実はこの国にもあった魔法統括協会の支部にズタボロになった店主を放り込んだ後、わたし達はモミジさんの宿に戻りました。

昨日した約束を守ってもらう為です。

そして今、わたしはモミジさんにベッドの上で横になって向かい合っていました。

こうやって至近距離で見つめると、改めてモミジさんの整った顔立ちには驚かされるのです。シミ一つない綺麗な肌や、形の良い眉。薄

めながらも潤っている唇はどこか扇情的で、吸い込まれてしまいそう。

本人も認める童顔を助長させる大きな瞳には、わたし自身の顔が映り込んでいます。つまり、モミジさんもわたしの顔をまじまじと見ているということなのです。恥ずかしい……。

「じゃ、じゃあ……いきみますよ」

「然り」

緊張で声の上擦るわたしの両手を取り、自身の後頭部へと当てがいます。これで少しでも力を入れれば、モミジさんの顔は寄せられて……ダ、ダメなのです！

「ふふ、緊張なさるな。爪を立てたりしなければ、怪我はしないでござる」

「でもお……」

「アヴィリア殿は本当に可愛いでござるな」

そう言つて、モミジさんはわたしのほっぺを撫でます。いつものにぱーつとした笑顔ではなく、優しい大人っぽい微笑みを浮かべて。

そのギャップが、わたしの体温を上げる。

「そうそう。肘を拙者の鎖骨と肩の筋肉の間に引っ掛けて……あん！ちよつと痛いでござる」

「あう……へ、変な声出さないでください」

「失敬。リードすべき拙者が焦ってしまったでござる」

「いえ、こちらこそごめんなさい」

痛くしてしまったのはわたしなのです。ここは素直に謝り、モミジさんにレクチャーの続きを促します。

童顔に似合わない嬌声に、頬が上気するのがわかります。

「こう、ですか？」

「そう……そのくらいの力加減でござる。初めてにしては上出来でござるよ」

「ありがとうございます……」

ニコリと笑うモミジさん。その笑顔に、鼓動を早められてしまうのです。

さて。わたしとモミジさんがベッドの上で密着して何をしているのか。この夏の暑い中、2人きりの空間。死線を共にした2人がベッドのある部屋で。そのベッドの上で。何をしているのか。

それは……

「じゃあ肘を支点にして、テコの要領で引くでござるよー！」

「ふんぬ〜〜」

「痛たたたたたた！ 力入れ過ぎでござるよー！」

——寝相の悪いお姉ちゃんと一緒に寝る為の特訓なのです。

モミジさんは、壊滅的な寝相の悪さを誇るお姉ちゃんと同じベッドで眠り、無事に朝を迎えた猛者なのです。

わたしは今、その極意を習得しようとしていました。

「良いでござるか、アヴィリア殿。これは首相撲と言つて、本来は相手の首を抑えて身動きを制限し、投げたり、膝蹴りを胴体に叩き込んだりする為のものでござる。アムネシア殿と同じベッドで眠りたいならこれを習得しなければならぬ」

昨日は護身術の応用とか言つてましたけど、ここまで殺意の高い護身術があるのでしょうか。

モミジさんの故郷の治安が気になるところですが、今はレクチャーに集中しましょう。

「もう一度やってみせるでござるよ」

モミジさんがお手本を見せてくれるようです。

ベッドで横になった状態のまま、彼女は先ほど教えてくれたようにわたしの後頭部に手を当て、優しく引きました。

すると、わたしのおでこが……その……モミジさんの柔らかい胸部に当たりました。少しだけ気持ち良いのです。

「あんまり強く引くと、苦しくてアムネシア殿が眠れないでござる。あくまで優しくでござるよ。それはまるで、赤ちゃんと無限の慈しみを向ける聖母の如く」

「わたしは妹なんですけど……」

「妹がママでも問題ないでござるよー！」

力強く宣言されました。

「さあ、拙者を赤ちゃん……ではなく、アムネシア殿と思ってもう一回でござる」

「は、はい」

モミジさんのお手本通りに、わたしは彼女のおでこを胸に当てるように引きました。今度は力を入れ過ぎないように。

「そう。いい感じでござる。すーすーはあー…あぁ、アヴィリア殿いい匂い……」

なんかモミジさんが別の目的を果たしているように聞こえるのは気のせいなのでしょうか。引き寄せると、何故か彼女は深呼吸を始めるのです。ついでに「ぐへへ」と少々お下品な笑い声も時折漏らしています。

「あつ、アヴィリア殿。ここで頭撫で撫でを付け加えたらポイント高いと思うでござるよ」

「どうですか?」

「あああああ〜良いでござるう…最高に良いでござるよ」

……気のせいということにしましょう。

「これを睡眠中も続けるのは難しそうですね」

「それに関しては経験でござるな。慣れればほとんど力を入れず、テコの要領だけで固定できるのでござるよ。……あぁ…アヴィリア殿の赤ちゃんになりたい」

ちよくちよくモミジさんの声で雑音が入るのは、たぶんこの部屋が呪われているからなのです。

——ふと急に。本当に急に、わたしはお姉ちゃんに会いたいという想いが込み上げてきました。

考えてみれば、2人で故郷を出てからこんなにも長い時間顔を合わせないのは初めてなのです。

わたしはエラストで1年間もお姉ちゃんの帰郷を待ってた筈なのに、今は1秒でも早くお姉ちゃんの顔を見たくて仕方ないのです。「アヴィリア」と、優しく名前を呼んでもらいたくて仕方ないのです。思いつきり抱き締めてもらいたくて仕方ないのです。

でも今ここに、お姉ちゃんはいません。一応モミジさんの宿の場所

と、そこで預かってもらっていることは魔法統括協会支部を出た後にペーパー^紙ダーツ^{飛行機}にして本来わたしが泊まる宿に投げておいたのですけど…。まあ、お仕事があるので朝までお姉ちゃんとは会えないのです。

「モミジさん」

「ばぶ？…ではなく、おろ？」

「わたしはお姉ちゃんを守れるのでしょうか」

そんな寂しさを埋めるように、現在進行形でわたしの胸に顔を埋めているモミジさんへ尋ねました。

「わたしはお姉ちゃんを守るべき時に守ってあげられませんでした。わたしだけがお姉ちゃんの味方になれたのに、味方になれませんでした。わたしだけがお姉ちゃんを信じていたのに、それを言葉にできませんでした」

「……………」

「…………ごめんなさい。なんの話かわかりませんよね」

昔、信仰の都エストでわたしとモミジさんは一度出会っています。でも、その思い出はモミジさんには無いのです。あの国を出る時、消されてしまったから。

それでも、彼女の言葉にわたしは背中を押されました。

『どうしても何かを成し遂げたいなら、なりふり構っている暇なんてないんだよ。自分の持つ人脈も、権力も、暴力も、その場にある全てを利用しないと。少なくとも私はそうやって旅に出たよ』

その言葉のおかげで、わたしはお姉ちゃんを助ける為にイレイナさんを頼るといふ選択ができました。結果として、わたしはもう一度昔のようにお姉ちゃんと姉妹になりました。

でも、それではダメなのです。今日も、あの時も、わたしは誰かに頼らなければ何もできませんでした。

誰かに守ってもらわなければ何もできないアヴィリアではダメなのです。

今お姉ちゃんの傍にずっと居られるのは、わたしだけだから…！

「申し訳ないでござるが、確かに何の話かは分からぬ。それでも、これ

だけは言えるでござるよ」

モミジさんは胸から顔を上げ、わたしの目をしっかりと見て言います。

「——アヴィリア殿ならば、アムネシア殿を守れるでござる」

その声音には、確信がありました。信頼がありました。そしてなによりも優しさがありません。

「そんなあつさりと言われても……」

「あつさりでは無いでござる。現に今日、アヴィリア殿は拙者を守ってくれたでござるろう？」

「それは…モミジさんがわたしを守ってくれたからで……」

「でもアヴィリア殿が守ってくれなければ、今頃拙者たちはあの店主のおもちやにされていたでござる」

「でも……」

あの時わたしは黙殺しました。一握りの勇気さえあれば、お姉ちゃんがあんな目に遭うことも避けられたのに。

「お主本人がなんと言おうと、拙者の知るアヴィリア殿は大切な姉を心配させないように困難へと立ち向かえる者でござる。そして他者を気遣い、時には共に歩もうとすることができる優しい女子おなごでござるよ」

有無を言わせない勢いで捲し立ててきます。それがこの人の持つ強さなのかもしれません。強引さとも言えるのです。

モミジさんは、それでも無意味な足踏みとも取れる反論をしようとするわたしへ微笑みました。

「どんな物者も利用し続けるでござる。大切な姉を守る為に」

「わたしに…守れますか……？」

「絶対に守れる。——今日守ってもらった私が保証するよ」

その言葉はきつと…わたしが欲しかった卒業証書。

守られてばかりのアヴィリアを卒業した証なのです。

嬉しくてだらしくなく緩んでしまう顔を見られたくなくてモミジさんの頭をもう一度引き寄せると——ドドドドドドドドドドドッ！

部屋の外から非常識なまでの足音が聞こえてきました。その足音はわたし達のいる部屋の前で止まったのです。

モミジさんも気になったらしく、わたしの胸元で首を傾げています。深呼吸をしながら。

次の瞬間——ザンツと。部屋の扉が両断されたのです。何事っ!??

「アヴェリア!!?ここにいるの!?!」

「お、お姉ちゃん!?!」

「はあ、良かった…やつと見つ…け…た…た…」

扉をぶった斬って飛び込んできたお姉ちゃんは、わたしの顔を見るなり安堵のため息を漏らした後、次第に言葉を失っていききました。

「おろろ? おや、アムネシア殿! ご無沙汰でござる。再会できたことを大変嬉しく思うでござるよ」

「あ、うん…え?」

「え?」

わたしの胸元から呑気に挨拶しているモミジさんを見て、さらに硬直。

そこでわたしも、部屋に飛び込んできたお姉ちゃんが急失速している理由に思い当たったのです。

わたしとモミジさんがいる場所はベッドの上。お互いの距離はゼロ。どころかマイナス? モミジさんはわたしの胸元に顔を埋め、さらにわたしはそんなモミジさんを抱き締めるかのように後頭部へ両手を添えています。

この光景…何も知らない人が見たら確実に誤解が生まれるのでは?!

あわわわわ…! みるみるうちにお姉ちゃんのお顔が真っ赤になつていくのです。色白で髪も白いので、耳どころか首まで赤くなっているのがよく分かるのです。

「……………お邪魔しました」

お姉ちゃんはそれだけ言い残して、静かに部屋を出て行きました。嵐のように来て、そよ嵐のように去って行きました…ではなく!!?

「お姉ちゃん！　ちよつと話を聞いて欲しいのです！」

「大丈夫よアヴィリアうん大丈夫アヴィリアも年頃だものね大人の階段くらい登るものね階段ダツシユくらいするよねうんでもちよつと早いんじゃないかなお姉ちゃんより先に登っちゃうのはでもアヴィリアの人生だもの……」

関節が錆びついたかのようなぎこちなさで宿の廊下を歩いていくお姉ちゃんは、うわ言のように呟き続けていました。

2日ぶり会えた大好きなお姉ちゃん。本当は心配をさせてしまったことを謝らないといけないのに。ごめんなさいと言わないといけないのに。そして叶う事なら抱き着いて頭撫で撫でして液化化するほど甘やかしてほしいのに！

今はそれよりも優先しないといけないことが出来てしまったのです！　この誤解を早急に解かないとやべーのです……!!??

翌日。拙者はアムネシア殿とアヴィリア殿の姉妹と共にこの国を出立することになったでござる。

別に示し合わせたわけではござらぬが……まあお互い不幸が重なったでござるよ。

まず拙者は、アムネシア殿が部屋の扉をぶつた斬ったことで宿を追いやされたでござる。それだけならまだ良かったんだけど、どうやら『収穫の国ガーベラ』のブラックリストに載ったらしく、他の宿でも悉く宿泊拒否。拙者が壊したわけじゃないのに……ぐすん。

こちらの白髪姉妹は、アムネシア殿がアヴィリア殿を探す為に2度無断欠勤をしたらしくバイトをクビに。当然路銀の当てが無くなり、さらに魔法使いでもない者が短期のバイトを見つけたのは至難の業なので、もうはいつそ出国してしまおうということになったらしいとのこと。素敵な姉妹愛でござるが、代償は高くついたようござるな。

拙者たち3人は門の前で揃ってため息をこぼすでござる。とほほ……。

「あの……ごめんねモミジちゃん。わたしのせいで……」

「お気になさらず。アムネシア殿が悪いわけでは……いや悪いでござるな」

「うっ……」

「まあ、どうせ観光スポットも少ない国でござったし気にしないでいいでござるよ」

「でもお姉ちゃんの早とちりは良くないのです」

「誤解は解けたでござるか？」

「一晩掛かりましたが、なんとか」

どうもアムネシア殿は、拙者とアヴィリア殿がベッドの上で抱き合っているのを見て……その……ちよつとオトナな事を致していると勘違いしたようでござった。……別にアヴィリア殿ならアリでござるが。

「うう……だ、だって仕方ないじゃない！ 妹が家出したと思ったら手紙が届いて、そこに宿の名前と部屋番号だけ書かれてたのよ？ それで扉を開けたらベッドで抱き合ってるし……」

「これはアヴィリア殿が悪いでござるな」

「マジですか!?？」

「マジでござる」

だからちゃんと過不足なく詳細を記すように言ったでござるよ。

むうくと頬を膨らめますアヴィリア殿に、拙者とアムネシア殿が笑う。それに合わせて、アヴィリア殿も相合を崩した。

「モミジちゃん」

そしてひとしきり笑い合った後、アムネシア殿が微笑みながら拙者に向けて腕を広げるでござる。

その意図を汲み、首肯を返した拙者は彼女に近付いて——すぽ。その腕の中に収まる。

「わただけじゃなくて、アヴィリアまでモミジちゃんのお世話になっちゃったね」

「構わないでござるよ。それに、拙者もアヴィリア殿に守ってもらったでござる」

「そっか。……わたしの妹、可愛いでしょ？」

「この上なく」

耳元で囁かれた自慢に思わず笑ってしまいながら、それでも確固たる意志を持って肯定するでござる。アヴィリア殿は可愛い。異論は認めぬ。

妹系で通っている拙者だが、本家本元の『妹』の足下にも及ばないことがよく分かったでござる。

「むう。わたしだけ除け者なのです」

「ふふつ、拗ねないの。ほら！ アヴィリアもおいで？」

「……ん」

アムネシア殿は拙者の背中に回していた片腕を開き、アヴィリア殿も招いて2人まとめて抱き締める。これはある種の二股なのでは？

でも、アヴィリア殿は顔が見えないように伏せていても恋する乙女のような匂いを発しているので問題ないようでござるな。一瞬チラツと見えた口元からヨダレ垂らしてるし。

初めてアムネシア殿と出会い、そして別れた時、拙者たちは友達としてお別れ出来なかったでござる。だからなのか、アムネシア殿は拙者と別れる時に抱き締めるようになったでござるよ。

拙者のこと大好きじゃん。拙者も大好きだけど。さらにはイレイナ殿への想いも同じ。もはや別の意味で相思相愛でござるな。

「またどこかで会いましょう？今度は3人で遊びたいな」

「拙者も同じ気持ちでござる。アヴィリア殿は？」

「わ、わたしもなのです……！」

「それじゃあ決まりね！」

それを合図に、拙者とアヴィリア殿はアムネシア殿から離れる。

きつと今、一緒に行こうと言えば2人は着いて来てくれるでござろう。逆に、2人からそう言われてしまえば拙者もついて行く。

だからこそ、言わないでござる。拙者は旅人。そして2人も今は旅人。

旅人同士の再会は、旅の中でなければカツコつかないでござろう？

そしてほうきに2人乗りした姉妹は、拙者の行きたいところとは別の方角に飛んで行ったでござるよ。

その姿が見えなくなるまで見送り続け、完全に見えなくなったところで拙者も鞆に腰掛ける。

「姉妹って良いなあ……」

一人っ子ならではの羨望を口にしながら、拙者もまた、旅の続きを始めるでござる。

イレイナ殿から貰った日記帳の空白も——あとわずか。

モミジのパーフェクト過重力教室

1 限目

夏の茹だるような暑さが去り、しかし冬よりもずっと過ごしやすい季節。樹木を彩る葉は緑から紅へ。もしくは黄へ。

澄み渡った美味しい空気を吸い込み、笑みを浮かべる女の子がいます。

紅葉を3枚散らした黒い袴に黄色の着物。桜の刺繍が施されたローブを靡かせながら、カランコロンと漆下駄を鳴らしていました。目指すは正面に聳える無骨な壁に囲まれた国。周囲の美しい景色には不似合いです、だからこそ目立ちます。

てくてくてく。歩いている女の子が門の前まで来ると、門兵さんが出てきました。門兵さんは女の子の腰にある物を見て尋ねます。

「ようこそいらつしやいました。あなたは…剣士様でしょうか?」

「武士で旅人で魔法使いでござる」

「うん…? 魔法使いなのですか?」

「間を取って旅人でござるよ」

「なるほど。失礼ですが、お名前を聞いても?」

「モミジでござる」

「滞在期間はどれほど?」

「特に決めてないでござる。観光スポットを巡り終えたら、ではダメでござるろうか?」

「構いませんよ」

にっこり笑う愛想の良い門兵さんに、女の子も笑顔を返します。

入国料は銀貨1枚。それを手渡すと、門が開かれます。

「ようこそ。王立セレステリアへ」

さてさて。そんな門兵さんの声を背中に受けながら大手を振って門を潜る、ツヤツヤ黒髪ポニーテールのミニマム女武士とは一体誰でしょう?

そう、拙者でござる。

王立と言うからには王様が治めているのであろうが、そのわりに国民は伸び伸びと過ごしている印象でござった。

老若男女、思い思いに各々の日常を満喫しているでござる。

背の高い建物が両脇に並ぶ道で上を見上げれば、どちらかの建物の住人の物と思しき洗濯物が風にそよそよ。お日様をたくさん浴びて、とてもよく乾きそうでござるな。

長閑のどかで平穩で。この国の風景をキャンバスに描けば、タイトルは『平和』で間違いないでござる。

そんな王立セレスティア。どうやら魔法使いの人口もそれなりに多いらしく、そこかしこに散見される。

ほうきに荷物を括り付けて運ぶ郵便屋さん。

魔法でサーブ配膳を行う喫茶店。

炎魔法を使い、お客さんの目の前で肉を焼く露店。

さらには演劇の舞台で魔法を用いて光やら粉雪やらの演出を加えたり……うっ、人形劇もやつてるでござるな。以前の経験から、魔法で動く人形には少し警戒しちゃうでござるよ……。

まあそれはそれとして。魔法を使った大道芸を見ると、拙者の中で産声を上げた芸人魂が真っ赤に燃えるでござるよ。心を掴めと轟き叫ぶでござる！

「さあさあお立ち合い！ 拙者生まれは東国の武士で旅人で魔法使い！ お急ぎなされぬお歴々、ちよいと足止め口止めご注目あれ！ 祖国の伝統と魔法を組み合わせて、いざ！ 刀片手に蝶の如く舞うでござる！」

パチンパチン！ 数々の大道芸が披露されている広場の一角で手を打つ。

そもそも拙者の服装は目立つ上、なにより顔面がとても良いので通行人の方々はすぐに目を向けてくれるでござる。

おお！ よく見れば、子連れの女性や友人同士の女学生、さらには子どもだけの集団が多いでござるな！ 素晴らしい！

ある程度の人数に見られていることを確認した拙者は、鯉口を切つ

て抜刀。表情は風のように余裕のある無表情…ではちよつと寂しいので、薄く微笑んでおくでござる。

抜いた刀を頭上に掲げ、いぎ！ ゆらりゆらりと舞い踊る。お菓子
の国でサヤ殿のサポートを受けながら披露した剣舞でござる。あれ
よりもスローテンポでござるが。

「「 おお……い……」」

剣舞は雰囲気的に歓声を上げるといふよりは、じっくり見据えて楽しむもの。ローブと長い黒髪を靡かせるように舞い、どこか神秘的な情景を演出する。

しかし、これだけでは当然見飽きてしまうでござる。

「ママ〜飽きた！」「単調ね」「なんか自分に酔ってて鼻につくわ」「変な格好」「チビ」

そのような声が…なんか罵倒混ざってなかった？ 拙者泣くよ？

ま、まあ！ そんな声が聞こえてきた辺りで、前に歩く動作で後ろに下がる。パピ上の作り上げた剣術の歩みの奥義——かみだま神騙しを、過重力魔法を併用して再現し、この場に合わせて応用。拙者は踊りをスローテンポからアップテンポへ。舞踊からダンスへ切り替える。

剣舞では慎ましくすり気味だった足を大きく使い、ボールを蹴るように上げたり、腰を捻ねつてステップを踏んだり。クルンと宙返りも華麗に決める。さらにお尻も素早く左右にフリフリ。

刀を持った手では、あざとき満点のハートを作つて観客の女性にきゅん♡と突き出す。自分を抱き締め、撫で上げてウインクしながら投げキッスもプレゼント。

拙者の可愛いを前面に押しして押しまくったダンス。それを今、踊り切つたでござるよ……！

「はあ…はあ……」

自己評価は100点満点！ うわあく拙者のファンになった女の子からお茶に誘われちゃったらどうしよう。照れちやうでござる！

そんな取らぬ狸の皮算用をしていたら自然と顔がだらしなく緩ん

でしまい、それを隠す為クールに後ろを向く。

息を整えながら納刀していると——トントン。後ろから肩を叩かれたでござる。これはキタのでは！ 女の子がキタのでは!!? 拙者の時代が来たのでは!!?

そんな荒ぶる心を抑え、舞踊中の表情と落差を出す為にはあくど笑って振り向くと、わお！

「この辺りで刃物片手に踊ってる頭おかしい女の子がいるって通報があったんだけど、君のこと？」

……お、お、おまわりさんだあ……。

「ちよつと本部に来てくれるかな？ お茶出すから」

おまわりさんからお茶に誘われちゃったでござるよ。

「どうもすみませんでした」

むすう、とほっぺを膨らまして適当な謝罪をおまわりさんにプレゼント。

なんで入国早々捕まりかけなきやならないでござるか！ ちよつと公共の場で抜き身の刀持って可愛らしく踊ってただけで……よくよく考えたら普通にやべー奴でござるな。拙者が悪いじゃん。ごめんねおまわりさん。

「はあ……」

わりと強めに怒られたので、トボトボと肩を落として先ほどの広場へ戻る拙者。とりあえずリベンジしたい気持ちはあるので、別のやり方で芸を披露するでござるよ。

鞆から扇子と細かく千切った和紙を取り出し、まずは和紙をパサッと軽く前方へ投げる。それを下から扇子でパタパタ。

そうすると、あら不思議。風で煽られた和紙が蝶々のように舞うでござるよ。これぞ拙者の国に伝わる伝統手品『和妻』の定番、〃胡蝶の舞〃でござる。

少し練習すれば誰でもできるでござるが、これが案外見ていると面白い。

5分ほどパタパタしていたら、子ども3人組が拙者の前でしやがみ

込んでじいーと見物し始めたでござる。

「わーすげー!」

「蝶々だあ! 蝶々が飛んでるよ!」

「お姉ちゃんが飛ばしてるの?」

か、可愛え…! 純粹無垢な瞳をキラキラさせて見上げてくる子ども達に、純情可憐な拙者の心は癒されるでござるよ。

見たところ、仲良し3人組といった感じでござるな。いいなあ。拙者も小さい頃にこんなお友達が欲しかったでござる。

「そうでござるよ。それじゃあもうちよつと数を増やしてみるでござる!」

子どもの声援に気を良くした拙者は、さらに和紙をパサッと追加。8匹の紙で出来た蝶々が不規則に舞う。

「! おお! お姉ちゃんすげー!」

やべっ…泣きそう。子どものあまりに純粹な言葉に泣きそう。この子たち拙者の子にしたい。

そんな願望が生まれつつ、さらに5分。

「! ……………」

子ども達の目が死に始めたでござる。

「ねえつまんない」

「他に何かないの?」

「すっごく単調」

どうやら和紙がフワフワ飛んでるだけの光景に、好奇心旺盛な子どもたちは早くも飽き始めたようでござるな。

しかし、拙者ができる『和妻』はこれだけでござる。なので、扇子を持つ手とは逆の手で刀の柄を握り、過重力を用いてもう少し蝶々に派手な動きをさせてみる。

ふむ…どちらかと言えば空気抵抗を受けて飛んでいるせいか、過重力の効果がほとんど感じられないでござる。肝心な時に役に立たねーでござるな過重力。

「もしかしてお姉ちゃん、これしかできないの?」

「無能だね」

「そんな事しか出来ないのに披露しようなんてよく思えたね？」

あれ？　なんか急に雲行きが……。

「そもそも、服装以外で目立つ要素皆無だもん」

「なんか『ござる』とか安直な語尾でキャラ作りしてるけどぎ、正直今のござ世それウケないよ」

「ねえお姉ちゃん、恥ずかしくないの？　しょーもない一発芸しかできなくせに自信満々に披露してる姿、率直に言って滑稽の一言に尽きるんだけど」

な、なんでござるか……この言語能力の発達が大変著しいクソガキ共は……!??

「大体さ、さつきおまわりさんに連れて行かれたのによく戻って来れたよね」

「その肝の凶太さだけは一級品だ。見習いたいよ……ププツ」

「めちやくちや生き恥晒すじゃん。お姉ちゃんはアレだね。生き恥＝人生な人だね」

こ、堪えるでござる……！　ここで泣いたら、もっとバカにされるでござる……うう……。

「そんなにひどい言わなくてもいいじゃないでござるかああ！　うわああああん！」

ダツ！　拙者はダツシユでその場から逃げ出したでござる。泣くのを我慢とか無理。ぐすん。

自分より10歳は年下の子ども達に泣かされた拙者は、広場の隅で蹲って地面をツンツン。もう拙者に優しいのは地面さんだけでござる。だって地面さんは意地悪言わないもん。優しいことも言わないけど。でも拙者のこと否定しないし。地面さんに乗ってる時が1番落ち着くでござるな。なんででござろう？　あ、二足歩行生物だからか。

「どうせ拙者なんてマジカルニートトラベラーでござる……」

「もしもし。そこのあなた？」

「どうせ拙者なんて生き恥＝人生のエセ侍でござる……」

「もしもし」

「どうせ拙者なんて、顔が最高に可愛いだけの大和撫子ロリ巨乳でござる……」

「あなた実はさほど落ち込んでいませんね？」

「おろ？」

地面さんに愚痴を聞いてもらっていると、何やら拙者に掛けられる耳当たりの良い女性の声。初めてにも関わらず、既にずっと聴いていたと思わせる美声でござるな。このまま無視し続けられ耳元で囁いてくれるかな…？

いやしかし！ レディから声を掛けられて無視するなど、人の道に非ず！ その信念の下、拙者は光を置き去りにする勢いで振り向くでござる。

「やつとこちらを見てくれましたね。こんにちは、お嬢さん」

拙者の視線に合わせてしゃがんでいた女性は、期待通りタレ目が特徴的なゆったり美人でござった。ひゃっはー！

夜闇を思わせる長い黒髪で片目を隠し、隠れてない目元にはセクシーな泣きぼくろ。女性の魅力を引き立てる黒を基調とした引き摺るほど丈の長いローブと三角帽子を身にまとい、胸には魔女の証たる星をかたどったブローチを付けているでござる。

全体的に暗い色合いでござるが、どちらかと言うとミステリアスな雰囲気でござるな。

「失敬。お見苦しいところを」

「いえいえ。それよりお願いがありました」

えっ、いきなり？

「構わぬ。しかし拙者、先ほどの国に着いたばかり故、デートスポットには詳しくないでござるよ」

「は、はあ……。私もさほどそういう場所には詳しくありませんが」

「であれば拙者、僭越ながらエスコートさせていただきますでござるよ。」

My 麗しfair の 貴lad_{婦人}y

「それはありがとうございます」

デートといえば、まずはカフェでお茶でござるな。これだけ栄えている国でござる。適当に歩いていれば見つかるでござろう。

拙者は女性の手を取り、歩き始める。

「それで、私のお願いとこのはですね」

「拙者とデートでござろう?」

「違います」

「なんと?!?」

騙されたでござる! だったら拙者に何を求めるといのか。まさか……デートもすつ飛ばして体目当てでござるか! えっち!

「先ほどあなたがやっていた、蝶々みたいなのを飛ばすやつ、もう一度見せてもらってもよろしいでしょうか?」

「……なんだ。それか」

「なんで残念そうになるのです?」

「いや、特に理由はないでござる」

恥ずかしい勘違いに、ほっぺが紅潮しているのが自分でも分かるでござるよ。うう……穴があったら入りたい。

いやだつて勘違いしちゃうじゃん! クソガキ共にあれだけボコボコに言われて落ち込んだところでござるよ! そんなタイミン
グで優しく声掛けられたら、マッチポンプで舞い上っちゃうでござるよ!

「あ、もちろんお金は払いますよ。大道芸ですもんね」

「お代は結構。美しい貴女と言葉を交わせる今この時が最高の報酬でござるよ」

「まあ! お世辞が上手なこと」

「本心でござるよ」

そもそも拙者、お金が欲しくて芸をやったわけではござらん。どちらかと言えば女性や子どもからの黄色い悲鳴が欲しかったでござる。

得られたのはおまわりさんとのティータイムと、クソガキ共からの心ない罵声でござったが。

一旦柔らかい手を離し、鞆から扇子と和紙を取り出して歩きながら
「胡蝶の舞」。

「わあ……うっふふ……」

それを見る彼女の目はキラッキラでござる。尋ねるのは失礼なので拙者の予想になるでござるが、おそらく彼女の年齢は30代半ば。そんな大人の女性が目をまるで女兒のように目を輝かせる姿は……うっ！　これがギャップ萌えでござるか……。いと良きにござるよ！

「さ、触っても問題ありませんか？」

「ふっ。追えば逃げるのが蝶でござる」

パタパタと舞う和紙の蝶に触れようとする彼女の手から逃げるように扇子でコントロール。すると、さらに嬉しそうに「あらあら」と声を漏らしたでござる。

拙者よりも一回り以上年上の方に使うのは無礼に当たるでござるうが、敢えて言わせてもらおう。めちやくちや愛らしい、と！　この人拙者の子にする！

と、ここまで来て今更でござるが、拙者は彼女の名前を知らないでござるな。

拙者はクルクルと回って蝶を彼女から逃しながら尋ねる。

「申し遅れた。拙者の名前はモミジ。武士で旅人で魔法使いでござる」

「あらあら、ご丁寧にも。私はフランです。よろしくお願いしますね。……あ、蝶々」

自己紹介の途中でちょうど通り掛かった本物の蝶を追いかけようとする女性——フラン殿の手首を掴んで止める。それは浮気でござるよ。

「あ…行っちゃいました……」

「いや、そんなに落ち込まなくても」

生きてる蝶々なんて歩いていれば普通に見つかるでござろう。確かにこの季節に蝶々が飛んではるのは少々珍しいでござるが。

「フラン殿は見たところ魔女さんのようでござるが、蝶々など魔法を使って呼び寄せられるのでは？」

「もちろん出来ますよ。こうやって魔法で作り出すことができます」

「えい」とフラン殿が杖を振ると、魔力の鱗粉を散らしながら舞う

蝶々が出現。めちやくちャリアルでござるな。……こんな芸当が出来るなら、拙者のような素人が行っ「胡蝶の舞」なんてゴミのように映るのでは。

「暇な時は大体この子たちと戯れてますね。蝶々は良いものです」「なるほど。つかぬ事を聞くでござるが、フラン殿はどのような職業に？」

今の時間はお昼とおやつのちょうど中間あたり。王立セレステリアにそのような概念があるかは分かるぬが、恐らく平日でござる。

そんな時間に広場をぶらぶらしているような者は、ろくに働きもしないプーさんの可能性が高い。しかも魔女だから拙者と同じマジカルニートの可能性が！

奇しくも拙者、同志を見つけたかもしれないでござるよ！ まあフラン殿は魔女なので、定職に就かなくても簡単にお金なんて稼げるでござるろうが。

「うふふ。ちなみに何だと思えますか？」

「えっ？ えーと……」

なんか質問を質問で返されたでござる。「ニートだと思えます！」って言っても大丈夫でござるろうか……？

言葉選びに苦心する拙者をよそに、フラン殿はちよつと自慢気に自身の姿を見せるようその場でクルツと回る。見た目にヒントがあるということでござるか？

「ふむ……」

引き摺るような長さのローブから、恐らく肉体労働ではないでござるろう。そもそも魔法使いって肉体労働するくらいなら魔法使おうし。

さらに、露出の少ない肌も不健康ギリギリのように白い。今の季節秋から考えて、もし夏に日焼けしたのならばまだ黒くても良いはず。つまり屋内職でござるな。

以上の事から考えられ、さらにフラン殿のイメージに合う職業はただ一つ！

「恐らくフラン殿は夢のような職業ではござらぬか？」

「まあ…そういう言い方もしますね。人の夢を見守る職業です」

「なるほど」

確定でござる。見守るとはつまり——何もしない！

「夢の職業。略して夢職無でござるー！」

「違います」

「失礼。少々遠回しな言い方でござったな。拙者が言いたいののは、ニートという事でござるよ？」

「だから違います」

「どうして嘘をつくでござるか？」

「どうして嘘だと決めつけるのですか？」

あれ？ 心なしかフラン殿ちよつとキレてね？

「正解は、学校の先生です」

「またまたく」

「学校の、先生、です」

「あ、はい」

こんなな威圧感のある笑顔初めて見た……。恐怖のあまり、拙者はコクコクと壊れたように首を縦に振るでござる。

「モミジさんも魔法使いですよね」

「然り。魔導士の位ではござるが」

「では、私の学校に来てみますか？」

「拙者、就学の意味は無いでござるよ」

「いえ、生徒になれという訳ではありません。単なる見学ですよ」

見学かあ……。学校なんてどこも同じだと思おうでござるが。……うん？

「どうして魔法使いだと学校を見学することになるでござるっ！」

学校は学問を修める場でござる。魔法は関係ないのでは？

「それは——私が魔法を教える学校の先生だからです」

フラン殿はミステリアスな笑みを浮かべて、悪戯っぽく言ったでござる。

フラン殿に連れられて辿り着いたのは、高い時計台が象徴的な王宮と見紛う程に立派な建物でござった。敷地も広大らしく、囲われた柵

の外からでは外観以上のことは分からないでござる。

「なんとというか……凄まじいでござるな」

「一応この国の目玉観光スポットでもありますから。関係者以外立ち入り禁止なので、外から眺めることしかできませんが」

「ほう。それは運が良い」

こんな立派な観光スポットを外からしか見られなければ、さぞ菌瘁い思いをすることであろう。旅人ならば尚更。

「……まあ、中には勝手に入ってしまう悪い子もいるんですけどね」

「勝手に入るとどうなるでござる？ 首を刎ねられたりするでござるか？」

「普通に門番に止められるだけです」

『王立魔法学校』とそのまんまな名前が記された門の前にいる門番にフラン殿が一礼すると、畏まった様子で開門される。

ふむ。実はまだ疑っていたでござるが、この先生というのは本当らしいでござるな。

「今日は授業はお休みでござるか？」

本当に先生ならば、この時間にぶらぶらしてるのもおかしいでござるし。学校なんてほとんど通っていなかったでござるが、確かおやつ時間くらいまでは授業があったはず。

「いえ。ちゃんと授業はありますよ。今の時間だと、ちょうど最後の授業を行なっている頃ですね」

「……………」

「その疑わしいものを見る目はなんでしよう？」

「……やっぱり不法侵入でござったか」

「やっぱりってなんですかやっぱりって。ちゃんと門番が門を開けてくださってでしよう？」

「魔女にビビっただけかと」

「私は基本的に普段の授業は受け持っています。希望者のみの課外授業であったり、他の先生に指導するのが専門です。だからこの時間は特にやる事が無いだけですよ」

なんだ、そうでござったか。てか先生に指導するってフラン殿、実

は結構えらい御仁なのではないでござるか？

「ちようどこれから課外授業ですので、証拠代わりに見学して行きま
すか？」

「それは嬉しい申し出でござるが、良いでござるか？」

分野問わず、学問とはある種の財産でござる。だからこそ学校に通
うということはアホみたいに高い入学金やら授業料が発生する。言
い方を変えれば、「授業」とは高級品でござる。

そんなものを、見学の名目で無料提供しても良いのか。

「問題ありません。私が良いと言えば良いのです。だって先生です
ら」

「フラン殿がこの学校の責任者ではないでござろう？」

「ご安心を。彼女達責任者の弱味なら最低1人1つ以上は握ってあります。
うふふ」

どうやらフラン殿は、実質この学校の支配者のようでござるな。恐
ろしや。

「まあ、そういうことであれば」

「ふふっ。それなら、今日は張り切って授業しないといけませんね」

なんででござろう？ 嫌な予感しかしないでござるよ。

嫌な予感。的中でござる。

「はい。今日は皆さんに、この旅人さんと鬼ごっこをしてもらいます」
今日の授業は屋外でやるということで校庭に向かうフラン殿へ着
いていき、既に集まっていた生徒の前で放たれた第一声がこれでござ
る。気は確かか？

「モミジさん。自己紹介をお願いします」

「え？ あ……えっ？」

「自己紹介です。挨拶は人として基本ですよ？」

何も知らない旅人騙して生徒と鬼ごっこをさせようとする先生は
人として如何なものか。是非とも質問の時間をいただきたいでござ
るよ。

しかし、わりとこういった事態はフラン殿の課外授業ではある事なのか、生徒たちは既に受け入れモード。むしろ拙者の自己紹介にワクワクしてる様子でござる。なんで？

「えっと……名前はモミジ。武士で旅人で魔法使いでござる。よ、よろしく」

ペコリとお辞儀すると、集まった生徒から社交辞令のような拍手を受ける。どうしてこんな事に……。

「質問いいですか？」

「はい、ユウトさん」

「どうしてフラン殿が許可を？」

「先生ですから」

「それ、どんな時でも通じる言い訳じゃないでござるよっ」

「この場、この時、この状況において言えば、『先生』は無敵の免罪符になり得るんですよ。覚えておいてください」

「教育者とは思えない発言でござる」

まあ、郷に入りては郷に従え。この課外授業に限って言えば、フラン殿の郷でござる。別に失敗したら死ぬわけでもないし、お人形にされるわけでもない。大人しく従うことにするでござるよ。

とりあえず、最初に質問しようとしたメガネを掛けている絵に描いたような優等生っぽい女生徒——ユウトと呼ばれた彼女に笑みを向ける。拙者とフラン殿の様子を見て、質問していいのか迷ってるし。

「何が聞きたいでござるか？」

「モミジさんは魔女なのですか？ 見たところブローチを着けていないようですが……」

「魔女ではござらん。皆さんと同じ魔導士でござるよ」

拙者の回答に、生徒達は若干のザワつきを見せるでござる。そりやそうでござるよ。魔女ならばいざ知らず、自分達と同じ魔導士を追いかけ回せと言われたら戸惑うのも当然でござる。

「では僕も質問を」

次に手を挙げたのは、金髪と白い歯が特徴的な顔面偏差値高めの男

子生徒でござる。一般的に見たらイケメンと呼ばれる類でござろうか。男の顔面など、心底どうでも良いでござるが。

「はい、イケメくん」

「だからどうしてフラン殿が」

「先生ですから」

あ、はい。

「えっと…イケメ殿でござったか。なんでござる？」

「出身はどこですか？ 方言のようなしゃべり方をしているようすが」

「東の国でござる。これは方言ではなく、物忘れの激しい友達が拙者を思い出しやすいように特徴を付けただけでござるよ」

「そこまでしないとダメなほど深刻な…？」

「たぶん若年性認知症でござるな。以前再会した時にはもう治っていたでござるが」

確かアムネシア殿の日記には、『夜眠ると記憶が消える病』と書かれていたでござるから、それに類するものだったのでござろう。治って良かったね、アムネシア殿。

「あ、あの…わたしも良いですか？」

今度はオドオドした声の小さい女生徒。拙者と同じくらい長い茶髪がいい匂いしそうでござるな。是非とも後でくんかくんかさせていただきたい。

「フラン殿。彼女は？」

「オドコさんです」

「オドコ殿…先ほどのユウト殿と合わせて記憶に刻み込んでおくでござるよ」

「質問に答えてあげてくださいね」

「然り」

にこりと質問を促す意味で優しく微笑むと、彼女は顔を赤くしてオドオド。

無性にテイクアウトしたい。いやしかし、彼女と2人きりの空間にいたら理性がテイクオフしちゃうでござるな。

「そ、そうですか。……度し難いですね」

なにやら取り返しをつかない誤解を受けているようでござるが、赤面する女の子というわりと拙者の性癖に刺さるものが見られたので良しとするでござる。てか、ここの生徒さんみんな可愛いでござるな。

「では皆さん。両手を前に出してください」

追加の質問が無いことを確認したフラン殿は、そう言つて杖を振つたでござる。

すると、生徒さんのお手々がキラキラと緑色に発光。

「魔法のインクを皆さんの手に付与しました。モミジさんにそのインクをベツタリ付けたら勝ちですよ」

「え、すごく迷惑」

「私が解除すれば消えるのでご安心を」

「その魔法、どこに需要があるでござるか?」

「万引き犯やひったくり犯の服に付着させれば、捕まえた時の証拠になります。ああいった犯罪は現行犯逮捕が難しいですから」

てことは鬼ごっこ中、側から見てる人には拙者が何かの犯人だと思われるってこととでござるな。

解せぬ。

「制限時間は30分です。それでは、位置についてー」

フラン殿の声に、生徒さんは淀みなく一斉にほうきを呼び出して乗る。無駄が省かれた良い動きでござる。

対して、拙者も腰から鞘ごと刀を抜いて座る。実は鬼ごっこ初体験の拙者。なんだかんだ言いつつも、ちよつと楽しみでござるよ。

「よーい……どんー!」

魔法で放たれた号砲に拙者は生徒さんから逃げる為、全速力で飛び立ったでござる。

(さあ、掛かって来るでござる!)

結果——開始3分でタッチされたでござる。何このクソゲー二

度とやらんわ。

2 限目

「え、早すぎませんか？」

魔法のインク塗れで生徒さんから猫掴み状態になって戻ってきた拙者に向けて、フラン殿の一言。さりげなく「せっかくお昼寝タイムができたと思ったのに……」という最悪な呟きも耳に入ったが、それは聞かなかったことに。

いや、よく考えてほしいでござる。そもそも鬼ごっこって、逃げる側が多数派の筈でござろう？　なんで鬼が多数派で逃げる側が拙者1人なの？　まさに逃亡犯そのものだったでござるよ。もしくは借金取りに追われる多重債務者。

「フラン殿の生徒さんは大変優秀でござるな」

不貞腐れた拙者は、嫌味を1つ飛ばしておくでござる。こんなイジメでござるよ。ぴえん越えてばおんでござるよ。

「……………」

ほらく！　生徒さんも『この即刻捕まったエセ侍どうしよう…』みたいな顔で戸惑ってるでござる。

内心の意図は違えど、この場にいる全員からジト目を向けられたフラン殿は顎に手を当てて唸り始める。

「……モミジさん。あなた、どうやって逃げました？」

「どうやっても何も、普通に鞆に……あつ、拙者にとつての筈は鞆でござるが、それに乗って逃げたでござるよ。生徒さんと同じやり方でござるな」

「なるほど」

なにやらフラン殿の中で合点がいったらしく、手を合わせて「ふむふむ」と頷き始めたでござる。

「ではもう一回戦やりましょう。皆さん手を前に」

いじめでござるか？　拙者を魔法のインク塗れにする斬新なイジメでござるか？

そんな悲嘆に暮れる拙者をよそに、フラン殿は戸惑う生徒さんの両手へ魔法を付与。今度は蛍光ピンクでござるな。目がチカチカする。

それに合わせて、着物に付いた緑色が消えたでござる。ちゃんと消えて良かったあ…。

「せ、先生。さすがにモミジさんともう一度というのは…その…」
明らかに気落ちする拙者を見て、ユウト殿がそうフラン殿に進言してくれる。優しいでござる。さすがは優等生。優等生の『優』は優しいの『優』でござる。実際彼女は鬼ごっこでも生徒の指揮を取っていたし。

たぶん時間の無駄、という考えもあるのでござろうが。

しかし、ユウト殿の言いたいことが伝わったのか伝わらなかったのか、フラン殿は変わらず笑みを浮かべたまま。

「問題ありません。皆さんがモミジさんを捕まえるのは至難の技ですよ」

「いや、そんなにハードルを上げられても拙者が困るでござるが」

実際開始3分でタッチされたし。

「ああ、1つ言い忘れていました」

すると、フラン殿は拙者を手招き。何かと首を傾げたまま近付くと、耳元に口を寄せてきたでござる。

ふむ…フラン殿、大人の女性らしい落ち着いた香りがするでござるな。これまでも拙者、アムネシア殿、イレイナ殿、シーラ殿、サヤ殿、アヴィリア殿と数多くの美女美少女のスメルをくんかくんかしてきてでござるが、負けず劣らず悩殺されそうな素晴らしい香りでござる。抱き着いて良いかな…ではなく。

「あなたのやり方で逃げてください。生徒に合わせる必要はありませんよ」

そう言って耳元から離れる。拙者のやり方…でござるか。

「本当によろしいのでござるか？ いくら遊びとはいえ…いや遊びだからこそ、正々堂々と同じ条件でやらないのは拙者の主義に反するでござるよ」

「これは遊びではありません。授業です」

———そういうこととござるか。あくまで鬼ごっこは、理解を円滑に進める為の演習授業。そして拙者は教材。

どうやら拙者は、とんでもない思い違いをしていたようでござるな。そういうことであれば承知したでござる。

「では皆さん。条件は先ほどと同じです。その魔法のインクをモミジさんにベツタリ付けてあげてください」

色々言いたいことはあるようでござるが、生徒さん達は大人しく箒を呼び出して乗った。めちやくちや良い子達でござるな。

対して拙者は——腰に戻した刀に手をかけて直立。鞘には乗らない。

「位置についてー、よーい…どんー!」

本日2度目の鬼ごっこ開始を告げる号砲に合わせて、相変わらず綺麗に連携の取れた動きで生徒さん達は突っ込んでくるでござる。

鞘（箒）に乗らない拙者に対しても油断なく、今回は横一直線に広がって。とても合理的な陣形でござるな。確かに魔法使いは箒に乗らなければ上下の動きが極端に小さくなる。

しかし、全くできない訳ではないでござるよ!

「うっ、うわあ!?!」

驚愕に染まるイケメ殿の顔面ストレスで、拙者は過重力を自身に掛けて前方に跳ぶ。生徒さんの陣形を丸ごと背面跳びでやり過ごすでござる。

「鬼さんこちら♪ 手の鳴る方へ♪」

そのまま拙者は学校の門まで走り、バク宙で高い柵を飛び越えながら目を丸くしている生徒一同へ告げる。調子外れの音程はぐ愛嬌。

さあ、リベンジマッチでござるよ!

流石に突っ走り続けるのは疲れるので、学校を出た拙者は鞘に乗って街中にある高い建物の屋根へ移動する。

そして、人混みのある道を挟んで橋渡しされている洗濯物が吊るされた紐の上で綱渡りのようにして待ち構えるでござる。落つこちなように軽く過重力を掛けてバランスを取ることも忘れない。

王立セレスティアの国民がわざわざこのようにして洗濯物を干すのは、魔法使いが箒で低い位置を飛びにくくする為とのこと。それは

魔法使い同士の衝突や、落下した魔法使いが歩行者に激突することを防ぐという目的でござるが、今回はそれを利用して貰うでござるよ。

「お、来たでござるな」

30分という時間制限があるので、別に隠れていても良いでござるが、今の拙者は教材でござる。それをやったら後でフラン殿に小言言われそう。

それに、せっかくなら鬼ごっこを楽しみたいという純粋な遊び心もあるよ。

最初に来たのは先ほど顔面スレスレを失敬したイケメ殿と、彼が率いる生徒数名。箒に乗っているので分かりにくいが、よく見ると2人1組のようでござるな。

「逃げなくていいんですか?」

「逃げるでござる…よー!」

しかし、全員で正面から来たのは悪手でござる。拙者は洗濯紐の上から後ろに倒れ込むように落下。紐に掛かった洗濯物で一瞬だけ彼らの視線を切る。

「みんな! 左右から挟み込むように追って!」

素早く指示を飛ばし、集団で包囲するように飛んでいくイケメ殿を人混みの中から見送り、歩いて彼らとは逆方向に向かう。

別に魔法使い同士の鬼ごっこが上空だけで行われるとは限らないでござるよ。

拙者は洗濯紐から落ちる直前に見えた魔法学校の時計台が示した時刻を思い出す。残り時間、23分。

市場まで来た拙者は、おやつ代わりにリングを購入してもう一度別の建物の屋根の上へ。実は市場まで来る途中にも何度か上空を鬼たち生徒が飛んでいるのを目撃したでござるが、どうも拙者を搜索する目は地上に向けられていなかったでござる。

これでは隠れているのと同じ。『魔法使いは飛んで逃げる』という固定概念から抜け出せない生徒たちに原因はあるが、だからと言って

教材である拙者が授業放棄はまずいでござるからな。

シヤクシヤクとリングを齧っていると、背中側から視線を感じる。

「見つけた！ 買い食いはダメなんだぜ？」

「内緒にしてくれると嬉しいでござるよ。チャラ殿」

律儀に声をかけてきたのは、軽薄そうな喋り方が特徴的な男子生徒でござる。

彼が率いる生徒たちは、互いが当たらぬよう間隔を取りながら不規則にバラけている。

「いや、最初は驚いたけどあの背面跳びで避けるやつさ、この状態で攻められたらできないよね？」

「然り」

学校から飛び出した時の生徒たちの陣形は、言うなれば『線』でござった。だからこそ容易に飛び越えることが出来たでござる。

しかし今回のチャラ殿たちの陣形は、『面』。散弾のように広く展開して逃げる場所を潰す作戦でござるな。悪くない。

でもそれは、拙者が避けることを前提とした陣形でござる。逆説的に、避けなければ良いという結論に至るでござるよ。

「全員突撃いいいい!!」

お調子者っぽく声高々にチャラ殿は叫ぶ。それと同時に、彼らは一斉に突っ込んで来た。

「とか言いながら俺も行っちゃうんだよね！」

拙者に両手を突き出して突っ込んできたのはチャラ殿でござる。

彼は最初から避けられると思っっているらしく、結構な速度を出している。

対応するのはチャラ殿のみ。他の生徒は無視でござる。

「柔は剛を制す。覚えておくでござるよー」

まず拙者は食べかけのリングを前方に放り投げて刀の柄を握り、突っ込んでくるチャラ殿に下から上への過重力。チャラ殿は今両手を離して足だけで箒にしがみついている状態なので、すぐにバランスを崩したでござるよ。

「うわわわわわわわ!!?」

「危ない危ない」

箒の慣性に乗ってつんのめるように拙者へ倒れ込んでくる彼をヒラリと躲し、右手で彼の箒を、左手で彼の襟首をキャッチ。

そのまま片足を支点にしてクルッと時計回りに180°。回転してチャラ殿の勢いを殺し、屋根に下ろしてあげるでござる。さらに、右手で握られたまま一緒に180°。回転したことでUターンした彼の箒に乗る。

——奪刀術だつとうじゆつという技術がある。読んで字の如く、相手の武器を奪って無力化する護身術でござる。まあ、拙者が実家でマミ上から習っていたものでござるが。

今回の鬼ごっこに関して言えば、鬼側の武器は魔法使いの代名詞とも言える箒。それを奪ってしまえば、少なくとも奪われたチャラ殿は無力でござるよ。

「ちよ、待てよー」

彼と同じ速度で突っ込んでいた生徒たちは急な方向転換ができず、振り返って拙者の後ろ姿を見送ることしかできない。

逃げ場を潰すというのは悪くなかったでござるが、やるなら第二陣も用意するべきでござったな。

盗んだ箒で走り出しながら投げたりリングをキャッチ。ついでに魔法学校の時計台を確認。残り時間、15分。

「ととと止まってくださいー」

チャラ殿の箒でのんびり浮いていたところ、オドオドした声に静止を掛けられたでござる。

拙者の進行方向には、蛍光ピンクに光る手のひらを向けているオドコ殿。そして止まったのが運の尽きでござったな。

全方位、上下前後左右全てを一瞬にして囲まれたでござる。

「こ、これなら…逃げられません…」

「ふむ。そう言った言葉は壁ドンされながら言われたいでござるよ」

「かか壁ドン…なんて、そんな…っ」

ウインク混じりに軽口を叩くと、オドコ殿は小さなお口をあわあわせながら顔を真っ赤に染めたでござる。めちやくちや初心^{うぶ}じゃん。壁ドンを想像しただけで赤面とか、変な輩に騙されなにか心配になるでござるよ。

それはそれとして、今度は随分と大所帯で来たでござるな。イケメ殿とチャラ殿のグループを合計したらちようどこのくらいの人数になりそうでござる。ざっくり言うと、だいぶ多い。

さらにここまで囲まれてしまえば、先ほどまでのように『逃走』という手段は使えない。ここは少々頑張りどころでござるな。

「とりゃあああああ」

不意打ちを食らわれないよう周囲に意識を集中させていると、わざわざ掛け声を上げて真後ろから男子生徒が飛びかかってきたでござる。

拙者は普通に箒をコントロールして避ける。すると、それを皮切りに拙者を包囲していた生徒が続々と襲いかかってきたでござるよ。

「これ、チャラ殿に返しておいてほしいでござる」

拙者は正面から迫る蛍光ピンクの両手に、乗っていた箒を握らせ、さらにその者の肩に手をつけて跳馬運動の要領で飛び越える。すぐさま別の生徒がタッチしようとしてくるが、それは体を傾けるだけで回避。

拙者は落下しないように腰から鞘ごと刀を抜き、その上に立って——構える。両手を開いて前方へ。

この鬼ごっこにおける拙者の敗北条件は、フラン殿が生徒に付与した魔法のインクを付けられること。

しかしそのインクは、生徒の手のひらにしか付与されていないでござる。つまり、手のひらに触れなければ負けにはならない。

「やあああああああああああ」

気合と共にタツチしようとしてくる女子生徒。その手が拙者の腕の届く範囲に入ったところで——ペシッ。手首を痛くならない程度の強さで横から叩いて逸^そらす。

武術ではごくごく当たり前の技術。打撃に対する基本的な防御テクニク。それをこのシチュエーションに合わせて応用しただけで

ござる。

そこからは一方的でござった。捌く。逸らす。凌ぐ。受け流す。単純作業とも言えそうなほどに、それを繰り返すだけでござる。

このように全方位を囲まれて仕掛けてくるような状況は春頃経験済み。お人形さんではござったが、明確な攻撃意思を持ったもので。それに比べれば、ただタッチだけを目的にした彼ら彼女らの軌道は至極読みやすいでござるよ。

(そもそも皆、良い子そうでござるし)

フラン殿の生徒全員、紛れもなく良い子ちゃん達でござる。別に侮つてるとか馬鹿にしてるとかではなく、ただ単純な感想として。

少なくとも、殴り合いの喧嘩とか似合わないでござるな。

まあ、だからこそこのルールに限って言えば拙者が1枚上手でござる。

守るよりも攻める方が体力を使うので、5分も経てば拙者を囲んでいた生徒たちは死にそうな表情で息を切らしている。そろそろ頃合いかな。

「息の乱れは陣形の乱れ。魔法使いにも体力は必要でござるよ」

疲労によって集中力が途切れたらしく、包囲網に穴が空く。それを見逃してやる理由も無いので、拙者は素早くその穴から脱出。

そろそろ制限時間なので、魔法学校に戻るとするでござるよ。

残り時間、6分。

時計台に腰掛けてしていると、内部の歯車が鳴らすカチコチという風情溢れる音が聞こえてくる。

眼下には、校庭の芝生で寝転がっているフラン殿が見えるでござるが……あれってもしかしてお昼寝してる？

「これがラストチャンスでしょうか」

「時間的にそうでござるな」

眼鏡を掛けたリーダー的存在の女生徒——ユウト殿の言葉に、笑顔で頷きを返す。

今現在拙者は、生徒全員に囲まれているでござる。オドコ殿の時と

は密度が桁違い。

さらに、時計台が背中にあるせいで逃げ場は無し。

ユウト殿の的確な指揮のおかげか、この包囲網が形成される時間は10秒にも満たなかったでござるよ。

「あと1分ほどでござるか?」

「はい。まさか魔女でもない貴女に、ここまで煮湯を飲まされるとは思いもませんでした」

「まるで勝つことが確定したかのような口ぶりでござるな?」

「いくらなんでも、この人数を捌くのは無理でしょう」

確かに、この密度で手を伸ばされては捌き切れない。なんなら両手だけでなく、両足、両肘、両膝を使うということもできるが、流石に上空でそれをやってしまうと生徒たちが危ないでござる。

加えて、チャラ殿に対してやったような奪刀術の応用での突破も難しい。1人の箒を奪っても、別の生徒が控えてるこの状況では効果が薄いでござるからな。

視界を切れるものも無い上、関係者以外立ち入り禁止の学校敷地内では人混みに紛れるという手段も使えない。

恐らくユウト殿は、拙者の逃走方法を全て観察していたでござるな。そして拙者が見せた逃走方法を潰した。素晴らしい洞察力と観察眼でござる。

でもそれは結局、既存の方法が使えないというだけでござるよ。

背中には時計台。後退は不可能。拙者をお腕で囲むような包囲網に隙は無い。よく見るとその包囲網は、二重、三重に敷かれたようにも見える。

少なくとも、鞘に乗ったの突破は無理でござる。

「モミジさんの箒に依存しないバツタみたいな移動方法は恐らく過重力の応用でしょう。あれは接する物が無ければ直線的な動きしかできませんよね?」

「バツタみたいって……」

「いやまあ、ピョンピョン跳ね回ってるからそう見えなくもないでござるうが。」

「その時計台から離れてしまえば足場はありません。私達の勝ちです」

確かに拙者の過重力を応用した移動は障害物の多い室内で真価を発揮する。屋外であろうと街中であれば建物の壁が使えたが、今ここにはそれすら皆無。何せ王立セレステリアのどこにいても見えるほどの高さを誇る時計台の上でござる。

だけど足場が無いというのは些か早計でござるよ、ユウト殿。

「残り時間40秒。勝ち誇るのは構わぬが、拙者にタッチしなきゃ負けるのはお主らでござるよ?」

「分かっています。——みんな!」

勝つことが確定したとしても、ユウト殿は油断することなく全体を見渡せるように下がって一声。それに合わせて包囲網を縮小させるかのような動きを抜群のチームワークで成し遂げる生徒一同。

きっとユウト殿から見れば、拙者は気付かず網の中に入ってしまったお魚さんのようでござろう。

でも、彼女は1つ勘違いをしているでござる。足場が無い?

だったら——お主らが足場になるんだよ!

「よいい、どん!」

——ダン! 拙者は自身に過重力を掛けながら時計台を蹴り、生徒たちの包囲網に向かう。

今まで逃げるか防ぐの防戦一方だった拙者が立ち向かってきたことに、彼ら彼女らの顔は驚愕に染まっているでござる。

何も驚くことは無い。この程度の『想定外』、鬼ごっこ中何度も見せた筈でござるよ。

拙者は時計台を蹴ると同時に体を螺旋状に半回転させ、上下逆さまの視界の中で、トン…。

この空中にある唯一の足場——生徒が跨がる筈の裏を静かに踏み込む。

過重力の特性を最大限まで活かした包囲網突破術——八艘跳びならぬ、八箒跳びでござる。

本来は踏み込みと同時に箒を破壊したり乗ってる者を突き落とす

でござるが、今それをやったら普通に大事件なので足場にするだけに留める。

トン…トンツトン…!!

静かな足音と共に突破する拙者へ反射神経の良い生徒は手を伸ばすが、それはペシツと手首を軽く叩いて逸らす。

そして包囲網最後尾列にいたユウト殿の箒を踏んだ瞬間、

(しまった…!!)

最後の最後で気を抜いてしまった拙者は過重力の制御を誤り、予想以上の強さでユウト殿の箒を踏んでしまう。

「あ…!!」

お尻側から箒越しに蹴り上げられた彼女はそのまま落ちてしまったでござるよ…!!

ユウト殿は指揮を執るため、包囲網全体を見られるように他の生徒から少しだけ離れていた。そのせいで、落下する彼女を助けることのできる生徒はいない。今まさに地面へ真つ逆さまに落ちていく彼女を追っても間に合わないでござる。

「くっ…!!」

拙者は鯉口を切り、鞘ごと腰から勢い良く抜刀。遠心力に任せて鞘を前方に投げ、そのまま即席の足場にする。

そして鞘に拙者側——正確には落下するユウト殿側に過重力を掛け、さらに自分にも掛けて全力で踏む。

(間に合え…!!?)

踏切台のような高反発を受けて…よし！ なんとか届いた。

お姫様抱つこで彼女を支え、刀を小指と薬指で振って下から上への過重力。衝撃を打ち消し、無事着地できたでござるよ。

「怪我は無いでござるか？」

「ひゃ、ひゃい…!!」

腕の中にいるユウト殿はちよつと上擦った声でお返事。顔を見れば、トレードマークの眼鏡が少しズレただけで無傷のようでござるな。少々顔が赤いのが気になるでござるが、恐らく落ちた時の恐怖によるものでござろう。

ゆつくりと地面に下ろし、ズレている眼鏡と乱れてしまった前髪を優しく直してあげたら……プイ。か、顔を背けられた……!!?!

もしかして嫌われたでござるか!!?!

顔が真っ赤なままこちらを見てくれないユウト殿にシヨックを隠せない拙者は、若干フラフラしながらフラン殿へ振り返る。

「はい、制限時間です」

いつの間にか杖を握って立ち上がっていたフラン殿はパンと手を叩き、鬼ごっここの終わりを宣言したでござる。

「この鬼ごっこ——モミジさんの負けです」

逃げ切ったかのように思えたでござるが、最後の最後——つまりユウト殿を助けた時。彼女は無我夢中で拙者の服にしがみついていたでござる。

ハプニングとはいえ、あれも制限時間内でのこと。蛍光ピンクのインクが着物に付いたことで、ルールの拙者が敗北となったでござる。結構悔しい。

本日のフラン殿の課外授業はそれで終わり、後日レポートを提出する旨を告げて生徒たちは解散。

現在拙者は、フラン殿の家にお邪魔している次第でござる。

「本当に泊まってもよろしいのでござるか?」

「はい。いきなり授業をしてもらったんですもの。せめてものお礼です」

「しかし、今日会ったばかりでござるよ?」

「問題ありません。あなたの人柄はある程度理解しているつもりです」

「いいのかな……? いやまあ、本人が良いと言うなら良いんだろうし、拙者としても宿代が浮いて助かるでござるが。」

「拙者が悪人という可能性もあるでござる」

「悪人はあんな必死な形相で今日会ったばかりの私の生徒を助けようとはしませんよ」

「あれも演技だとしたら?」

「その演技がずっと続くのを祈ります」

ふむ…おつとりした見た目に反して、フラン殿は我が強いタイプのようでごさるな。

「それはそうと、モミジさんはお料理得意ですか？」

「拙者の数少ない特技でごさるな」

「では、今日の夕食をお願いしても？」

「……………」

「最近誰かの手料理というものを食べていないものでして」

まさかの提案に言葉を失ったでござる。あれ？ 拙者一応お客だよね？

「泊めてあげるわけですし、それくらいは構いませんよね？ ギブアンドテイクでいきましよう」

「別に構わぬが、泊めてもらえるのは今日の授業のお礼では？」

「ほら、会った時に言っていたではありませんか。『美しい貴女と言葉を交わせる今この時が最高の報酬でござるよ』と。私のギブは2つ。対して現在モミジさんからのテイクは授業の1つ。1つ足りません」

「もはやギブアンドテイクのかつあげでござる」

「あの…………ダメですか？」

うっ…………その上目遣いは反則でござるよ。美少女の行う上目遣いとは違い、大人の女性が行う上目遣いには『あざとさ』が無いでござる。むしろ地位も名誉もある人が上目遣いで頼んでくるというのは、どこか背徳的な色気があるでござるよ。フラン殿のような美人であればなおの事。

「ま、まあ、一宿の恩を一飯で返せるのなら安いもの。何か希望はあるでござるか？」

「お肉とパンが食べたい気分です」

「承知」

首肯を返して鞆から財布を取り出そうとしていると、フラン殿からスツと花柄の中着袋を渡されたでござる。

「お金はごちらから自由に使ってください。流石にお代まであなたに払わせる気はありませんよ」

中にはお金がたくさん。明らかに食事の買い出しには多過ぎるでござるが、これは拙者のことを信用しているという証拠なのでござるう。

ありがたく受け取り、拙者はこの国の市場へ向かう。

フラン殿の家のキッチンを借り、拙者は彼女のお金で買ってきた食材を作業台へ並べる。

まずメインとなる牛の肩肉と挽いた鶏むね肉。さらにレタスとトマト、紫オニオン。ガリリツクオニオンドレッシングにハチミツ、マスタード。そしてバンズ。拳大のゴルゴンゾーラチーズ。

フラン殿がパンとお肉をござる所望ということで、今夜はハンバーガーを作るでござる。

まずは魔法で冷やしたボールに挽いた鶏むね肉と生卵、岩塩、こしょう、ナツメグを入れる。

そして牛の肩肉をみじん切りのように包丁で刻む。こうすることで、挽き肉オンリーのものよりも旨味と食感が増したパティができるでござるよ。

そして刻み終えた牛肉もボールへ入れ、グーパン。ひたすらグーパン。ただただグーパンでござる。思わず「オラオラオラオラオラオラオラオラオラ」と言いたくなるほど殴り続ける。気が狂ったかのように。急にキツチンで殴打音が鳴り出したので、フラン殿が心配で見に来ちやうくらい。

これは別に拙者の頭がおかしくなったとかではなく、大量の血管が通った手のひらで捏ねると体温が伝わって脂が溶け出してしまうからでござる。逆に拳ならばほぼ骨なのでその心配がいらぬ。めちゃくちゃ合理的な理由でござるよ。

そして両手で整形し、オリーブオイルを敷いて温めておいた鉄板へポイ。ジュワアアアと音を立てながら香ばしい肉汁が溢れ出す。

パティを焼いてるうちにバンズパンを真ん中で切り、外側を軽く炙るでござる。白くまっ平の内側には接着剤代わりのハニーマスタードをたっぷり塗り、その上から千切ったレタス、切ったトマト、ガー

リックオニオンドレッシング、タイミング良く焼き上がったパティ、紫オニオンの順番で乗せる。その上から、小鍋で溶かしておいたムワツと濃い匂いのゴルゴンゾーラチーズを回し掛け。肉とチーズの匂いが混ざり、口の中には瞬時に唾液が分泌されるでござるよ。

そして溶けたチーズの上にもう一度切ったトマト、千切ったレタスを乗せ、さらにゴルゴンゾーラチーズ。最後に上側のバンズパンで蓋をして崩れないよう串で留めたら……完成！

拙者お手製のハンバーガーでござるよ！

「はい、お待たせしたでござる」

「まあー」

ハンバーガーと漏れ出したチーズが乗ったお皿を出すと、フラン殿の目がキラキラと輝き出す。

「こ、これは……どうやって食べるのですか？」

「一般的にはサンドイッチのようにかぶりつくでござる。こんな風に」

お手本を見せるように、拙者は自分の分を素手で掴み、口の大きさに合うように少しだけつぶして思いつきかぶりつく。

トマトとレタスのおかげで肉汁の重さは軽減され、紫オニオンの辛味はバンズに塗られたハニーマスタードによって緩和される。

打ち消し合うのではなく、お互いがお互いを引き立てさせ合う。そして濃いチーズがその全てを調和させる。我ながら拙者のハンバーガーは完璧でござるな！ 文句なしに美味い！

お手本であることを忘れて舌鼓を打つ拙者に、フラン殿は少し難しい顔をしているでござる。

「そ、それは少々はしたくないような……」

「そう言うと思って、ナイフとフォークを持ってきたでござる。パティ……えっと、ハンバーグの下から分けて食べるという方法もあるでござるよ」

「あつ、それならなんとか」

その為にゴルゴンゾーラを分けて掛けたでござるからな。

お上品にナイフとフォークを使って食べるフラン殿と、何も気にせ

ず欲求に従ってかぶりつく拙者。2人だけの食卓には、ただ2人の咀嚼音だけが響く。

美味しいものを食べてる時って、食べるのに夢中で無口になるでござるよ。そして、その美味しいものを作ったのは一体誰か。

そう、拙者でござる！ ドヤさ!!？

「そういえば」

「もぐもぐ……はい？」

「どうしてフラン殿は、『拙者のやり方』を知っていたでござる？」

「あなたのやり方…ですか？」

「ほら、鬼ごっここの時でござるよ。拙者、過重力を使った移動はフラン殿に見せてないでござる」

フラン殿が拙者の過重力を見た時といえば、拙者が子ども達相手に“胡蝶の舞”を披露してた時くらいでござろう。ほぼ効果が無かったの、かなり分かりにくかったはずでござるが。

なんとなく疑問に思ったことを質問すると、フラン殿は口の中のものを含み込んで静かに拙者を見据える。

「チーズ、口に付いてるでござるよ」

「あらあら。こっちですか？」

「反対でござる」

そんなやり取りを挟み、フラン殿は口を開く。

「——知っていたんです。私はあなたのことを」

「拙者のことを？」

真面目な顔で首を傾げるが、拙者の内心は冷や汗ダラダラでござる。

えっ、何知ってるって!!？優秀な魔女とはいえ、ただの学校の講師が拙者を知ってるってどういう事!!？そんなに拙者色々と噂になつてるでござるか？ 確かにやらかした経験はそこそこあるけど、あれくらい旅人なら普通じゃないの？

博物館にカチコミ入れたり、パン屋に入った強盗シバき倒したり、国の心臓とも言える墓地で魔法統括協会のエージェントとバトルしたり、お祭りであんこ菓子作ったり、仮釈放された変態人形職人をも

う一度檻にぶち込んだりするので、旅人なら誰もが通る道でござろう？ えっ、違うの？

ドックンドックン大騒ぎの心臓を抑え、異常な速さで流れる血のせいで暑さを感じながら、フラン殿に話の続きを促す。

「そうですね。では、改めて自己紹介をさせていただきます。――私は星屑の魔女フラン。魔法統括協会に所属している夜闇の魔女シーラの姉弟子で、灰の魔女イレイナの師匠です。ここまで言えば分かりますね？」

「つまり、弟子であるイレイナ殿の未来の伴侶となる拙者の嫁力を測るために料理を作らせたと……？」

「違います。自分でした質問を忘れないでください。あと嫁力ってなんですか」

嫁力とは、嫁になった場合どれほど嫁としての務めを果たせるかでござ。ちなみに現代社会の傾向的に、嫁＝女性というわけではござらん。

基本的に家事全般をどれだけできるかというものなので、家事が得意な男も嫁力が高いということでござ。

拙者の実家には誰一人としてそんな男はいなかったが。少しは手伝えゴミクズ共と思っただ日は両手の指じゃ足りないくらいでござ。

閑話休題。

「一目見て気付きました。『ああ、この子がシーラとイレイナが言っていた子か』と」

「え、どこでござる？」

「そんな個性極振りの格好と口調の女の子は世界広しと言えど、一人しかいません」

拙者は自身の格好を見て、首を傾げる。

着物に袴、漆下駄。現在の季節の風物詩と真逆のものが刺繍されたローブを羽織って、腰には刀を差した魔法使い……ふむ。

「探せばいそいでござるな」

「いません」

力強く否定されたでござる。解せぬ。

3 限目

昨晚フラン殿から修行時代のイレイナ殿の話をたっぷり聞かせてもらった拙者は、ほくほく顔で街中を歩く。

好きな人の過去って良いでござるな。というかイレイナ殿と1年間共同生活とか、フラン殿羨ましすぎでござる。嫉妬で焼死しそう。

「今日はモミジさんに授業をしてもらいたいと思うのですが、よろしいですか?」

「いやまあなんとなく予想してたでござるが、マジでござるか?」

「マジです。ちなみにイレイナはやってくれましたよ」

「ならやるでござる!」

拙者、イレイナ殿に憧れているでござる。

イレイナ殿のようになりたい! むしろイレイナ殿になりたい!

細胞単位でイレイナ殿と同じになりたいでござるよ!

「よろしくお願ひしますね」

「委細承知!」

ピョン! と手を挙げて元気にお返事。

授業と言っても、恐らくフラン殿が拙者に求めているのは過重力に関することのみでござろう。むしろそれ以外を求められても困っちゃうでござるが。

いくら天上天下唯我独尊のイレイナ殿でも、師匠の言葉には耳を傾けるはず。ここは彼女の期待に応えて、好感度をグイグイ上げるでござるよ。そうしてゆくゆくはイレイナ殿に拙者の活躍を伝えてもらって……うへへ。

「あっ! じゃあ授業をやるにあたって、ちょっとした小道具が欲しいでござる。少々寄り道にしてもよろしいでござるか?」

「ハア……」

学校に到着し、課外授業の時間が迫るにつれて拙者のため息は増えていく。

よくよく考えてみれば、生徒さんから見たら拙者って別に大したことないのではと考えついてしまったからでござるよ。鬼ごっこ負けたし。

大体、気分が良いものではないでござろう。イレイナ殿やフラン殿のように魔女ならばともかく、拙者は生徒さん方と同じ魔導士。同じ魔導士の、しかも過重力しかろくに使えないマジカルニートトラベラーに偉そうに授業されるとか、ストレスではないでござろうか？学級崩壊とか起きないか不安でござる……。

「フラン殿……。本当に拙者が授業しても良いでござるか？」

「先ほどの威勢が嘘のようですね。何か心配事でも？」

「魔導士が魔導士に授業っていかなものかと」

「ああ、そのことですか」

フラン殿はポンと手を打ち、次いでニコニコと相変わらずのミステリアスな微笑み。

「問題ありません」

「しかし、昨日はユウト殿を落としてしまったし、嫌われているかも……」

「それも問題ありません」

それはどっちの意味でござるか？

拙者が嫌われてないってこと？

それとも嫌われていても授業はできるってこと？

「あなたの心配は全て杞憂に終わります」

そう締めくくって、フラン殿は教室へ向かって歩き出したでござる。本当に大丈夫かなあ……ぐすん。

王立セレステリアの国民性なのか、生徒たちは昨日と同じく授業開始前に全員集まっていたでござる。そのわりにフラン殿はお昼過ぎまで寝腐っていたので、その説は却下でござるな。単に生徒さんが真面目なだけでござろう。

本日の課外授業は屋内の教室で行うでござるが……うっ、この学校の階段教室、変態人形職人と対峙した劇場を想起させるでござる。泣き

そう。

授業開始前から既にトラウマやらプレッシャーやらで涙目の拙者。隣のフラン殿と入室すると、生徒たちが一斉にこちらへ視線を向ける。

(出てけとか言われたらどうしよう……)

ビビり散らす拙者に生徒さん達は——わああと嬉しそうな顔。おろろ？

「今日も来てくれたんですね!」「モミジさんが授業してくれるんですか?」「あ、あの…あの、よろしくお願い、します!」

「おろろろ?」

意外にも歓迎ムードで、生徒さん達は立ち上がって口々に拙者へ声を掛けてくれるでござる。良かったあ…嫌われてなかったよお……。

「はいはい皆さん。席に着いてください」

「フラン先生!もしかして今日はモミジさんが授業を?」

「ええ。お願いしたら、快く引き受けてくれました」

すると、生徒たちの多くが歓声を上げる。そ、そんなに期待されても困るでござるが……と、愛想笑いを浮かべながら教壇へ降りていると、姿勢良く席に座るユウト殿を発見。

「昨日は申し訳ござらん。しつこいようでござるが、怪我は無かったでござるか?」

「は、はい。大丈夫……です」

極力にこやかに聞くと、プイ。顔を逸らされながらも、一応は答えてくれたでござる。

可愛い女の子から顔を逸らされて内心絶望に染まるでござるが、まあ元気なら良いでござるよ。うん。……うん、元気ならね。何故だか耳が赤いのが気になるでござるが。

流石に1人で教壇に立つのは不安だったので、先ほど泣き落としたフラン殿に隣に立つてもらいながら授業開始でござる。

「そ、それでは授業を始めます。誰かに物を教えるというのは初めてなので、拙い部分があるかもでござるが、どうかご容赦を」

ゴミのような授業になるかもしれないので一応の保険だけ掛けて

おいて、拙者は黒板に『過重力』とチヨークで記す。

「昨日も話したでござるが、拙者はこの魔法過重力くらいしか達人なものはござらん。なので、これを中心に講義していくでござる」

「はいはい！ 質問いいですかー？」

「いきなりでござるか……。どうぞ」

「昨日俺の箒を奪ったのも、過重力の応用なのー？」

「あれはどちらかと言えば護身術の応用でござる。えつと…：体術と言えは伝わりやすいでござるか？ 拙者は旅に出る前、実家でマミ上…：では無く母に習っていたでござるよ」

先生つて難しい…。私人ではなく公人として喋る都合上、ある程度硬めの表現で話さないといけないでござるな。

しかしそんな拙者の心配を他所に、金髪と白い歯が特徴的なイケメ殿が質問を重ねてくる。

「お母様が体術を、ですか？」

「然り。気になるでござるか？」

「はい」

授業と関係無い話になるので、これはどうなのかとフラン殿に目を向けると、ニコニコしながら頷き返されたでござる。話し続けるってことかな？

「えつと…：拙者の家では父が剣術を、母が体術を教えているでござる。内弟子となり、住み込みで週4日実戦的な剣術を父から習う『森のくまさんコース』。週1回2時間で奪刀術を元に組み上げた女性向けの護身術を習い、その後自由参加のお茶会が付いた『うさぎと亀さんコース』があるでござるよ。んでんで、拙者は毎週マミ上の『うさぎと亀さんコース』を受けていたでござる」

ちなみに『森のくまさんコース』の由来は、入会したら絶望しか無いほどキツイという意味を暗喩しているでござる。

逆に『うさぎと亀さんコース』は、のんびり自分のペースでという意味。

「あとはまあ、『うさぎと亀さんコース』中に魔法使い向けの護身術もある程度挟むでござるが、そもそも拙者の故郷は魔女見習いになる為

の魔術試験を行っていないほど魔法使いが過疎ってるでござる。せつかくなので、準備運動がてらそれも教えるでござるよ」

だいぶ無理矢理でござるが、なんとか授業へ修正。今は拙者の身の上話より、いかにこの限られた時間で生徒さんの身になるものを話せるかでござるからな。

「フラン殿。杖を貸してもらえるでござるか？」

拙者の杖は刀の柄なので、この技をやるには不向き。ちよつと興味深そうにしているフラン殿から杖を借りる。

そして確認のため杖を一旦魔法でしまい、魔力を込めてパツと展開。魔法使いなら誰でもできる芸当でござる。

問題無くできたら、もう一度杖をしまつて、拙者は両手を上げる。いわゆる降参のポーズでござるな。

「今から教えるのは、誰でもできて尚且つ至近距離であればどんな相手も制圧できる超凄い攻撃魔法でござる」

「「おおー！」「」

「ではせつかくなのでチャラ殿。拙者の前へ」

これは相手がいた方が分かりやすいので、発端であるチャラ殿にお手伝い願う。

拙者の前へ来た彼は少々不安そうでござるな。興味を持ってもらうためにちよつと前口上を盛つてしまったので、原因はそれでござろう。

「安心するでござる。お主に怪我は負わせぬよ」

「お、おーけー……」

「ではチャラ殿。いい感じにチンピラっぽく拙者に絡むでござる。真に迫った熱演を所望するでござるよ」

「突然の無茶振り!?？」

「フアイトでござるー！」

拙者がにつこり笑いかけると、他の生徒からもチャラ殿へ「頑張れ〜」や「やったれー！」など声援が飛ぶ。

そして、意を決したチャラ殿は顎をしゃくれさせてチンピラっぽく詰め寄ってきたでござる。おお、上手い。

演技に関心しながらも彼の顔が拙者の手の届く範囲に来た瞬間――シユガツ！

展開した杖の先をチャラ殿の右目スレスレで寸止めさせる。

「はい、これが誰でもできて尚且つ至近距離であればどんな相手も制圧できる超凄い攻撃魔法。人読んで、マジカル目潰しでござる」

「……………」

「ポイントは杖を展開してから突くのではなく、展開しながら突くこと。そして片方の目ではなく、目と目の間を狙うこととござる。訓練されて無い者は突然目の前に何かが飛んできたら自然と左右どちらかに避けるので、勝手にどちらかの目に突き刺さるといふ寸法でござるな」

実はこの技、男性より女性向けでござる。一般的に女性の方が男性より背が低いので、降参のポーズで上げた手の高さがちょうど対峙する男の目の位置になるでござるよ。

「あの…質問、いいですか？」

「はい、イケメ殿」

「どの辺が攻撃魔法なんでしょう？ ただの目潰しにしか見えなかったのですが…………」

「魔法の杖を使った攻撃なら概ね攻撃魔法でござる。その辺りがなんとなくマジカルでござるな」

と、懇切丁寧に説明したら、何故だか生徒一同が顔を青ざめさせてちよつとだけ距離を取ったでござる。着席してるからほとんど変わってないけど。

「…………さて、では過重力の話に戻るでござる。チャラ殿、お手伝いありがとうございます。これあげるでござるよ」

原因はいまいち分からぬが、授業崩壊の気配を感じた拙者は青ざめているチャラ殿にお礼代わりの飴ちゃんを渡して軌道修正。

あとフラン殿の笑顔を怖い。拙者、別に悪いこと教えてないでござるよー！

「皆さん、過重力はもちろん知っているのでござるな？ 任意の座標に普段以上の重力を掛ける魔法でござる」

説明しながらチョークで棒人間を1人と、その頭上に横一本線を書き、さらに横一本線に下矢印を重ねる。めちやくちや単純ながら、過重力がどんなものかを一目で理解できる図式でござる。

「セオリー通りの使い方であれば、拘束が主でござる。基本は上から下へ。練習すれば逆に下から上や横方向にも掛けられるでござるよ。昨日の鬼ごっこで拙者が逃げたやり方は、簡単に言えば上から下以外の過重力を自分に掛けて跳ね回っていただけでござる」

「ここまでの説明は生徒たちも予習済みでござろう。本題はここからでござる。」

「しかし、ここまではあくまで基本。言うならば初級編でござる。では、中級編とは何か。それは……」

そう言つて、黒板の棒人間の周りを四角形で囲むようにして線を描く。

「過重力の線を増やすこと」

元々が拘束用なので、原点復帰とも言えるでござろう。

実のところ、1方向だけの過重力を掛けられても動けるつちや動けるでござる。重たい荷物を肩に乗せているようなものなので、めちやくちや疲れるけど。

でも、それが多方向からであればどうでござろう？

拙者はフラン殿から借りた杖の先を教卓に向けて立たせ、手を離す。当然杖は倒れてしまうでござる。

その光景を生徒たちに確認させた後、抜刀。もう一度杖を立たせて、前後左右の4方向から過重力を掛ける。すると、杖は直立のまま重力によって固定されたでござるよ。

生徒たちの感嘆の声に、ここは1つ小喃を挟んでみようと思いつたでござる。ぶっちゃけ、杖が立っているところを見てもイマイチ凄さが伝わらないでござるからな。

「昔、マミ上と一緒に買い物をしていた時、暴漢に遭遇したことがあるでござる。その時マミ上が、このようにして暴漢を拘束したでござるよ」

「「おおー」「」」

「そして顔面が砂時計のように変形するまでデンプシーロールでボコ殴りにしていたでござる」

「……………」

目を閉じれば、あの時のマミ上の凛々しく勇ましい姿はすぐに思い出せる。

∞字に流れるマミ上の長く艶やかな黒髪。腕の振りに合わせて映える袖の椿柄。桜吹雪のように散る暴漢の返り血。

そう！ あの時、幼いながらも拙者の恋心は確かに萌芽した！ 母と娘という禁断の間柄でござるが、その背徳感もまた叶わぬ恋心を燃え上がらせたでござる!!？

はあ……あの淡い初恋、思い出すだけで体がポカポカしてくるでござる。寒くなったらまた思い出そう。

と、少々人にはお見せ出来ないほどだらしなく表情を弛ませていると、フラン殿に肩を叩かれたでござる。

「モミジさん。今後、授業中にあなたのお母様のお話を禁じます」

「なにゆえ？」

「授業の記憶が全部あなたのお母様に上塗りされてしまうからです」

「つまりマミ上に心奪われると？」

「語弊がありそうですが、まあそういうことです」

「マミ上は誰にも渡さぬ！」

「廊下に立たせますよ？」

「理不尽な……………」

今は拙者も先生なのに…………。

「じゃ、じゃあ講義ばかりではつまらないので、ここからは演習でござる。フラン殿、例のものを」

「はい」

フラン殿に杖を返し、それを振ってもらおうと教卓にドサツと大きめの籠と人数分のコップが出現。同時に芳しい香りがふわっと教室に充満する。

中にはちよつとだけ不細工な形をしたリングが大量に入っているでござる。訳あり商品として安く叩き売りしていたものを、さらにま

とめ買いすることで格安で手に入れたでござるよ。旅人にとって、値切りは必須技能でござる。

「これは拙者が過重力の練習に使っていた方法でござるよ」

籠の中から一個、美味しそうなリンゴのヘタを摘んで生徒たちから見やすいように持ち上げ、刀を振るう。

「まずリンゴを左右から過重力を掛けて空中で挟んで固定。そしてリングの下にコップを持ってきて……一気に潰す！」

見えない壁に挟まれたリンゴは一気に平べったく潰れたでござる。

そして、下からは潰れた分だけリンゴの果汁が搾り取られてコップの中に落ちてくる。

「まあ、ざっとこんなもんでござるな。左右の2方向だけだとコップ3分目あたりまでしか搾り取れないでござるが」

お煎餅のように平べったくなり食べやすくなったリンゴを齧れば、シヤクシヤクと咀嚼音が響く。まだ果汁が残っている証拠でござる。

リンゴを食べ切り、さらに今搾り取った100%果汁のリンゴジュースを飲み干した拙者は、籠からもう1個リンゴを掴んで同じように——しかし今度は前後上下左右の6方向から過重力を掛けるでござるよ。

「この方法で過重力の線——拙者は便宜上『重力帯』と呼称しているでござるが、この重力帯の数を増やせば増やすほど搾り取れる果汁の量は増えるでござる。こんな風に」

そしてクルツと刀を振れば、瞬時にリンゴがサイコロのような大きさにまで圧縮されて中から飛び出した果汁に隠れてしまった。

下からも掛けているので、リンゴと果汁は拙者の前で直方体の透明な箱に入れられているような光景が出来上がったでござる。

下からの過重力を徐々にずらしていき、注ぎ口を作ってそこからコップに注ぐ。リンゴの大きさにもよるでござるが、大体6方向からの過重力でコップ一杯分のリンゴジュースが圧搾できるでござるな。

「最初は2方向で挟み込むように。重力帯を増やすことが出来たらその度に増やすでござる。1個のリンゴからコップ一杯分の果汁を搾り取ることが出来たら過重力中級者でござるよ。……あ、リンゴに飽

きても大丈夫なようにオレンジも用意したので、欲しくなったらフラン殿に頼むでござる」

フラン殿の魔法で生徒各々にコップとリンゴが配られるのを尻目に告げて、久しぶりに拙者もやってみるでござるよ。

懐かしいなあ。実家でこの練習をした時は、バケツに大量に溜め込んで内弟子のみんなに差し入れと称して押し付けていたでござる。まあ、わりと喜ばれたけど。

この練習法、自分の実力がコップに入った果汁の量として目に見えて分かるので上達しやすい。さらに、果物を変えれば別の味も楽しめるので飽きないでござる。

この練習法を考えたマミ上は天才でござるな！ 好き!!?

「ちなみに魔法使いのいない国だと、これでちよつとしたお金稼ぎも出来るでござる。もしこの中で将来旅人になりたいという者がいたら、積極的に練習してほしいでござる」

そんな感じで旅人としてドヤ顔でアドバイスするけど……うん、誰も聞いてないでござるな。既に練習に入ってるし。

見たところ、全員筋が良い。

実は2方向から過重力を掛けるというのは慣れるのに1日くらい時間がかかるでござるが、もう全員できているでござるよ。やっぱり優秀でござるな。

中には既に3方向から掛けている者もいるほど。

……もしかしてこれが普通で、拙者が才能なかっただけ？ なんか彼ら彼女らを見てるとその可能性も出てきたでござるぞ。

「何か分からないことがあったら、遠慮なく言うでござるよ」

そうして、課外授業の時間は過ぎていく。

拙者はアドバイスをしたり、時には搾られたリンゴジュースを貰ったり。時には手取り足取りで教えたり。

自分の教えを吸収して上達してくれる姿を見るのは、とても心地良いものでござるな。

「はい、お疲れ様です」

授業を終え、学校内にある私の執務室のソファで突っ伏すモミジさんに労いの言葉を一つ。そしてテーブルに彼女の練習方で私も搾り取って見たリングとオレンジのミックスジュースを置きます。

「か、かたじけない……」

「良い授業でしたよ。最初は緊張していたようですが、時間の経過と共にそれも解れていったようです」

「さいでござるか」

「皆さんも楽しんでくれたようですしね」

『楽しい』ということとは夢中になるということです。

確か彼女の国の諺で、*“好きこそ物の上手なれ”* というものがありましたね。なんだかんだで、一番楽しんだ人が一番学び取れるものです。

そういう意味では、彼女の授業は100点満点なのでしょう。

「ただ一つ気になったことと言えば、何故女子生徒に教える時には必ず腰に手を回していたのでしょうか？」

「うぐつ」

突っ伏したモミジさんの体がギクリと跳ねました。

「何故なのでしょう？」

「あー…えっと、ほら……魔法って感覚的なものでござろう？ 密着した方が教えやすいでござるよ！ 決して女子生徒の匂いを嗅いだり体の柔らかさを堪能してたわけではないでござるマジで！」

「男子生徒には口頭説明で済ませていたようですが」

「いやあの…あつ！ いくら同年代とはいえ、あの場に限り拙者と彼らは教師と生徒の関係でござった！ 女教師が男子生徒に密着するのは色々問題でござろう？ ね？」

そう早口で捲し立てるモミジさんに3秒ほど白い目を向けますが、まあ……お仕置きはしないでおきましょう。元はと言えば私が頼んだことでもありますし、やり方は彼女に任せましたから。

私はモミジさんの突っ伏すソファに座り、同じくミックスジュースを一口。あら美味しい。

「フラン殿。拙者、どうしても気になる事があるでござる」

体を起こしたモミジさんは、先ほどまでとは違う真剣な眼差しで私を射抜きます。

「なんででしょう?」

「どうして、拙者だったのをござろう?」

彼女の質問は、何も知らない者が聞けば意味不明なものです。

しかし、私にはどういう意図の質問なのか分かってしまいます。張本人同士だからこそ、理解できてしまいます。

彼女はこう質問しています。『どうして拙者を教師にしたのか』と。考えてみれば当然の疑問でしょう。

「拙者は魔導士。ただの旅人で魔法使い。ついでに武士。あと可愛いロリ巨乳」

無駄に高い自己肯定感と共に、モミジさんは語ります。

自身がいかにか教師として不適切な者か。そんな自分を何故、一時的なものとして教師側に迎え入れたのか。

「魔法使いとしてなら拙者は明らかに凡庸でござる。魔女になれるほどの才能も持たず、それを目指す努力もしていない。常に向上心を胸に進み続けなければならぬ学校という場に、これほどそぐわない存在も珍しいでござろう?」

「……そうですね」

「もう一度聞くでござる——どうして拙者だったのをござろう?」

……まあ、普通に考えれば不思議ですよ。教える立場の者の実力が教わる立場の者と同等など、おままごととそう変わりません。

しかしそれでも、モミジさんでなければならぬ理由があったのです。

「——モミジさんは、どうして過重力の説明を中級までで終わらせたのですか?」

「質問に質問で返すのはマナー違反でござるよ」

「あなたの質問の答えに繋がることです」

怪訝そうに柔らかそうな頬を膨らめます彼女へ、私は尋ねました。

過重力に対する初球や中級という概念は、モミジさん独自のものでしょう。でも、それならば最後に上級がなければおかしい。そう言っ

た数え方は初級から始まり、中級を挟んで、上級に終わるものです。彼女の雰囲気的に何も考えずしゃべっていた、ということも考えられますが、今日の授業を聞いている限りそれも無い。

糸目がデフォルトの私ですが、今は少しだけ目を開いてモミジさんを見据えます。

すると、彼女は観念したようにため息を吐きました。

「初級は過重力の方向を自在にすること。中級は重力帯を増やすこと。そして上級は——精度を上げることでござる。フラン殿ならば、何故拙者が教えなかつたのか分かるでござろう？」

「……ええ。そこまでいけばもはや——」

——人殺しの技術です

精度を上げる。つまり、モミジさんの言う重力帯を局所的に絞るということでしょう。

本来は体の上から抑えつけるように掛ける過重力。それを局所的に絞って狙う場所は恐らく……。

「リンゴと人間の脳……どちらの方が潰しやすいかなど、考えるまでも無いでござる」

体の内部を直接狙う。過重力の精度を上げるということは、それを可能にする。

「脳を潰す。心臓を重力帯で囲って無理矢理止める。7つある頸椎に別ベクトルの重力を掛けて首を引き千切る——過重力を練習すれば簡単に出来ることでござる」

あまりにも残酷な使い方ですが、それもまた魔法という技術の一面なのでしよう。

この説明を受ければモミジさんが何故中級までで説明を止めたのか理解できます。

彼女は話し終えた後、いつも見せてくれたにぱあくとした笑顔が浮かべました。

「でも拙者は脳みそ潰して死体を作るより、リンゴ潰してリンゴ

ジューズ作る方が好きでござる。それに、人殺しの技術なんてあの生徒たちには似合わぬよ」

「……そうですね」

毎日真剣な面持ちで魔法を練習する彼らの顔を見れば、そんな悲しい一面など見せる必要なんて感じません。

魔法が好きなあの子たちが、このまま好きであり続ける為に導くのも教師としての務めなのですから。

「さて、拙者は質問に答えたでござる。今度はフラン殿の番でござるよ」

「はい。それでは私からも一つ質問をさせてもらいましょう。質問というよりクイズですが」

「拙者の話聞いてた!?」

「もちろん」

「マイペース極めてるでござる……」

基本的に私はこういう人間です。これで今まで上手くやってこれたので、これからも問題ないでしょう。根拠はありませんが。

「モミジさんは、『優秀な魔法使い』とはどんな魔法使いだと思いますか?」

「はあ……また漠然とした質問でござるな」

「では3択に絞りましょう。」

- 1、どんな敵も鎧袖一触に薙ぎ払える戦闘能力を持った魔法使い。
- 2、あらゆる魔法を使いこなしてどんな病気も杖の一振りで治してしまえる魔法使い。

3、研究を重ねて他国の追隨を許さないほどの生活の発展を支えた魔法使い。

さて、どれだと思いますか?」

1本ずつ指を立てて選択肢を上げていくと、その度にモミジさんの眉間に皺が寄ります。あらあら。可愛らしいお顔が台無しですね。

眉間の皺を揉み解すように指先で捏ねると……まあ! スベスベお肌が気持ち良い。眉間の皺すら柔らかくてクセになりそうです。

「ぐぬぬぬ……じゃ、じゃあ、3番の魔法使いで」

「本当に？」

「うぐつ……本当に」

「ファイナルアンサー？」

「ファ、ファイナルアンサー……」

そこまで真剣に悩まなくてもいいのですが……。授業でもそうでしたが、この子も大概真面目ですね。以前会ったシーラのお弟子さんを想起させます。

「正解は、〃国や文化に寄って違う〃です」

「……………」

「あら、どうしました？ 不満そうですね」

「3択で聞いておいてその答えはズルくないでござるか？」

「優秀な魔法使いの在り方がたったの3種類なわけないでしょう？」

「むう……………」

眉間に当てていた手を、今度は膨らんだ頬に添えました。相変わらズスベスベのプニプニですね。若いつて羨ましい…………。

いえ！ 私もまだまだ全然若いですけど!!？

「それで、なにゆえこのタイミングでそんなクイズを出したでござるか？」

「今のがあなたの質問の答えになるからです」

「うん……………」

可愛らしく小首を傾げてポニーテール揺らすモミジさんには、私が言いたいことが伝わっていない様子。

「イレイナがここで今日のあなたのように特別授業をしたという話はしましたよね」

「然り」

「あの子は未だ10代でありながら、とても優秀な魔女となってくれました。師匠である私すら驚いてしまうほどに」

「弟子自慢でござるか？」

「はい。あの子は自慢の弟子です」

調子に乗るのは火を見るよりも明らかなのでここぞという時にしか言いませんが、これが紛れもない私の本心です。

才能があり努力も怠らない。1つの目的の為に頑張り続けられる忍耐力。他にもたくさん要素がイレイナを見違えるほど優秀な魔法に育て上げてくれました。

「何度も言いますが、あの子は優秀です。そして、優秀過ぎたんです」「それに越したことは無いのでは？」

「そうですね。イレイナ本人にとって見ればそれは素晴らしいことです。しかし、他の方々からすればどうでしょう？ 例えば———この生徒たち」

「———っ！！？」

同年代でありながら自身と隔絶した実力を誇る者を見た時、人はどう思うのか。大きく分ければ2つです。1つは、自分もあなりたいと憧れる。

問題は2つめです。

自分にはあなれないと諦める。

「実はモミジさんが授業した生徒の中にも、どこかやる気を無くしてしまった生徒がいたんです」

「それで……ござったか……」

「だから私は示してあげたかった。イレイナのように魔法になるだけが、魔法使いの在り方では無いと。しかし、それを私が言っても効果は薄いでしょう」

なにせ私自身も魔女なのでから。魔女である私がそれを言っても、嫌味にしか聞こえない。

悩んでいる生徒がいるのに、その悩みを解決することができない。教師としてこれほど歯痒いことはありません。

「だから広場であなたを見た時、らしくもなく天啓かと思いましたよ。多くの魔法を修めるのではなく、1つの魔法を極めて使いこなすモミジさんがこの国に来たことに」

彼女は、シーラやイレイナから聞いていた通りの方でした。過重力一辺倒の魔法使い。自身の向いているものにのみ力を注いだ、ある意味邪道な魔法使い。しかし極められた邪道は、時に王道を越えることもあるのです。

「イレイナではダメでした。私だけでは無理でした。——モミジさんだからこそ、別の魔法使いの在り方を示すことができたんです」
「……ただ拙者は、頼まれたことをやっただけでござるよ」
「でもそれが生徒の悩みを解決するきっかけになったんです」
『なりたい自分』と『なれる自分』は違う。諦めていたとしても、やはり未練はあったのでしよう。でなければ自由参加の課外授業に出たりはしません。

そして今日、あの子はモミジさんの授業を受けてイキイキとしていました。以前のように、目を輝かせて魔法を学んでいました。
私はソファから立ち上がり、モミジさんの前に立って頭を下げます。

「——感謝します。私が教えられなかったことを教えてくれたことに。生徒にとつて、新しい1つの道標みちしるべになってくれたことに」
あなたの示した道は、きつと生徒にとつて大きなものだったんですよ。

長いようで短い。訪れた国を出国する際にいつも思う、使い古された感傷を胸にしまって拙者は王立セレステリアの門の前に来たでござる。

「出国ですか？」

「然り」

「忘れ物はありませんか？」

「大丈夫でござる」

「いかがでしたか、この国は」

旅人として、何度も聞かれた質問。しかしそんなもの、答えは決まってるでござるよ。

たぶんこれは門兵さんが求めている言葉。そして拙者の紛れもない本心でござる。

「素晴らしい国でござった。この上なく、これ以上なく、素晴らしい国でござったよ」

「そうですか」

言葉少なにそう答えれば、門兵さんはにこりと笑ったでござる。
露店で売ってるリングが美味しかった。

夢に向かう学生たちが眩しかった。

生徒を想う教師の心が尊かった。

そして、拙者だからできたと言われて嬉しかった。

言いたいことはたくさんあるけど、それをしていたら日が暮れてしまうでござる。旅人の出国は日が高いうちにが鉄則。夜は危ないでござるからな。

門兵さんに門を開けてくれるよう頼むと、彼は頷いて——動きを止めた。

「いかがでしたか？」

「どうやら忘れ物があったようですよ」

忘れ物……？

刀はあるし、鞆もちゃんと持つてるでござる。たまに忘れる下着も服の上から確認すればちゃんと身に付けている。

そもそもフラン殿が起きる前に抜け出してきたので、忘れ物があったとしても気付く人はいないはず。

もし気付くとしたら、それは——

「——朝は苦手なので、できれば出国はお昼過ぎにしてほしかったのですが」

たまたま早起きしたフラン殿しかいないでござる。

「おはようでござる」

「はい。おはようございます」

「拙者、何か忘れ物でもしたでござろうか？」

「ええ。だから急いで追いかけて来ました」

嘘ではないでござろう。着ている服は皺だらけだし、帽子で覆われていない髪には寝癖が散見してる。悪い事をしたでござるな。

「かたじけない」

「いえいえ」

しかし、フラン殿は箒に腰掛けているだけで手ぶらでござる。もしかして忘れ物を届けようとして慌てて出てきたら、忘れ物を持ってく

るの忘れた？

失礼ながら、フラン殿ならやりそうでござる……。

「何か失礼なこと考えていません？」

「いや、別に」

「……まあいいです。それではモミジさん、忘れ物を取りに来てください」

チヨイチヨイと手招きするフラン殿に素直に近付くでござるが、マジで何も持っていないでござるな。本当に忘れ物を家に忘れてきたのでは、と。そんな風に考えながら彼女に近付くと、ガシッ。

フラン殿に抱き締められる……というより、しがみつかれたでござる。なにこれ？

「皆さん！ 今です!!？」

「セーラーの!!？」

フラン殿の掛け声に合わせて聞き覚えのありまくる大勢の音が耳朵を叩いた瞬間、

——ギユウウウウウウウウン!!？」

突然の浮遊感と共に、空へ吹っ飛ばされたでござるよ！ 何事!!？」

(この感じ……過重力でござろうか?)

あまりの事態に一周回って冷静になった頭が、拙者とフラン殿に掛けられた魔法の正体に気付かせてくれる。てかフラン殿、なんで一緒に吹っ飛ばされているでござるか。

「下を見てください」

雲の高さまで打ち上げられたところで、フラン殿に促されたのは

……

「ふわああ……!？」

まさに絶景でござる。

拙者の視界に飛び込んできたのは朝日に照らされた王立セレステリア。色とりどりの屋根も、ロープで揺れる洗濯物も、王立魔法学校も露店の帆さえも、全てが朝露を反射した朝日によって文字通りキラキラと輝いているでござるよ。

鞆に乗って空を飛ぶことはあっても、こんなに高い所まで来たこと

は無いでござる。ましてや、1つの国を上空から視界に収めるなんて体験は初めてでござる！」

到達点まで来た拙者たちは、そのまま重力に従うまま視界いっぱい
の王立セレステリアが広がって、近付いて…近付いて…おろ？こ
れヤバくね？

「モミジさん、着地お願いします。私どうやら杖を家に忘れてしまっ
たようです」

「この状況で致命的過ぎる忘れ物でござるな!?!」

いつの間にか拙者におんぶされるような態勢になっているフラン
殿に告げられ、慌てて下から上の過重力を起動。なんとか地面に激突
してグシャつとならず済んだでござる。危ねえ……。

ドックンドックン大騒ぎの心臓を抑えて息を整えていると、フラン
殿が横からヒョイッと覗き込んでくる。

「あなたの忘れ物はどうでした？」

「とつても素敵でござったよ」

そういえば拙者、観光するの忘れていたでござるな。まさか観光ス
ポットを一気に見せられることになるとは思わなかったが。そもそ
もどこが観光スポットかも分からなかったし。

たぶん、それ以外にもたくさん意味があったのでござろうが。

拙者は恐怖なのか感動なのかイマイチよく分からない涙をゴシゴ
シと拭い、周囲を見回す。

見送りに、集まってくれたでござるな……みんな。

「皆さんへの評価をお願いします、モミジさん。教師としての最後の
お仕事です」

フラン殿の言葉に、にっこりと笑う。そんなの聞くまでも無いでござ
ろう。

こんな自分を先生として受け入れてくれたこと。

一緒に鬼ごっこをしたこと。

潰したリングの香りが充満する教室のこと。

思わず涙してしまう景色を見せてくれたこと。

その景色を見せる為に過重力を使ってくれたこと。

旅人として、これほど幸せなことなんてないでござる。点数をつけるのも烏澁がましい。それでももつけないといけなのだから、やっぱり拙者、先生はあんまり向いてないかもね。

「——100点満点花丸満点だよ、みんな」

『武士の旅々』は、残り1ページ。

武士の旅立ち 家出騒動 序

とある国外れの荒野で、黒髪の武士と魔女が三日三晩殺し合っていました。

「武士はある国の王様から依頼を受けたのです。曰く『黒髪の魔女の暗殺を頼む』と。」

そして魔女は、自身の身を守る為に魔法で対抗しています。

これだけ聞くと魔女が悪者のように思えますが、実情は違います。

この魔女——魔女名『矛盾の魔女』を拝命している彼女は、王様を殴りました。ボコ殴りにしました。自損しないよう魔力を拳に纏わせてカバーし、それはもうお付きの家臣がドン引きするまでボッコボコにしました。ついでに「何見てんだゴラア!?!」という理由でお付きの家臣もボコりました。

重ねて語りますが、魔女が悪者であるというわけではありません。どちらかといえば、王様の方が悪いのです。

王様は中年と言っても差し障り無い歳になりながらも、やんちゃが過ぎる方でした。

ある日、お忍びでお気に入りの家臣2名を引き連れて日課の女漁りの為に城下町を歩いていた時です。美しい旅の魔女を見掛けました。「おお、これは美しい」と一目惚れした王様は、すぐにその魔女の尻を撫でました。この王様は、まず尻を撫でることを女性とのファーストコンタクトに用いるなかなかクソな方なのです。

旅の魔女は小柄で美しい黒髪が特徴的な大人しそうな女性です。

——外見は。

突然知らないおっさん（王様）からお尻を触られた魔女は、問答無用で拳を振るいます。魔女なのに、拳を振るいます。

鋭い右フック。返す左フック。右フック、左フック、右フック、左フック、右フック、左フック、右フック、右フック、左フック、右フック、左フック、右フック、左フック、右フック、左フック——
魔女は見掛けに反して中身が猛獣のような人でした。

「べっ」

地面に伏せる王様以下家臣2名に唾を吐きかけ、魔女は立ち去りました。

訂正します。ここまでいくと魔女は悪者です。

しかし、王様は発端が自分であるにも関わらずキレました。「尻を触るくらい挨拶みたいなもんじやろ！」とセクハラ親父そのものの意見を掲げ、魔女を殺せと命じました。

総勢300人の軍人が魔女を殺す為に動員され、そしてその全員が出撃から30分後には顔面アザだらけで帰還しました。魔女は化物のように腕っ節が強いのです。

ですが、これでは王様の腹の虫は治りません。

そんな時タイミング良く…もしくは悪く旅の武士が1人、その国に訪れました。刀を腰に差し、何故かうエスタンハットを被った男性です。

彼は魔法使いですら無いのに、刀一本と身一つで魔女すら圧倒する、〃魔女狩り〃の異名を持った掛け値なしの化け物です。しかも、聞くところによると魔女と同じ国出身のようでした。

王様はさっそく彼に依頼をしました。「黒髪の魔女の暗殺を頼む」と。

依頼を了承した武士は、隣国に逃亡する魔女を追いかけ国外れの山中で襲撃しました。

それから3日後——今に至ります。ちなみに山は3日間連続〃魔女狩り〃と『矛盾の魔女』の戦闘によって荒野へと変わってしまいました。

三日三晩戦い続けた2人は、どこか自分の中で相手が特別な存在に変わっていることに気付きました。

「なんだ…この胸のドキドキは…?!?!」

疲労です。

「なんで…あの人から目が離せない…?!?!」

命のやりとりをしているので当たり前です。

「もしかして…?!?!」

「この気持ち……」

「——恋っ!?!?」

違います。

三日三晩戦い続けた2人は疲労と空腹と寝不足で、ちよっぴりおかしくなっていました。

しかし、「恋」とは絶対的なものではなく相対的なもの。たとえば世間一般から見たら明らかに違っても、当人らが「恋」と言えばそれは「恋」なのです。

後に2人は語りました。「殺し合いから始まる恋もある」と。

そして2人は考えました。私達を引き合わせてくれた恋のキューピットは誰か。幸せの青い鳥はどなたか。——そう、王様です。

ならば、と。2人はお礼を言う為、王様のいるお城へ仲良く恋人繋ぎで向かいました。

「は?」

王様以下家臣一同は戦慄しました。それも当然です。

殺すよう依頼したターゲット魔女と、殺しに行つたはずのエージエント武士が恋人繋ぎで戻ってきたのです。しかも、「殺し合つてたら好きになつちやつた♡」とか意味不明なことをほざき散らす始末。狂気すら感じます。

王様は今更になって悟りました。たぶんこの2人は関わつたらやべー、と。なので、

「お主らのおかげで隣国との貿易路を開拓ができた。あちらに行けば褒賞が貰えるであろう」

とナチュラルにお隣の国へ2人を押し付けました。魔女と武士の戦闘によつて荒野になってしまった山は、隣国の貿易路であると同時に難所でもあったため嘘は言っていません。

そして2人は「え、なにそれ知らない」と褒賞を拒否つた隣国の王様から金銀財宝をカツアゲし、それを結婚資金にして故郷に帰り幸せに暮らしましたとき。

「——これがパピーとマミーの馴れ初めだ」

さてさて。そんな暴虐が魔王よりも魔王な魔女と武士も丸くなり、

とつても愛らしい娘を1人授かりました。

「なにそれ初耳」

「話してなかったからな」

「ていうか両親が強盗したお金で建てた家に住んでるとか聞きたくなかった……」

「まあそう言うな。弟子たちが軟弱なせいで暇なんだ。パピーに構ってくれ」

『2時間全力ダツシユ耐久レース。脱落者はケツ木刀』なんてやればそうなるでしょ……」

「たかが2時間程度全力で走れなくてどうする？ 肺活量は大事だろう。亀を助けた後、気付かないうちに青年から老人になるまで海底で息を止め続けた心優しい漁師だっているんだぞ」

「たぶんその漁師さんが特殊だったんだね」

「ちなみにパピーもやればできる」

「あつそ」

「なんだ…パピーに冷たいじゃないか」

「洗濯物干してる時にいきなり父上がだる絡みしてきたら冷たくもなるでしょ」

「パピーと呼びなさい！」

だる……つとウンザリ顔を隠しもしない着物姿の愛らしい女の子。それは一体誰でしょう？

名前はモミジ。そう、14歳の私なんだよ。今、父親がウザくてすぐ家出したい！

「ちなみに金銀財宝は借りただけだ。強盗じゃない」

「旅人が旅先でお金を借りるのは強盗と同義だと思うよ」

内弟子の1人が復活したことにより、鍛錬が再開されました。父上の方針で、内弟子は集団行動を基本としています。いくら死ぬ一歩手前まで疲れていても、1人が元気になれば強制的に全員元気にならないといけません。内弟子のみんな、ファイトー！

次のメニューは乱取り——全員が木刀で父上に殴り掛かるとい

う単純なものですが、これは内弟子50人以上が疲れて倒れるまで続きます。できれば晩御飯までには終わってほしいな。せつかく作ったのに冷めちゃう。

攻撃の掛け声が次の瞬間には悲鳴に変わるのをBGMに、私は台所にいる母上のもとへとテトテと走りました。洗濯が終わったことの報告をしないといけないからね。

あと丁度いい時間なので、おやつも貰おうっと！

「母上」。洗濯終わったよ」

「はい、ご苦労様。今ちようどおしるこ出来たのよ」

「やった！ お餅入れてもいい？」

「2個までなら」

「じゃあ2個!!？」

「はいはい。欲張りさんね」

「母上も一緒に食べよう？」

「そうね。ちようど仕込みも終わったことだし」

着物の上に割烹着を着た母上は、晩御飯の下拵えと私のおやつを同時進行で作ってくれてみたい。

両手でおしるこをよそいながら、口に啜えた杖で炎魔法を使ってお餅を焼いてくれます。

何故か母上は魔法を両手に纏わせるというトンチキな技術を多用するので、杖は口に啜えて絶妙な舌使いで魔法を使うのです。なんでも、魔法を使うのにいちいち片手を塞ぐのはもったいないとのこと。

でも実際、こようやって魔法を使うことでお料理の効率が格段に上がってるので、そこそ有用なのかもしれない。練習方法はさくらんぼのヘタを舌で結ぶことらしい。私も挑戦したけど、舌攣つってできなかったよ。

「——それでね、父上がパピーって呼べってうるさいの」

「あらあら。でもマミーもマミーって呼んでほしいわ」

「ええ〜…なんか格好悪いよお……」

「そうかしら？ マミーって甘えてくるモミジ、可愛いと思うけど」

う〜ん……そんな事しなくても私は可愛いはずだけどなあ。

「晩御飯のお手伝いは何かある？」

「特に無いわね。あとは煮込むだけだし、お魚も捌き終わっちゃった。強いて言えば盛り付けくらいかしら」

「そっか！　じゃあ一緒に昼寝しようよ」

「食べてすぐ寝るのは体に良くないのよ？」

「でも気持ち良いよ」

「めっちゃ分かる」

「熱々のおしるこを食べながら、私達は他愛もないお喋りに花を咲かせます。」

「なんだかんだで私も母上も内弟子50人以上の衣食住を世話しないといけないので、こうやってゆっくり話す時間はあまりありません。それこそ寝る前とかかな。」

「あとは母上の護身術レッスンが終わった後のお茶会とか。でもあれは他の生徒さんもいるから、あんまり母上を独り占めできないし。」

「マザコン丸出しで隣の母上にもたれかかると、肩甲骨辺りまで伸ばした私の髪を一束持ち上げられた。」

「髪伸びたわね。少し切ってあげようか？」

「前も言ったでしょ？　伸ばしてるから切らないよ」

「でも家事してるとき鬱陶しくない？」

「それはたまにあるかも……」

「まともじゃえば良いのに」

「……ううん。大丈夫」

母上はまともでないもん。だったら私もまともめない。

「綺麗な髪ね。若いって良いわあ」

「母上は髪だけじゃなくて全部綺麗だよね」

「ふふ、お世辞が上手になったんじゃない？」

「そう言つて私の器に自分のお餅をポチャンと入れてくれた。やったね。」

翌日。今日は週に一度の母上が開催する『うさぎと亀さんコース』

——護身術の日です。

「ほら！ 足運びが疎かよ！ 下半身が上半身についてきてない」
「はいー！」

世の中にはか弱い女性を狙う卑劣漢が普通にいます。そして狙われるのは大体女性が1人である時。その状況で自分を守るのは、自分しかないからね。

ご婦人方が参加する習い事のような印象だけど、この鍛錬の時間に限って言えば母上は私にだけ厳しい。それがどういう意味なのか分からないほど私も馬鹿じゃないけど、やっぱりもう少し優しくしてくれても……。

「余計なことは考えない！」

「痛ったあ……！」

バシンツと。足払いで重心が崩れた瞬間、背中から床に叩きつけられた。最低限の受身は取ったけど……ぐつ、痛みで動けない……！

「倒されたらすぐに立つ！」

「うぐつ……ぐぐぐ……!!?」

「早くしなさい！」

「ううう……ひつく、……ふええ……」

あまりの厳しさに涙が滲みます。痛いよお……。

「え、ちよつ、ご、ごめんさい！ 打ちどころ悪かったかしら？」

「うええええええん!!? 痛いよお！ もう母上なんて嫌い!!?」

「んなつ……つ???」

「嫌い」という言葉にかつてないダメージを受ける母上。おろおろと意味もなく手を動かしながら私の顔を覗き込んできます。……
チャーンズ。

「せいっー！」

私は即座に魔力を右手へ集め、杖を取り出して母上の肩を狙う。肩に攻撃を当てれば、それは顔にも当てられたという判定になります。本来は油断させて魔法の杖で目を潰す技——通称マジカル目潰しですが、母上の顔を傷つけるわけにはいかないからね。

完璧なタイミングで放った杖の突きは、パシツ。普通に人差し指と

中指に挟んで止められた。

それだけに終わらず——クル。私と突き側に体を回してその勢いで杖を奪われちゃったよ!?!?

「作戦は悪くなかったけど、もう少し泣く演技を磨いたほうが良いわね」

「ひゃ、ひゃい……」

奪われた杖を眼球スレスレで寸止めされた私は、母上の凜々しいご尊顔にキュンキュンしながら頷くしかありませんでした。

……なるほどね。私の「嫌い」という言葉にダメージを受けたのが母上の演技だったんだ。そして攻撃を誘われた。

床に転がされた上、杖を奪われた私にもはや打つ手無し。

「参りました……」

「よろしい。さあもう一回よ。今度はマミーも杖を使うかもしれないから、しっかり対処しなさい」

私の手を引いて起こしながら、地味に怖いことを言いながら構える母上。怪我しないよう気を引き締めて頑張ろうつと……。

2時間の鍛錬が終わり自由参加のお茶会をマダム達と楽しんだ後、私と母上は家事にまた戻ります。

道場は私達が使っていたので、父上と内弟子たちは近くの山に行つたのですが……

「ええ……」

洗濯籠に入れられた内弟子たちの道着を見て私は泣きたくなくなりました。冗談みたいに汚いんだけど。泥汚れならまだしも、血まで付いてるし。しかも乾いてる。せめて軽く水で流してよお……血つて落ちにくいんだよ！

「お、モミジ。今日は牡丹鍋にしてくれ。さつき狩ってきたからな」
「……ねえ、父上？ この血はなんなの？」

「イノシシのだ。最近巨大なイノシシが畑を荒らしていてな。内弟子の鍛錬で山に入ったらちようどそれがいたんで、ついでに退治してきた」

「いや、私が言いたいのはそうじゃなくてさ。どうして一瞬たりとも道着の汚れを落とそうという努力が垣間見えないのか聞いてるんだけど」

私の怒り、分かるかな？ ただでさえ男の汗まみれで臭い上に、泥だらけで血まみれの道着が50人以上だよ!?？これ全部私が洗うんだよ!?？もう焼却して新しいの買った方が絶対楽じゃん！

「そろそろ覚えて！ 血は落ちにくいのか!?？てかイノシシの血なら尚更少しは落としてよ！ 男臭さと獣臭さのアンサンブルでここら一带えげつない匂いになってるんだけど!?？」

「モミジ……まさかキレてるのか？」

「見れば分かるでしょ!?？」

「ついに反抗期か」

「違うわ!!？」

何故かしみじみとした様子で頷く父上に、私の怒りは頂点に達する。

「だあー！ー!!？もうやだ！ もう私この家出てく！ 家事に協力的じゃない父親なんて最悪だからね！ 父上なんて大嫌い！」

「またまたく」

「本心だよバーカ！」

「くっ……これが娘を持つ父親の宿命か」

「死ね！」

「ふっ。その程度の暴言、とっくに覚悟はしていたさ」

ダメだ……。私の言いたいこと全然理解してない。

「話は変わるが、何故イノシシを使った鍋が牡丹鍋と呼ばれるか知ってるか？」

そして理解する気もない。

「……盛り付ける時に牡丹花みたいな形にするからでしょ」

「諸説あるがな!!？」

何故かドヤ顔でいう父上に、ブチッ……！ 私の中の何かが切れました。

「もう怒った！ 本当に怒ったから！ 家出する！ 旅に出る！」

「そうか。暗くなる前に帰ってくるんだぞ」

「帰ってこないって言ってるの!」

「友達の家泊まるのか? ……いや、それはないな。パピーは知ってる。確かお前に友達はいなかったはずだ」

「さりげなく気にしていること言うのやめてくれない!?」

「いないけど! 確かに私友達1人もいないけど! それを口に出して言うってデリカシーないの!?」

「いいもん! 野宿でもなんでもするから」

「——やめておけ」

瞬間、父上の声音が変わった。そして正面にいたはずなのに、いつの間にか私の背後に立っている。

(全然見えなかった)

……いや、違う。私は今興奮してたせいで瞬きが増えてたんだ。その瞬き1回分の間に、父上は普通に歩いて後ろへ回り込んだ。

「今の動きにすら反応できないようなお前に野宿は無理だ」

「そ、そんなのわからないじゃん」

「お前は人の悪意に鈍感過ぎる」

意味が分からない。なんで今このタイミングでそんな話になるのか。

「パピーは今、お前をわざと怒らせた。何故だか分かるか?」

「……………」

「怒らせることで、本題から目を逸らさせたんだ。今回のこと言えば、道着の汚れを落とさなかつたという所だな」

「逸らさせてどうするのさ」

「うやむやにする」

いや、行動と目的の落差よ……。

「ふむ……これも良い機会か」

まさに落胆する私を見て、父上は顎に手を当てて神妙に頷いた。何が良い機会なのかは分からないけど、何かを企んでいるのは分かる。

「モミジ。お前、最近よく『旅に出たい』とか『家出する』とか言うようになったよな」

「そうね」

「何故？」

「そんなの決まってるじゃん。——嫌になったの。父上や内弟子の臭い道着を洗う毎日に嫌気が差したんだよ」

私の答えに、顔を顰める父上。あまりにもくだらない理由で呆れるのかも。

だけど側から見たらくだらなくても、私からすれば大問題。あの臭い洗濯の山から解放されるなら、今の生活を捨てても良いと思えるくらいにはなってるよ。

「そんなに臭いか？」

「特に父上のはヤバイ」

「……そうか」

あれ？ 心なしか父上が煤けてる。

「ま、まあ、理由はなんでも良い」

「じゃあ聞かないですよ」

「仮に旅に出たとして。お前、外でちゃんとやっていけると思うか？」

「思う」

「わお即答」

自分で言うのもアレだけど、私はいつだって自分に無限の可能性を感じています。それに、未熟ではあっても魔法使い。何か困ったことがあっても、魔法でちよちよいつと解決できるしね。

「逆に聞きたいんだけど、どうして父上はいつも私が国の外へ出ることに反対するの？」

家庭内のヒエラルキーで言えば、私の中で父上は最下位です。内弟子も含めて。

でも、一応の立場上は家長になります。つまり家庭内での問題に対する決定権は父上が握っている。娘である私は父上の許しが無ければ旅に出られません。

「理由を挙げていけばキリが無いが、一言でまとめるなら『無理だから』だな」

「そんなことないもん！ 母上から習った体術があるし、魔法だって使える。過重力だけなら魔女にも迫るって言われてるんだよ！」

「——それがどうした」

「っ!?」

「またも父上は私の背後に回る。この……バカにして!!?」

「体術が使える。魔法が使える。過重力なら魔女にも迫る。——それが旅をする上でなんの役に立つんだ?」

「っ、強いじゃん!」

「だから、旅人が強くてなんの役に立つ?」

「自分で自分を守れる!」

「それ以外は?」

まるで邪魔な石を蹴ってどかすように、父上は私の反論を悉く潰す。でもこんなただの意地悪じゃなか! 子どもが『なんで? なんで?』って聞いて相手を黙らせるのと変わらないよ!

……でも、私はそれ以上の言葉を紡げない。悔しいけど思いつかないんだ。

「結局お前は嫌なことから逃げたいだけだ。それ自体は人間なら仕方がないことだが、逃げ場くらい考えろ」

「言われっぱなしで私の目には涙が浮かびます。でも、泣くもんか!」

「だったら! どうしたら旅に出るの認めてくれるんだよ!」

「ふむ……」

顎に手を当てて父上は少し考える仕草。3秒ほどでまとまったのか、ポンと手を打ちました。

「1週間後、決闘しよう。審判役はマミーに任せる。どちらかが参ったと言うか、マミーが勝ち負けを判断したら終わりだ」

「……私が父上に勝ったら旅に行くの許してくれる?」

「ああ」

「本当!!?」

「本当だ。パピーは嘘つかない」

「だったら……やってやる! 拳を握って意気込む私に、重ねて父上

はあっさりと言う。

「もしお前が負けたら、2度と旅に出たいなんて戯言はほざくな。これは最初で最後のチャンスだ。心して臨め」

「わかった。絶対に勝つ」

ふっ、と笑う父上。でもそれは明らかに嘲笑だった。勝てるわけが無いと決めつけてるね。

「あとーっ」

「なにさ」

「パピーと呼びなさい」

うっせえわ。

家出騒動 破

翌日から、私は家事と食事睡眠以外の全ての時間を鍛錬に充てることにした。

何はともあれ、やっぱり父上に対して私の最大のアドバンテージは魔法が使えること。そこから繋がるけど、攻撃範囲の広さだね。

いくら父上が魔女すら圧倒する掛け値なしの化け物でも、結局のところは「ただの人」。攻撃方法は広くても握った刀の範囲を出ない。

だったら私のやる事は――

「ふぬぬぬぬぬぬぬぬぬっ!!?。」

1番得意な魔法である過重力に磨きをかけること。中途半端な付け焼き刃の魔法より、よっぽど信頼できるからね。

左右から螺旋状の過重力を掛けて洗濯物を丸ごと絞る。滝のように水が流れてちよつと気持ち良い。

「せいー!」

さらに、広げて干した洗濯物にも過重力。上下左右の4方向に内側から外側へ。シワ伸ばしのために絶妙な力加減でかけていく。

「ふう〜」

そして一休みの一服に過重力を使って搾り取ったリンゴジュースをゴクゴク。直接手で触れないので衛生的。体温も伝わらないので冷えた状態で美味しくいただけます。過重力、超便利。

「お嬢さん」

「うん?」

至福のひと時に水を差す男の声。そちらへ振り向くと、よく私に声を掛けてくれる内弟子の1人がお盆にお茶とお菓子を載せて立っていました。

「奥方様がおやつを用意してくれましたよ」

「あ、持ってきてくれたの? ありがとう」

「いえ」

この人は内弟子の中でも1番若いらしくて、年齢は17歳。入門したのは1年前だったかな。

内弟子の大半は荒々しくてゴツゴツしてて臭いけど、この人はとっても紳士的で柔和。しかも臭くない！　ここ重要！

「リンゴジュース飲む？」

「いただきます」

臭くないので近付かれても問題なし。私は隣をポンポン叩いて座るように促し、自分のとは別のコップにリンゴジュースを圧搾する。一杯分を隣に座った彼に渡して、代わりに湯呑みに入った温かい抹茶と羊羹を受け取った。

「師範と立ち合うそうですね」

「あら、耳が早いね」

「どうやら僕らも立会人として参加するようです」

「ふうん。面倒事を増やしちやっただかな？」

「いえ、そのようなことは。むしろ師範の本気を見られるかもとワクワクしてるくらいですよ」

やっぱり彼も父上の内弟子だね。技の吸収に貪欲。柔らかな口調とは裏腹に、1週間後が待ち遠しくて堪らないと言いたげだよ。笑顔が獰猛だもん。

「父上の本気ね……。実際どんなもんなんだろ」

実のところ、私は父上の本気で戦うところを見たことがない。いや、本気どころか戦闘そのものを見たことがないや。

いつだって父上は過酷すぎる鍛錬を内弟子に施してる。何も知らない人が見たらパワハラとか言われそうなほどのね。

だけど、逸話だけなら母上や内弟子からいくつか聞かされた。

曰く、10人以上の魔女が防衛する城に単身乗り込んで5分で制圧した。

曰く、戦時下の国から亡命した民衆を守る為に1人で1000人の軍勢を足止めた。

曰く、周辺諸国に無差別攻撃をぶつ放す迷惑千万な国をぶつ潰した。

などなど。英雄なのかテロリストなのかイマイチよく分からない眉唾ものの逸話を多数聞かされたよ。

あまりにも嘘くさいので本人に確認したところ、遠い目で「若気の至りだったんだ」と言われた。そんなアグレッシブ過ぎる若気の至りがあるかい。

「師範は人間辞めてますからね。この間の乱取りなんて耳掻きしながらやってましたよ」

「どゆこと……？」

「僕らが束になっても、耳掻きの片手間に対処できる程度には絶対的な差があるということですよ」

「なるほど。それは確かに人間じゃないね」

1対50を耳掻きの片手間にこなすんだから、私との1対1なんて遊びにもならないか。てか危なくないのかな？

「その前は寝坊したから朝食摂りながら箸を使っていました」

「いや折れるでしょ」

「さらに前は木刀の代わりに爪楊枝1本を得物にしましたね」

「……………」

「それより前はミルクティーを混ぜながらティースプーンでしたよ」

「誰か父上に武器と食器は別物ってこと教えてあげて」

逆に内弟子のみんなはそれでいいの？ 剣術習いに来てるのに、師範が剣使っていないけど。

「歴史を紐解けば食事中に襲撃されたなんて事案は山ほどあるので、ある意味剣を使うより実戦的なのかもしれません」

「……………まあ、確かに」

『『よいいどん』で始まる戦闘の方が少ないそうですからね。『棒状の物は概ね剣である』とよくおっしゃっています』

道具を使い始めたばかりの原始人みたいな発想だよ、それ。

「尊敬しかありません」

「冗談でしょ？」

「もちろん本気です。一芸に秀でる者は万芸に秀でる。あくまで剣術は万芸への足がかりでしか無いということ、師範は身をもって示してくれています」

空を仰いで語る彼の目には、確かに尊敬の色が濃く表れてる。人生

棒に振ったね。

私は羊羹を食べ、その甘さを渋めの抹茶で洗い落としてから一つお願いごとを思いついた。

「君はさ、必殺技みたいな使える？」

「必殺技……単純に技ということでしょうか？」

「そうそう」

「まだまだ若輩者ゆえ、習得できたものは一つだけですが」

「おおすごい！ 見せてほしいな」

小首を傾げて可愛らしくおねだり。この時、ちよつと顎を引いて上目違いにするのがポイントだね。

「やっ……その……困りますお嬢さん。師範から無闇に披露するものは無いと……」

「……だめ？」

「その……」

むむむ……意外と強情だね。あまりやりたくないけど……ええい！
手も握つちやえ！

「お願い」

「……わ、わかりました」

へっ、ちよろいぜ。

まあ、私は可愛いからね。可愛い女の子のお願いを無下にするなんて人の道に非ず。私がお願ひすれば、砂の一粒から砂糖の一粒まで私に従うこと間違いなし！

止められない止まらない自画自賛をしているうちに、木刀を持った彼は私から見て半身になる。

「僕が技を見せたというのは、どうかご内密にお願いします」

「もちろん。それでそれで？ どんな技なの？」

「龍捕りゆうほという、主に生捕を目的とした突き技です」

一度目を閉じ、一拍後に開く。

すると、それだけで彼の空気が変わった。月並みな表現になるけど、まるで張り詰めた糸のように緊張感が周囲を覆う。

「——いきまます」

そして——パパパパパパパパパパント!!?

甲高い破裂音が8回。連続で突き出した切先から鳴り響く。同時に正体不明の衝撃が8回、私の髪を揺らした。

もしかして今の破裂音……音速超えたから？ 空気の壁を突き破った時に鳴るやつじゃない？

母上が不必要に音速超えたパンチでハンバーグ殴ってるから聞き覚えあるけど。

「両膝、両股関節、両肘、両肩——もしくはその逆から。とにかく、相手の主要な関節を瞬時に破壊することを目的に作られたそうです。極めれば龍さえ捕獲できるとのことですが……」

「いや、それ以前に今の突き技、音速超えてたよね？」

「ただの人間が魔女に対抗するなら、音速程度超えなければなりません」

「音速を超えた攻撃ができる人はもう『ただの人間』じゃないよ」

母上は一瞬だけ過重力を掛けているからできるけど、それを素の身体能力だけでやるとなると、本当に人間じゃない。

しかも、彼の口調的に『超音速の攻撃』は内弟子の中じゃできて当たり前前の技術っぽい。我が家の道場は化け物養成所だね。怖っわ。

「私、自信無くなってきたよ……」

正直、魔法を使える私ならなんとかなると思ってた。だって魔法使いが剣士より優れてるっていうのは常識だもん。

だけど、そもそも父上は人間の常識が通じないときた。1番の若手がコレなら、指導者の父上はもはやどんな事をしてくるか分かったもんじゃない。

「それでも頑張ってください。僕はお嬢さんを応援しています」

「ありがとう」

「お嬢さんが頑張った分だけ、師範の魔法使いに対抗する技術が見られますから。こんなチャンスは滅多にありません」

「それが狙いか!」

おい待てこの人が1番怖い。

彼の応援する理由、父上の技を見たいからじゃん。私が頑張れば頑

張った分だけ父上は剣術を使わなきゃならないから。

「楽しみだなあ。師範、どんな技でお嬢さんを倒すんでしょうね？」

これを本人に笑顔で言うんだもん。もはやサイコ。

「私は負けないから」

「ええ。全力で足掻いてください」

「明らかに負けると思ってるよね!?!」

「ふふふっ」

そう笑って誤魔化し、彼は立ち上がった。鍛錬に戻るようだね。早

く行け！ バーカバーカ！

「では、リンゴジュースご馳走さまでした」

「はいはい」

シツシツと虫を払うようにすると、困ったようにもう一度笑って彼は道場の方へ戻っていった。

「ねえ、母上」

「なあに？」

「私、可愛い？」

お布団の中で母上に抱き着きながら私は尋ねました。

「あああら。これは『可愛い』と答えたら、マスク取りながら『これも?』って聞かれるのかしら？」

「なにそれ？」

「そういう怪談話があるの知らない？」

「知らない」

「あらら……。これも時代かしら」

なにやらジェネレーションギャップに打ちひしがれ始めたけど、母上はまだ全然若いと思う。

父上なんて40代で既にハゲてるし。たぶん帽子のせいだ。

「ちなみにそれはどういう怪異なの？」

『私、キレイ?』って大きなマスクをした女性が道行く子ども達に質

問して回るってものね」

「それただの事案じゃないの?」

「それで、『キレイ』って答えると『これでも〜』ってマスクを取るのよ。そのマスクの下の口の端が耳まで裂けてるってわけ。で、逃げる」と追いかけてくるの。しかも足がめちゃくちゃ速い」

「ああ……それは怖いね」

「子どもの頃マミーも遭遇したのよね……」

「それでどうなったの？」

「ボディー発で沈めてやったわ」

「どうやらその怪異には物理攻撃が有効だったらしい。哀れ、口が裂けた女性。」

「いくら怪異とはいえ、女性の顔を殴るわけにはいかないもの」

「母上、かっこいい……」

「モミジも女性には優しくするのよ」

「男には？」

「殺さなければ問題ないわ」

問題発言です。

「それで、モミジが可愛いかって話だったわね」

「そうそう。みんなさ、可愛いって言うってくれるじゃん？ だから

てつきり私は森羅万象の何よりも可愛いんだと思ってたんだけど……」

「正直甘やかし過ぎたかもと反省してるわ」

「やっぱり可愛くないのかな……？」

上目遣いで見ると、母上は眩しそうに目を細めました。そして私の頭を撫でてくれます。

「疑問の余地無く可愛いわよ。食べちゃいたいくらい」

「でも父上は私のこと可愛くないって思ってるんじゃないかな？」

「あら、どうして？」

「だって『可愛い子には旅をさせろ』って言うでしょ？　なのに父上は私が旅に出ることを反対してる。これって、逆説的に私が可愛くないってことにならない？」

「……………」

私の疑問に、頭を撫でる手も止めて母上は黙っちゃった。

もつと撫でてほしいので、当てられたままの手に頭をすりすり。母上のお手々柔らかくて気持ち良い。

「母上?」

「……ごめんなさい。あまりにもトンデモ理論だったから少し頭が働かなくなっちゃったわ」

「でも、天才の一步目はいつだってトンデモ理論から始まるよ。だから私は可愛い天才」

「そ、そうね……」

え、なんで目を逸らすの? 泣くよ? 産声に負けなくらいの泣き声ぶちかますよ?

「まず、パピーはモミジのことを目に入れても痛くないほどに可愛いと思ってるわ。それは間違いない」

「ええ……それはそれでちよつとキモい」

「……………。ちよつど良い感じにフワツと可愛いと思ってるわよ」

「それならまあいいや」

「あなた面倒くさいわね」

「女の子は大体面倒くさいものだもん」

「そうね」

「それでそれで?」

「あ、うん。——だからじゃないかしら?」

「どゆこと?」

「これでもかかってくらい可愛いと思ってるから、旅に出したくないのよ」

母上の言いたいことは分かる。でも、それだと『可愛い子には旅をさせろ』っていう言葉と矛盾するよ。いくら母上が『矛盾の魔女』だからって……。

「簡単に言ってしまうえば親心ね。寂しいから行かないで欲しいっていう気持ちもありそうだけど」

「父上にそんな感情は無縁でしょ」

「そうでもないわ。あの人、結構モミジのこと大好きよ」

本当なのかな……。この間の口調的に、父上は私のこと然程気にか

けて無いと思うけど。

旅に出るのを反対するのも、単に家事をする人手が減るのを嫌がってるだけだろうし。

「これはまあ……親になってみれば分かることなのかもね」
「……………」

「モミジだって、別にパピーのこと嫌いではないでしょ？」

「……………どうでもいいだけだよ」

「そう」

なんでもお見通しだと言いたげな母上の視線から、胸に顔を埋めて逃げる。クスツと小さく笑う声が頭の上から聞こえた。

「母上は……………」

「うん？」

「母上も、私のこと大好き？」

「もちろん」

「そっか」

少しだけ体を離し前髪を手で上げておでこを見せると、母上はチュツとキスしてくれた。えへへ……………これ好き。

「ねえ母上。1個だけお願いがあるんだけどいい？」

「明日の勝負に関すること？」

「うん」

私は、絶対に勝ちたい。勝って旅に出て、あのお洗濯地獄から解放されたい。たとえば大好きな母上に毎日会えなくなっても。

「じゃあ、マミーも1個お願いしようかしら」

「交換条件？」

「そうね。交換条件は旅人に付いて回るものよ」

「だったららむよ。なに？」

「マミーのこと、これからは『マミー』と呼びなさい。母上じゃなくて」

「……………マミーは恥ずかしい」

「じゃあマミーもモミジのお願い聞いてあげなさい」

ぐぬぬぬ……………。

「……マミ上」

「え？」

「マミ上ならいいよ」

私が母上と呼ぶのは、ここまで生んで育ててくれたことへの敬意を示していること。

子が親に敬意を払うのは当たり前だけど、それ以上に私自身が尊敬してる。だから母上は外せない。

でも自分のやりたい事を通す為には、時に自分自身を曲げないといけない。きつと母上は……いや、マミ上はそれを私に教えようとしてくれてる。

「マミ上じゃ……ダメかな？」

「マミ上……いいわね！　すごくいい！」

……あ、これ違うわ。ただ単に『母上』って呼び方が気に入らなかつただけっぼい。

「喜んでもらえて何よりだよ」

「ふふふ。明日パピーに自慢しちゃいませよ♪」

「あ、うん」

まあいいや。マミ上の笑顔が見られたし。

私はニッコニコで就寝前にも関わらずテンションMAXなマミ上が落ち着くのを待つてから、大事なお願いを口にしました。

「あのね、明日の勝負——」

ついに勝負の日。私にとっては、これからの人生を決める文字通り

一世一代の最大一番。最大最高の真剣勝負。

自慢できるほど広い我が家の庭で、私と父上は対峙していた。

周囲は内弟子が長方形に並んで囲んでいる。

「土俵代わりだ」

と、父上が言う。なるほど。この内弟子包囲網からは出ずに戦うってことね。

「改めて勝敗の確認をする。と言っても至ってシンプルだ。どちらかが参ったと言うか……」

「審判役のママ上が勝ち負けを判断したら終了、でしょ？」

「ああ。……ん？　ママ上？」

私の呼び方が気になったらしく、審判役として屋根の上からこちらを見下ろしているママ上へ、父上は視線を向けた。

「そうなのよ♪　昨晚からそう呼んでくれてるの」

「……いいなあ」

ほっぺに手を当てて、まるで初恋が叶った少女のようにクネクネするママ上。……可愛い。

「よし。じゃあパピーがお前に勝ったら、パピ上と呼んでもらおうか」

「絶対イヤだ」

「……反抗期か？」

「うん」

もういいやそれで。親の言う事を聞かず旅に出たいから父親とバトルするような娘は、ある意味反抗期だろうし。

私は気を引き締めて父上を見据える。服装はいつも通り、私が洗濯した道着に袴。手には木刀。そして——腰には刀。

拵えから見て、たぶん真剣だ。使うつもりなのかな…。

私の視線から考えていることを読み取ったのか、父上は渴いた笑いを浮かべて口を開いた。

「安心しろ。ただの儀礼だ。この立ち合いはお前にとって真剣勝負なんだろう？」

「ただのダジャレじゃん」

「だが気が引き締まる。久しぶりだよ、こいつを腰に差すのは」

つまり本気で来るんだね。『魔女狩り』なんていう痛々しい異名が付くほどの実力全てで。私を旅に出させない為に。

「パピーは準備OKだ。お前は？」

「私も……いいよ」

右手に魔力を込めて杖を取り出し、構える。

(始まりの合図で一気の後退。同時に過重力で拘束)

いくら父上が人間離れた剣術を使うといっても、攻撃できるのは剣の届く範囲のみ。だったら私は、魔法の特性を活かして父上の間合

いの外から一方的に攻撃すれば良い。

正直なところこんな単純な作戦が通じるか不安しかないけど、残念ながら私にはこれ以外の手段が無い。だから、これで押し通る！

「それでは、いざ尋常に……」

マミ上が手を上げる。始まるんだ。合図と共にあの手が下ろされた瞬間、私の人生を左右する一発勝負が。

目を閉じて深呼吸。落ち着け。魔法を使うのに一番大切なのは平常心。いつだって慌てるより冷静な方が結果は良いほうに転ぶ。

そして一瞬の精神統一を終えて目を開ける。

「——冗談だろ、モミジ？」

——ザン！ 私の握った杖が、いつの間にか距離を詰めていた父上に抜刀一閃。斬り飛ばされた……っ！

フライング!??嘘でしょ!??まだ母上は『始め!』って言ってないのに!

「ちよっ、卑怯だよ!」

いきなり杖を斬られたことに驚いて尻餅をついちゃった私は、さすがに抗議。ズルい!ズルだ!卑怯者!

「卑怯?もう一度聞くぞモミジ——冗談だろ?」

「……っ!?」

その言葉に、私はまるで刀を直接心臓に当てられているような錯覚に襲われる。父上の声からはあらゆる感情が排されていた。

そして目も。娘に……いや、人に向けるものじゃない。まるで捨てることを決めたゴミに向けるような、冷たく無機質な目をしてる。

本能的な恐怖に身を強張らせた私は、継るような気持ちでマミ上を見上げるけど……マミ上は……父上を咎めるつもりは無いということが一目で分かった。——マミ上も同じ目をしてる。

「いざ尋常に……か。まったく笑いを堪えるのに必死だったよ」

「何を…言ってるの……?」

「いいか? 外の世界に、『いぎ尋常に』なんてものは存在しない。正々堂々も、真つ向勝負も、騎士道精神も、武士道精神も、そんなものは何の役にも立ちほしない」

「だから不意打ちをしても良いって言うの?」

「当然だ。不意打ちの何が悪い? 卑怯の何がいけない?」

「そんなの……」

「——お前は何も分かってない」

父上は切先を私の眼前に突きつけて言葉を紡ぐ。

「何故、わざわざ勝負を1週間後にしたのか。その理由を考えなかったのか?」

「それは鍛錬する為の準備期間で……」

「お前は1週間程度でオレとの実力差を埋められると、本気で考えていたのか?」

「……………」

「準備期間と言ったな。確かにそうだ」

言葉そのものが刀のように、私の鼓膜を斬りつける。

「お前はこの1週間、何もしてこなかった」

「そんなこと……!」

「あるさ。お前は戦って勝てない相手に、戦って勝つ努力をしていただけだ。それを世間一般ではな、無駄な努力と言う」

「努力に無駄なんて無い!」

「あるんだよ。無駄な努力なんて山ほどな。お前はオレに勝つ方法を『戦闘』以外から見出すべきだったんだ。その為に、1週間もの時間を与えたんだから」

そこまで言われて、私は自分自身の過ちにやっと気付いた。

そうだ…戦って勝てないなんてこと、最初から分かった。それなのに、魔法という特権が自分にあることでどこか楽観的になってたんだ。

「お前はこの1週間、なんでも出来た。オレの食事に毒を盛れば良かった。逆に食事を与えないという選択もあったな。今着てるこの

道着、着心地が良い。裁縫が出来るならこの服に細工だつてできたはずだ。家事全般をお前に依存している以上、戦闘以外にできるアプローチは沢山あったんだよ」

でも、私はそれをしなかった。その選択肢すら頭に浮かばなかった。

「理解しただろうか？ 完全な準備不足だ。旅に出れば、この準備不足1つで簡単に死ぬ。想定内のことにすら対処する手段を見つけれなかったお前が、想定外だらけの外でやっていけるわけが無いんだ」

吐き捨てるように言うと、父上は刀を鞘に納めて周囲に立つ内弟子の1人に放り投げた。

そして、スタート地点に転がっている木刀を拾う。

「——構えろモミジ。その怠慢の結果を、身をもって教えてやる」

家出騒動 急

「——構えろモミジ。その怠慢の結果を、身をもって教えてやる」
その一言を聞いただけで、私は失神しそうになった。

(いや無理これどうしよう!?!?)

もはや勝てる勝てないの問題じゃない。この勝負、私は五体満足で終わらせられるのかな？

とにかく尻もちから立ち上がった私は、素早く杖を振って過重力を父上に掛ける。上から下の、もっとも基本な使い方。

全身に鉛を入れられたような過重力特有の感覚に父上が眉を顰めてる。とりあえず、あの見えない踏み込みはこれで抑えられたね……って!?!?

「危なっ」

まるで最初から居たかのように、目の前に現れた父上から放たれる横振りを屈んで躲す。

「心理状態にも寄るが、人は4秒に1回、0.12秒間マバタキをする——つまり目を閉じる。それは魔女もただの人間も変わらない」
だからその0.12秒の間に近付いてしまえば良い、って？

いきなりタネ明かしをして来たのは謎だけど、その内容はさらに上をいく謎さに溢れてるよ。そんなの不可能だもん。

私は後ろに下がりながら牽制で魔力の塊を幾つか放つ。狙いはバラバラだけど、どれも父上の体の何処かに当たる軌道。瞬間、木刀を握る手が霞み——

「ふっ……!」

——パパパパパパパパパパパパパパパパアン!!?その半分を叩き返し、もう半分当てて打ち消した。嘘っそでしょ……??

「よく見ろ、モミジ。マバタキすら命取りになる相手がここにいる」
彼我の実力差は絶望的。天と地の差なんて生易しいものじゃないよ。こんなの、ダンゴムシが象に立ち向かうようなもの。

(それでも…勝つんだ!)

ゆったりと歩いてくる父上を、私は目が濁いて涙が溢れてくるのも

構わず凝視する。一応魔力の塊は撃っておくけど、それは全部父上の右肩から先が霞んだ瞬間に打ち消されていた。コンチクシヨー！

内心悔しきでいっぱいだけど、それでも父上から目を離さない。離したら終わる。

開始早々マバタキすら許さないという鬼畜親父に、これ訴えたら勝てるんじゃないかと別の場所で勝機を見出した時——消えた。

「……………」

慌てて首を回して周囲を確認すると、チラツ、チラツと視界の端で父上の姿が確認できる。でも、その見えた場所に視点を向けると見えない。

(これは……かみかく神隠しだ)

昔、父上と隠れんぼをして遊んだ時に使われてブチギレた技。それはまさに読んで字の如く、突如消えてしまう技なんだ。

人間の目には「盲点」と呼ばれる、視界の中にあっても見えない部分が存在する。日常的にも、『気付いて当たり前だったことに気づかなかった時』に「盲点だった」って言うよね。

でも、今使われる「盲点」は網膜の構造上どうしても生まれてしまう人間の欠陥部分のこと。

この『神隠し』は、そんな視界の中でも見えない部分である盲点に入り込む技なんだ。

クソツ！ 凝視したのを逆に利用された……………！

(でも『神隠し』は、1対1じゃないと効果が薄い)

私は周囲を長方形に囲んでいる内弟子の視線を追う。今の父上の神隠しは、あくまで私だけの盲点に入ってる状態。

周囲からは普通に見える！

足音は聞こえないけど、地面の土をよく見れば父上が今いる場所も自ずと分かる！

内弟子の視線と土の動きを合算させて導き出した父上の居場所は……………

「右側頭部を守れ」

……………私の、真横……!?!?

——バシントッ！ 言葉に従って反射的に上げた右腕へ、強い衝撃。そのまま吹っ飛ばされた！

「くっそ……い！」

女の子としては少々お下品な悪態を吐きながらも、なんとか過重力を使つて着地できた。うう…右腕が痺れるように痛いよお……。

さつきまで私がいいた場所を見ると、左足を蹴り抜いた姿勢で父上が立っていた。つまり、私を吹っ飛ばしたのは父上の蹴りつてこと？

いやいやいや！ 警告したとはいえ、大事な一人娘の顔面を蹴ろうとする普通!!??

あまりにもドメステイック・バイオレンス!!??

「休んでる時間は無いぞ」

「——っ!!?」

たぶん私は今マバタキをしたんだね。当然のように一瞬で距離を詰めた父上が木刀を振るう。——バキッ。杖を折られた。

「だったら……っ！」

折られた杖を父上の顔面に投げつけ、すかさず逆の手に魔力を込めて予備の杖を取り出して——シャガア！

もう躊躇してる余裕なんて一切ないので、容赦無くマジカル目潰し。

（入った！）

これは避けられない。

どんな達人も、相手に致命的な一撃を与えた後は気が緩むものだからね。今回で言えば、父上は魔法使いである私の杖を折ったことで安心しちゃったんだ。

ふーんだ！ 私の勝ちだよ！

……と、内心ほくそ笑んでいたら——

「ふがつ」

イビキのような声を上げて、受け止められた——鼻の穴で。

「いや汚なっ!!?」

「スウウウウウウウウウウウウ!!?」

そのまま鼻呼吸で息を吸って——すぽ。

……ええ。入っ…ちやつ…た…。

「べっ」

そして口から吐き出した。うわあ…父上の体液でテラテラと光ってるう…。ぼっちい。

てか、鼻から口に通す時点で突っ掛からない？ 杖って基本は木製の棒だからほとんど曲がらないんだけど。

だけど、その疑問の答えはすぐに分かった。地面に転がる体液塗れの杖から、若干吐き気を催す酸っぱい匂い。

「もしかして…一回飲み込んだ？」

「ああ。食道で止めようと思ったんだが、勢い余って胃まで行っちゃった。年は取りたくないもんだ」

「……………」

つまりあの杖は、まず父上の鼻水でコーティングされて、胃液に浸かった後、仕上げに唾液でフィニッシュ決めた、と……。

「これが秘技、魔法封じだな」

「確かにね!?!」

そりゃあ封じれますよ！ 触りたくない上半身の体液ベスト3でビッチャビチャにされれば！ 鼻水、胃液、唾液。もう字面からして超絶汚い！

どうせ目を離そうが離すまいが変わらないので、屋根の上にいるマミ上に今の行為は魔女的にどうかお伺いの目を向けると…あ、遠い目してる。たぶんマミ上もやられたことあるね。

「さあ、拾えモミジ」

「絶対イヤ!!?」

私はさらに予備の杖を取り出して、思いつきり過重力で飛んで距離を詰める。

マバタキしたも凝視してても近付かれるなら、もはや父上から遠ざかるのは無意味に等しい。木刀の攻撃範囲は、使い手を中心に置いたドーナツ型だからね。さっきまでは外側に立ってたけど、今度は内側まで強引に入り込んでやる！

私はその勢いのまま手首を掴んで奪刀術。剣士である父上から木

刀を奪い取ってやった。

「——っ!!?」

「相手の武器を奪う時、相手もこちらの武器を奪うことが出来る。覚えておけ」

逆に…奪われた…!! 私のが!

でも構うものか。父上が神業のバーゲンセール人間でも、所詮はただの人間。魔法を使って武器の強度を上げることができない。

「たあ!!?」

「これはお前の得意技だろう」

杖で防がれてもそのまま叩き折れるよう思いつき振り下ろした木刀を、また奪われた! 2連続の奪刀術だ…!! —— やられる!!?

「ほら、もう一回」

「ふえ?」

次の瞬間には襲ってくるであろう痛みにも備えた私に、父上は杖を投げ返してきたんだけど。なんで?

と、私の可愛く大きな目をパチクリさせたら——ブウン!

パチクリの間に懐に入られてぶん投げられた。

(つて、着地着地!)

内弟子が形作る長方形の土俵を対角線に投げられた私は、ズサアと地面を滑りながらもなんとか着地できた。勢い殺すために私の進行方向にいた内弟子のお腹に1発掌底打ちしちゃったけど。ごめんね?

自分の投げたものに走って追いつくとか普通にできるのが父上なので、油断無く視線を上げると…良かった。私を投げた位置からほとんど動いてない。

この土俵の中で1番離れている対角の位置で、父上は木刀を肩に担いだ。

「分かっただろ、モミジ。オレとお前の差が。お前に勝ち目はない」

「……だったらなにや」

『『参った』』と言え。それでこの体操も終わる」

体操、と来たか。確かに父上にとってみれば、今の攻防なんてレベルなのかもしれないね。私にとって危険な綱渡りの連続でも。

「イヤだね」

「イヤだイヤだと……反抗期かとも思ったが、実はだいぶ遅めのイヤイヤ期か?」

「ふん!」

「そういう態度だから友達できないんだぞ」

「うるさいなあ!!?」

思わぬ憎まれ口に顔真っ赤で言い返すと、父上がゆったり歩いてくる。

今度は普通に。視界の中で消えたり、突然目の前に現れたりせず。(もう出し惜しみしてる余裕はないね……)

私は杖を父上の正中線から指2本分左——心臓に向けて集中。集中。過重力の正六面体で父上の心臓を囲む。

(よし、成功)

過重力を用いた必殺技——マミ上は『心筋拘束』しんきんこうそくって呼んでたっけ。父上は心臓を文字通り締め付けられる感覚に脂汗を垂らして顔を顰めてる。常人なら胸を抑えてのたうち回る苦しみの筈だけど、それでも普通に歩いているのはほら……父上だし?

でも、私はそれ以上に神経を使っている。この技、力加減をミスると本当に心臓を潰しちゃうからね。いくら真剣勝負でも、実の父親を殺すつもりは無い。

だけどこれで私の勝ちは確定した。

「降参して、父上。自分が今どんな状態なのかくらい分かるでしょ?」

「ああ……くっ、この……感覚は……懐かしっ、いな」

「降参してくれないと、もっと苦しくなるよ」

「はっ! やってみろ」

不敵な笑みを浮かべながら、父上は歩みを止めない。

『心筋拘束』はある意味魔法を使った絞め技。本来は頸動脈などの太い血管の血流を止める絞め技を、血流の大元である心臓に掛けてるんだ。

「降参…しなよ！」

「だからもつと苦しめてみる」

ギリツ…ギリギリツ…と。私は徐々に力を込めていく。けどおかしい。もはや立っているどころか、極端に遅くなった血流によって酸素が脳に届かず失神してる頃のはず。なのに父上は、失神どころか歩く速度がまったく変わってない。なんで…？

その答えは、歩み寄せられたことで理解できた。信じ難いことだけど。

父上が波打ってる。細かくだけど、エイやヒラメが泳ぐみたいに全身がウネウネと時計回りに波打ってるんだ。

「心臓は血流を作るのに不可欠な器官ではない。あくまでポンプだ。全身の筋肉をこんな風に動かせば、血流を作るとは難しくない」

いや難しいわ！ てか普通できないわ！

「お前が生まれてからは控えていたが、夫婦喧嘩でこんな風に心臓を止められるなんて何回あったことか」

……え、なに？ マミ上喧嘩になると心臓止めてくるの？ 怖すぎじゃない？

ていうか、そんな夫婦生活を生き延びた父上はもはや人間じゃない。い。

「——そろそろか」

もう本気で父上を人間じゃない別の生き物として考えようと決めた時——クラ。突如、強めの目眩に襲われる。

加えて、頭痛、吐き気と、まるで乗り物酔いのような症状が現れ始めた。なんで…いきなり…っ！

(うっ…気持ち悪い…)

脳みそを丸ごとシェイクされてるみたいだ…！ あまりの気持ち悪さに、私は膝をついて父上の心臓に掛けていた過重力をキャンセルしてしまう。

「相変わらずこういうった策に引つ掛かりやすいな。どうしてオレが、わざわざゆったり歩いていたのか疑問に思わなかったのか？」

「なん…だよ…！ 私に何したのさ…！」

「神眩かみくらまし——ただの催眠術もどきだよ」

これは…初見の技だ。周囲の内弟子を見ると、何人かは私と同じように顔を青くして込み上げる吐き気に耐えている。

わからない。この技の正体がわからない。父上は、ただ普通に歩いていたはずなのに。

「人は視覚情報と三半規管のバランスが狂うだけで簡単に酔う。実際には揺れているのに、見ている風景は揺れていない。たったそれだけでな。神眩かみくらましは、特殊な歩法によってそれを誘発させるものだ」

つまり私は、父上が歩く姿を見て酔わされたってことか……！

クソ！ 『心筋拘束』を行使する為に集中したのを逆手に取られた。

でもここまで見せられて、魔法を使えない父上がどうして「魔女狩り」なんて呼ばれるほど魔女を圧倒できるか、なんとなく分かってきたぞ。

父上の本当に恐ろしいところは、なんでも問答無用で斬り裂く斬撃でも、魔力の塊を木刀で叩き落とすことのできる反射神経と情報処理能力でもない。心臓をほとんど止められた状態で問題無く活動できるところでもない。その全てが明らかに人間の域を飛び越えているけど、真に恐るべきは——多彩な接近方法だ。

よくよく考えれば当たり前だよ。剣士の父上が攻撃できる範囲は、自身を中心に置いたドーナツ型。そこに入らなければハエだって倒せない。音速を超えた斬撃も意味を成さない。

——だから近付く。

魔女だって所詮は人間だ。どんなに強力な魔法を使ってもマバタキはするし、視覚で捉えているなら盲点も存在する。箒で飛ぶんだから三半規管だってある。

相手が「人間である」という部分を、とことん突いて接近すること。その技術の研鑽が、父上を「魔女狩り」と呼ばれるまでに祭り上げた。

「お前はあまりにも素直すぎる」

「……だからなにさ。素直で可愛いとかもはや最強でしょ……っ」

「お前の最強の概念はイマイチ理解出来ないが、少なくとも旅人にとっては危険なものだ」

「なん…でよ……」

「——世界は悪意に満ちている」

膝をつく私の視線に合わせるよう片膝立ちになり、父上は言葉を説き始めた。

「聖人君子なんていない。旅をしていれば分かる。誰も彼もが、他人を利用して甘い蜜を啜ろうとするクズばかりだ。善人なんて、極少数派なんだよ。そして利用されるのはいつだってそんな極少数の善人だ」

「……………っ…………」

「モミジ。お前はあまりにも優しく素直だ。正直本当にオレの子どもかと疑うほどにな」

私は確かに善人なのかもしれない。だって可愛いし。可愛いは正義だし。

でも、だからこそ父上は、そんな私を旅に出させようとしなない。

「旅人になんてなるな。オレも色々やらかした側だから真つ当な人間とは言えないが、それでも真つ当な父親にはなりたいと思ってる。父親として、大事な一人娘を悪意の渦中に放り込みたくない」

何を今更……………！

「この世界にはな、反吐が出るような理由で平然と人を傷付ける奴が大勢いるんだ。…………いや、理由があればまだマトモな方だ。ただ単に、まるで呼吸をするように人を殺す奴がいる。暇だからと犯罪に手を染める奴がいる。それはもう撲滅し切れないほどにな」

「……………それでも」

「お前が行こうとしているのはそういう世界だ。だからやめろ。旅人になるなんて」

「……………それでも」

「……………」

「それでも私は——旅人になる！」

その言葉と同時に、この至近距離で魔力の塊を叩き込む。狙いは、

顔、膝、肩。合計5箇所を同時に。

よし、無駄なお喋りのおかげでなんとか酔いが覚めてきた。

「そうか——なら仕方ない」

父上の声から感情の色が失せ、片膝立ちの姿勢にも関わらず5発の魔力の塊は木刀で弾き飛ばされる。チツ…化け物め。

追撃に備えて杖を構えると——スウ。父上は立ち上がり、私に背を向けて歩き去ろうとしてる。この…まだバカにして!!?

「どこ行くのー!」

「先達としてアドバイスしてやる。旅人の基本その1——相手の土俵で戦うな」

パチン！ 父上が背を向けたまま指を鳴らすと、ザツ！

私達を囲んでいた内弟子が——土俵が、どこからともなく取り出した木刀を構えている。私に向けて、構えている。

「旅人の基本その2——利用しろ。自分の持つ人脈、権力、暴力、その場にある全てを利用しろ」

「えっ、ちよ…なにこれ!?」

「別にオレが直々に手を下すまでも無いだろう。お前程度の魔法使い、内弟子だけで十分だ」

父上がそう言うてる間に、長方形を作っていた内弟子が木刀片手にゾロゾロと私を囲んでくる。

まずい…完全に袋小路だ。今の私は袋のネズミ。この状況の末路は、袋叩きしかない。

「旅人の基本その3——使えるモノはなんでも使え。自分の周囲にある物も人も、有機物も無機物も、空気から石ころ1つさえも。全てが現状打破の鍵になり得る」

たぶん父上、結構テキストに喋ってるね。若干その2と被ってる。

(でも——いいよ。だったら利用してやるもん!)

私は囲んできている内弟子の中から1番の若手、私に「龍浦」を見せてくれたサイコパスお兄さんを見つけ出して、魔法で彼にだけ声を届けるように操作。

『聞こえるね? もし聞こえてたら頷いて』

彼を見ていると、怪訝な表情を浮かべながらもコクリと頷いた。よし。

『君がもし攻撃を仕掛けてきたら——私に“龍浦”を見せてくれたことを、父上にバラす!』

旅人の基本その2に則り、利用させてもらうよ。君の弱味をね!

私の言葉に顔を真っ青にしたサイコパスお兄さんは、壊れたように首を縦に振り出した。やったね大成功。

これに味を占めた私は、拡声の魔法を使って周囲の内弟子にも呼び掛ける。

「みんな聞いて! もし私に攻撃したら——もうみんなのご飯作ってあげない!」

「二——っ!?」

「負けたら私はずっと家事をして暮らすことになるけど、絶対にご飯作らない! マミ上にも、食事は作らなくて良いって進言するから!」

ふっふっふっ……どうだ!

狙い通り、内弟子のみんなは迷ってるよ。そりやそうだよ。腹が減っては戦はできぬ。いくら剣術を学びたくても、お腹が空いていたら集中できないもんね。

でもまだ弱い。だから私は最後の一押し。

「もし私の味方をしてくれたら、なんでも好きなもの作ってあげる!」

「二 うおおおおお! 師範覚悟おお!!?」

「全員、掛かれえええええ!」

「二 イエス! マム!!?」

内弟子全員が雄叫びを上げながら木刀を振りかぶって父上へ向かっていった。食べ物力は偉大なり。

「……素晴らしい」

ふと、雄叫びの中から小さく父上の賞賛が聞こえたけど……気のせいかな? 視線を向ければ、冗談のようにぶっ飛ばされていく内弟子しか見えなかった。

それからわずか1分。内弟子軍団は壊滅。まあ予想通りだけどね。

死屍累々と、我が家の庭には内弟子達が転がっている光景が広がっている。その中心には、50人以上を1分で制圧したのに息一つ乱してない父上の姿。

「作戦は悪くはなかった。だが、無意味だったな」

「そうでもないよ」

「なに？」

旅人の基本その3。使えるモノは使え、でしょ？

私は1番近くに転がっている内弟子を過重力で軽くして掴み上げる。

右手に杖。左手に内弟子。これもある意味、二刀流かもね。

「マミ上が言ってたよ。——飛んでくる人間というのは、それだけで凶器になる、つてね！」

「流石はマイハニー。血も涙も無い」

「私のマミ上をハニー呼ばわりしないでよ。キモい……から!!？」

——ブウン!!？気絶した内弟子を思いつきり投げつけてやった！

父上はなんだかんだで内弟子を大事にしてるからね。絶対に怪我をさせるようなことはしない。

そこを突かせてもらいましょう。

私は庭を縦横無尽に走り回り、片っ端から転がる内弟子を拾って投げる。ポイ！ポイ！ポイ！

対して父上は木刀を離して、次から次へと飛んでくる彼らを減速防御の要領で左右へ投げ捨てるように受けるしかない。避ければ怪我しちゃうだろうし、普通に受け止めたら捌き切れないからだ。

私の内弟子連射砲は止まらないよ。なにせ弾は無限に転がってる。一度投げた人でも、もう一度使える。なんてコスパが良いんだろう！

「ほらほら！ さっきまでの威勢はどうしたのさ！」

「もはやセリフが完全に悪役なんだが……」

「私は可愛い！ 可愛いは正義！ つまり可愛い私の行いは全て正義の執行!!？」

「カルト宗団かな」

ふふん！ さつきまで煮湯をガブ飲みさせられていた分、手も足も出ない状況にしてやるのは気分が良いね！

……だけど、正直これは決め手に欠けてる。私が投げて父上が止めるを延々と繰り返し返してるだけになってるよ。

この状況が続けば、先に体力が尽きるのは攻めてる私の方。父上は怪我をさせないように受け止めないといけないから神経使うけど、私は魔法と並行して走る、投げるという3動作をしてるからね。

（でもね、父上。あんだけ言いたい放題言ってくれた仕返しが、これだけに終わるはずないよ）

ニヤリと胸中でほくそ笑みながら、馬鹿の一つ覚えのようにまた一人投げつける。

「まさかこんな形で『一緒にキャッチボールしたい』という、父親としての夢が叶うとはな」

「——あっそ」

「おっ？」
ここで初めて父上の表情が変化した。その顔は——私のすぐ目の前。

受け流した内弟子の影から私が現れたことにビククリしてるね。まさかこの状況で私が踏み込んでくるとは思わなかったみたい。

（確か狙うのは……両肩、両肘、両股関節、両膝だったね）
両手にそれぞれ握った木刀を引き、狙いを定める。

今初めて握った木刀でいきなり技を出すのは、普通なら無理かもしれない。でも私には魔法がある！

魔法を行使する動作は杖を振ること。それは、「振る」という動きさえできれば問題無い。

口に啞えた杖を舌で振り、前方へ向かって自分に過重力。
生まれた慣性を両手に乗せて、私が唯一見た技を放つ。

「ふーほ」
二刀での龍浦。両肩を狙った最初の2発を——バシッ、バシッ！

「白羽取りは、剣士の必修科目だ」

当然のように受け止められた。左右とも、親指と他の4指で挟む真剣白羽取りの片手版で。

でも、それで良い。ここまででは予想通りだよ。

(内弟子の砲撃。木刀によるパクリ技。でもこれだけじゃ、意地悪言われた仕返しとしては物足りないよね。だから最後は——私だ!!?)

受け止められた木刀を離して、私は勢いそのままに父上へ突っ込んでいく。

そして空中で体を仰け反らすように振りかぶって——ゴツツツ!

過重力、龍浦、体重、その他諸々の勢いを全部乗せた私の頭突きが、父上の鼻っ柱に炸裂した。

「痛った……っ」

うう……頭がクラクラする。視界の中でお星様が飛んでるよ。そのせいで上手く着地できず、あからさまに転んじやった。

「チツ……まさか1発貫うとはな」

「へっ……ざまーみろー!」

鼻血を流す父上の姿に、胸が透く気分だよ。

頭突きの反動で口から落ちた杖を拾って、私は油断なく構える。距離は刀の間合い。気絶しなかったってことは、反撃が来るぞ……。

「まさかここまで粘るとはな。しかも『龍浦』まで使ってくるとは思わなかった。誰に教わったんだ?」

「教わってないよ。ただ見せて貰っただけ」

「ほう……見ただけで習得したか。魔法を併用こそしていたが、技そのものは完璧だった。剣の才能の方があるんじゃないか?」

ママ上より自分寄りな才能を私が持っていたのが嬉しいのか、父上は口元を綻ばせながら木刀を左腰に充てた……抜刀術の構えだ。

でも、それは悪手なんじゃない? 木刀がどんな軌道で飛んでくるのか、私には丸分かりだよ。

「本邦初公開だ。この奥義は」

ためか。確かにそれなら、私を怪我させずに無力化できる。

「そこまで！ 勝負アリ！ 勝者——」

この状態を戦闘続行不可能と見て取ったマミ上が、屋根の上から高々と宣言した。

うん。この勝負……

「——モミジ!!？」

私の勝ちだよ。

昨晚、私は布団の中でマミ上に1つお願いしていた。

『あのね、明日の勝負——私の勝ちにしてほしいんだ』

今回の勝負の勝利条件は大きく分けて2つ。どちらかを満たせば勝ちだった。

1つ。どちらかが「参った」と言うこと。

2つ。マミ上が勝ち負けを判断すること。

だからまあ、ざっくり言っただけじゃあね——マミ上が勝ちと云えば勝ちになるんだよ。勝負の内容に関わらず、ね。

私はマミ上をマミ上と呼ぶことで、このお願いを聞いてもらえた。父上には悪いけど、この勝負は結局出来レースだったんだよ。はい残念でした〜！

でも父上、言ったもんね。

旅人の基本その4——騙される前に騙せ、てさ。最初から騙されてたんだよ〜あつかんべー！

あの勝負から2週間。ついに家を出る日が来た。

家の門の前ではマミ上と内弟子一同が見送りの為に出てきてくれる。

その中に、父上の姿はない。

「父上は……？」

「朝早くから出掛けて行ったわ。急いでたみたいだけど」

実はあの勝負以降、私は父上と会話らしい会話をしていなかった。同じ家に住んでるから何度も顔を合わせることはあったけど、どうにも気まずくて無視するような形ですれ違ってたよ。

(嫌われちゃった……かな)

ぶっちゃけ、卑怯過ぎた自覚はある。審判を味方につけるのは流石にやり過ぎたかもしれない。

そもそも、出来レースを仕掛ける必要なんてなかったんだ。勝負開始と同時に、マミ上に私の勝利を宣言してもらえばそれで終わったことだった。

それでも私がわざわざ父上と戦ったのは――

(たぶん……遊んで欲しかったんだろうなあ)

自分でも自分の気持ちは不確かだけど、たぶんこれが正解。

私が小さい頃から父上は内弟子と鍛錬ばかりして、遊んでくれた記憶なんて片手の指で足りるくらいしかない。

マミ上には、私自身も分からない私の気持ちがお見通しなのかもしれないね。

「まあいいか」

ちよつと寂しいけど、仕方ない。これも私の行動の結果だもん。受け入れないとね。

少しだけ浮かんだ涙は、俯いて誤魔化す。門出に涙は似合わないから。

そしてこれから長い間見納めになる我が家へと目を向ける。

「バイバイ、マミ上。バイバイ、内弟子のみんな。バイバイ、父上……」

「――パピーと呼びなさい」

いつの間にか、隣に父上が立っていました。怖っ！

「まったく……父親に挨拶しないで出掛ける奴がいるか」

「あらおかえり。朝っぱらからどこ行ってたのよ」

「ちよつと市場まで」

「なんだ：行くなら言つてよ。ちよつと大根とお味噌切れてたから買つてきて欲しかったわ」

「わかつたわかつた。後で行つてくるよ」

「あなたつていつもそうよね。なんでもかんでも事後報告で」

「だからわかつたつて」

と、当たり前のように普通の主婦と夫つぷりを見せつけてくる我が両親。

あれ？ この場の主人公つて私だよな？ 私の旅立ちの瞬間だよ？

「あの……」

「ああ、モミジ。餞別だ。——ちよつ、わかつたから。モミジが出掛けたらすぐ行つてくるから」

マミ上に詰め寄られながら適当に放られた、中身の入った拵え袋をキャッチ。そこはもう少し感動的なムードで渡さそうよ……。

拵え袋つていうのは刀を持ち運ぶ為の布袋なんだけど——その中身を出すと、予想通り一振りの刀が入つた。護身用に持つてけてこと？

確かに見える所に武器を提げてた方が威嚇にはなるけど。

「うんー？」

とりあえず抜刀してみるけど……うん、刀身も別に何か細工があるわけじゃないね。名刀とか業物つてわけじゃないけど、そこそこ丁寧に作られた普通の刀身だ。刀特有の刃紋がビューティフル。

たぶん父上が朝早く出掛けたのはコレを取りに行つてたんだろうけど、別にこの程度の品なら物置にたくさんあるじゃん。餞別だから新品を用意したとかかな？

私が刀を見て首を傾げていると、それに気付いた父上……いやなんです土下座で謝つてんのさ。尻に敷かれてるなあ……。

「知り合いに頼んで柄を魔法の杖に加工してもらつた。いつもみたい振つてみる」

袖の中から出したリングを私に投げ渡しながら、そんなことを言つ

てくる。リンゴジュースを搾れつてことか。

コップが無いのでどうしようかと迷ったら、マミ上が魔法で作ってくれた。さすが魔女。

「こ、こころ？」

刀身がある分いつも使ってる物より重いからちよつとコツがいるけど、おお！　ちゃんと魔法が出た。使い心地も悪くない。

搾り取れたリンゴジュースを一口飲んで——そこで1つ思いついた。

「はい、マミ上」

「あら？　マミーと間接キス？」

「違うよ。水盃の代わり」

水盃とは、盃に入った水を回し飲みするちよつと衛生的にはアレな別れの儀礼。飲み終えたら使った盃を割り、この盃はもう使わない。2度と会えないという意味で行うもの。

私のは旅だか家出だかもはや分類不可能で分からないけど、それでも今から危険な国外に出るわけだからね。もしかしたら道中で野垂れ死ぬかもしれない。

そんな時、両親に何も言えないのはあまりにも親不孝だもん。だから、ここでそれを済ませとこうと思ったら——

「ゴボゴボゴボゴボッ!?」

マミ上は土下座していた父上を蹴って仰向けに寝かせ、口にコップをひっくり返してリンゴジュースを注ぎ込んでいる。

えっ、これ大丈夫？　「魔女狩り」の異名を持つ父上、リンゴジュースで溺れ死にそうになってるんだけど。ご近所さんに見られたら通報待ったなしの狂気の絵面だよ。

私の心配をよそに、空いたコップをポイッと捨てて魔力に霧散させてから、マミ上はいつも通り優しく微笑む。

「バカね。こんな古びた儀式必要無いわ」

「でも……」

「あなたのその律儀なところは美德だけど、その美德が時には親不孝になることも覚えておきなさい」

物分かりの悪い我が子を叱るように——実際そうなんだけど——
——マミ上は私のおでこをツンっと人差し指で押ししてきた。

『これが今生の別れになるから』なんて気を遣われて喜ぶ親、いると思おう?」

「それはいないだろうけどさ」

「だったらお前は、いつも通りにすればいいんだ」

「父上……」

「パピ上と呼びなさい」

マバタキの間に立ち上がった父上も、マミ上と並んで私のおでこを押す。

「お前の門出が、旅になるのか家出になるのかは知らん」

「でもね……旅も家出も、終点は『我が家』よ」

「よく言うだろう? 『家に帰るまでが遠足だ』てな」

「だからマミーもパピーも、今から出掛けるあなたに掛ける言葉は1つしかないの」

「世界で1番大切な1人娘が出掛ける時、親が掛ける言葉なんて決まってるだろ?」

そう言つて2人は……私の頭を優しく撫でてくれる。

……うん、そうだね。私が間違つてた。水盃は『さよなら』の儀式だ。

でも、子どもが親に『さよなら』を言うのは死別の時しかない。

私が言うべき言葉も、浮かべるべき表情も、やるべき行動も、全部間違つてたよ。

ごめんね、バカな子で。そしてありがとう。私のやりたい事を尊重してくれて。

本当は分かつてたよ。父上も……いや、パピ上も、私が外に出ることを応援してくれてたこと。

だってさ、明らかに技を見せてくれてたもん。私程度なら一瞬で倒せたのに、それをしなかつたもん。

厳しく当たったのは、私を鍛える為だったんだよね。わざわざ『旅人の基本』を教えてくれたのは、私が死なない為だったんだよね。

「マミ上だつてそう。『交換条件は旅に付いて回るもの』なんて、あからさま過ぎだよ。そんなの、私が外に出ることが確定してるようなものじゃん。」

旅人の基本その4——騙される前に騙せ。

私は最初から……最初の最初から、この両親に騙されてたんだ。

「あらあら」

「おっ」

だから私は堪え切れなくなった涙もそのままに、それでも笑顔で思いつきり2人に抱き着く。右腕をマミ上に、左腕をパピ上に、それぞれ首に回してしがみつくように飛び付いた。

そんないつまで経っても甘えん坊な私を2人は抱き留めて。

「魔女狩り」としてでも無く、「矛盾の魔女」としてでも無く、ましてや旅人としてでも無く。

どこにでもいる親として、ごく普通に言ってくれる。

——気を付けて、行つてらっしゃい。

「行つてきます」

そして今日この日から、私は旅人になった。

私はモミジ。武士で旅人で魔法使いだよ！

テールと刀を振り回しながら山賊さん達を追いかけ回してるんですけど。

あ、よく見たら刀を持つ手とは逆の手に気絶していると思いき山賊さんも持っています。

「男は奴隷！ 女性の方々は……ふひひひひひ。ヒヤッ
ハアアアアア……！！？」

などと奇声を上げながら、彼女は返り血が付着する大輪のひまわりのような笑顔で、手に持つ山賊さんを逃げ惑う山賊さんに投げつけています。恐らくお得意の過重力で軽くしているのでしよう。

そして見事命中して気絶した山賊さんを拾い上げ、また別の山賊さんへシユート。

脅威の剛速球（山賊）です。ほとんど悪魔の所業です。

「……………」

一瞬スルーしようかとも思いましたがそれはそれでなんだか薄情な気もするので、彼女の悪魔的所業が終わるのを空の上から待つことにします。

それから数分。

片手に刀、逆の手に山賊を持ち、地面に倒れ伏す山賊を踏みつけている武士で旅人で魔法使いの腐れ外道の元へ、灰色の髪を靡かせ降りていく魔女がいました。さて、それは一体誰でしょう？

彼女は灰の魔女イレイナ——そう、私です。

「ふう、粗方片付いたでござるな」

周囲を見回せば、死屍累々と倒れ伏す山賊の方々——確かKCP山賊団でござったか。

彼らのトレードマークであるニワトリさんのような赤モヒカンが、枯れ葉だらけの寂しい山の斜面を綺麗に彩っているでござるな。

……って、そんな現実逃避してる場合じゃないでござる。この連中、山賊のくせに無駄に健康なので全員を確保するのに手間取ってしまっただでござるよ。

今から彼ら全員を依頼元の国まで運ばないとならないでござるな……。いやはや、重労働でござる。ぐすん。

「おっと忘れるところだった。——先ほどから見ている者！ 敵意が無いのならば姿を見せるでござるー！」

周囲に聞こえるように叫ぶ。KCP山賊団を追いかけている途中から、何やら視線を感じていたでござる。

彼らは全員拙者に背中を向けていたので、たぶん別の誰かであろう。視線が拙者だけでなく、刀や投げつけるための山賊にも長いこと向いたことから知的生命体。動物は武器よりも人を警戒するでござるからな。

女の子は視線に敏感でござるよ。

右手に刀、左手に山賊の変則二刀流で全方位を油断無く警戒していると、箒に乗った影が上から降りてきたでござる。

「おろろ？ 魔法使いさんでござつ…た…た…た…た…た…た…た…た…た…た…た…」

「お久しぶりです、モミジさん」

「イレイナ殿?!?」

なんとビックリ！ 降りてきたのは拙者と同じくらい長い灰色の髪に黒の三角帽子を被せ、黒いローブを纏った見るからに魔女っぽい格好の魔女。拙者が懸想する女性——イレイナ殿でござつた！

拙者は左手の山賊を捨てて納刀し、箒の上でちよつと引き攣った笑みを浮かべるイレイナ殿へ、ぎゅ。抱き着くでござる。

はぁ~~~~いい匂い……ちゅき♡

このフレーバー……本物でござる。山賊退治のストレスから生み出したイレイナ殿の幻覚とかじゃ無いでござるな。えへへ。髪の毛ちゅばちゅばしたい。

「離れてもらって良いですか?」

「お断りするでござるん」

「いや、本当に。返り血が私の服にも付いてしまうので」

「返り血……?」

なんの事かと拙者が首を傾げると、『いつマジか』みたいなドン引き顔をされたでござる。

ふむ…どんな顔をしててもイレイナ殿は美しいでござるな。

しかしおかしいでござるな。拙者、KCP山賊団が逃げ始めるまでは確かに刀を使ってシバき倒していたでござるが、全部峰打ちにしていたでござる。斬りつけると出血するし、服に付いた血って乾くと洗濯しても落ちないでござるからな。

だから返り血なんて付くはず無いでござるよ。

「お顔に付いてますよ。良かったらこれ使ってください」

「おろ？ かたじけない」

未だにちよつと返り血については覚えが無い拙者に、イレイナ殿は花柄の白いハンカチを渡してくれたでござる。優しい。

とりあえず自慢の可愛い顔をペタペタ触ってどこに付着してるか確認すると、ベチャ。右のほっぺにベタつく液状のものを確認。

「あー…これ、血じゃないでござるよ」

「えっ？ ですが……」

「ケチャップでござる。ほら」

指で拭ってペロつと舐めると、酸味の効いた品の良いトマト味。ふむ、やはりこの山賊団が持っているだけあって酸味と塩気のバランスが上手く取れているでござるよ。

イレイナ殿にもケチャップが付いた指を差し出すと、ちよつと迷った素振りを見せながらもペロリ。

「あ、ホントだ。……って、なんで顔が真っ赤なんですか？」

「いや…その……」

……あれでござるな。想い人に指を舐められるって……あれでござるな！ なんか！ すごく！ 恥ずかしい!!？

なんか拙者ほとんどもなくえっちいことをイレイナ殿にしてしまった気分でござる……ううゝ!!？

恥ずかしさのあまり渡されたハンカチで口元を隠すと……おや？ハンカチからもイレイナ殿の匂いが。そこら辺の高級香水が生ゴミの匂いと思えるほどに、100%イレイナ殿の匂いが染み込んでいるでござるよ！ これ欲しい！

「まあ、返り血でないのは分かりました。それで、どうしてあなたは顔

にケチャップ付けて山賊さんを追いかけて回していたんですか?」

「すーはーすーはー……ほえ? なんでござる?」

「返してください」

「ああ!?」

ハンカチ…取り上げられちゃった……ぐすん。

「ああじゃありません」

「うわああん! イレイナ殿がハンカチ盗ったあ……」

「人聞き悪い事言わないでくれませんか。まあ、どうせ誰も聞いてないので良いんですけど」

「……はっ! 周囲に誰もいない事を良いことに、拙者にえっちなことをするつもりでござるか!?」

「……………」

「あ、そんな害虫を見るような目で見ないでほしいでござる。興奮しちゃう……」

「無敵ですかあなた」

おやおや? イレイナ殿は随分と疲労感に満ちている様子でござる。きつと長旅だったのでござるな。お疲れ様でござる。

「で、どうして山賊なんか追いかけていたんです?」

「お仕事でござるよ。ここから20分ほど飛んだところにある、『健やかなるポモドーロ』という国から依頼されたでござる。どうにも最近KCP山賊団なる彼らが国外へ輸送中のある物を強奪したので、物品の回収と山賊団の捕縛を頼まれたでござる」

「はあ……。なんか空から見てた感じ、あなたの方が山賊っぽかったですけど」

「そうでござるか?」

『『ヒヤッハー』とか奇声上げて襲い掛かっていたじゃないですか』

「奇声とは失敬な。『ヒヤッハー』は山賊にとって気さくな挨拶でござるよ。これでも一応、最低限の交渉は試みたでござる」

「ほうほう。山賊に、ですか?」

「然り。拙者、暴力は嫌いでござるからな」

そう言うと、イレイナ殿は信じられないものを見るような目を向け

てきたでござる。

いやまあ、確かにイレイナ殿と初めて会った時もパン屋強盗をシバき倒したし、大半の厄介事は殴って解決してきたけど！でも基本拙者は平和主義でござる。

「まず友好の証として、奪った荷物のそばで食事していた山賊団の前に、『ヒヤツハアアアアア！ここは通さねえでござる！』と刀を舐め回しながら飛び出したでござる。——そしたら何故か問答無用で襲い掛かってきたでござるよ」

「……………」

「とりあえず暴力は良くないので、ぶん殴って黙らせたでござる。たぶんその時顔にケチャップが付いちやっただでござるな」

「……真面目なバカって1番始末が悪いと思いませんか？」

「おろ？うくん……まあ、それでござるな」

「あなたの事ですよ」

ひどい……。モミジ泣いちやう。

「うん？なんでそんな状況でケチャップが付くんですか？」

「山賊団が食事していたからでござる」

「……？あつ、ケチャップを付けて何か食べていたということでしょうか？」

「ちよつとズレてるでござるな。正確には、彼らの主食がケチャップでござるよ」

イレイナ殿は『なに言ってるの？』みたいな顔を拙者に向けてくるでござる。

ふむ……拙者の拙い説明ではいくら頭が良いイレイナ殿でも理解しづらいようでござるな。申し訳ない。

「そこらに転がってるKCP山賊団——正式名称ケチャップ^K山賊^C山賊^Pは、文字通りケチャップ専門の山賊でござる」

山の斜面に横たわる赤モヒカンの彼らを指差し、拙者はウインク混じりにイレイナ殿へ告げたでござる。

「ケチャップ専門の山賊って何ですか？」

うーん……拙者もわかんない！

しかし、魔女であるイレイナ殿に会えたのは運が良かったでござる。

もしイレイナ殿に会えなければ、拙者は気絶した山賊団の皆さんを1人1人拾いながら山を登らなければならなかったでござる。

正直拙者のお仕事を手伝ってもらうのは心苦しいでござるが、致し方なし。

この依頼の報酬を貰ったら何かお礼するでござるよ。……いや、よく考えたらお礼と称してデートできるではござらぬか！ 拙者天才じゃん!!?」

「ここがアジトですか。なにやらケチャップくさいですし」「そうっぽいでござるな」

魔法でまとめて運んでもらいながら辿り着いたのは、山の頂上付近にある洞窟。その入り口の前には、『ケチャップ好きにあらずんば人にあらず』とケチャップで書かれたトーテムらしき物が建てられているでござるな。これ虫さんが寄ってきそうでござる。

「えい」

ポイ。イレイナ殿が運んでいた山賊をまとめて洞窟の中に放り込んだでござる。

その衝撃で何人かは目を覚ましたらしく、拙者を怯えるような目で見上げてくる。

いやいや、そんなに怖がらないでほしいでござる。ちょっと山の中を刀片手に追いかけて回しただけでござらう?」

「さて、目を覚まして早々申し訳ないでござるが、ボスを呼んできて貰っても良いでござるか?」

「ひい!??よ、喜んでえー!」

彼我の戦力差は理解しているのでござらうな。下つ端っぽい赤モヒカンが洞窟の中に消えていくのを見送り、ちよつとばかり憂鬱気なため息を漏らす。

「モミジさんって、いつもこういったお仕事でお金稼ぎしてるんですか?」

「然り。もう少し平和的な仕事があればそれが良いござるが、大体そういうのは頭脳労働でござるからな。色んな魔法が使えればもつと違ったのでござろうが」

「そうですねか……」

拙者の答えに思うところがあつたのか、真剣な顔で顎に手を当てて何かを考え込むイレイナ殿。

……今だったらほっぺにちゅーしてもバレないかな……？

「ま！別に現状に不満があるわけじゃ無いでござるよ。ああいった小難しいことを考えて行う作業よりも、こういった仕事の方が楽でござる」

「というところ？」

「国や街の中だと、例えば正当防衛でも暴力沙汰は問題になるのでござる。対して、ああいった国に属さない人間はシバいても誰も咎めないし、なにより殴れば言うこと聞くぶん楽でござるよ」

「さつき暴力は嫌いみたいなこと言ってますませんでしたっけ？」

「時と場合によるでござるな」

あざと可愛くウインクでイレイナ殿の疑問を誤魔化して雑談していると、アジトの奥から一際体の大きな男が出てきたでござる。ボスの証なのか、赤モヒカンが2つあつて触角みたいになつてる。おもしろいでござる。

とりあえず拙者は敵意が無いことを示す為、笑顔で手を上げて、

「ヒヤッハー……」

気さくにご挨拶。

「ひゃ、ヒヤッハー……っ？」

おや？ 元気が足りないでござるな。

流石にもう一度この山中を鬼ごっこする気はないので、ニコニコして何か言うのを待っていると、ボスが目を覚ました別の山賊たちにヒソヒソと内緒話を始めたでござる。

そして話し終えると、ボスはめちやくちやへっぴり腰で拙者の前へ。

「あ、あの……どのような御用向きでしょうか？」

「お主がKCP山賊団のボスで相違無いでござるな」

「へい」

「ふむ。健やかなるポモドーロから依頼を受けた旅人でござる。依頼内容はお主らの捕縛と、先日国外への輸送中に強奪したケチャップ1年分の再回収。暴れるようなら制圧も止む無しとのことであつたが、あまり手荒なことはしたくないでござる」

相手に魔女もいるような状況では無いと思うが、それでも一応刀に手を掛けて依頼書片手にその内容を告げる。

「確認なのですが、捕縛された後は俺らどーなんだ？」

「健やかなるポモドーロはお主らを労働者として受け入れるようでご
ざるよ」

恐らく国の物資を奪われるくらいなら普通に労働者として使つたほうが良いという考えなのでござろう。

簡潔明瞭に言えば、『てめーらの今までの悪事は水に流すから、てめーらも我らの国で汗水流せ』ってことでござろう。懐が深いように思える提案でござるが、長い目で見れば国が得するようになってるでござるよ。

そんな風になんとなく国の真意を察していると、KCP山賊団は顔色を恐怖の色に染め始めたでござる。

「い、嫌だ……」

「おろろ？」

「嫌だ…あの国には戻りたくない……嫌だー！！？」

ボスが頭を抱えて半狂乱の様相を見せると、共鳴するように他の山賊たちも同じような状態に陥つたでござる。

そんな光景に拙者とイレイナ殿は目を丸くして顔を見合わせ、

「うるさいですね」

「うるさいでござるな」

無慈悲に吐き捨てる。あまり喚かないでいただきたい。

でも、今のボスの一言には少し気になる部分があつたでござるよ。

「もしもし？ 『あの国に戻りたくない』と、言ったでござるか？」

「あああああ!!？……あ、うん言った」

「何か事情がありそうでござるな。良ければ話を聞くでござるよ」

イマイチよく分からないテンションのボスに優しくそう言うと、深刻そうな顔で他の山賊たちをキョロキョロ。視線を向けられた山賊たちは一様に頷いたでござる。

「そう言つて貰えると助かりますぜ。あ、良かったら入つてくだせえ」
今度は友好的な笑顔を浮かべて洞窟にご招待。彼らの情緒、一体どうなっているでござるか。

「危害を加えると判断したらその時点で斬殺するでござるぞ」

「ええ！ええ！もう斬殺でも爆殺でも好きにしてくれて構いませんぜ。——おらオメエら！ お客様のお通りだあ！」

やるつもりは無いでござるが、ちよつと強めに威嚇の言葉を添える。しかしどうもボスの中では、拙者とイレイナ殿は味方のような認識になっているでござるな。

てかイレイナ殿、完全に巻き込んでしまったでござる。国に着いたら本格的にお礼しないと。

ケチャップくさい洞窟内を進んでいくと、松明に照らされた石造りの円卓がある場所に出たでござる。

周りを見渡せば、整然と並べられた大量のケチャップという異様な光景。

「ウエルカムケチャップです。飲んでくだせえ」

円卓に備えられた椅子に座ると、赤モヒカンの山賊が木で作ったコップに大量のケチャップを入れて拙者たちの前へ置いたでござる。

ウエルカムケチャップ？ 嫌がらせの間違いでござろう？

隣のイレイナ殿を見ると…あ、うん。帽子で分かりにくいけど、端正なお顔が引き攣つてるでござるな。

拙者もイレイナ殿と同じ表情を浮かべながらこれを飲むか捨てるか迷つてみると、円卓を挟んだ対面にボスがドカつと座る。

その手にはケチャップ。それを一気に煽り、神妙な顔で話し出したでござる。

「まず俺らのことから話すぜ、旅の人。俺らはな、元々健やかなるポモドローの住人だったんだ」

「おや、そうでござったか。それがなにゆえ山賊に？」

「まあ一言で言えばな、嫌気が差したんでえ。あの国の生活に」

「ほう……」

嫌気が差したから飛び出した……か。どうにも他人事とは思えない理由でござるな。

「一体何が気に入らなかつたでござるか？」

「まあ言ってみれば食生活だな。あの国からの依頼っつーことは、旅の人もあそこがどんな食生活を送ってるか知ってるよな？」

「然り」

拙者が領くと、隣のイレイナ殿が何かを期待するような眼差しを向けてくる。

そういえば、大人びて見えるけどイレイナ殿って好奇心旺盛な方でござったな。そんなギャップも好きでござるよ♡

巻き込んだ上に置いてきぼりにするのは気が引ける為、イレイナ殿にも分かる通り『健やかなるポモドーロ』のおさらいでござる。

「健やかなるポモドーロは、トマトが名産品でござる。毎食必ずトマトが出て、水の代わりにトマトジュースを飲むほどのトマト好き。燃え上がる情熱と飽くなき探究心によって品種改良を施し、今では調理法に合わせて多くのトマトが生まれてるでござる。サラダ用はもちろん、煮込み用、焼く用、スムージー用、保存用、観賞用、布教用まで様々。この依頼を受ける時も、ウエルカムドリンクの代わりにウエルカムミネストローネが出てきたくらいでござるよ」

正直ウエルカムミネストローネは意味不明でござったが、切りつけるような寒さのなか辿り着いたのでその時は特にツツコムようなこととはしなかつたでござる。あとめちやくちや美味しかった。

「んで、その食生活に嫌気が差したと」

「へい。てか、俺らはトマトが嫌いなんですぜ」

「でもケチャップ飲んでるでござろう？」

「トマトは嫌いだけど、ケチャップは好きなんですぜ」

あーいるよね、そういう人。

うん？ てことはつまり……

「KCP山賊団というのは、トマトは嫌いだけどケチャップは大丈夫な人が国から飛び出して結成された組織ってことですか？」

「そーいうことですが、旅の人その2」

「誰が旅の人その2ですか」

旅の人その2ことイレイナ殿の言葉に、ボスは赤モヒカンを揺らし
て頷いた。

「しかし、嫌なら食べなければ良いのでは？」

「事はそう簡単なものじゃねーんですぜ」

「というと？」

「あの国ではな、トマト嫌いだとまるで人権が無いかのよう扱われるんだ…！ 『ケチャップは大丈夫なのに、トマトはダメなんて変なの』とか陰口叩かれるんだですぜ！」

ボスがトマト嫌いのケチャップ好きによる弊害を語り出すと、それに触発された他の山賊たちもいきり立ち始めたでござる。

そして聞いても無いのに、聞くと涙、語るも涙なエピソードを勝手に話し出す。

「オイラなんてな、4歳の時に結婚を誓い合った幼馴染のチーちゃんに『トマト嫌いな人と結婚なんてできないわ！』って振られたんだべ」

それたぶん適当な方便でござるよ。4歳の時の約束を本気にして
る奴はやべー奴でござる。

「ワシなど、『トマトが嫌いなんて、親父も耄碌したな』と家族に捨てられてしまったんじゃ！ 耄碌じゃと？ ふざけるな！ まだワシは35じゃぞ！」

どう見ても70歳は超えてるお爺さんのシャウト。ちなみに自分の年齢が分からなくなるのは、耄碌が中程まで進んだ状態らしいでござる。

「ぼ、僕なんて！ 『トマト嫌いな上に会社の金を横領する奴はクビだ』って仕事を失ったんだ！」

ここまで被害者面できれば、一周回って大したものだでござるよ。

などなど。まあ、ボス以外のエピソードはほぼゴミのようなものでござったが、とりあえず皆さんの中では『トマトが嫌いだから』とい

うだけで自分が不当な扱いを受けていることになってるでござるな。
「まあ、色々ツッコミたいところはあるでござるが、お主らの言いたい事は分かったでござる」

「え、マジですか？ 私ハマったくわからなかったんですけど」
「しっ！……ぶつちやけ拙者だつて理解できぬが、さつさとこのダ
ルい依頼を終わらせる為でござる。ここはグツと堪えて、話を合わせ
るでござるよ」

要約すれば、トマトが嫌いなことで差別されたくないというのが彼
らの言い分でござる。話を聞く限り本当に差別があつたかは分から
ぬが、そこを考え出すと面倒くさいのであつたという前提で話を進め
るでござるよ。

「だからな？ 俺らはもうあの国に戻りたくねーんだよ」

「ちなみに健やかなるポモドーロは、お主らKCP山賊団をまとめて
同じ職場に雇用するつもりらしいでござる。はいこれパンフレット」
役人から山賊団に渡すよう頼まれた物を円卓に置く。

とりあえずこういう物はボスが最初に確認する形式らしく、穴が空
くほど眺めているでござるな。

パンフレットを読み進めるボスは、ときおり「ほう」だの「へえ」だ
の、何やら満更でもないリアクションを漏らしているでござる。それ
に他の山賊も釣られ、ボスの横からパンフレットを覗き込む。

「モミジさん。彼らを雇いたいなんていうトチ狂った職場つてどこな
んです？」

「ああ、それは……」

イレイナ殿からもつともな疑問を投げかけられ、拙者はそれに答え
るため予備のパンフレットを取り出していると——バン！

ボスがパンフレットを円卓に叩きつける音に驚き、中断。

何か気に入らない部分があるのかと恐る恐るその顔を伺うと、

「OK決めたぜ！ 野郎ども!!？俺はあの国に戻る！」

満面の笑みで洞窟内に宣言したでござる。

「その条件、お気に召したでござるか？」

「おう！ こいつはこれ以上に無い好条件だ。持ってきてくれたこと

を感謝するぜ、旅の人！」

「それは良かった」

「お礼のケチャップ、いるかい？」

「いない」

ボスが快諾した事が大きかったのか、パンフレットを回し読みしていた他の山賊たちも次々と国で働くことを決めたでござる。

これは……依頼完了ということの良いでござるかな？

赤モヒカンの団体をゾロゾロと引き連れて国に戻ってきた拙者に、門番は度肝を抜かれたかのように目を見開いていたでござる。人って驚くとあんな風に固まるでござるな。

そんな門番さんはイレイナ殿が声を掛けて正気に戻し、後で合流する約束をして一旦お別れ。

そのまま拙者はKCP山賊団を引き連れて役所に送り届け、たんまりと報酬を貰ったでござる。やったー。

「モミジさん。こつちです」

喫茶店のテラス席で優雅にコーヒーを飲むイレイナ殿、絵になるでござるなあ。

「お待たせしたでござる。すんなり入国できたでござるか？」

「ええ」

向かいの席に腰を下ろし、拙者も砂糖増し増しのカフェオレを注文。……いや、メニューにトマトが多過ぎる。なんでトマトジュースだけでも5種類あるでござるか。

「まずはイレイナ殿、拙者のお仕事を手伝ってくれてありがとう。山賊団の運搬、とても助かったでござるよ」

「いえ。あの程度、手伝ったうちにも入りませんよ」

「流石は魔女でござる。まあ、それはそれとしてお礼をさせてもらうでござるよ。とりあえずこの場の支払いは拙者が……」

「あっ」

拙者の言葉の途中で、何かを思い出したかのような声を上げるイレイナ殿。

「なにか?」

「……いえ、なんでも。それよりモミジさん。ちゃんとお財布はありますか?」

「おろ? それはもちろんあるでござるが……あつ」

袖の中でお財布を掴んでその存在を確かめた時に、拙者もとある光景が頭を過ったでござる。

そして、それはたぶん一瞬早くイレイナ殿も思い出していたことでござろう。彼女にしては珍しく、悪戯っ子のような笑みを浮かべているでござる。

「初めて会った日も、こんな話をしたでござるな」

「そうですね。思えば、山賊に襲われていたあなたを助けたのが出会のきっかけでしたか。今日はモミジさんが山賊を襲っていましたか」

「むう……襲っていたとは人間きが悪いでござる」

ほっぺを膨らまして抗議する拙者を、イレイナ殿は優し気な笑みで照らしてくれる。

言われてみれば確かに。『事実小説より奇なり』とはよく言ったものでござるな。

「結局、彼らを雇いたいなんていう奇特な職場ってどこだったんです?」

「あー、言い忘れてたでござるな。ケチャップ工場でござるよ。彼ら、パッケージは同じなのに完成度の高いケチャップばかり奪うから、その辺の審美眼を国に買われたでござるな」

「……どこを見れば完成度の高いケチャップって見分けられるんでしょう?」

「さあ? 拙者にも分からぬ」

そもそも、食品を見た目だけで判断するなんてナンセンスでござる。

拙者の国にも見た目だけなら結構ヤバイ食べ物多いし。そういうのって大体美味しいでござるが。

でも、それができるといふのは希少なスキルなのでござるな。

「そういえば『男は奴隷にする』みたいなことを言っていました。あれは結局ただの脅しだったんですか？　実際は就職先を提示してましたか」

「脅しじゃないでござるよ。労働者とは即ち、社会の奴隷でござる」
「そういえばあなたの勤労に対する価値観ってそんな感じでしたね……」

「働きません死ぬまでは」が拙者の座右の銘でござる」

「なんとまあ……」

「イレイナ殿も同じでござろう？」

「いや、私はちゃんと働いてますよ」

「なん…だと……!?？」

「その反応は流石に失礼では？」

イレイナ殿が働く姿って想像できないでござる。年下の拙者に対しても敬語を崩さないけど、人に媚びへつらうとか絶対できないだろうし。

「まあ、定職に就いているわけではありませんけどね」

「ほほう。参考までに、どのようなお仕事を？」

「基本は占いですね」

「なんと!?？やはり魔女ともなれば、未来を見通す魔法が使えるでござるか？」

「ただの真似事です。ほら、魔女と占い師ってパツと見たら大体同じような格好じゃないですか？　これが良いお金になるんですよ」

うわあ……悪い顔。

「魔女とは思えない発言でござる」

「何を言いますか。魔女とは魔法使いの最高位。言葉のマジックを駆使してお金を稼ぐ占い師とはある意味親戚のようなものですよ」

「イレイナ殿が言ってるのは占い師ではなくペテン師でござる」

「似たようなものです」

全世界の頑張ってる占い師さん達が怒り狂いそんな暴言でござる。

「しかし……未来を見通す魔法、ですか」

「あつたら使うでござるか？」

「状況によりけりですね。モミジさんは？」

「拙者も、状況によりけりでござる」

未来を見通す魔法。そんなものがあれば、きっと楽に生きていけるでござろう。まず拙者ならギャンブルに使うでござる。

でも——楽しくは無いでござろうな。

やらないから想像でしかないけど、ギャンブルっていうのは先の分らない未来にお金を賭けてスリルを楽しむものでござる。

そしてそれは旅も同じこと。何が起こるか分からない未来を楽しむのが旅でござる。それが楽な道のりでなくても、思い返せば楽しかったと言えるのが旅でござる。

楽な道のりなど、思い返す価値も無い。

きつと、『楽しい』の対義語は『楽』なのでござろう。

「ねえ、モミジさん」

「なんでござる？」

「ここに、この周辺の国が記された地図があります」

そう言つて、イレイナ殿は鞆から取り出した地図をテーブルの上に広げる。

「私は次に訪れる国を、この中から選ぶうと思つています」

「うん……？ 健やかなるポモドーロがここでござるな。てことは……周辺に5つ国があるのでござる」

「そうです」

言いたい事がイマイチ分からぬ拙者は首を傾げるが、構わずイレイナ殿は話を続ける。

「少しゲームをしませんか？」

「ゲームでござるか……。拙者、あまり複雑なものは理解できないでござるよ」

「ルールは簡単ですよ。目を閉じて、お互い同時に次に行きたい国を指差すんです」

「それだけ？」

「はい。それだけ」

それはゲームなのでござろうか？ 色々と疑問が残るでござるが、

基本受動的なイレイナ殿からの珍しい提案に拙者は乗ることにしたでござる。

地図をよく見て、周辺諸国の位置をしっかりと把握してから目を閉じる。

「準備は良いですか？ セーので指してください」

「然り」

「ではいきますよ。——セーの」

トトン。2人分の指がテーブルを叩く音が響き、目を開ける。

拙者が指した国は健やかなるポモドーロから北に向かった場所。

そしてイレイナ殿は——

「同じ、ですね」

拙者と同じ国でござった。

「不思議な偶然です」

「そうでござるな。不思議な偶然でござる」

そう。これは不思議な偶然でござる。

目を閉じていた拙者には、このゲームでイレイナ殿が何をやっていたかなど分からぬ。

もしかしたら、ちよつと小狡いことをしたかもしれない。

もしかしたら、ちよつと不正をしたかもしれない。

もしかしたら、目を開けていたかもしれない。

しかし目を閉じていた拙者には、預かり知らぬことでござる。

「ま、まあ、せつかく同じ国に向かうんです。良かったら一緒に行きませんか？」

「然り。ついに逢引きでござるな」

「いえ、違いますが」

明後日の方向を見ながら告げられた言葉に、拙者は笑顔で頷く。

大好きなイレイナ殿と共にいられるのであれば是非も無い。その旅路は、きつと素晴らしいものになるでござろう。

「しかし、健やかなるポモドーロにも着いたばかりでござる。とりあえず今日はこの国を全力で楽しむとすることでござるよ」

「ええ、そうですね」

お互い、冷めた飲み物を一気に煽ってお会計の為に店員さんをお呼ぶ。

「ここは拙者が払い、経済的余裕を見せつけておくでござるよ。」

「拙者、日記帳が欲しいでござる。イレイナ殿に選んでもらいたいでござるよ」

「構いませんよ。オマケにタイトルも直筆してあげましょう」

「是非お願いするでござるー！」

「歩きにくいのでくつつかないでください。……もう」

最初にイレイナ殿から買ってもらった日記帳はラスト1ページ。

その1ページに何を綴るか、拙者はずっと迷っていたでござる。

この1ページを埋めてしまったら、イレイナ殿との繋がりが無くなってしまいかもしれない。

この日記帳を書き終えてしまったら、拙者が綴った彼女達との思い出が閉じてしまうかもしれない。

そんなありもしない妄想に怯えて、拙者は最後の1ページを前に書く手を止めていたでござる。

でも、そんなことは無いでござるな。

日記も旅も、紡ぐからこそ意味がある。

出会いも別れも、繰り返すから心に残る。

旅人である以上、足踏みしていると思っても前に進んでいるものでござる。楽しくても、怖くても、嬉しくても、辛くても。

今ではない、いつか。ここではない、どこか。いつかどこかの小さな物語は、拙者にとってかけがえのない大きな旅物語。

命短し恋せよ乙女。

さあ、イレイナ殿には特別ハイカラな日記帳を選んでもらうでござるよ。

「日記帳のタイトル、何がいいですか？」

「それはもちろん、『武士の旅々』でござるー！」

幕後語り

拙者がママになるでござる！

「そういえば、今日はイレイナ殿のお誕生日でござるな」

「え、ええ…そうですが」

「健やかなるポモドーロ」の周辺国をイレイナ殿と共に漫遊している道中、箒の後ろに乗せてもらっていた拙者はふと口にしたでござる。

「私、あなたに誕生日教えましたっけ？」

「顔を見れば分かるでござるよ」

「頬が緩んでいたとかですか？」

「いや、ファイリングでござる。イレイナ殿の顔を見ていたら、『あ、今日誕生日だな』て」

「なんですかその謎特技」

「武士の嗜みでござるな」

武士ならばこれくらい出来なければ務まらないでござる。美少女相手ならば尚更。

「というわけで、何か欲しい物とかあるでござるか？」

「お金ですかね」

「なるほど。拙者の愛でござるか」

「お金です」

「じゃあ宿に着いたら拙者の手料理を振る舞うでござるよ」

「お金……」

「おろろ？ 拙者の唇もでござるか？ イレイナ殿はえっちでござるなー」

「……………」

「あわわわわ!? 急に逆さまにならないでえ!!?」

急に上下逆さまにされ、ほっぺに手を当ててくねくねしていた拙者は箒から落とされたでござるよ。

空中で刀の柄に手を当て、上から下の過重力でイレイナ殿の後ろに

ぴよんと戻る。そしてもう一度落とされないように、ぎゅう。えへへ
くイレイナ殿いい匂い。

「まあ冗談はこのくらいにして、何が欲しいでござるか？」

「おか…」

「お金以外で」

「むう…では、さつき言つてたあなたの手料理をお願いします」

「承知したでござる！ 腕によりを掛けて仕上げるでござるよ」

「ええ。楽しみにしています」

さてさて。ニコツと微笑むイレイナ殿に胸をキュンキュンさせながら彼女の灰色の髪をクンクンしている、武士で旅人で魔法使いは一体誰でしょう？

そう、拙者でござる！

はいご無沙汰しております。モミジでござる！

国に辿り着いた拙者達は、さつそく安宿探し…ではなく、ちよつとお値段が張りながらもキッチンの付いた宿を探すでござる。

「ふむ…やつぱり窯かまが付属してるお部屋は見つかりにくいでござるな」

「まあ、普通はないですよね」

「最悪パン屋さんの近場に泊まって、窯を借りるというのも手でござるが」

「どうか、手料理はパンで決定なんですか？」

「然り。…あ、もちろんパン以外が良ければ言ってくれて構わないでござるよ。リクエストはばんばん募集中でござる」

イレイナ殿はパン好きだし、焼き立てなら喜んで貰えると思ったでござるが。

「パンもいいですが、せつかくならあなたのお料理を食べたいです
すね」

「おろろ？ 和食、食べたことないでござるか？」

「ありますよ。ですが、それはどれもお店のものです」

「うん？ つまり、拙者の国の家庭料理が食べたいと」

「そういうことです」

それであれば、キッチン付きのお部屋を探すだけだから、すぐに見つかるでござるが……

「拙者の家庭料理は、基本手抜き料理でござるよ？」

自分たち家族の分＋内弟子50人以上の量を作るとなると、自然とそうなるでござる。

「美味しくないんですか？」

「味は保証するでござる。美味しさを保ちつつどこまで手を抜けるかが家庭料理の極意でござるよ」

「であれば構いませんよ。旅をしていると、時折家庭の味というのが恋しくなるものですから」

「そうでござるな。あ！ せっかくだから、 “あーん” もしてあげるでござるよ？ 拙者がイレイナ殿のママになるでござるー！」

「いりません」

「いやしかし……」

「いりません」

むう……。ほっぺを膨らまして抗議するでござるが、イレイナ殿はどこ吹く風。髪とローブを優雅に揺らしながら、スタスタと歩いて行ってしまおうでござる。

「待つて欲しいでござるよお〜」

拙者も自慢のポニーテールをぴよんぴよん跳ねさせながら、その背中を追う。

キッチン付きの部屋を見つけたので早速借り、本日の主役であるイレイナ殿にはゆっくり待たせてもらおうでござる。

市場で調味料やら食材やらを買い込んで戻ってきた拙者はすぐさまキッチンに立ち、抜刀。Let's, クッキング！

「いや、なんで刀抜くんですか」

「それはもちろん食材を切るために」

「包丁があるでしょう」

「ここ最近ずっと刀でお料理してたから包丁の使い方忘れちゃったで

「ござる」

「……あなた、初めて会った時に刀を『武士の魂』とか言ってますんでした?」

「……言ったつけ?」

「まあいいです。手伝いますよ」

「心配ご無用。イレイナ殿は本でも読んで待ってるでござるよ」

刀に度数80%のお酒をジャバジャバかけてアルコール消毒しながら答えるでござるが、イレイナ殿は拙者の買ってきた食材をじっと見据えて動かない。

「何か気になる物でもあるでござるか?」

「いえ……」

ちなみに拙者が買ってきた物は野菜中心。種類も豊富。少量多品目が和食の基本でござるからな。

イレイナ殿には家庭料理が食べたいと言われたでござるが、お誕生日なので豪勢さは必要。お魚も買ってきたので、焼き魚と煮付けの両方をつけてあげるでござるよ。

あとはもちろん天ぷら! どんな嫌われ物なお野菜も、天ぷらにすればなんでも美味しくいただけるでござる。アムネシア殿にも大好評だったなあ。懐かしい。

「あの」

「おろ?」

「その——きのこも使うんですか?」

「然り。きのこは和食の可能性を無限に広げるでござるよ」

「そう…ですか」

「嫌いでござるか?」

聞くまでもなく、イレイナ殿は拙者が水洗いするきのこを見て顔を青くしている。

ふむ。これはこれは……。

「大丈夫! 拙者が口移して食べさせてあげるでござるよ」

「それはきのこ云々関係無く衛生的に嫌です」

「しかし、赤ちゃんには口移して食べさせてあげるものでござる」

「いつから私は赤ちゃんになったんですか」

「人は赤ちゃんとして生まれ、赤ちゃんになって死んでいくものでござろう?」

「それはただの耄碌です」

そんな戯言を並べながら、拙者は手早く調理していくでござる。

煮物は時間を掛けた方が美味しいから、この時間から煮れば食べる頃には程良く味が染みてるでござろう。

「心配しなくても、イレイナ殿の膳にはきのこを入れぬよ。わざわざお誕生日に嫌いな物を食べる必要は無いでござる」

「……ありがとうございます」

「ふふつ。イレイナ殿の弱点、見つけちゃった♡」

「……できればサヤさんには内緒にしておいてくれると助かります」
「えくくくどうしよっかなあ?」

「最近気付いたんですが、『時間逆転の魔法』を脳に掛けたら短期的な記憶消去が可能なんじゃないかと思うんですよね」

「イレイナ殿のきのこ嫌いは墓場まで持っていくでござる!!?」

「よろしい」

わりと平然と脅しにくるイレイナ殿…好き。これが惚れた弱味でござるか。

……というか、こうやって雑談しながらお料理していると新婚さんみたいでござるな。

えへへ。バックハグとかしてこないかなあ! そうしたら拙者は回された腕に手を添えて……うへへ。

「だ、ダメでござるよイレイナ殿お…。そんなところに手を入れたら…買ってきたお魚さんが見てるでござるよお……」

「……………」

温められていく煮汁とは対照的に、イレイナ殿の視線はどんどん冷たくなっていくでござる。

「ふう…」馳走さまでした。大変美味しかったです」

「お粗末様でした。少し多かったですでござるか？」

「え、ええ…まあ。ちよつと横になりたい気分です」

「食べてすぐ横になると牛になるのでござるよ？」

「……？ 人が牛になるわけないでしょう」

「イレイナ殿が牛になったら、拙者が美味しく食べてあげるでござるよ。生で」

「……薄々思っていたのですが、モミジさんって頭おかしいんですか？」

「好きな人と一つになりたいと思うのは普通のことでは？」

「その一つのなり方が猟奇的なんですよ」

白い目を向けてくるイレイナ殿を尻目に、拙者はベッドに移動して正座。そして袴越しの太ももをぺちぺちと叩いてにっこり微笑む。

「こちらへどうぞ、イレイナ殿」

「は、はあ？」

拙者の意図を正確に読み取ったイレイナ殿は、ちよつとだけ顔を赤くしてる。照れてるでござるか？？ベリベリキュートでござるな！

「眠ってしまわないように見張りも兼ねて、でござるよ。それとも年下には膝枕されたくないでござるか？」

「いえ、そういうこだわりはありませんが……」

「ちなみに拙者は美幼女から美老女まで、女性の膝枕なら誰でも大歓迎でござるー」

「別に聞いてません」

ぴしやりと言いつつイレイナ殿は、少し迷ってからベッドに上がってくる。

そして、躊躇いがちに拙者の太ももへ頭を預けたでござる……つて、おろろ？ イレイナ殿の顔がおっぱいで隠れちゃったでござるな。

「これは新手の煽りか何かですか？」

なんとなく、おっぱい越しにイレイナ殿から敵意を孕んだ視線を感じるでござる。おっぱいに親でも殺されたかのような凄まじさでこ

ざるな。

「……ちよつと失敬」

イレイナ殿の後頭部に手を入れて持ち上げ、足を崩して人魚座りへ。

……よし。これなら顔が隠れることも無いでござる。

「サラシ…でしたっけ？ 胸を潰してる包帯みたいなの。今は巻いてないんですか？」

「イレイナ殿といると、刀を振る必要もないでござるからな。胸を潰す理由が無いでござる」

旅人である以上、自衛の為に刀を振るうこともあるでござる。そんな時胸が揺れて痛いから潰しているだけで、魔女であるイレイナ殿といるならば守ってもらえるのでその必要性が無い。

「あなたは私が守ってあげなくても十分強いでしょう」

「拙者だって女の子でござるよ？ 好きな人に守ってもらいたい願望はあるでござる」

そう言いながら、イレイナ殿の頭を撫で撫で。すると、彼女の体がカチンと強張る。

しかし撫で続けると徐々に力も抜けていく。そういえば、イレイナ殿ってどちらかと言うと相手を甘やかす側っぽいでござるな。

人に甘えるのとか苦手そう。

言ってることとやってる事が微妙にズレてるけど、イレイナ殿は気にせずリラックスしている様子でござる。良かった。

「そういえば、一応プレゼントも用意したでござるよ」

「貰える物は貰います」

「そう言ってもらえると助かるでござる。はい」

袂——袖にあるポケット——から、特に包装もされていない物を取り出してイレイナ殿の眼前へ翳す。

「これは…レターセット、ですか？」

「然り。〴〵両親へお手紙を書くでござるよ」

「……何故？」

「だって今日はイレイナ殿にとって大事な日で、そしてイレイナ殿を

産んでくれた人達にとつても大切な日でござろう?」

大事な1人娘が一人旅をしている。それだけで親からすれば心配は積もり積もっていることだろう。

家出同然に飛び出した拙者と違い、旅に出ると言つて旅に出たイレイナ殿ならば尚のこと。

「別に改めて感謝の意を示せとか偉そうな事を言うつもりはござらん。生存報告程度でいいでござるよ」

「……そうですね。しばらく手紙も出していませんでしたし、助かります」

受け取ったレターセットを、ぎゅつと優しく胸に抱くイレイナ殿。そんな彼女の頭をさらに優しく撫でてあげながら、ゆつたりと拙者も言葉を紡ぐ。

「もし照れくさいようなら、拙者も1人の友人として一筆添えるでござるよ」

「どのように?」

「『イレイナ殿を産んでくれてありがとう。イレイナ殿と出会わせてくれてありがとう。あなた達の娘さんは拙者の恩人です』と」

「そんな大層なことはしてませんよ」

「そして——『娘さんを拙者にください』と」

「明らかに友人としての範疇をぶち抜いているのですが」

「『もしくれないのであれば、拙者が貰われます』と」

「クーリングオフで」

「『それすら拒否するならば、略奪します』と」

「手紙は私1人で書きますので、余計なことしないでください」

にべもなくイレイナ殿にはキツパリと拒絶されたでござるよ。…くすん。

いつものようなやり取りを交わして拙者達は笑い合う。

——生まれてきてくれてありがとうね、イレイナさん。

「あ、お手紙出す時はこの封筒に入れて欲しいでござるよ」

「……なんか既に1枚変な紙入ってませんか？」

「婚姻届でござる。ちゃんと拙者とイレイナ殿の血判が捺してある正式な物でござる」

「私捺した覚えはないんですけど!!?」

「もちろん偽造でござるよ。指紋すら偽造できない者に結婚する資格は無いでござるー!」

71人目の裏切り者 それはブギーマン

「ハア…ハア…ハア…ッ」

いつからだろう…俺はいつから追いかけていたのだろうか？

少なくとも、5歳の頃までは平和だった。あれは…そう、学校に通い始めてからだ。

最初は微かに気配を感じるだけだった。すれ違った誰かがたまたま自分の影を踏んだ程度の、そんな気にすれば気になるけど、気にしなければ気にならない。その程度のもの。

だけど、年を重ねることにその存在はハッキリと感じ取れた。16歳になった時には俺がどこにいても、どこに隠れてもすぐ背後に現れていた。

——「奴」が俺を追いかけている。

「こ、来ないでくれ！俺が何したって言うんだ!!？」

昼下がりの街の大通りで、18歳の俺は恥も外聞もなく喚いた。周囲の通行人たちは、何事かと一目こちらを振り返ってくる。

でもダメだ。誰もが俺の顔を見た時、諦観の表情を示すだけ。手を差し伸べようとはしてくれない。

だって、みんな知ってるから。俺が「奴」に追いかけていることを。そして「奴」に追いかけている者は、誰も助けることができない。本人が対処するしかない。

だから…俺も諦めていた。

そう——諦めていた…はずだった。

「いかが致した？」

大通りのど真ん中で蹲る俺に、そんな心底心配そうな声を掛けてくる人がいるなんて。

「何か困り事でござるか？」

その声に顔を上げると、黒髪黒瞳で東の国の民族衣装に身を包んだ

女の子が俺を心配そうに見ていた。腰にはご丁寧に刀が差してある。よく見れば、民族衣装の上からローブを羽織っている。魔法使いなのか？ だったら、この子は他所者か。

この国には魔法使いがいない。一応魔力を扱う人達はいるけど、彼ら彼女らは『魔眼勇者』——1年に1人生まれる、選ばれし者達だ。継るような気持ちで見上げると、女の子は安心させるように優しく微笑みながら俺に声をかけ続けてくれる。率直に言って結婚したい。「拙者達は旅人。着いたばかりで右も左も分からぬが、お主が辛そうなのは分かるでござる。もし力になれることがあれば、言つてほしいでござるよ」

「あつ……あ……奴」が……」

「おろ？」

「奴」が……追いかけてくるんだ……!!？」

「奴」、ですか？」

すると、黒髪の女の子の後ろから灰色の髪の女の子がぴよこつと顔を出した。好奇心に揺れる瑠璃色の瞳が俺を射抜く。ついでに整った顔立ちが俺のハートも射抜く。

「奴」の名前はブギーマン。どこにいても追いかけてくる。どこからでも現れるんだ。例え俺が便所にいようと、ベッドにいようと、街を歩いていようと、風呂に入つていようと……っ」

「ふむふむ。ブギーマンさんというストーカーですか」

「たぶん違うのではないでござるか？」

「ああそうだ。違う。ブギーマンは、この国の子どもを追いかける。大人に近づくにつれて、その姿がハッキリと見えてくる」

「もしか、魔物の類でござるか？」

「それも違う。ブギーマンは魔物じゃないんだ！」

提示した可能性を全て否定された黒髪の女の子は眉を寄せる。しかし、俺の怖がりように充てられたみたいで少し怯えた様子だ。たぶん俺が夫として守ってあげるべきなのかもしれない。

「じゃ、じゃあ……ブギーマンとはなんなのでござるか？」

大人に近づくに連れて姿をハッキリさせるブギーマン。

何処にいても何をしても、追いかけてくる恐怖の存在。

この国では誰もがその姿に怯え、恐れ、慄き、やがて大人になっていく。

そう、ブギーマンとは――

「ブギーマンとは――将来への不安だ」

「イレイナ殿、お昼何食べるでござる？」

「そうですね。パンが良いです」

ブギーマンの正体を聞いた瞬間、即座に踵を返した2人の美少女は談笑しながら遠ざかっていった。

「朝もパンだったでござろう……」

「朝食べたのはバケットです。あのガーリックトーストは絶品でした。良かったらまた作ってください」

「拙者と結婚したら毎日食べられるでござるよ？」

「……………は？ 無理です何言ってるんですか」

「今ちよつと迷ったでござるな…。え、拙者ってイレイナ殿にとってガーリックトーストしか価値の無い女でござるか？？」

「お昼はクロワッサンにしましょう」

どうやら俺にとつてのブギーマンは、彼女達の昼食以下の問題のようだ。

「ほら、早く行かないと売り切れてしまいますよ――モミジさん」

――ブギーマンは誰のところにもやって来る。今も誰かの背中に付き纏っている。

そう、あなたの後ろにも……。

健やかなるポモドーロの周辺国をイレイナ殿と共に旅すること2週間。

早くも4カ国目のこの国は、山の中にあるでござる。

この国の特徴は主に2つ。

1つ目は、先ほど出会った青年が語ったように「ブギーマン」の存在。まあ、将来の不安を言い換えたものでござるな。確かに将来の不安って大人になるに連れて大きくなるでござるが、あそこまでビビるとは…。

そして2つ目は――

「――『魔眼勇者』でござるか？」

「ああそうだよ。1年に1人、この国に生まれる魔力を扱う資格を持った選ばれし勇者様さ」

イレイナ殿の要望により、さつそく目に着いたパン屋さんに訪れた拙者達。

食べたいパンを決めた拙者は、さつさと会計を済ませて店主にこの国の事を教えてもらっているでござる。

ちなみにイレイナ殿は、クロワツサン以外にも色々目移りしたせいか未だにパンを選んでる最中でござる。

「それは魔法使いと言うのでは？」

「いやいや。勇者様たちはね、魔法を使うのに杖を使わないんだ」

「おろ？ ではどうやって魔法を行使するでござる？」

「あたしも聞いただけなんだけどね、どうやら魔力を目に溜めるらしいのさ。そうすると、勇者様1人1人が持つ『魔眼』が発動するって寸法さ」

「魔眼……」

なんとも年頃の男の子が好きそうなワードでござるが、こちらの店主さんが妄想を語っているとは思えないほど真摯に教えてくれている。「つまり私たち魔法使いが扱う魔法とは別系統のもの、ということですか？」

「うん…？ あたしはそもそも魔法というものがなんなのかわかりやしないんだが、そうなんじゃないかい」

めちやくちや長考の末、迷うくらいなら全部買っちゃえ！ という結論に至ったらしいイレイナ殿。

トレーにはこのお店のパン全種類が載せられているでござる。うわあ…。

「……そんなに見てもあげませんよ?」

「いや、引いてるだけでござる」

さすが無頼のパン好き。パンの為ならば金銭感覚がトチ狂うよう
でござるな。拙者と初めて会った時は、もう少し理性的な買い方をし
てたような気がするでござるが。まあ、人は成長するものなのでござ
ろう。……成長…なのかな?

「そっちのイートインコーナーで食べるなら飲み物サービスするけ
ど、どうする?」

「ではお言葉に甘えて。私はコーヒーをお願いします」

「拙者はカフェオレ! 砂糖増し増しでお願いするでござるよ」

「あいよ」

店の奥に引っ込んでいく店主さんを見送り、拙者とイレイナ殿は
イートインコーナーの隅っこを陣取るでござる。拙者の個性なのか
国民性なのか、隅っこつて落ち着くでござるよ。

「魔法使いの端くれとして聞くでござるが、拙者達の使う魔法とは別
系統というのどういう意味でござる?」

イレイナ殿が言っていたのでなんとなく食べたくなつたクロワツサ
ンを齧りながら尋ねてみる。

餅は餅屋。魔法のことなら魔女に聞くのが一番でござる。

「魔法というか、正確には別系統の魔法使いですね。まあ、魔法史学の
中でも未だに仮説の域を出ないマイナーな説ですが」

「仮説…でござるか?」

「そもそも魔法使い…ってなんだと思いますか?」

「おろ…? 魔法を使える人間のことではないでござるか?」

「その通り。では——何故魔法を使える人間と使えない人間がいる
と思いますか? しかも地域によってその比率も異なります。確か
あなたの国は魔法使いが少ないんですけどよね?」

「改めて聞かれると困るでござるな……」

拙者の国は魔女見習いになる為の魔術試験が行われないほど魔法
使いが過疎つてるでござる。

魔法を扱える拙者やマミ上は珍しい存在だし、むしろパピ上のよう

に頭のおかしい剣術のほうに魔法より信用されているのが実情でござる。

一応魔法の才能は遺伝によるものが強いとされているでござるが、それも確実なものでは無い。親が魔法使いだから、子も魔法使いとして生まれるとは限らないでござるな。

拙者が答えられないと判断したイレイナ殿は、丁寧に千切って食べたパンを嚙下してから教えてくれたでござる。

「魔法使いは、魔力に影響を受けた突然変異の人間」と言われています」

「突然変異…でござるか」

なんとなく人に向ける言葉では無い気がするのには傲慢でござろうか。

しかし、言われてみれば分からなくも無いでござる。

「つまりその仮説に沿って言うならば、この国の『魔眼勇者』は拙者達とは別の方向に突然変異した存在ということではござるか？」

「そういう事です」

「なるほど。そこそこ興味深いでござるな」

「まあ、この『突然変異説』よりも有力な説なんて山ほどあるんですけどね」

最後の一言にずっこけそうになったでござるよ。わりと的を得てると思うけどなあ……。

不満気に頬を膨らませる拙者が面白かったのか、イレイナ殿は「ふっ」と笑みを漏らす。可愛い。

「まず、突然変異とは往々にして『環境に適応する為』に起こるものです。毒物に耐性がある個体が生まれるのは、それに適応しないと生きられないから。寒さに強い個体が生まれるのは、それに適応しないと生きられないから。ですが、別に人間は魔力に適応出来なくても問題なく生きていきますよね。実際そういう人がたくさんいるわけですし」

「ま、まあ然り」

「ですが、動物や植物が魔力の影響で突然変異をするという事象は実

際にあります。……私も旅をする中で、そういった光景を見たことがあります。だから未だにこの『突然変異説』は仮説止まりなんです」「可能性は限りなく低いけど、完全に否定できる論拠も無いと」

魔力による動植物の突然変異の下りで薄っすらとイレイナ殿の顔に影が差したのは気になるでござるが……まあ、旅をしていればそういう事もあるでござろう。

「あれでござるな！　こういう『なにに説』とかの話を食べ事中にすると、なんだか頭が良くなつた気がするでござる」

「それを人は『思いがり』と言います。よく覚えておいてください」

「急に辛辣!?？でもそんな所も好き！」

「……なんか最近、あなたサヤさんに似てきましたよね」

「とんだ暴言でござるな」

「どこがですか」

「アレと同列に扱われるとか反吐が出るでござる」

「あなたもあなたで辛辣過ぎませんか……?」

「いや、サヤ殿本人はめちやくちや好きでござるよ?　礼儀正しいし、素直だし、どんな事にも一生懸命になる姿は尊敬してるでござる。ただ、イレイナ殿に関連する事でサヤ殿に似てると言われるのは人権問題に触れると言つても過言では無いでござろう?」

「たぶんサヤさんも同じこと言うと思います」

よく似合うジト目で吐き捨てるように言われたでござる……心外な。

「拙者はただ、イレイナ殿の胸でバブリ狂いオギャリ散らしたいだけでござるよ……」

「そういうところですよ」

心外な。

むすつとほっぺを膨らませて抗議するでござるが、イレイナ殿は柳に風とばかりにパンをもぐもぐ。既に彼女の興味は拙者からパンへ移っているようでござるな。むう……。

今度は別の意味で拙者が膨れていると、店主がサービスの飲み物を

持ってきてくれたでござる。

「ありがとうございます。——ところで店主さん、この国の見所つてありますか？ 観光名所とか、絶景とか」

「うーん……やっぱり勇者学校じゃないかい？」

「勇者学校というと、先ほどの『魔眼勇者』さん達が通う学校ですか？」

「そう。と言っても、あんまり見て面白いもんじゃないけどねえ。外観も普通の学校と大差ないし、運が良ければ訓練中の勇者様が見られるくらいさ」

「ふむふむ」

「羨ましいもんだよ。勇者様として生まれられるなんてね。なにせ、将来への不安ブギーマンに追い掛けられることが無いときた」

「おろ？ 店主さんもそのような時期が？」

「そりやそうさ」

店主さんは鷹揚に頷く。そして、椅子を引き拙者たちと同じテーブルに着いたでござる。暇なの？

まあ暇なのでござろう。お昼時よりも少しズレてるし、店内には拙者とイレイナ殿以外のお客さんは皆無でござる。

「ここはこの国の情報収集がてら、店主さんの雑談に付き合うとするでござるよ。」

「あたしはね、ビッグになりたかったのさ」

「ビッグとな？」

「ああ。とにかくビッグな人間になりたかった。道を歩けば誰もが『バンザイ』と称え、あたしの名前を知らない人はいない。いつも金に余裕があつて、老若男女問わずの人気者になりたかった。でもね……」

そこで店主は少しだけ自嘲気味な笑みを浮かべたでござる。

「大人になって現実を知るに連れて、あたしの所にも将来への不安ブギーマンが現れた。その結果、あたしは実家でもあるこのパン屋を継いだってわけさ」

——夢を諦める。それは確かに『大人になる』というのかもし

れない。そうやって妥協して、人は成長するでござるな。

「だから今はどうやってパン屋をやりながらビッグな人間になるか考
えてる最中なのよ」

……訂正。この店主、成長してないでござる。

「もぐもぐ」

パンを咀嚼しながら雑談を華麗に聞き流し、何やらこれからのプラ
ンを考えるイレイナ殿。それから拙者にお伺いの目配せをしてきた
でござる。

恐らく、勇者学校に行ってみるかどうかでござろうな。

「行ってみるだけ行ってみるでござるよ。『魔眼勇者』という者達に
は興味があるでござる」

「あ、勇者様を見るのは自由だけど、接触するのはダメらしいからそこ
は気を付けるんだよ。ヘタな事すると、王宮までしよつ引かれるから
ね」

「しよつ引かれるのは慣れてるでござる」

「えっ……」

店主さん、ドン引き。

何か変なことを言ったかと自分の発言を振り返ってみると……あ、
やべっ。拙者やべー奴じゃん。

「失敬、語弊があつたでござるな。旅をしてると、どれだけ気を付けて
いても知らず知らずのうちに何やら違反を犯してしまうものでござ
るよ。間違っても拙者たちは危険人物ではないでござる」

「……………」

「いや本当に。そんな目で見ないで欲しいでござるよお……」

明らかに犯罪者を見るような目をされ、拙者の瞳はうるうる。

必殺、泣き落としてござる。

しかし、人生経験豊富な店主には効果がいまひとつ。イレイナ殿へ
視線を移す。

「そっちの魔女さんも、よくしよつ引かれるのかい？」

「何言ってるんですか私は魔法使いの最高位である魔女ですよそんな訳
ないじゃないですか」

「うわあ…すごい早口」

「捕まる前に逃げるなんて朝飯前ですよ」

イレイナ殿、語るに落ちたでござる。

……あらら、店主さんがさっさと店を出て行ってほしそうな顔になつちやつた。

結論から記せば——しよつ引びかれたでござる。

「ふむ。お主らが旅人か？」

勇者学校を覗いていた拙者たちは、突如衛兵みたいな連中に囲まれてお縄に。刀を取り上げられて、何やら国の中枢っぽい建物に連れてこられたでござるよ。

そして、拙者とイレイナ殿の前には玉座にふんぞり返った王様っぽいおっさんが1人。

「……本当に捕まるとは思わなかったでござる」

「……杖は取り上げられなかったので、一応いつでも逃げることはできますよ」

「……話だけでも聞いておくでござるよ。もしかしたら、これがこの国なりの歓迎かもしれないでござる」

「……滅ばばいいのに」

大変イラツとした様子のイレイナ殿に激しく同意の首肯を返して、拙者がおっさんの問いに答えることに。

今のイレイナ殿に会話をさせたら、罵詈雑言の雨あられでござるう。

「然り。つい先ほどこの国に到着したばかりでござる」

「そうか。いや、手荒な真似をしてすまなかった。見たところ、お主らは武力を保有しているようだったのにな」

「おろろ？ 門番に持ち込み禁止とは言われなかったでござるが。国民の方々も、特に警戒していないようでござった」

「旅人ならば自衛の為に必要ではあろう。ワシも禁じるような事はしていない」

随分と回りくどい言い回しをするおっさんでござるな。あとなんか偉そうで腹立つ。

「であれば何が目的でござるか。手荒な自覚があるところを見ると、歓迎というわけでは無いでござろう?」

拙者みたいなちんちくりんが凄んでも怖くはないでござろうが、それでも問答無用で拘束されれば睨みもするでござるよ。

これがマミ上ならおっさんにラリアットを食らわしていただろうし、パピ上なら宝物庫から持てるだけでお宝を強奪していたでござろう。

何より、拙者を縛った者が男だったというのが気に食わないでござる。拙者は女の子に縛られたいでござるよ!

「単刀直入に言おう。お主ら2人に、我が国を救っていただきたい」

「お断りします」

「お断りでござる」

異口同音に、拙者とイレイナ殿は単刀直入な願いを一刀両断。

「……………」

あまりの即答におっさんは言葉を失っているでござる。

だがすぐに持ち直し、頭を振って再度偉そうにこちらを見据える。そして、こちらがビックリするような事実を告げてきたでござる。

「意外に思えるかもしれないが、現在この国は他国と戦争をしている」「とてもそうは思えぬが」

先ほどの国の様子を思い出してみるでござるが、普通に平和そのものでござった。

戦争あるあると言えば物価の高騰でござるが、特にそこも他の国と変わらない平均的なもの。殺伐としているわけもなく、略奪があるわけでもなく、ごくごく普通の田舎国でござる。

一応「魔眼勇者」やら「ブギーマン」やら、若干因習めいたものはあったでござるが。

「休戦から既に70年が経っている。誰も彼もが戦時下であることを

忘れてしまったのだ」

……それはもう実質終戦なのでは？

「だが、休戦から70年。我が国は毎年1人、敵対村にスパイを送り込んでいた。しかし、敵対村に到着してすぐに連絡がつかなくなる。70人。誰一人例外無く、だ」

「もしかして、そのスパイって『魔眼勇者』ですか？」

「……正解だ。彼らは我が国が誇る最大戦力。それらが通じないとなれば、もはや我々に残された道は破滅しかない」

「どういうことでござるか、イレイナ殿？」

唐突に出てきたこの国名物の『魔眼勇者』という名前に拙者が首を傾げると、イレイナ殿は真面目な表情を浮かべた。…あ、惚れちゃう。もう惚れてるけど。

「毎年1人生まれる不思議な力を持った人達。そして毎年1人スパイに行く人達。もちろん敵が多い場所に単独潜入するなら、特別な人の方が良いでしょう？」

「ふむ」

「加えて、あの勇者学校です。まるで世間から隔離するような作りは、スパイ養成機関だからでは？」

「そちらの魔女らしき格好をした者は頭の回転が早いな」

「申し遅れました。灰の魔女イレイナです」

そう言いながら、耐えかねたらしいイレイナ殿は魔法で自分の縄を切って自由の身に。カッコいい……！

拙者もそれに倣って、スルツと縄抜けの術でござる。

「あなたの言いたいことは分かりました。つまり、連絡がつかなくなった魔眼勇者さんを捜索してほしい。あわよくば、そのまま戦争を終わらせてほしいと」

「いや、そうではない」

少々したり顔で言い切ったイレイナ殿の言葉を、今度はおっさんが一刀両断。

「つい昨日、こういった手紙が敵対村から送られてきたんだ」

恥ずかしそうに顔を赤くしてるイレイナ殿へ、チヨイチヨイとおつ

さんは偉そうに1枚の紙面を手渡した。

拙者もそれを読む為にイレイナ殿へ顔を寄せ、彼女のフレーザーバーでフイーバーしながら共に読み進める。

「……………!?？」

その手紙には、70年前に潜入した最初の魔眼勇者が危篤状態であることが記されていたでござる。

「お主らには手紙の真偽を確かめて欲しい。ただそれだけだ。報酬も払おう。こちらは着手金だ」

おっさんの言葉に、衛兵が2個の中着袋を持って現れた。チャリンチャリンと、巾着袋からはお金の音。

その音に、拙者とイレイナ殿は目がキラキラでござる。

「旅立つ前の勇者達と同じ金額だ。成功報酬も別に用意しておく」

このふんぞり返ってるおっさんが用意したお金でござる！ きつと金貨が大量に……………と期待で胸を膨らませながらさっそく巾着袋をひっくり返すと――

「銅貨……………」

「10枚……………？」

何かと間違いでござろうか？ 仮にも戦時中の敵側に潜入する者へ、銅貨10枚……………露店のパン10個分……………？

「当面の武器も用意した。ほら『木の棒』だ」

「……………」

「なんだ。不満か？」

「えつと……………旅立つ魔眼勇者の方々には、全員このような粗末な物を……………？」

「銅貨10枚と木の棒1本。それが勇者の伝統的な初期装備だろう」

……………だから生きてるのに帰ってこないんじゃないやね？

「ああ、あともう1つ。今年の魔眼勇者も連れて行け」

もういつそおっさんシバいてバツくれようかと、イレイナ殿とアイコンタクトを交わしているところに15歳くらいの男の子がおっさんの横へ現れたでござる。

「ほれ。この2人がお主と共に潜入するものだ。挨拶をしろ」

「はい、王様」

あ、やっぱりおっさん王様でござったか。

「バロルと申します」

どこか機械的で感情を感じさせない瞳が、拙者達を射抜く。

しかし、何故でござろう…？ その瞳で見つめられることに、どうしようも無い嫌悪感を感じるでござる。

別に体を舐め回すように見ているとか、下心があるとかじゃない。

もつと原始的な、本能的な忌避感がバロル殿に見つめられているだけで湧いてくるでござる。

それはイレイナ殿も同じらしく、少しでもバロル殿の視線から逃れようと身を引いてる。

「このバロルの魔眼は魔眼勇者史上最高の能力を持つ。きっとお主らの役に立つ」

「身に余る光栄でございます」

恭しく頭を下げるバロル殿はそのままおっさんから木の棒を受け取り、そのまま拙者とイレイナ殿の間を通り抜けて部屋の出口へ向かっていく。一礼。退室。

えらく人形染みた少年でござるな。

……ただ、武士の本能に従って言えば——

(彼は危険人物でござる)

武士として、旅人として、魔法使いとして。そして何より生物として。

バロル殿の存在に本能的な警鐘が止まらない。

「……王様」

「なんだ？」

「バロル殿の魔眼は、一体どういう能力でござるか？」

「ふつ……そうだなあ。道中にでも本人へ尋ねると良い」

王様はニヤリと、嗜虐的な笑みを浮かべたでござる。

刀を返してもらい、さっそく出発した拙者たち。バロル殿の先導に従って、拙者とイレイナ殿は肩を並べて歩いていくでござる。

「そういえば、結局どこと敵対してるって言ってたでござるか?」

「さあ? ただ、私の耳がおかしくなければ敵対村と言っていましたか」

「——正しいですよ」

背筋を伸ばして前を歩いてきたバロル殿が、足を止めずにこちらへ感情の孕まない目を向けてくる。

一瞬また忌避感を覚えながらも、なんとか歩みは止めないで聞き返すことができたでござるか。

「正しい、とは?」

「僕の国と敵対しているのは、この山の麓にある村です」

「村と国が戦争してるでござるか?」

「はい」

これはまた、えらく不可思議な構図でござるか。一介の集落が、国と渡り合った上で休戦まで漕ぎ着けたでござるか。

しかし、魔眼勇者なんて者が生まれるような土地でござるか。その村もまた、一筋縄ではいかないような事情があるのでござろう。

「察しているとは思いますが、もちろん普通の村ではありません。村の名前は『魔王村』——魔物が闊歩し、魔王が住む村です」

事ここに及んで、魔王ときたでござるか。

「ですが安心してください。どんな魔物が相手でも、僕の魔眼さえあれば取るに足らない相手です」

「どういった能力なのですか?」

丁寧な言葉遣いとは裏腹に、ピクリとも表情を動かさないバロル殿はなんて事の無いようにイレイナ殿の質問に答える。

「死の魔眼——相手は死にます」

こつち見んな。

そこは魔王村

国を出てから下山すること1時間。箒に乗って下りられれば楽なのでござろうが、一応は潜入という体で行くので徒歩でござる。

そして無事、魔王村に辿り着いたでござるが……

「なんか普通の村でござるな」

“村”というよりは“街”という感じでござるが。だいぶ栄えてる。

魔王村というくらいだから、常に暗雲立ち込めて路上の至るところに死体が転がってるような殺伐とした場所を想像していたでござるが、全然普通の集落でござる。

一応チラチラと魔物らしき者たちも確認できるけど、パツと見たところ人間の方が多いし。

魔物と人間も種族の壁を越えて交流してる。

魔王村とは名ばかりの多民族国家でござるな。あ、一応村だっけ。

「バロルさん。本当にここが魔王村なんですか？」

「地図上では間違い無いかと。村の形も、僕が聞いていたものと合致しています」

流石にイレイナ殿も疑問に思ったらしく、バロル殿へと怪訝な顔を向けているでござる。

出会ってから今まで、特に感情らしい感情を見せなかったバロル殿も、少しだけ不安そうにしてる。

ふむ…。

「失敬、そちらのご婦人。拙者は旅人でござる。ここの村の名称を教えてくださいただけるでござるか？」

「あら、可愛らしい旅人さん。ここは“魔王村”よ」

「えへへ可愛らしいなんて、かたじけない」

はい、ここが魔王村でござる。この名前って村人も普通に使ってるでござるか。

とりあえず目的地であることは確定したので、これからどうするかとバロル殿を振り向くと……おろ？　なんかスタスタとどっかに歩

いて行っちゃったでござるな。お手洗いでござろうか。

「ここからは別行動だそうです。バロルさんと私達で手分けして情報収集をしよう、と」

「……一応旅人として潜入したのだから、一緒に行動するべきなのは？」

「たぶん彼、集団行動できないタイプですね」

「ふむ、拙者と同じでござるな。女の子なら親友になれたからしれないでござる」

友達作るのがって難しいもんね。拙者も故郷ではできなかったもん。とはいえ、

「ではイレイナ殿！ 拙者と一緒に村を回るでござる！」

「いや、なんで腕組むんですか」

「女の子2人が並んで歩いていたら、腕を組んでいないほうが不自然でござろうっ！」

「どこの国の常識ですか」

「拙者の国！」

「嘘ですよ？」

「いや、これがあながち嘘でもないでござるよ。むしろ仲良し同士で双子コーデとか、姉妹コーデとかするのが流行ってたでござる」

街で見かけた時は、血を吐くほど羨ましかったでござる。拙者も！

女の子と！ 手を繋いで歩きたい！

「……拙者とデート、イヤでござるか？」

「わりと」

「うう…イヤで、ござるか？」

「嘘泣きやめてくれませんか？」

「腕組んでくれないと、イレイナ殿の服で鼻かむでござる」

「脅迫じゃないですか……」

呆れた目をしながらも腕を振り解かないイレイナ殿好き！ 元々ヤバいくらい好きだけど。

「ほら、あつちにポップコーンの露店があるでござるよ！ せっかくだから、おやつにするでござる」

「ああはいはい。わかりましたよ」

それにしても、ポップコーンの露店なんて珍しいでござるな。

お祭りならわりと見かけるけど、露店の雰囲気的に毎日ここで営業してるとほいでござる。

店主はまだ年若い…なんならイレイナ殿と同年くらいの青年でござるな。

「店主。1ついただけるでござるか?」

デートの定番と言えば食べさせ合いっこでござる。

ポップコーン1つ1つをあーんさせあえば…おお! めちやくちや食べさせ合いっこできるでござるな! 拙者賢い!

イレイナ殿の美しい白魚の如き指が幾度となく拙者の唇に触れることを夢想しながらお財布を取り出して銅貨を数枚。

「おう! お嬢さん達、旅人さんかい?」

「然り。ポップコーンの露店とは、あまり見ないでござるが……」

「ああそれはな、俺の魔眼がコーンをポップさせるのに向いてるからだ」

「……………」

…………え? この店主、今なんと?

「どうした? やっぱ2つ買いたくなかったかい?」

「魔眼……持つてるでござるか?」

「あん? 持つてるよ」

「えっと…店主はこの国の出身でござるか?」

「いや。その山を登ったところにある国で生まれた。『魔王村』には諸事情で降りてきたんだ」

「もしかして魔眼勇者?」

「なんだ。俺たちのこと知ってるのかい?」

あつげらかんと言う店主に対して、拙者とイレイナ殿は顔を寄せ合ってひそひそ。

「……………いましたね。バロルさんの前任者」

「……………わりと普通にいたでござるな」

いやまあ、生きてたならめでたいでござるが……。この店主が何年

前の魔眼勇者かは知らぬが、とりあえず合流でござる。

うくん……どう話そう。あまりにもあつさり見つかったことで、拙者の脳が状況に追いつかない。

「私達はあなたの出身国の王様から依頼を受けてここに来ました。魔眼勇者で生存しているのはあなただけですか？」

「いや？ 魔王村に降りて来た魔眼勇者は全員生きてるよ。…あ、最初の1人は危篤中だっけ。それで、ポップコーンは何個いるんだい？」

「この村に着いてから一切連絡をしなかったのは何故なんでしょう？」

「連絡よりもポップコーンの方が大事だ」

「……そうですか」

「ポップコーンは2個でいいかい？」

「1個で」

「だが俺は2個作りたい！ よって2個作る！」

あ、イレイナ殿がすごく拙者に助けを求めている。なんとというか……その庇護欲を沸き立たせるお顔、良いでござるな！

(……と、なんかこういう事考えてると、あの変態人形職人を思い出してしまうでござる)

拙者はあんな変態と違う。ただただ世界中の女の子に甘え、甘やかしたいだけの清廉潔白な武士で旅人で魔法使いござる。

「ほくらイレイナ殿。拙者の胸を貸してあげるでござるよ。思う存分バブバブするでござる」

「うわあ…無理」

「では拙者がバブバブするでござる」

「なんで私の知り合いつて話聞かない人が多いんでしょう……」

「類は友を呼ぶというやつでは？」

「……あ、ポップコーンが弾けてます」

誤魔化したでござるな。一応自覚はあったでござるか。

イレイナ殿に少しだけジト目を向けてから、ポンポン！ と軽快な破裂音を上げる露店を見れば……おお！ バター香る鉄板の上で弾

けたポップコーンが店主の持つ容器へと流れるように入っていくでござる。これはお見事！

うん？ というか、真剣でありながらもエンタメとして笑顔を浮かべる店主の眼差し——正確には瞳が、いつの間にか翡翠色に変わっているでござる。

どうやらイレイナ殿も気付いたらしく、拙者たちは揃ってポップコーンではなく店主の瞳に釘付けでござるよ。

これはもしや……魔眼？ そういえば、ポップコーンと相性の良い魔眼的なことを言つてたでござるが。

「へいお待ち！ ポップコーン2個な。お代は3個分でもいいぜ」

「詐欺じゃないですか。まあいいですけど」

「は？ いや、冗談だよ。ちゃんと2個分でもいいさ」

「構いません。私の気持ちですので、受け取ってください。その代わり、少し教えてほしいことが」

気持ちと言いつつ少し多めにお金を渡して情報をせびる。確かに、時に情報料というのはアホみたいにあふつ掛けられる事もあるので、結果的にこれは上手いやり方なのかもしれない。

流石イレイナ殿！ ケチれるところはどこまでもケチる狡さは、旅人随一でござるな！ そこに痺れる憧れる!!？

拙者の尊敬の眼差しに気分良さそうな様子で、イレイナ殿はお金を渡しながら店主へと問い掛ける。

「今は戻っていますが、ポップコーンを使っている時にあなたの瞳の色が変わっているように見えました、それが魔眼ですか？」

「ああそうだよ。俺のは“分析の魔眼”って言うんだ。視界に映るあらゆるモノを分析できる」

「具体的にはどのようによ？」

「そうだなあ……例えばそこのお嬢さんが腰の剣で俺に斬りかかろうとするだろ？」

「モミジさん。やめてくださいいね」

「そんな辻斬りみたいなことしないでござるよ……」

失敬な。

「はは、例え話だよ。んで、その姿を魔眼で見ただけで、どんな軌道で斬りかかってくるか分かるってわけだ」

「ふむ。未来予知の類たぐいでござるか」

「少し違うな。お嬢さんの姿勢、視線、剣の握り具合……まあその他諸々の要素を全て分析して予測する、言ってみれば事象の積み立てを見ているんだ」

「……おん？」

「モミジさんでも分かるように言い直すと、まな板の上にある材料を見てどんな料理が出来上がるか予測できる魔眼というわけです」

「おお！なるほど！」

あれ？ 今サラツとイレイナ殿、拙者のことバカって言わなかった？

「しかし、その魔眼がどうしてポップコーンと相性が良いということになるでござるか？」

「ポップコーンってのはな、繊細なんだ。鉄板に溶かしたバターをどの割合で絡ませれば良いのか、熱した鉄板のどの位置に置けば弾けるのか。薪だつてそうさ。その日の気温や湿度によつて薪の燃えやすさが変わる——その全てを俺は“分析”する。敢えて言わせて貰おう！俺に弾けないポップコーンは無い!!？ああそうさ……爆裂種なら、神様だつて弾いてみせる!!？」

とりあえず彼の魔眼とポップコーンの関係についてはよく分かったでござる。确实にもつと有意義な使い方がある気がするでござるが。

あと爆裂種の神様つてなに？ いるの？ ポップコーン担当の神様。

「あ、これ美味しいですよ」

「当然さ。俺のポップコーンをそこらのポップコーンと同じと思つちや困るぜ」

「イレイナ殿、拙者も欲しいでござる。あくん」

「こつちがモミジさんの分です」

「むう……」

店主が独断で2個作るなんて余計なことしてくれたせいで、拙者の計画がおじやんでござる。

せっかく食べさせて貰いながらイレイナ殿の指をちゅぱちゅぱしようと思っただのに……。

当のイレイナ殿は「彼と組めば賭けでボロ儲けなのでは……」とか呟いてるし。

拙者とお金、どっちが大事でござるか!?? ぶんぶん!

心の中で憤慨しながら買ってもらったポップコーンを口にポイ。

あ、ほんとに美味しいでござる♪

「もぐもぐ……して店主。他の魔眼勇者たちもこの村にいるとのことだぞるが、何処に?」

「あーどこだろう? わりとみんな日雇い労働者みたいな感じだからなあ。『この時間にここにいます』って奴はそんなに知らないんだが」

「知ってるだけでいいでござるよ」

「OK。って言っても2人だけだけだな。『光の魔眼勇者』と『闇の魔眼勇者』だ。双子だけ」

「おや? 私が聞いた話では、魔眼勇者は1年に1人しか生まれないとのことでしたが」

「俺はあまりその辺詳しく無いんだが、一卵性双生児だから1人ってカウントらしいぞ」

好奇心が顔を出したイレイナ殿の質問にも、店主は淀みなく答えてくれる。

しかしこのままでは話が脱線するので、ここは強引に。

「その2人は何処いずこに?」

「『闇』の奴は写真館で働いてる。『光』の方は夜勤だからたぶん今は寝てるな。日が沈んだら、あの灯台から目を光らせてるはずだから行ってみな」

と、店主が指差す先には村の中心辺りからニョキつと生えた高台。今行ったらこの村の景色が一望できそうでござるな。

「承知。情報提供、感謝でござるよ」

「おうよ! また来てくれな」

「あ、1つ私から聞いてもいいでしょうか？」

「あん？」

とりあえず言われた通り写真館にでも行こうかと思えば、イレイナ殿が声を上げたでござる。

「どうして故郷を裏切るようなことをしたんです？」

サラツと。言葉面に反してイレイナ殿はなんて事の無いような様子で店主に疑問を投げ掛けたでござるよ。

まあ、本来なら「故郷を裏切る」というのはのっぴきならない事情が無ければやらないでござろう。

拙者たちは旅人だし、ぶつちやけ他人事なので怒るなんてのもお門違いでござるが、確かにこの疑問は解消しておきたい。

現在魔王村でポップコーン屋を営む元魔眼勇者の店主は、イレイナ殿の質問に少しだけ困ったような笑みを浮かべ――

「――ブギーマン将来への不安に追い掛けられたからさ」

ポップコーン片手に店主から教えて貰った場所に行けば、確かに小ぶりながらも綺麗な写真館があったでござる。

ふむ：写真を撮るなら衣装のレンタルは無料でござるか。値段も良心的でござるな。

写真館の前に置かれた看板には、この村で撮られてきたであろう写真が無作為にペタペタ貼られているでござる。

「魔物も写真って撮るんですね」

「案外悪い者だけでは無いのかもしれないな」

魔物Ⅱ人間を襲うみたいな考えは普通に拙者たちの中にもあったでござるが、知性を持っているだけあって対話も可能なのでござろう。

看板に貼られた写真を見ながらこの村の事情をなんとなく話していると、ガチャ。写真館の扉が開いて、中から家族らしき4人組が出てくる。

(……………?)

出てきた家族の顔面は、まさかのトカゲでござる！ リザードマンでござるか！ 初めて見た……。

「ありがとうございます。現像が済み次第お届けします」

そんな家族を見送る為に出てきたのは、エプロンをした若い女性。こちらは人間でござるな。流石は魔王村。

リザードマンの一家は良い写真が撮れたのか、楽しそうな様子で村の中へ歩き去っていく。顔面が爬虫類だから表情とかなかったけど。

あまりジロジロ見るのは失礼とはいえ、イレイナ殿と共にリザードマンファミリーを見つめっていると、エプロンの女性が拙者たちに気付いたでござる。

「あらら。お客様ですか？」

「いや、拙者たちは人を探しに来たでござるよ。『闇の魔眼勇者』とやらはいるでござるか？」

「あ、それ私です」

早くも潜入してる体裁を保つのが面倒になってきたので単刀直入に聞くと、あつさり見つかったでござるな。いやまあ、ここにいるのは知ってたから当たり前っちゃ当たり前でござるが。

エプロンの女性こと『闇の魔眼勇者』殿は、なんとというか普通の女性って感じでござるな。

ポップコーン屋の店主はえらく変な人だったので、てつきり魔眼勇者って変人しかいないと思ってたでござる。

「私にお話があるようですね。中にどうぞ」

つい心を許してしまいそうになる笑顔で、彼女は拙者たちを写真館の中へ招いてくれる。

まあ、立ち話もアレなのでお邪魔するでござるよ。

と、扉を保持して拙者とイレイナ殿を写真館へ招き入れた彼女は――カチャン。後手に扉の鍵を閉めたでござる。

「――見つけた♡」

俯いて表情が隠れた彼女の口元が、裂けるように笑みを浮かべたでござる。魔眼の使用を表す翡翠色の輝きを目に宿しながら。

これはもしや嵌められたでござるか。となれば……!

即座にイレイナ殿を守る位置に立ち、ポップコーンを頭に乗せて抜刀。この狭い室内であれば、拙者は魔女すら打倒できるのでござるよ。

と、内心余裕だった拙者。しかし突如、視界が闇に溶ける。

「イレイナ殿……」

「これは彼女の魔眼でしょうか」

その言葉から、イレイナ殿も拙者と同じ状態だと分かる。とりあえず離れないように刀を持つ手と逆の手でイレイナ殿のお手々を繋ぐでござる。……あ、イレイナ殿の手温かい♪

「あー！いいわ！　そうそうそのまんま動いちゃダメですよ！」

どうやら当の魔眼勇者は既に場所を移動したようで、先ほどとは打って変わって大層興奮した声音で何やらカシャカシャやってる。怖い。

一応拙者は暗闇の中でも敵意や害意というものを感じ取ってなんとなく相手の攻撃を予感することは可能でござるが、今はそれができない。相手には拙者たちを攻撃しようとする意思が無い……？

声の方向からイレイナ殿を庇うように位置取りを行うと、カシャカシャという音がさらに多くなる。

あと彼女の悲鳴とすら思えるような嬌声も。超怖いでござるよ。

「……おろっ！」

内心ビビり散らかしながらも、イレイナ殿を庇って刀を構える今の拙者ってめちゃくちゃ格好良いと自画自賛していたら、唐突に視界が元に戻ったでござる。

「はいありがとう！　良い写真が撮れたわ」

いつの間にか被っていた布から顔を出して、グツとサムズアップをくれる闇の魔眼勇者殿。よく見ると、彼女が顔を出した布はカメラのレンズを覗く側にあるものでござった。

ということとは、さっきのカシャカシャという音はシャッター音でござったか？

「……説明を、していただけますよね？」

おろろ。イレイナ殿、大変ブチギレている様子。そりやまあ、写真館入ったらいきなり視界奪われて勝手に撮影されてたんだから当然でござるか。

しかし、見た目に反して凶太い神経をしている「闇の魔眼勇者」殿は、にっこりとご満悦な様子でいつの間にか拙者たちを照らしていた照明の位置を弄ってる。

全然気付かなかった……。

「うふふ〜ごめんなさい。私が探し求めていた美少女2人がいきなり来たものだから、つい勢い余って撮っちゃいました。あ、刀のお嬢さん格好良かったですよ。100点です」

「おおー やったあー！」

「ただ、そちらの灰色の髪の方が凄い目つきしてたわね。私としては、少し怯えた表情が欲しかったところですね。30点」

「……なんで勝手に撮られて低得点付けられなきゃなんのでしょう？」

にこにここと総評をくれる彼女に、イレイナ殿は凄まじい目つきでガン垂れてるでござる。美人の怒り顔って迫力やばやばでござるな……。とりあえず、これ以上イレイナ殿を刺激されると魔法で写真館吹っ飛ばしかねないので、ここは穏やか大和撫子こと拙者が話を進めるでござるよ。

「結局お主は、拙者たちの写真を撮りたかっただけでござるか？」

「はい。できればこの写真館の宣伝写真として使いたいのですが、ダメでしょうか？」

「肖像権はご存知ですよ？ 私の写真を使いたいのであれば、相応の額を要求しますが」

どんな小さなビジネスチャンスも見逃さないイレイナ殿。彼女の肩に手を回し、空いた手でお金のマークを作って迫る。お金が入る可能性を目敏く見つけ、すぐに機嫌を直して商談を開始したでござる

な。

「……いやいや。さすがに金貨20枚は…」

「……では、これも付けてあげます」

「……これは？」

「……招きポップコインと呼ばれる、お客さんを呼び寄せるポップコインです」

「……これを、どうするんですか？」

「……このポップコインを食べて、私たちの写真を飾れば普段の1.15倍のお客さんがこの写真館に押し寄せるでしょう」

「……1.15倍」

「……どうです？ 長い目で見れば、金貨20枚なんてすぐに取り戻せる額ですよ」

なにやら食べ飽きたポップコインを押し付けながら交渉してるでござるな。

そのまましばらく見守っていると、イレイナ殿は即金で貰ったらしい金貨をお財布に入れながら戻ってきたでござる。

闇の魔眼勇者殿は、イレイナ殿の食べ飽きたポップコインを宝物かのように目を輝かせて掲げてるし。

何はともあれ交渉成立。イレイナ殿はお金を貰って頬を緩め、そんなイレイナ殿が見れて拙者もハッピー。ついでに「闇の魔眼勇者」殿もハッピー。たぶん騙されたんだろうけど。

みんなが幸せになったところで、本題に入るでござるよ。

「して、「闇の魔眼勇者」殿。拙者たちの話を聞いてもらってもよろしいでござるか？」

「その前に、そちらの灰色の髪の方。権利関係の話も済ませたし、あなたのお写真をもう少し撮りたいんだけどいいですよね？」

「……まあ、仕方ないですね」

「あの…拙者の話を……」

「撮りながら聞いわ。あと、良かったらアリエルと呼んでくださいな。

「闇の魔眼勇者」なんて呼びにくいでしょう？」

「闇の魔眼勇者」改めアリエル殿は、テキパキと撮影準備を始め

る。

どうやらイレイナ殿の肖像権に関する出費の分だけ元を取ろうという魂胆のようでござるな。イレイナ殿撮り放題でござるか。……いいなあ。

「ちようど良いから、あなた助手をやってください」

「ほえ？ 拙者が？」

「ほら！ 早くレフ板持って！」

「おろろ！ レフ板ってどれでござるか？」

了承した覚えはまったく無いのに、既にアリベル殿の中で拙者は助手に就任されてるようでござるな。

撮影機材らしき山を指してレフ板を持つてこのことでござるが、そもそもレフ板ってなんぞや？

「リフレクターのことでしょうか？ 素人じゃないんだから、さっさとしてください」

……いや、素人でござるよ？

身内には強く当たるタイプなのか、アリベル殿はきつい口調でレフ板なる光を反射させるボードみたいなのを持たせてくる。

あ、これがレフ板でござるか。

そして怒涛の流れでイレイナ殿撮影会が開始でござる。

「はいいですよーその目つき。もう少し笑えますか？」

「無理です」

「では少しだけ顎を上げてくださーい。そうそう。……助手う!!? 光の反射が甘い！」

「ひええ！ し、失礼したでござる！」

「セクシーなポーズくださーい。椅子に座って足組んで」

「嫌です」

「じゃあ人差し指を唇に当てて……いいですね!!? 助手う！ 何度言ったら分かるんですか！ もっと顔を照らして！」

「こ、これ以上やったらイレイナ殿が眩しいでござろう?」

「構いません！ 私が魔眼を使っていますから」

「モミジさん。不思議なことにまったく眩しくないので、アリベルさ

んの指示通りにして貰って大丈夫ですよ」

ちよいちよい逆らうイレイナ殿被写体にはニコニコし、拙者助手には鬼のように厳しいアリベル殿。

どうやら彼女の魔眼は、光に関する効果があるようでござるな。

最初の無断撮影の時も、拙者たちは気付かぬうちに照明で照らされていたみたいだし。

と、かれこれ1時間。撮影会終了。

満足気にホクホク顔のアリベル殿と、グツタリ疲れ果てているイレイナ殿が対照的でござるな…。

「お疲れ様でござる。はいお水」

「ど、どうも……」

どうやらこの場で現像するらしく、なにやら刺激臭のする液体やら何やら、とにかく専門器具らしき物をまとめてワゴンに載せてきたアリベル殿。

その背中を見ながら、拙者は椅子を並べて簡易的なベッドを作成。イレイナ殿を寝かせ、頭の位置に拙者が座れば……はい完成！ 膝枕

!!?」

実は最近、膝枕が拙者のマイブームでござるよ！ イレイナ殿きやわわわ！

疲れのせいかな大人しく膝枕されてるイレイナ殿の頭を撫で撫でしながら、拙者はふとした疑問をアリベル殿へ尋ねてみる。

「素人質問で申し訳ないでござるが、写真の現像というのは真っ暗な部屋で行うものでは？」

「それはフィルムが感光しない為ですね。普通はそうですが、私に限って言えば問題ないのです」

「ふむ。それもやはり魔眼の能力でござるか？」

「はい」

振り向いてこちらを見つめるアリベル殿の瞳は、やはり翡翠色。魔眼使用中ということでござるな。

「私の魔眼は、見た場所に闇を生み出すことができます。有機物も無機物も関係無く、反射率0のボールを掛けるイメージです」

「だから拙者たちが入ってきた時も、いきなり視界が真っ暗になつたでござるか」

「そういうことです。これを応用すれば照明を当てても、当てられる本人はまったく眩しくなかったり、カメラのフラッシュで目を瞑ってしまふということも無いわけですよ」

「なるほど。だからさっきのイレイナ殿も」

「ええ。まあ、プロにもなると光の当たり具合から自分でポーズや表情を決めるので、これは完全に一般人向けの使い方ですがね」

「有機物も無機物も関係無く、ということはその現像も？」

「感光…えっと、詳しいことは省きますが、取り出したフィルムに光が当たると、写真が真っ白になつちゃうんです。それを防ぐ為に本来は暗室という真っ暗な部屋でやるんですけど、私の魔眼を使えば例えぼつかぼかの日向でも現像作業ができます」

ふむ。日常生活を送る上ではさほど微妙な能力でも、こと写真という分野に於いてはこの上なく便利なものでござるな。

そんな感じで素直に感心しながらさり気なくイレイナ殿の髪をくんかくんかしている、興が乗ってきたアリベル殿は言葉を続ける。「森羅万象の全ては光と闇で表現できます。光があるから闇が生まれ、闇があるから光が際立つ。その光と闇が生み出すコントラストを、人は『世界』と呼ぶのでしよう。だったら私は世界を切り取ります。世界はいつも決定的瞬間に満ちている。——ああ、そうです！そこに写すべきモノがあるなら、私は闇で光を照らし出す！そこにあるなら、神様だつて写してみせる!!？」

……なんかさつきも聞いたような口上でござるが、魔眼勇者つてこういうの言わないと死ぬでござるか？

ま、いいや。どうでも。

「そういえば2人は私に用があつてここに来たんですよね？」

「……その通りです。いきなりあなたの撮影会に巻き込まれましたが」

「お金は払いましたよ。請求額ピッタリに」

「うっ……」

拙者のお膝から棘のある言葉を吐いたイレイナ殿は、作業しながらのアリベル殿の正論による反撃で顔を顰めちゃったでござる。

基本的に性根が腐っているイレイナ殿は正論を言われるのが嫌いなのか、ちよつと敵意が溢れてる。

今回に関してはアリベル殿が1枚上手でござったな。強欲魔女vs強欲魔眼勇者の戦いは魔眼勇者の勝利でござる。肖像権を売ったのは失策でござるよ、イレイナ殿。

拙者は苦虫を噛み潰したような顔のイレイナ殿を撫で撫でしてくんかくんかしてチュツチュ……は拒否られた！ なにゆえり？

「それで、どうして貴女は故郷を裏切つてここに？ 魔王村 やはり、ブギーマンに追い掛けられたからですか？」

「正解です。もしかして、そんな事をこの村にいる魔眼勇者に聞いて回ってるんですか？」

「厳密には違いますが、そう考えてもらって結構です」

「少し引つかかる言い方ですね」

「貴女が気にすることではありませんので」

なにやら剣呑な雰囲気が漂い始め、拙者ビビる。喧嘩はダメでござるよお……。

「ほ、ポップコーン屋の店主も言ってたでござるが、それは故郷を裏切る程のことなのでござるか？」

険悪な雰囲気を霧散させる為にも、拙者はこの根本的な疑問を聞いてみた。

そもそも、拙者とイレイナ殿がここに来たのは1人目の魔眼勇者殿が裏切ったのが発端でござる。

ブギーマン———将来の不安に駆られることは普通にあるでござろうが、あの国で蝶よ花よと崇められている魔眼勇者にもそれは適応されるのでござるうか？

「ただ、魔眼勇者 未来が欲しい。思い描くそれは各々違うかもしれませんが、きつと私達はそんな想いである国を捨てた……いえ、この村を選んだんですよ」

アリベル殿はどこか寂しげに微笑んでみせる。その笑みは、長く苦

しい葛藤を乗り越えたであろうことが伺えるでござる。

「たぶんこの村にいる魔眼勇者は、誰もが私と同じように答えると思いますよ」

どうせ他の魔眼勇者を探す充も無かったので、日が暮れるまでアリエル殿の写真館で時間を潰したでござる。

そしてこれから、『光の魔眼勇者』でアリエル殿のお姉さんがいるであろう灯台へ向かう予定でござるよ。

どうやらアリエル殿のお姉さんは夜間警備のお仕事をしているらしく、仕事内容は灯台から一晩中この村を見張ること。

魔物は大半が人よりも夜目が効くので、この村に街灯は少ない。暗いというのは、それだけで悪事をしやすいでござるからな。

それを防ぐ為に、灯台から目を光らせているというわけでござるな！ 立派でござる！

と、イレイナ殿の腕に抱き着きながら感心していると、

「うう、眩しい…」

突然強い光を浴びせられたでござる。どうやら光源は拙者たちの頭上のようにござるな。

イレイナ殿のローブを庇代わりにして…あつ、すごくいい匂いする……ではなく、上を見上げれば、2本の光がこちらを照らしているようにござる。

「あ、目を光らせるって文字通りの意味だったんですね…」

イレイナ殿の眩きに、拙者も光源へ目を凝らすと……なんと、光は灯台の上で仁王立ちしてる女性の目から発せられていたでござるよ!??

なんかちよつと間抜けでござるな。

……だけど、とりあえず1つ言いたい。

「こっちは見ないで欲しいでござる」

そこに魔眼勇者

アリエル殿の姉上、『光の魔眼勇者』ことアリエル殿からも話を聞いた後、拙者とイレイナ殿はバロル殿と合流。

どうやらバロル殿はバロル殿で、他の魔眼勇者から話を聞いていたそうでごさる。

「で、最初にこの魔王村に来た初代魔眼勇者を見つけたと？」

「ええ。アポイントは取ったので、明日の正午に伺います」

魔眼勇者たちのキャラが強烈で忘れかけてたでござるが、そういうえづ者たちの目的って危篤状態という初代魔眼勇者さんの安否確認だったでござるな。

銅貨10枚と木の棒1本というふざけ散らした対価で。

「会話はできるでござるか？ 危篤中ということでごさるが」

「ベッドから起き上がれないそうですが、会話は問題ないとのことですよ」

であれば、まあいいか。

ご臨終される前に生きてるか確認して、王様にそれを報告すれば拙者たちのお仕事はおしまい。あとは魔王村が人外魔境だとか魑魅魍魎が跋扈してたとか良い感じに話を脚色して、報酬をふんだくるでござるよ。

「報告は終わりです。僕は宿を取ってあるのでそちらに泊まります。では」

「いや、『では』じゃなくて」

「なんですか？」

無感情に踵を返してちゃっかり自分だけ宿の予約を入れていたバロル殿を、イレイナ殿が呼び止めたでござる。あ、ちよつとだけ眉間に皺が寄った。

「この村にも宿あるんですか？」

「あるわけないじゃないですか」

「じゃあバロルさんはどこに泊まるんですか？」

「魔眼勇者の先輩が親切で泊めてくれるというので、そこに」

聞かれたことしか返さないバロル殿との会話はテンポが悪いでござるな。

「ちなみに、拙者とイレイナ殿も泊めてもらえるでござるか？」

「先輩にはお2人のことを話していいので、無理かと」

「なんで話してないでござるか」

「聞かれなかったの」

ブツツと拙者のプリティのおでこに青筋が浮かぶ音。さてはお主、指示待ち人間でござるな。

拙者とイレイナ殿のイラツとした顔に、バロル殿は無表情で首を傾げて……ポン。これまた無表情で手を打った。表情筋使うでござるよ。

「ここら一带は比較的暖かいそうなので、山から吹き下ろす風さえ遮れば凍え死ぬことはないそうです」

「私達に野宿しろと？　こんないたいけな美少女2人に？」

「……？　モミジさんはともかく、イレイナさんは少女という年齢ではないか……もぐもぐ」

凄まじい失言をぶちかまそうとするバロル殿のお口に、拙者が着物の袖で蓋をする。

やべーでござるな、こいつ。空気読むってことをまるでしないでござる。……うわ、涎ついた最悪。

「OK静かにするでござる。じゃあ拙者とイレイナ殿は先ほど出会った『闇の魔眼勇者』殿の家を借りるでござるよ」

これ以上この2人を会話させるのは危険と判断した拙者。

アリベル殿が泊めてくれるかはまだ分からぬが、とにかくイレイナ殿をバロル殿から引き離すのが先決でござるよ！　我ながらファインプレー。

「わかりました。では」

突然口を塞がれたにも関わらず、特に気にした様子もなくバロル殿は夕暮れの村に消えていったでござる。

それから拙者とイレイナ殿はなんとかアリベル殿に頼み込んで、彼

女の家…というか写真館の床を間借りすることに成功。

旅をしているとやむを得ず野宿を強いられる場面もあるので、屋根と壁があるだけで感謝感謝でござる。

しかし……

「これ、起きたら絶対全身くまなくギシギシになっていきますね」

うう…床が硬いでござる。せめて敷布団が欲しい。

しかし、この村の寝具はベッドが主流らしく、そんな気の利いた物は無いとのこと。

「ふむ、仕方ないでござるな」

イレイナ殿がアリベル殿のベッドからマットレスを強奪する前に、拙者は添い寝するように置いておいた刀の柄をフリフリ。

「おつ、これは……」

「これなら多少は体の痛みを和らぐでござろう？」

拙者がかけたのは、下から上への過重力。体を軽くすれば翌朝ぎしぎしになるのも防げるでござろう。やっぱ過重力しか勝たん。

「お礼はほつぺにちゅーでいいでござるよっ」

「寝言は寝て言ってください」

「つまりイレイナ殿の夢に現れればいいでござるか」

「あなたが夢にまで出てきたら休まるものも休まらないんですが」

「夢でなら既成事実作り放題でござるな！ ひゃっほー！」

「夢での既成事実既成事実足り得ません」

「ふむ。既成虚実でも拙者は構わぬよ？」

「もはや空想じゃないですか……」

暗闇に慣れた目をイレイナ殿に向けると……おろろ？ なにやら

ドン引き顔。でもやっぱり顔が良き！

はあ、とため息を漏らしたイレイナ殿はズイっところちらに身を寄せてきたでござる。そして顔も近付けてきて…きやつ♡なんだかんだ言つて、ちゅー来るでござるか!?!?

いやいや、でも近くにアリベル殿がいるでござる。背德的でござるな……。

もしいや、こうやって隠れてするのに燃えるタイプでござるか!?!?そ

んなギャップに拙者は萌えるタイプでござるが！

「……魔眼勇者について、モミジさんの意見を聞かせてもらえますか？」

「……………」

「なんで急に真顔になるんですか」

……イレイナ殿にはガツカリでござる。

どうやら顔を寄せてきたのは、アリベル殿に深く関わる話をする為らしい。まあ、人種の話をするのに近いからこれもエチケツトでござるか。

意見に寄っては差別になるかもしれないし。

「失敬。質問が漠然とし過ぎていて考え込んでしまったでござる」

「それはすみません。私が言いたいのは、魔眼勇者の方々の精神面についてです」

残念ながら、拙者は少々お馬鹿ちゃんでござる。

まあ、『馬鹿な子ほど可愛い』とよくマミ上にも言われたし、直そうとは思わないけど。

対して、イレイナ殿は拙者と違って賢いでござる。たまにズル賢いとも言えるでござるが、それはそれ。ズルができるというのは、善悪は別として頭が回らなければできない。

そんなイレイナ殿が拙者に意見を求めるということ——まあ、答え合わせでござろう。彼女の中ではある程度の結論が出ていて、それが拙者の意見と合致しているか気になったのでござろうな。

「拙者には、どこか幼く感じたでござるな」

名前を聞き忘れたでござるが、ポップコーンの勇者殿はとにかく自分勝手でござった。商売であるにも関わらず、自分の作りたい分だけ作って客に押し売る。情報を欲していなければ、即刻断っていたでござるよ。

現在文字通りの寝床を提供してくれたアリベル殿も、それは共通しているでござる。

彼女は最低限の客商売ができていてでござるが、懐に入ってしまったばこの上なく素直というか自由な性格が露呈していく。

少しのきつかけでイレイナ殿と言い合いになったのもソレが顕著に出た結果でござろう。

そしてバロル殿。今年の魔眼勇者ということは拙者よりも年下なので幼いのは仕方ない。

しかし、それでも明らかにコミュニケーションやら気遣いやらができなさ過ぎる。

それどころか、感情表現そのものがあまりにも希薄すぎるでござるよ。

今日1日、1人1人と会話したのは長くとも数時間程度でござるが、それが拙者の素直な感想でござった。

どうやらイレイナ殿の考えも拙者とはほぼ同じらしく、コクリと首肯を1つ。

「私も同じことを感じました。他にも、皆さん共通して『ブギーマン』に追いかけられたというのも裏切った理由としてあげていきますね」
『将来への不安を感じたから故郷を裏切った』……相変わらず理解しがたい理由でござるが」

故郷であれだけ羨望の眼差しを向けられるなら、居心地の良いものでござろうに。

「———そうでしょうか？」

イレイナ殿が一言。疑問の形を取りながらも、どこか確信めいたものを感じさせる。

「というと、どういう事でござるか？」

「誰にでも、どんな人にでも、将来への不安はあるということですよ」

「それはまあ、あつたでござろうが」

魔眼勇者は元々、魔王が支配すると言われている魔王村へのスパイとして生まれた時から育成されていた———言わばあの国の切り札的存在でござる。

しかし、スパイというのは必ず命の危険が纏わりついてくる職業。いくら強力な魔眼があつたとしても、生物である以上、自己保存の本能があるでござる。ざっくり言ってしまうえば、死ぬのが怖い。

「死と隣り合わせの仕事が将来自分に課せられると分かっていたら、

不安にもなるでござろう」

「いえ、私が言っているのはもつと根本的なところです」

「おろ？・ どういう事でござるか？」

お馬鹿ちゃん丸出しの拙者に、イレイナ殿はどこか沈んだ声で問い掛ける。

「初めから将来が決まっている人と決まっていな人—— 一体どちらが幸せなんでしょうね？」

それはきつと、国を裏切った70人の魔眼勇者がぶつかり続けた命題で。

この時の拙者は、それに気付くことが出来なかった。

翌朝、過重力のおかげで床でも快眠できた拙者とイレイナ殿は泊めてくれたアリベル殿にお礼と朝食の催促を投げかけ、意外に美味しかったポテトサラダサンドをござ馳走になつてから写真館を出た。

集合時間の5分前には到着した拙者たち。対してバロル殿が来たのは、集合時間ジャスト。

「少し遅かったですね」

「遅刻はしていませんが？」

「12秒遅刻です」

「意外と小さいところ気にするんですね。老けますよ」

イレイナ殿の額に青筋が浮かぶでござるが、もう拙者何も言わない。

どうもこの2人、相性が悪いみたいでござるな。

まあ、どちらにしろ今日でさよならバイバイなので今我慢すれば良いでござる。

相変わらず無機質な表情で、バロル殿は何も言わず歩き始める。そして歩くこと5分足らずで小さな民家に到着。もはや現地集合で良かったのでは？

「おろっ？」

ふと、拙者はどこか忌避感を覚える臭いに顔を顰める。これは……死臭でござろうか。

拙者の嗅覚は一天四海、三千世界の女子をくんかくんかする為に発達を遂げているので、わりと鋭いでござる。その女子専用の鼻腔へ、危篤特有の臭いが叩きつけられるでござるよ。うへえ…。

「ごめんください。バロルです」

バロル殿が民家の扉をノックすると、ガチャ。扉を開けて現れたのは……わお！ 痴女でござる!??

と、対面1発目でこの上なく失礼な感想が浮かんだ拙者でござるが、実を言うと言違つてない。

「いらっしや〜い。坊や♡」

甘ったるい声で家の中へバロル殿を招き入れようとする痴女……もとい美人の格好は、真っ黒なマイクロビキニ。まだ寒い季節にも関わらず、あまりにも挑戦的で扇情的な服装でござるが、そのバツサリ開かれた背中からは小さなコウモリの翼がパタパタと動いているでござる。ふむ、人間では無いでござるな。

「サキュバスですか」

「ほお。初めて見たでござる」

淫魔、と俗称される魔族でござる。

特徴としては、整った容姿。この容姿で異性にエッチな夢を見せて精気を拝借することを生業にしているそうでござる。

イレイナ殿曰く、人間社会に溶け込んで暮らしているので探せばわりと見つかるとのこと。今度探してみよ。

ちなみに、女性の淫魔はサキュバス。男性の淫魔はインキュバスというらしいでござる。

それはさておき。問題は、何故サキュバスが危篤中である初代魔眼勇者の家から出てきたのか。

あつ、まさか……初代魔眼勇者の精気を吸いまくって危篤状態に陥らせたとか……っ！

「ほくら、坊や。早く入って入って♡」

女性である拙者とイレイナ殿には目もくれず、バロル殿の背中に豊満なおっぱいを押し付けるようにして家の中に連れ込もうとするサキユバス殿。対してバロル殿は、相変わらずピクリとも表情筋を動かさない。

その若さでその反応もどうかと思うでござるが。

「バロル殿。彼女は？」

「初代魔眼勇者の奥方さまです」

「まさかのお嫁さんでござるか!?？」

いやまあ、確かに70年もこの村で住んでれば結婚くらいするでござろうが…。その相手がまさかのサキユバスとは。

しかし、どうやら冗談ということも無いようで、確かにサキユバス殿の左手薬指にはどこか年季が入っていないながらも大切に手入れがされていると思われる指輪が嵌っているでござる。

呆気にとられる拙者でござるが、イレイナ殿に背中を押されて入室。濃くなつた死臭で我に返り、部屋の中央に据えられたベッドへ目を向ける。

そこには、ヨボヨボのお爺ちゃんが浅い呼吸を静かに繰り返しているでござる。彼が初代魔眼勇者でござるか。

「ダーリン、あまり長くは話せないの。だ・か・ら、極力手短にお願いね♡」

いちいち誘惑するような甘ったるい口調のサキユバス殿でござるが、どうやらこれは淫魔特有のモノのようでござるな。

淫魔で人妻とは、だいぶ高レベルな属性でござる。でも嫌いじゃないでござるよ！ むしろ好き!!？

と、空気も読まず静かな期待に胸を膨らます拙者でござるが、それもバロル殿の言葉ですぐに落ち着きを取り戻す。

「こんにちは。71代目魔眼勇者のバロルです。あなたが初代魔眼勇者のキククロで相違ないですか？」

「……ああ……来た……か」

初代魔眼勇者—— “キククロ” と呼ばれたお爺さんは体を起こそうとするけど、どうやらその体力すらもう無いようでござる。

なので、拙者はさり気なく下から上への過重力を彼に掛けて手助け。加えてイレイナ殿も魔法でゆつくりと体を起こしてあげる。

何もせず突っ立ったままのバロル殿は、昆虫じみた瞳をキュクロ殿に向けて続ける。

「相違ないか、と聞いているんです」

「……ああ。その通り」

「僕は、あなたに聞きたいことがあってここに来ました。質問に答えてもらいます。ですがその前に……」

「ちよつり？バロルさん！」

おもむろにバロル殿は碧眼——発動した魔眼を、人数分のお茶を淹れてきてくれたサキユバス殿へ向けたでござる。

バロル殿の目は「死の魔眼」。本人曰く、見たものを問答無用で殺す魔眼——まずい！

「イレイナ殿！」

「はいー」

拙者は素早くローブを脱ぎ、バツと広げてバロル殿の顔面へ投げつける。さらにその上からイレイナ殿が魔法で顔面にローブを押さえつけたでござる。

これでなんとか視界を閉ざした。

「サキユバス殿！ 早く外へ！」

つい今しがた会ったばかりの相手とはいえ、問答無用で殺されるのを放置するわけにもいかない。

とにかく外へ出るように促すでござるが、サキユバス殿はまるで今の光景が見えていないかのようにお茶をベッド横のサイドチェストへ並べているでござる。マジか？！

「バロルさん！ いきなりなんのつもりですか！」

「あなた達こそ、何故邪魔をするんですか？ 僕は魔眼勇者……この村に潜入して、滅ぼす為に来たんですよ？」

「それはそうかもしれませんが、今やることではないでしょうー！」

「早いか遅いかの違いです。早くこのローブを離してください」

季節柄、厚手のローブを着ていて助かったでござる。生地が透けて

みえるということも無いようでござるな。

まさかここに来て仲間割れになるとは思わなんだ……。こいつ、やべえでござるな。

いつそこでバロル殿を叩き伏せるといいうのもありでござる。

拙者とイレイナ殿の仕事は、この初代魔眼勇者キュクロ殿の確認。確かにキュクロ殿は裏切り、加えて他の魔眼勇者も悉く裏切っていたことは確認済みでござる。つまり、拙者たちの仕事は既に終わっている。

ならば、バロル殿を気絶させてあの国に連れ帰ってしまうのが一番安全な方法でござるな。

やる事を決めた拙者は抜刀。イレイナ殿と領き合い、バロル殿を無力化する為に動こうとしたところで——ピタッ。

体が……。いや、精神が驚掴みにされたかのように一切の行動が取れなくなったでござる。

「あまり……人の家で、暴れないでくれないか……？」

こちらに向けられたキュクロ殿の瞳が翡翠色に変わってる。体を起こす体力は無くとも、目は向けられる。目が向けられれば、魔眼は使えるということでござるか。

「そのままでもいい……。ワシの話を聞いてくれ……。……バロルよ。彼女を殺すかどうかは、それから決めてほしい……」

どうやら話し終わるまで魔眼を解除する気はないらしいキュクロ殿は、そのまま語り始めたでござる。

「ワシは生まれてすぐに、魔眼を持っていると発覚した」

きっかけは、ほんの些細なもの。赤ちゃんだったキュクロ殿は、誰もがそうするように母親の顔を見続けたそうでござる。

すると、キュクロ殿の母親は「オギヤーオギヤー」と、まるで赤ちゃんに戻ったかのように泣き喚き出した。続いて、父親も。

明らかかな異常事態に、国は外部から魔法にも造詣の深い医者呼びまだ赤ちゃんだったキュクロ殿を診察。

結果分かったことは、瞳に異常なまでの魔力が溜まっていたこと。

そして、その魔力を帯びた瞳が他者の精神に影響を与えること。

「『鏡像の魔眼』……ワシの魔眼は、見たものをワシとまったく同じ精神状態に陥らせると分かった」

それは言わば、キユクロ殿が見た相手をキユクロ殿に変貌させる——価値観、倫理観、行動原理など、全てがキユクロ殿と同一のものになる悍ましい魔眼でござった。

本来ならば忌み子として即刻殺されていたでござろう。しかし幸か不幸か、時代が彼を救った。

「魔族との戦争で負けたばかりだった祖国は、ワシを神の子として祭り上げた」

それが魔眼勇者の起源。敗戦国の怨讐が生んだプロパガンダ。

当時の王様は、彼を利用すれば敗戦の汚名を返上できると考えたとのこと。

「それからワシは15歳になるまで、あの勇者学校という名の監獄でありとあらゆる教育を受けた」

戦鬪、潜入、サバイバル、果ては料理や楽器演奏まで。当時の国が持つ全てをキユクロ殿は叩き込まれた。

それはひとえに、王様の復讐心を満たすため。敗戦に導いた無能な王という汚名を払拭する為。

キユクロ殿は、ただただその為の道具として利用され、消費されるだけでござった。

そして王様の言いつけ通り、魔王村に潜入。

「……そこでワシは、本当の人生というものを知った」

皮肉なことに、キユクロ殿は魔王村に潜入して初めて自由というものを手にしたでござる。

手を繋いで歩く親子。腕を組んで歩く恋人。声を張り上げて商品を売る露店。

そんな当たり前の光景は、キユクロ殿にとって勇者学校の柵越しに見る一種の創作物だった。

「……その景色は、当時のワシにとっては極彩色に見えたよ。それが目の前に、手を伸ばせば届く場所にある」

その時、キユクロ殿の心に一つの疑問が浮かぶ。

この誰もが当たり前のように享受できる日常を、思わず抱き締めなくなる光景を——自分のようなつまらない人間と同じものに墮として良いものか。

鏡像の魔眼を使えば、目に映る魔族全てを自分と同じ存在にすることができるとござる。

でもそれは結局、キユクロ殿が求めて止まなかったものを自分の手で壊すということ。極彩色の輝きを、灰色の怨讐で塗り潰すということ。

——だから、キユクロ殿は決めたてござるよ。

「ワシはただ——将来への不安ブギーマンに追いかけられただけだった」

このまま使命に従って魔王村を滅ぼせば、自分は死ぬまで魔眼勇者であり続けることになる。

だからキユクロ殿は国を裏切り、魔眼勇者であることを止めた。

「過去からは勇気を貰い、未来からは希望を授かり、人は現在いまを生なままけることができる。だが魔眼勇者であり続ける限り、ワシには勇気も希望過去も希望未来もありはしなかった」

そう言つて、キユクロ殿は自身の半生を締めたてござる。

「……………」

「……………」

「……………」

拙者、イレイナ殿、バロル殿は夕陽で赤く染まった広場のベンチで並んで腰を下ろしていたてござる。

先ほど聞いた話と、その後の光景から口を開く気にもならない。

あれから話し終えてすぐ、キユクロ殿は激しく咳き込み咯血までしてしまつたてござる。

すぐにイレイナ殿が時間逆転の魔法で治療を試みようとしたてござるが、それはキユクロ殿本人から手で制されて止められた。

そしてその手を、サキユバス殿が握つて——恐らくもう拙者たち

がキユクロ殿と言葉を交わすことは無いでござろう。

いつの間にか魔眼を解除されていた拙者とイレイナ殿は、最終的にサキュバス殿へ手を出さなかったバロル殿と共に民家を出て今に至るでござる。ていうかローブ被ったままだから手が出せないが正解でござるが。寒いから返して？

ローブに着いたバロル殿の涎を彼の服でゴシゴシ落としていると、先ほどの民家の方からサキュバス殿が歩いて来た。

相変わらずのマイクロビキニ姿でござるが、はっちゃけた格好とは裏腹にその顔は暗いでござる。まあ、当たり前でござるな。

一応バロル殿の瞳が翡翠色に変わってないかを確認。安全確認ヨシ。

「あの人から坊やに伝言よお。『好きに選びなさい』、て」

「それはつまり、今からあなたを殺してこの村を滅ぼしても構わないと？」

「そうね。今殺されれば、あの人に追いつけるかしら」

サキュバス殿はどこか捨て鉢な返答。

魔眼勇者とはいえ、キユクロ殿は人間。対して魔族はどれも長命でござる。

だから、この時が来ることは覚悟の上だったのでござろう。

「……1つ、聞きたいことがあります」

「なーに？」

「何故あの時、一切逃げようとしなかったのですか？」

バロル殿が尋ねているのは、拙者とイレイナ殿が魔眼でサキュバス殿を殺そうとした時のこととござろう。

あの時サキュバス殿は、まるでそれも日常の一風景であるかのように平然としていたでござる。

「もう慣れちゃったもの。あの国からやってくる魔眼勇者はみんな、あの人を訪ねて来て、最初に私を殺そうとして、そしてあの人に止められる。毎年毎年、人が違うだけの繰り返し。でもね——私にとつては、1年に1回の楽しみなのよ」

「命を狙われることが？」

「だって、あの人を守ってくれるんだもの。好きな人が身を挺して守ってくれるなんて、女の子が一度は憧れるシチュエーションじゃない?」

そう語るサキュバス殿は、まるで初恋に憧れる少女のようにはにかんだ。

「——あなただったんですね。あの国に、キュクロさんが危篤であると手紙を出したのは」

「そうよ。いつも魔眼勇者が来る時期にはあの人、保ちそうになかったから」

そっか。拙者とイレイナ殿にこの依頼を出した国からすれば、70年前に消息を絶った神の子が、突然生存確認されたということ。

ならば国としては、動かないわけにはいかない。例えキュクロ殿のことを覚えている人がいなくても、彼は国の重要人物でござる。

そして国から派遣させるのは魔眼勇者。拙者とイレイナ殿はあくまでイレギュラーな戦力でござる。

その魔眼勇者は確実にキュクロ殿を訪ね、近くにいる魔^{サキュバス殿}族を殺そうとして、そして守られる。

それをサキュバス殿は、キュクロ殿との末期^{まつご}の思い出にしたかった。

常人には理解できずとも、彼女にとってはそれが70年繰り返したランデブーでござったのだろう。

「つまり拙者とイレイナ殿は、知らず知らずのうちにお主らオシドリ夫婦のデートの盛り上げ役になっていたわけでござるか」

「巻き込んでしまったことは謝るわ。ごめんなさいね」

「構わぬよ。サキュバス殿の一世一代の大勝負。その一助になれたと思えば、誇らしいでござる」

「ふふ……優しいのね」

サキュバス殿は微笑みを浮かべて拙者の頭をなでなで。イレイナ殿も、仕方がないかと言った感じのため息を一つ。でも、気分を害したようには見えぬな。

あと残る問題は一つだけ。バロル殿の今後についてでござる。

「バロルさんは、これからどうするんですか？」

彼がこの魔王村を滅ぼすにせよ、そうでないにせよ、旅人である拙者とイレイナ殿の関知するところでは無いでござる。

拙者たち諸共殺すとなれば、魔王村と手を組んで彼を無力化するでござるが。

しかし、どうやらその心配も無用でござるな。

「僕は……僕も、あの国を裏切ります。魔眼勇者であることよりも、もつと意義のありそうなことをこの村で見つけましたから」

この村に派遣された彼以前の魔眼勇者も、きつと同じ想いだつたのでござろう。

今まで何も映していなかったバロル殿の顔には、どこか決意の色が見て取れる。

「僕も先輩たちと同様に、この村で何か自分に出来ることを見つけました」

「それはどういったものでござるか？」

「とりあえず害虫駆除なんかをやってみようかと。僕が目なら、見ただけで殺すことができますから」

「なるほど。案外天職かもしれないね」

「分析の魔眼」を持つ勇者はポップコーン屋に。

「闇の魔眼」を持つ勇者はカメラマンに。

「光の魔眼」を持つ勇者は夜間警備員に。

そして、「死の魔眼」を持つバロル殿は害虫駆除業者に。

もう、70年も裏切りが繰り返されてきたでござる。今さら71人目が裏切ったところで、大した問題では無いでござろう。

「ですが、僕が裏切ったのに報告の為にノコノコ国へ帰っては、お二人の身が危ないですね……」

「心配には及びませんよ。こういう時の対処法は熟知しています。ね、モミジさん？」

「然り。この程度、危機のうちにも入らぬよ」

「……参考までに、聞かせて貰えますか？」

ふむ。あまり褒められた方法ではないでござるが、これも融通の効

かないバロル殿への饞別でござる。

拙者とイレイナ殿は「せーの」と息を合わせて、

「バックレる」

困った時はこれに限るでござるな。

拙者たちの回答にバロル殿は目を丸くして——クスリ、と。

初めて年相応の笑顔を見せたでござる。

「いつかその時がくれば参考にさせて貰います。それでは、お気を付けて」

そう言つて71人目の裏切り者は、憑き物が晴れたかのように拙者たちを送り出してくれたでござるよ。

サンドイッチ、which、リーガルwitch. 第一口頭弁論

ここは法廷内。満員の傍聴人。証言台を挟んで向かい合う形に2組の長机が配置されています。

被告側の代理人^{弁護士}席には、愛嬌のあるお顔を険しさに歪めた長い黒髪の少女が2人。

対して、原告側には余裕の表情を浮かべた男装の麗人とパン屋の店主。

そして、その全てを見下ろす位置に黒い法衣服を纏った裁判長。

「開廷します」

裁判長の声に、まず被告代理人の1人。長い黒髪をポニーテールに結んだ小柄な女の子が冒頭陳述の為に証言台に立ちます。

「拙者はモミジ。武士で旅人で魔法使いで——」

さてさて。今ちようど始まったこの裁判。

大勢の聴衆が注目し、まるで国の命運を決めるが如く緊張感に溢れたこの法廷で、被告人席に座る知性と美貌と気品を兼ね備えた可憐ながらも哀れな魔女とは一体、誰でしょう？

「——被告人、灰の魔女イレイナの民間代理人でござる」

そう、私です。……訴えられました。

「拙者調べたでござるが、どうやら次の国では最近トンカツが名物になったらしいでござるよ？」

「なんですか、それ？」

「言ってしまうえば豚肉のフライでござるな。拙者の国では、これをだし汁と溶き卵で煮込んでお米の上に乗せる“カツ丼”なる料理があるでござるよ」

炊き立てツヤツヤの白米の上に、昆布だしと溶き卵を纏ったトンカツ。

もちろん溶き卵はフワツと半熟に仕立て、だし汁を吸いながらも衣のサクサクを損なわせない最高のタイミングを見極めるのは料理人の腕の見せ所でございます。

ちなみに拙者、めちやくちや得意！ 実家の連中は基本的にガツツリ系が好きだったから、よく作っていたでございますよ。

「ほう…美味しそうですね」

「あと、意外にパンにも合うそうでございますよ。カツサンドというそうでございます。拙者は食べたこと無いでございますが」

並んで飛んでいたイレイナ殿の速度が心なしか上がったような…あつ、やっぱり上がってるでございますな。…つて！ 早い早い!!？

いくらなんでも魔女の全力飛行に追いつけないでございますよおく！

「待ってえ〜〜つ!!？」

飛行速度+前方への過重力でなんとか食らいつく拙者の叫び声が、やまびことなって反響してるでございます。

これから拙者たちが向かう国の名は「宣告のスノードロップ」。

トンカツが有名な国にして——拙者とイレイナ殿が共に旅をする中での終着点でございますよ。

「ぐすん。ひどいでございますよお……」

つつがなく入国を済ませた拙者たちは、イレイナ殿の強い要望でパン屋さんを求めて街中を練り歩くでございます。

拙者はほつぺを膨らませて置いてかれたことを抗議するでございますが、好物を求める魔女さんはこちらに目もくれない。……むう。

「目に涙浮かべている暇があったらパン屋を探してください、モミジさん」

「むっ！ 拙者とカツサンド、どっちが大事でございますか！」

「カツサンド」

「即答!?!?」

悲報。拙者、カツサンドに負ける。ふくんだ!

「ほら、へそ曲げてないで。昼食くらいは奢ってあげますから」

「……砂糖増し増しのカフェオレも付けていいでござるか?」

「……まあ、いいですよ」

「……食べさせ合いつこしてくるでござるか?」

「……あまり人目につかないところなら、妥協しましょう」

「……拙者が赤ちゃん役をやるから、イレイナ殿がママ役でよろしく」

「お断りします」

「失敬。赤ちゃんをやりたかったでござるか」

「そこじゃありませんよ!?!?」

「ではいつ拙者と赤ちゃんプレイをしてくれるでござるか!」

「なんでお昼奢る話からそんな業の深い遊びする話になってるんですか」

「長い灰色の髪をした魔女さんに食事を奢ってもらう時は赤ちゃんプレイで、と義務教育で習ったでござるよ」

「義務教育捻じ伏せないでもらつていいですか?」

残念ながら、拙者のこの上ない完成度を誇る作り話は信じてもらえなかつたようでござるな。ちえつ。

「おつ、ありました」

「カツサンドもあると良いでござるな」

まあ、パン屋さんなんてどこの国でも大抵あるでござるからな。

意気揚々と入店するイレイナ殿に続いて、拙者もお店にイン。パン屋さん特有の小麦の香りを全身に受けにつこりでござる。

無類のパン好きであるイレイナ殿のことだから、てつきり一通り商品を物色すると思つていたでござるが……おろろ? イレイナ殿は、カウンター奥で営業スマイルを浮かべている店員さんの下に一直線。

「カツサンドください」

「かつさんど……?」

並べられたパンには一瞥もせず、パン屋さんにてまさかの口頭注文。ただだけ食べたいでござるか。いや、教えたの拙者だけど。

しかし、店員さんは首を傾げてヤバい客を見るような目をイレイナ殿に向けてるでござるな。

「トンカツをサンドイッチしたもので……だそうです」

「はあ……サンドウィッチのコーナーはそちらになります」

「カツサンドは無いようござるな」

「そこに無ければ無いですね」

ちようど拙者のすぐ近くが色彩も食彩も豊かなサンドイッチコーナーでござったが、残念ながらそれらしきものは見当たらず。

あ、見るからにイレイナ殿が落ち込んでる。

「ま、まあ、別のお店を探すでござるよ！　とりあえず拙者、こちらのハムチーズサンドをいただくでござる」

カツサンドが無いから何も買いませんさようならば流石に失礼と思ひ、拙者は手近にあつたものを一つ購入。本来はイレイナ殿が奢ってくれる予定でござったが、彼女はカツサンドが無いと分かつて早々に退店してしまったでござるよ。判断が早い。

「あうう……待つて欲しいでござるよお！」

「すみません。一ついいですか？」

「おろ？」

脳内がカツサンドに満たされたであろうイレイナ殿を追いかけようと踵を返すと、店員さんに引き止められたでござる。お金足りなかつたかな？

「お二人は旅人さんですか？」

「然り。先ほど着いたばかりでござるよ」

「じゃあ、今夜泊まる場所も決まっていないなですね」

「そうでござるな。まあ、適当な安宿を探すつもりでござる」

「それなら、前の道を東にまっすぐ行ったところにお手頃価格の宿がありますよ。この国を訪れる旅人さんは、みんなそこに泊まるそうです」

「おおー！　それはご親切にありがとうございますでござる！」

これは良い事をきいたでござるな。

旅人をしていると、時折宿選びに手間取ることがあるでござる。

それは国それぞれの宿の相場が分からなかったり、部屋が空いてなかったり、そもそも宿がどこにあるか分からなかったり。

一応観光ついでに宿の目星はつけるようにしてるでござるが、こちらの店員さんには感謝感謝でござるな。

拙者の話を聞いてからイレイナ殿のお口はカツサンドの口になってしまったらしく、それからパン屋さん巡りに付き合わされること2時間。

衝撃の事実発覚でござる。

なんと、そもそもこの国にカツサンドは無いとのこと。なんとという徒労……。

加えてなんと！ 逆にカツ丼はあるらしいでござるよ！

どうも最近この国に訪れた拙者と同郷の旅人さんが伝えたとのこと。それが火付け役となり、トンカツも瞬く間に名物になったそうでござる。どうやらその旅人さんはまだこの国に滞在中らしいので、機会があれば一度会っておきたいでござるな。閑話休題。

「ま、まあ！ 食べて機嫌直すでござるよ。ほら、これとかまだ温かいでござるよ」

「……いただきます」

「美味しいでござるか？」

「美味しい」

両手でパンを持ちながらコクンと頷くイレイナ殿。なんか可愛い。現在拙者とイレイナ殿は最初に立ち寄ったパン屋さんの店員さんが教えてくれた宿に部屋を取り、遅めのお昼タイム。拙者の奢り。

というのも、カツサンドを求めて止まなかったイレイナ殿は、それが無いと知るや即退店。お客としてあるまじき所業に内心ブチギレな店員さん。空気を読んで、拙者が一品だけパンを購入。

これを繰り返した結果、2時間で多種多様なパンが集まったでござる。

あ、オニオンブレッド美味しい。

「カツサンドは拙者が作るでござるよ。話でしか聞いたこと無いでござる」

ざるが、まあそれに近いものならでざるでござろう」

「……お願いします。私としたことが、少し冷静を欠いてしまったようですね。すみません」

「料理のレパートリーを増やすという意味では拙者にもメリットがあるでござるよ」

優しく微笑みフォローする拙者、マジ良い子。きっとイレイナ殿はプロポーズしたくなることとござろう。あ、パンに夢中で全然こつち見ないや。

と、イレイナ殿の顔面に一喜一憂する拙者の耳に、ドタドタと荒々しい足音が廊下から響いてきたでござる。

まだ明るいとはいえ、ここは宿。もう少し静かに歩くのがマナーでござるうに……さてはパーリーピーポーでござるな？

そんな憶測を立てていると、バーン！ 拙者たちのいる部屋の扉が乱暴に開けられる。はあ!??

「いたぞー！ 汚れた白髪の魔女だ！」

ノックもせず乙女の部屋に入ってきたのは、男性3人。お役所仕事っぽい格好をしているでござる。

そんな3人の視線は、まっすぐパンをもぐもぐしているイレイナ殿へ注がれてるでござるよ。

「な、なんでござるかお主ら！ 真面目系パーリーピーポーでござるか!?？」

「それ以上一步でもこちらへ近付いたらぶっ飛ばします。あと、『汚れた白髪の魔女』とほざいた方は一步前へ。私の髪は灰色です！」

髪は女の命。それを罵倒されたイレイナ殿の怒りはもつともでござるな。既に殺るや気に満ち溢れてる。

拙者たちはそれぞれ自身の得物を構え、3人を牽制。この安宿らしく狭い部屋ならば、拙者の独壇場でござる。

しかし、3人のうち先頭に立っていた1番年配らしき者が懐をござる。1枚の紙を取り出したでござる。

そして、その紙を見せながらこちらへ衝撃の発言。

「我々は裁判所の者だ。その魔女に訴状が出た。よって同行しても

らう」

訴状には細かい文字でビツシリと書き込まれてるでござるが、警戒の為に距離が離れているので読めない。対して偉そうに言うわりには律儀に一步もこちらへ近付いてこないの、さてどうしたものか……。

こちらから下手に近付けば、危害を加えられる可能性もまだ捨て切れないでござる。だからといって、イレイナ^魔殿^女が脅してしまったのであちらには期待できない。

すると、イレイナ殿が目配せしてきた。恐らく相手への警戒を拙者に任せるということでござろう。

領きを返すと、イレイナ殿は自身の片目の前に小さな丸を描く軌道で杖をくるん。その場所に透明なレンズみたいなのが現れたでござる。遠見の魔法でござるな。

「ふむふむ……なるほど」

「なるほど、とは？」

「真正正銘、見事に告訴されてます」

「……なにやったでござるか？」

「どうやら名誉毀損で訴えられたようです」

名誉毀損——ざっくり言うとお口などで社会的評価を貶める行為でござるな。

「……………」

「なんですかその目は」

……どうしよう。イレイナ殿って毒舌だし、なんだかんだであり得そうでござるよ。

「えっと……どなたに訴えられたでござるか？」

「パン屋の店主だそうです」

先ほどまでイレイナ殿は国中のパン屋を巡っていたでござる。売っているはずの無いカツサンドを求めて。

「あー……言っちゃったでござるか？ 『カツサンド売ってないなら潰れちまえ!!』 的なこと言っちゃったでござるか？」

「そんなこと言いませんよ」

「身に覚えは無いと?」

「……………ありません」

「なんでござるかその長い間はあ!??」

ホントに言っていないんだよね!?? 拙者心配になってきたでござるよ!!?」

「完全に濡れ衣です。同行は拒否します」

「であれば、国で貴様を指名手配する。先に言っておくが、魔女だからと言って力づくで逃亡しようとは考えないことだ。現在我が国の留置所には魔女が勾留こうりゅうされている。司法取引で彼女に貴様を追跡させても構わないからな」

正直相手が魔女——女性ならイレイナ殿がたらし込んで仲良く逃亡しそうでござるが、それは拙者が嫌だ。

加えて、たらし込めなかった場合のデメリットがかなり大きい。いくらイレイナ殿がそれ相応の実力を持つ魔女でも、相手の能力が現段階で未知数なら下手な手は打たないほうが良いでござろう。

どうやら彼女も同じ結論に辿り着いたらしく、杖をしまつて抵抗しませんがポーズ。

「まったく……………ろくに調べもせず訴状まで作ってしまうなんて、この国の司法は終わってますね」

抵抗はしないけど反抗はするイレイナ殿は、憎まれ口を叩きながら連行されていったでござる。

イレイナ殿と共に旅をする上での終着点で、拙者たちは離れ離れに引き裂かれてしまったでござるよ…………つ!

それから30分後。留置所のアクリル板越しにあっさり再会。やったね。

「この宣告のスノードロップでは、裁判が国民の娯楽だそうです」
「娯楽とな?」

「休日是一家仲良く裁判所へ傍聴に赴き、学生の青春は傍聴に捧げられ、デートでは特等席の傍聴券を取得することが交際への第一歩だと言ふことですね」

「この国の住人は病んでるでござるか？」

「そういう国民性なんでしょう」

巻き込まれる旅人からすれば、たまったものじゃ無いでござるな。

「そういう背景があるせいか、この国では訴えられることも大して珍しく無いそうです。成人する頃には平均20回は告訴されているとか」

「ふむ……理解し難いでござるが、この国での裁判は運動競技スポーツみたいなものと捉えればいいでござるか」

「大方その認識で間違いないでしょう。留置所内はそれぞれ個室。空調管理もされていて、食事も自分が食べたい物を注文できます。しかも留置期間中は全額無料。ぶっちゃけ、私たちが泊まろうとしていた安宿よりも断然快適です」

「まあ、郷に入りては郷に従えの精神でなんとか納得するでござるよ。それで……」

一旦話を区切り、拙者はイレイナ殿にベツタリ密着している人物へ視線を向ける。

「……こんなところで何をしてるでござるか——サヤ殿？」

拙者とイレイナ殿の共通のお友達にして、東国のやべー女代表（拙者調べ）サヤ殿へ問い掛ける。イレイナ殿が30分足らずでこの国の実態を詳しく知れたのは、恐らく彼女から聞いたのでござろう。

天真爛漫で表情がコロコロ変わるところが可愛い彼女でござるが、今はなにやら真面目くさった顔をしてるでござるな。はつきり言って似合わないでござる。

「……はっ、すみませんモミジさん。今、イレイナさんが無性生殖で無限に増えたら純度100%のイレイナさんハーレムが出来上がるんじゃないかと思いついてしまったもので」

「天才でござるか？？」

「うわあ……」

相も変わらず、イレイナ殿への愛も変わらず。元気そうでなによりでござる。

「で、何故このような場所に？」

「訴えられました!」

「見ればわかるでござる」

「いや、話せば長くなるんですけどね? 仕事でこの近辺の国のとある王様から、悪い魔女を捕らえて欲しいと魔法統括協会に依頼がありました。なんでもその魔女、王様から依頼されて了承したにも関わらず最終的には失踪したそうなんですよ」

「……ほ、ほう。ちなみにその悪い魔女に王様が依頼した内容とはどういったものでござるか?」

「ほえ? 魔女のほうじゃなくて、そつちが気になるんですか?」

「……久々の再会でござる。サヤ殿の声がもつと聞きたいでござるよ」

「うん……? まあいいですけど。ざっくりいえば、魔眼勇者? って人と一緒に山の麓にある魔王村まで偵察に行ったんだけど、結局行方が分からなくなっちゃったそうなんです。……まったく、そんな責任感の無い人が魔女だと、同じ魔女であるべく達もそういう目で見られちゃうっていうのに。いい迷惑ですよ、イレイナさん?」

「……え、ええ。そうですね。まったくいい迷惑だと思いますがその魔女も何か止むに止まれぬ事情があったかもしれないのであまり責めるのはどうかと思いますよ。ね! モミジさん?」

「そうで……ござるなあ……」

「……言えない。その失踪した悪い魔女とは一体誰でしょう。そう、イレイナ殿でござる! とか絶対言えない。」

加えて、前金が雀の涙程度だったからバツクレたとか言えないでござるよ……!」

「そ、それで何故この国に来たでござるか?」

「このあたりに灰色の髪をした魔女の目撃情報があったので、もしやイレイナさんかと思って探してたんです。ついでに何やら刀を腰に差したヘンテコな女の子もいると聞きましたが、まさか抜け駆けしているとは思いませんでしたよモミジさん」

「羨ましいでござるか?」

「ふん! あなたがなんと言おうと、今夜ぼくはイレイナさんと同じ

屋根の下で眠るんですからね！ 最終的に勝つのはやっぱりぼくです！」

留置所を『同じ屋根の下』と形容するところに、そこはかたない狂気を感じるでござるが……まあサヤ殿だし。

「で、何故訴えられたでござるか？」

「イレイナさんを探していたらつい気持ちちが暴発してしまいまして、国の中心で愛を叫んだら訴えられました」

「つまり騒音ですか。この国の実態を聞いた限り、あり得そうな話ですな」

「いえ、どうやらぼくの言葉が公序良俗に反していたそうです」
「……………」

ロックンロールなことこの上ないでござるが、どうやらこの国の司法は拙者たちが思っていたよりマトモに機能しているようござる。でも、この国にイレイナさんが来たらまず確実に訴えられると思っ
てましたし、実際こうして留置所内で再会できたわけですから、やっぱりぼくの運命の赤い糸はイレイナさんと繋がっていたんですね！」
謎の信頼感と共にサヤ殿のこれまでの身の上話は終了したでござる。

ちなみにイレイナ殿。今のサヤ殿の言葉にとってもなく物申した
そうござるが、運命云々は別として現状彼女の言ってることは何も
間違っていないので、なんとも味のある表情をしているでござる。

「そういうえば、イレイナさんは何で告られたんですか？」

「告^{告白}られたでござるか？」

「あ、この国では告訴されることを『告られる』って言うそうです。ロ
マンチックですよな」

「どこにロマンチックを見出したかは甚だ疑問が残りますが……。
言ってしまうえば名誉毀損です」

「あらら。ついにやっちゃったんですね」

「サヤさんと言いまじさんと言いまじ、どうして私がやらかした前提で
話を進めるんですか」

「違うでござるか？」

そういえば、拙者もイレイナ殿のやらかした名誉毀損の詳細は知らないままでごさった。

どんな暴言をぶちかましたでござる？

「サンド ヲウイツチ」をサンド ヲイツチ」と言っただけです」

「……………」

「……………」

「…………え、それだけでござるか？」

「はい。私を訴えたパン屋の店主曰く、『売り物の名前を間違えるのは、不買運動と同じだあ！』とのことです」

言い掛かりじゃん。本当にこれで訴状が出ちゃうでござるか。

この調子だと、拙者もいつ訴られるか分かったもんじやないでござる。

…………いや、これを機にサヤ殿がイレイナ殿にアピールしまくるのは目に見えているでござる。妨害する為にも、拙者もあっちに行っただうがいいかな…………。

と、少々冷静さを欠いた思考を巡らせていると——コンコン。拙者側の扉がノックされる音。

おろろ？ 面会時間が終わりでござろうか？

(確か、面会時間は原則無制限だったはず…………)

面会相手に相席者がいるというのが原則外だからでござろうか？

見当がつかず返事を渋っていると、こちらを急かすようにもう一度コンコン。

ふむ。あまり待たせるのも良くないでござるな。というわけで、一度席を立て扉を開けてあげると、バーン！

「——姉さん!!？」

長い黒髪の女の子が勢い良く扉を開け放ったせいで、拙者吹っ飛ばされたでござる。うう痛いよお…ぐすん。あ、でも女の子の髪からいい香り♪

「あ、ミナ！ どうしたの？」

「どうしたじゃないわよ！ ていうか、なんで捕まってるの！」

「ああ……それはまあ、この国のお国柄って言うか……」

珍しく敬語が崩れたサヤ殿が、実に言いくそうにお口をもごもごさせてるでござるな。拙者には元気良く「訴えられました！」って言ったのに。

ていうか、入ってくる時に『姉さん』って……まさか！

「ああ……お、お久しぶりです、ミナさん」

「げっ……なんでイレイナさんがここに……」

「主にサヤさんと同じ理由です」

「くっ……」

「うっ……モ、モミジさん？ 大丈夫ですか？」

何故か女の子に睨まれたイレイナ殿は、話を逸らすように拙者に矢印を向ける。

これ、別に拙者のこと心配してるわけじゃないでござるな。

「ひっくり返っただけでござるよ。ご心配なく」

「ほ、ほらミナ！ モミジさんに謝って」

「モミジって……あら？」

「謝罪は不要でござる。それより、初めましてでござるな」

降って湧いた美少女に無様なところは見せられぬ。

拙者は素早く着物の襟元と髪を整え、1番カッコよく見える角度で女の子に向き直る。

「拙者はモミジ。武士で旅人で魔法使いでござる」

「あ、す、すみません。ミナです。魔法統括協会所属の魔女をしています」

「サヤ殿に姉さんと言っていたところを見るに、やはり？」

「はい。炭の魔女サヤの妹です。よろしくお願いします」

ほうほう。この子が噂に聞くサヤ殿の妹でシーラ殿のもう1人のお弟子さんでござるか。

なんというか……大人っぽいでござるな。拙者もサヤ殿もちんちくりんでござるが、この子はすらつと背も高く体の凹凸もはっきりしてる。

薄い桃色の唇は妙に色っぽいし、長い髪も相まって失礼ながら彼女

の方がお姉さんに見えるでござるな。

握手を求めれば素直に応じてくれるところを見るに、悪い子では無いのでござろう。サヤ殿の妹さんだし当たり前か。少し気が強そうだけど。

挨拶を終えたところで、ミナ殿はサヤ殿へ振り返る。

「とりあえず、さつき姉さんの民間代理人の申請しておいたから。さつきと判決まで漕ぎ着けてそこから出してあげるから、すぐに出られるように荷物をまとめておくこと。いいわね？」

「ぼくとしてはイレイナさんと一緒にいられるからもう少しこのままでも……」

「——い・い・わ・ね？」

「あ、はい」

サヤ殿、意外にも妹さんには弱いでござるな。ある意味良いお姉ちゃんなんだろうけど。

それからミナ殿はイレイナ殿を一瞥……ていうかひと睨みしてから面会室を出て行ってしまったでござる。

なんか駄弁る空気でも無いし、拙者も帰ろうかな。サヤ殿と違って正統派美少女って感じのミナ殿とおしゃべりしたいし。いや、サヤ殿も見た目だけなら美少女なんだけど、いかんせん中身がアレでござるからな。

「んじゃ、また明日来るでござる。サヤ殿は、あまりイレイナ殿にベタベタしないこと」

「また明日。あ、本の差し入れとかあると嬉しいです」

「承知したでござる。適当に見繕っておくでござるよ。サヤ殿も何か必要でござるか？」

「う〜ん……じゃあ2人分のウエディングドレスをお願いします！」

『理性の取り戻し方』みたいな本を探しておくでござる」

きっとサヤ殿にはそれが1番必要でござろう。

てなわけで、拙者も面会室を後にしたでござる。

「ミナ殿！」

先に歩いていったミナ殿の背中へ、拙者は声をかける。良かった。追いつけたようでござるな。

「少し聞きたいことがあるでござるが、時間をいただいても？」

「ええ、大丈夫です」

了承を得られたので、隣に並ぶと……ふむ。スタイル抜群でござるな。あと、サヤ殿に比べて大人っぽい香りでござる。

あちらがレモンなら、ミナ殿はハニーレモンみたいな？

「先ほど言っていた『民間代理人』ってなんでござるか？ 確か裁判において代理人とは、弁護士を指す言葉であつたはずでござつたが」

もしかして、ミナ殿に密着しながらストリートティーを飲んだら勝手にハニーレモンティー出来上がるじゃね？と世紀の大発見を遂げながら、拙者は先ほどミナ殿が言っていたもので気になった部分を尋ねてみることに。

「民間代理人というのはこの国特有の制度で、簡単に言ってしまうと有志が集まった人が被告人の代理人弁護士を資格無しで請け負うことができるものです」

「それって拙者でも？」

「たぶん問題ないと思います。私も姉さんのに申請したらあっさり通りましたし」

なるほど。さすが成人までに平均20回告訴告られる国。ゆるゆるでござるな。

「何処で申請できるでござる？」

「留置所このロビーでもできますよ。私もそこでしました」

「ふむ……」

仕事が早い。どうもミナ殿は頭の回転が早いタイプのようにござるな。イレイナ殿と同じでござる。

そして拙者、良い事を思いついたでござるよ。

「ミナ殿。1つ、拙者のお願いを聞いていただけぬか？」

「内容に寄ります」

そこで安請け合いないところ、素晴らしい！

困からどんだけやべー奴だと思われてるでござるか。一応イレイナ殿が関わらなければ普通に良い子だったはずでござるが。

「だったら、先にイレイナ殿を助け出してしまおうでござるよ」「ぐぬぬぬっ…でも……」

どうもミナ殿の中でイレイナ殿を助けるのは抵抗があるらしく、どうしても最後の一步を渋ってる様子。一体何したでござるか、イレイナ殿は。

でも、恐らくあともう一押し。なので、ここで最後の手段でござる。

「サヤ殿にとつて、イレイナ殿は意中の相手でござる」

「そうっ…ですね……っ」

うわあ……めちやくちや悔しそう。

「でも、想像してみるでござるよ。自分の想い人の為に頑張るミナ殿の姿を！ サヤ殿の目にはどう映るでござろう」

「それは……」

「めちやくちやかっこいいでござるよ！ もはやミナ殿の株価上昇は天井知らず！ 好感度はカンスト間違いなし!!？」

「で…も……」

お、迷ってる迷ってる♪ では、これでトドメでござるな。

「その状態で、今度は自分自身の弁護までしちゃう！ こんな、女の子ならメロメロのデレデレになっっちゃうでござる！ むしろならない方がおかしい!!？」

「メロメロのデレデレに……っ！」

「さあ！ サヤ殿をメロメロのデレデレにする為に、拙者と共にイレイナ殿の民間代理人になるでござるよ！」

「はい！」

よし。勝った。